尾原ダム建設予定地内
埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ

円満寺遺跡 Ⅱ

(古代編)

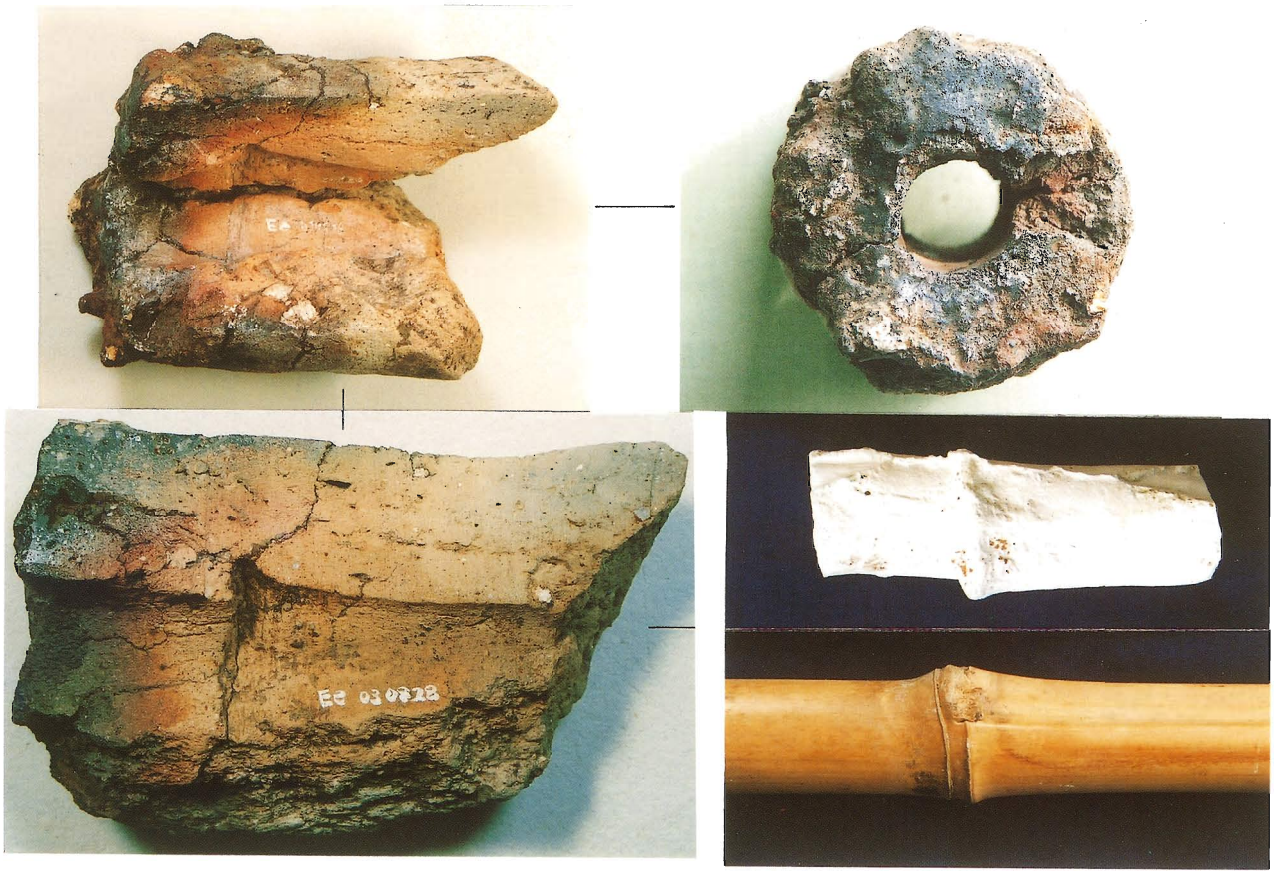
2006年3月

島根県

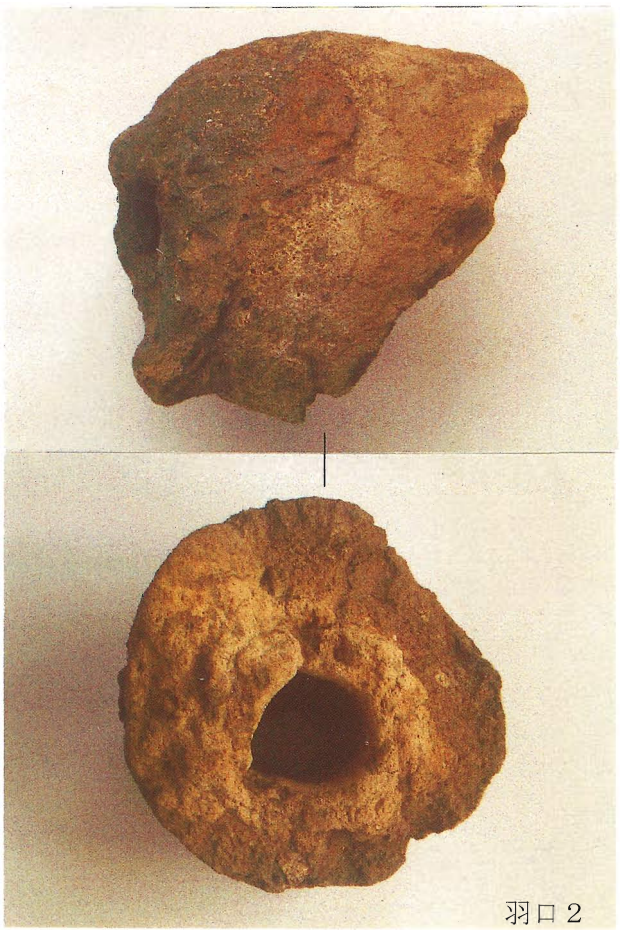
奥出雲町教育委員会

『円満寺遺跡Ⅱ』に誤植がありました。
御手数ですが次のように訂正をお願いします。

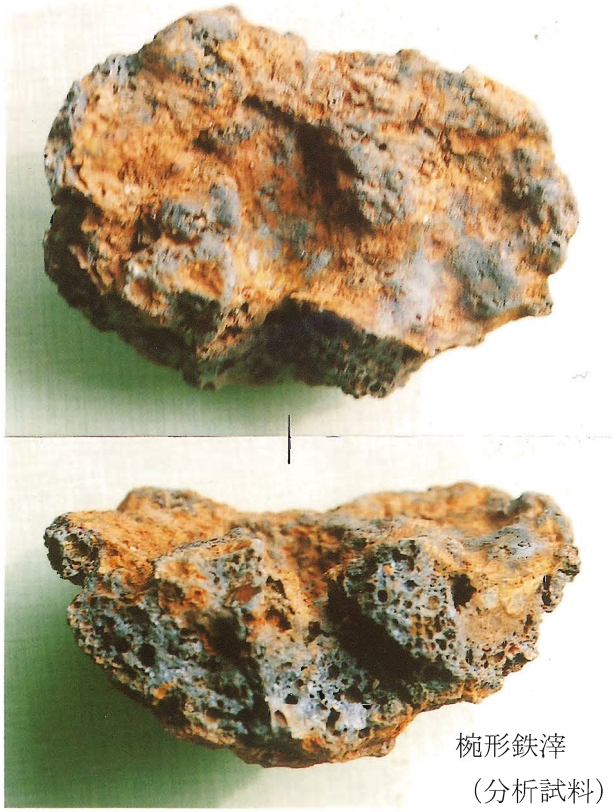
頁	・ 欄 ・ 行	誤	正
	挿図目次 左 4～7	遺物推積状況	遺物堆積状況
3	図3タイトル	**推積土の簡易…**	**堆積土の簡易…**
4～7	図4～7タイトル	**遺物推積状況**	**遺物堆積状況**
8	図8　図中説明	粘土数	粘土敷
11	図11タイトル	**甕(No1068)内推積状況**	**甕(No1068)内堆積状況**
20	図説明	○ 祭祀関跡	○ 祭祀遺跡
76	最下行註2	_2 例えば…	※2 例えば…
88	(表1 出土場所欄中)	(土品溜り)	(土器溜り)
104	図13のうち	No4赤塗土品片	No4赤塗土器片
112	中段(写真説明)	上も下も土器推積	上も下も土器堆積



羽口１　　縦断面及び髄心の石こう型と現生の竹

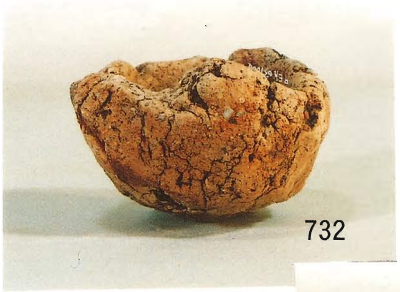


羽口２

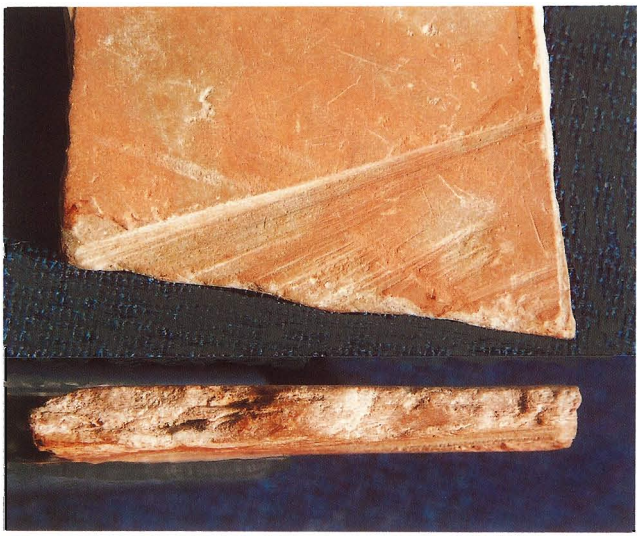


椀形鉄滓
（分析試料）

羽口と鉄滓



桃の種



手捏ね土器とその他の遺物

745

746

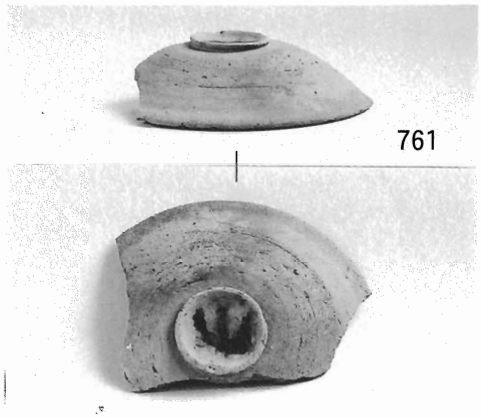
747

748

手捏ね土器

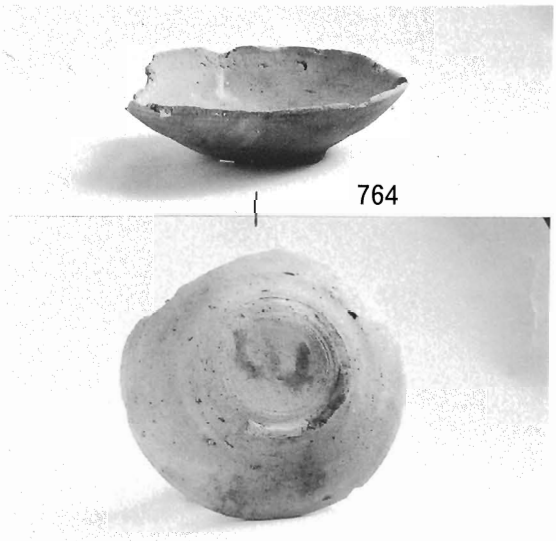
749

土 馬

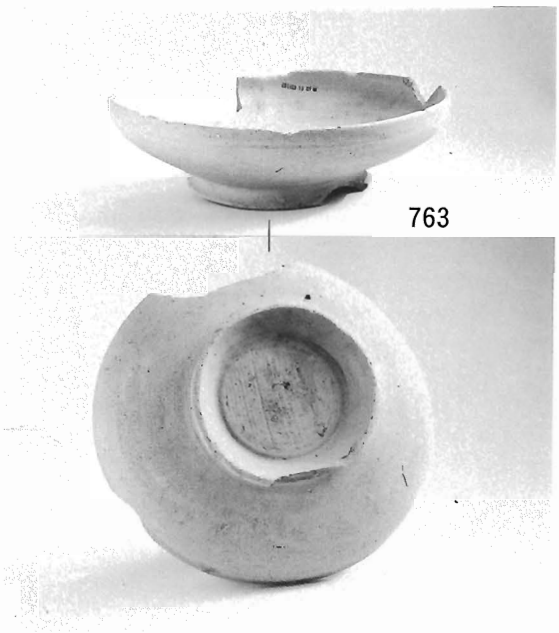


761

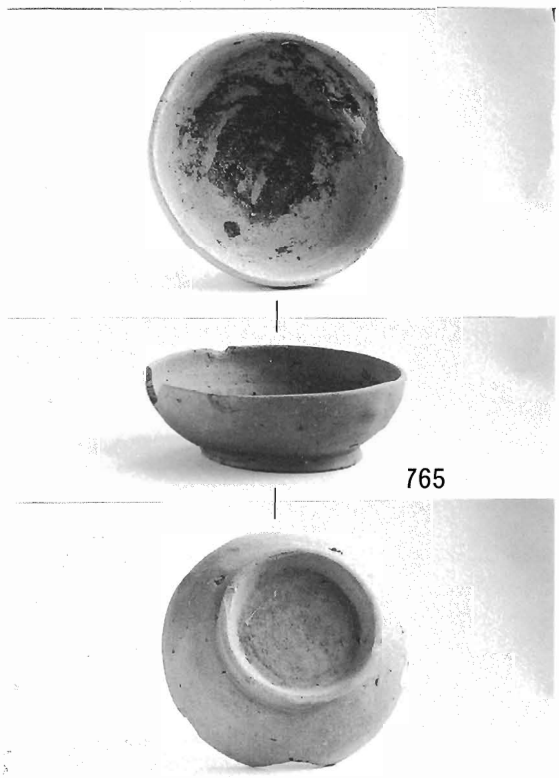
762



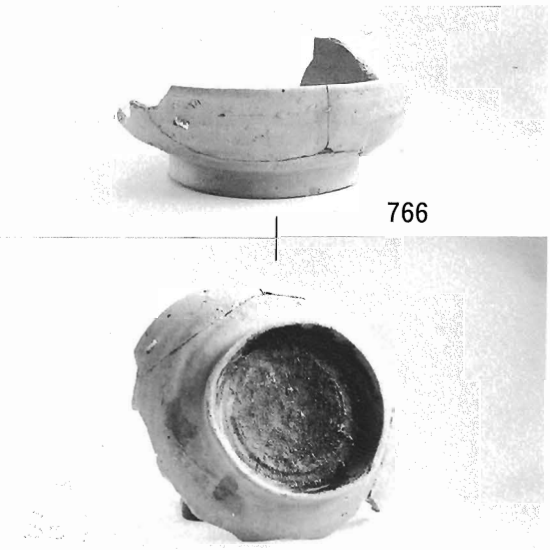
764



763



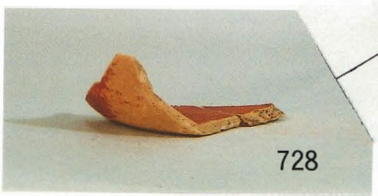
765



766

墨書土器等

墨書土器等



赤木椀

暗文土器と赤木椀

ステージA

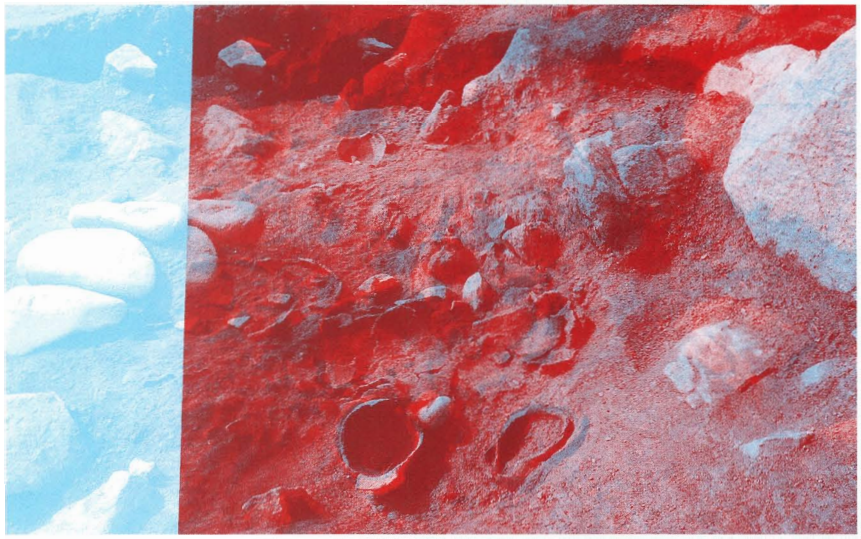
俯瞰

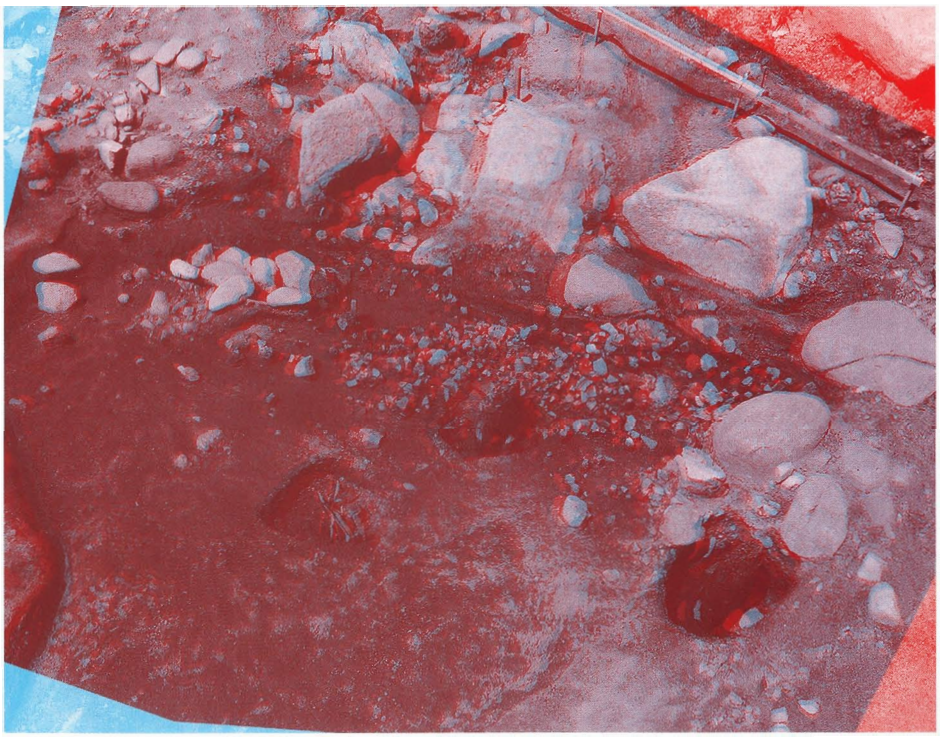
遺　構

ステレオ写真１

（添付 メガネで見て下さい）

２－４次
（ステージＡ）
全景



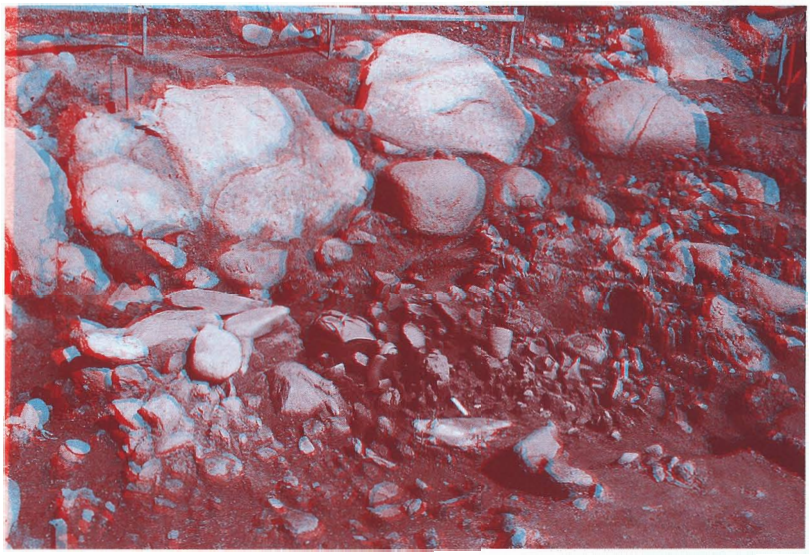


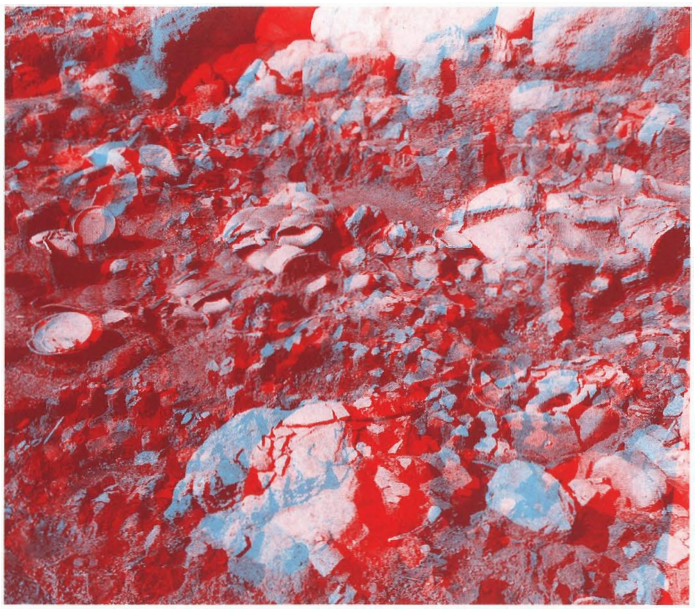
３－２次
（ステージＢ）
全景

ステレオ写真２

（添付 メガネで見て下さい）

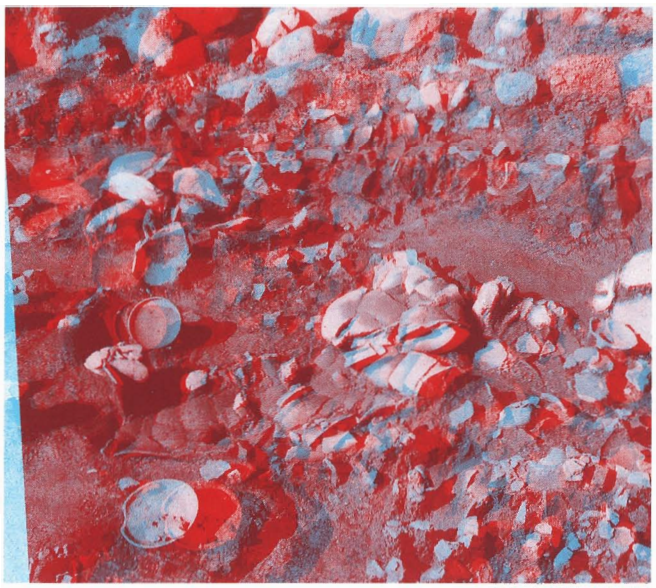
３－４次
（ステージＢ）





３－６次状況
（ステージＣ）

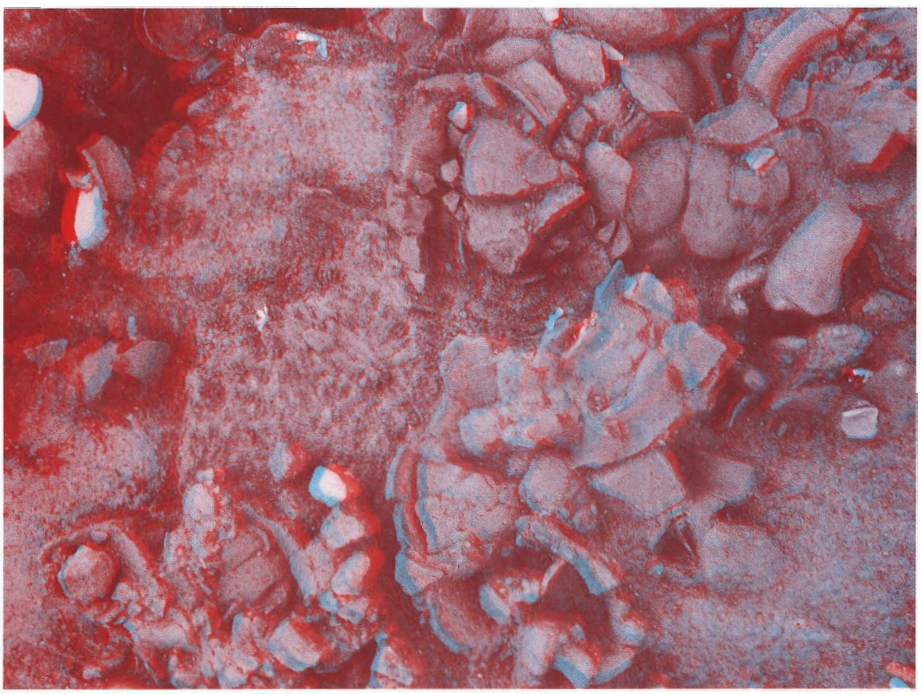
３－６次状況
（部分）



ステレオ写真３

（添付 メガネで見て下さい）

３－５次
（部分）



３－５次
（粘土貼りの上と下に土器）

例　言　付　記

1．例言についてはⅠ集首記に示したとおりである。

2．平成17年３月31日の行政合併に伴い町名変更、〝奥出雲町〟となる。

3．平成17年度体制は次のようである。

調査主体者	奥出雲町教育委員会 教育長　若槻愼二			
事　務　局	石見公男（教育課長）		徳江良弘（教育課長補佐）	
	広野　進（生涯学習係長）		平田昭憲（社会教育主事）	
	三成由美（生涯学習係）			
調　査　員	野津　旭	杉原清一	藤原友子	
調査補助員	佐野木信義	伊藤正樹	家熊　猛	元山貴光
遺物整理	藤原厚子			

凡　例

報告書中の遺物No.は、 次のように配した。

種　類	器　種	個体No
須恵器	蓋	1～29
	坏・高台坏	101～169
	高坏	201～220
	壷・甕類	301～323
土師器	甑・把手	501～529
	土製支脚	601～650
特殊遺物	赤彩・暗文、手捏 製塩、墨・漆	701～766
	玉・石類	801～
土師器	甕	1001～1236

目　　次

〔第１分冊〕
序文
例言
Ⅰ　調査に至る経緯と経過
Ⅱ　位置と環境
Ⅲ　調査の概要
Ⅳ　調査成果
Ⅴ　まとめ

〔第２分冊〕
Ⅵ　土器溜り部の調査
付編Ⅰ
付編Ⅱ

〔第２分冊〕

巻頭写真１～６
ステレオ写真１～３
Ⅵ　土器溜り部の調査
１　調査の概要 ……（杉原）… 1
２　遺構立地の微地形と環境 ……（杉原）… 2
３　遺構と土器類の堆積状況 ……（杉原）… 3
４　祭祀遺構の検討と復元の試み ……（杉原）… 17
５　出土遺物（須恵器類　土師器類　特殊遺物） ……（野津）… 21
６　遺物の年代観 ……（野津）… 63
７　混入した製鉄関係遺物の検討 ……（杉原）… 75
８　“赤い水”について ……（杉原）… 76
９　むすび ……（杉原・野津）… 77

付編Ⅰ　円満寺遺跡より出土木材および木炭の^{14}C年代測定 ……川野瑛子・柴田せつ子 … 81
Ⅱ　円満寺遺跡　出土品の調査 …… 村川義行・三奈木義博 … 88

挿図目次

図１　遺物取上げ次別区別 …… 1
2　巨石に囲まれた祭祀跡 …… 2
3　推積土の簡易粒度分析結果 …… 3
4　遺物推積状況１ …… 4
5　遺物推積状況１ …… 5
6　遺物推積状況２ …… 6
7　遺物推積状況２ …… 7
8　ステージA 遺物配置 …… 8
9　ステージA（ｆライン断面） …… 9
10　ステージB 遺物配置 …… 10
11　甕（№1068）内推積状況 …… 11
12　赤泥付着状況 …… 12
13　ステージC・C′遺物配置 …… 13
14　ステージD 遺物配置 …… 14
15　土器溜り遺構 完掘状況 …… 15～16
16　須恵 坏・高坏の年代観別と
　　特殊遺物の分析状況 …… 19
17　祭祀関連遺跡 …… 20
18　須恵器（蓋） …… 21
19　須恵器（坏） …… 23
20　須恵器（高台坏） …… 24
21　須恵器（高台坏） …… 25
22　須恵器（高坏） …… 27
23　須恵器（壷） …… 28
24　須恵器（壷・横瓶・他） …… 29
25　甕（１） …… 32
26　甕（２） …… 33
図27　甕（３） …… 34
28　甕（４） …… 35
29　甕（５） …… 36
30　甕（６） …… 38
31　甕（７） …… 39
32　甕（８） …… 40
33　甕（９） …… 41
34　甕（10） …… 42
35　甕（11） …… 43
36　甕（12） …… 44
37　甕（13） …… 45
38　甕（14） …… 46
39　甕形状とコゲ・煤の付着状況 …… 47
40　甑（１） …… 49
41　甑（２） …… 50
42　把手 …… 51
43　土製支脚（１） …… 52
44　土製支脚（２） …… 53
45　土製支脚（３） …… 54
46　土製支脚（４） …… 55
47　土製支脚（５） …… 56
48　土製支脚 形式別構成図 …… 57
49　赤彩土器 …… 59
50　手捏土器・土馬 …… 61
51　製塩土器・他 …… 62
52　鉄関連遺物 …… 75

表目次

表１　円満寺遺跡出土須恵器観察表 …… 64
2　円満寺遺跡出土土師器甕観察表 …… 67
3　円満寺遺跡出土甑観察表 …… 71
4　円満寺遺跡出土土製支脚観察表 …… 72
表５　円満寺遺跡出土赤彩土器観察表 …… 73
6　円満寺遺跡出土土器観察表 …… 74
7　円満寺遺跡出土製塩土器等観察表 …… 74

図版目次

PL 1　遺物出土状況（1）…… 107
2　〃　（2）…… 108
3　〃　（3）…… 109
4　〃　（4）…… 110
5　祭壇状遺構 －ステージA－ …… 111
6　粘土敷きと遺物の散布状況 …… 112
7　ステージC 石敷祭壇部 －上段の部－ … 113
8　石敷祭壇部 －下段の部－ …… 114
9　現地説明会と指導会 …… 115
10　須恵器（蓋）（図18）…… 116
11　須恵器（坏）（図19）…… 117
12　須恵器（高台坏）（図20）…… 118
13　須恵器（高台坏）（図21）…… 119
14　須恵器（高坏）（図22）…… 120
15　須恵器（高坏）（図22）…… 121
16　須恵器（蓋）（図23）…… 122
17　須恵器（横瓶・他）（図23・24）…… 123
18　甕（1）（図25）…… 124
19　甕（2）（図26）…… 125
20　甕（3）（図27）…… 126
21　甕（4）（図28）…… 127
22　甕（5）（図29）…… 128
PL23　甕（6）（図30）…… 129
24　甕（7）（図31）…… 130
25　甕（8）（図32）…… 131
26　甕（9）（図33）…… 132
27　甕（10）（図34）…… 133
28　甕（11）（図34・35）…… 134
29　甕（12）（図35）…… 135
30　甕（13）（図35・36）…… 136
31　甕（14）（図36）…… 137
32　甕（15）（図37）…… 138
33　甕（16）（図37・38）…… 139
34　甕（17）（図38）…… 140
35　甑（図40・41）…… 141
36　把手（図42）…… 142
37　土製支脚（1）（図43・44）…… 143
38　土製支脚（2）（図45・46）…… 144
39　土製支脚（3）（図46・47）…… 145
40　赤彩土器（1）（図49）…… 146
41　赤彩土器（2）（図49）…… 147
42　手捏土器（1）（図50）…… 148
43　手捏土器（2）（図50）…… 149
44　製塩土器・他（図51）…… 150

Ⅵ　調査に至る経緯と経過

1．調査の概要（図1）

土器溜り部は、円満寺遺跡調査区の東端位置に所在した（第Ⅰ編Ｐ14図４参照）。

局部地形は、小谷下端の巨岩で囲まれる湾入状斜面である。この巨石群を含む７×８ｍ、面積約50㎡で、深さ1.4mほどに、土器片等の集堆積したところである。

この部分の発掘調査は平成14年度10月から開始し、浅いサブトレンチで確認しながら層状に検出・取上げを繰返す方法で行った。都合、平成14年度は８次まで及び翌平成15年度も８次まで行い、平成15年12月に現地調査を終えた。

対象範囲を１ｍ方眼に区分しＡ・Ｂ…、ａ・ｂ…の組合わせで区名とした。

取り上げ次は、結果として高位置のＢｄ区から漸次、谷水流れに沿ってＧｅ～Ｈｆ区に至った。因みにこの間の地山面での落差は2.3mである。

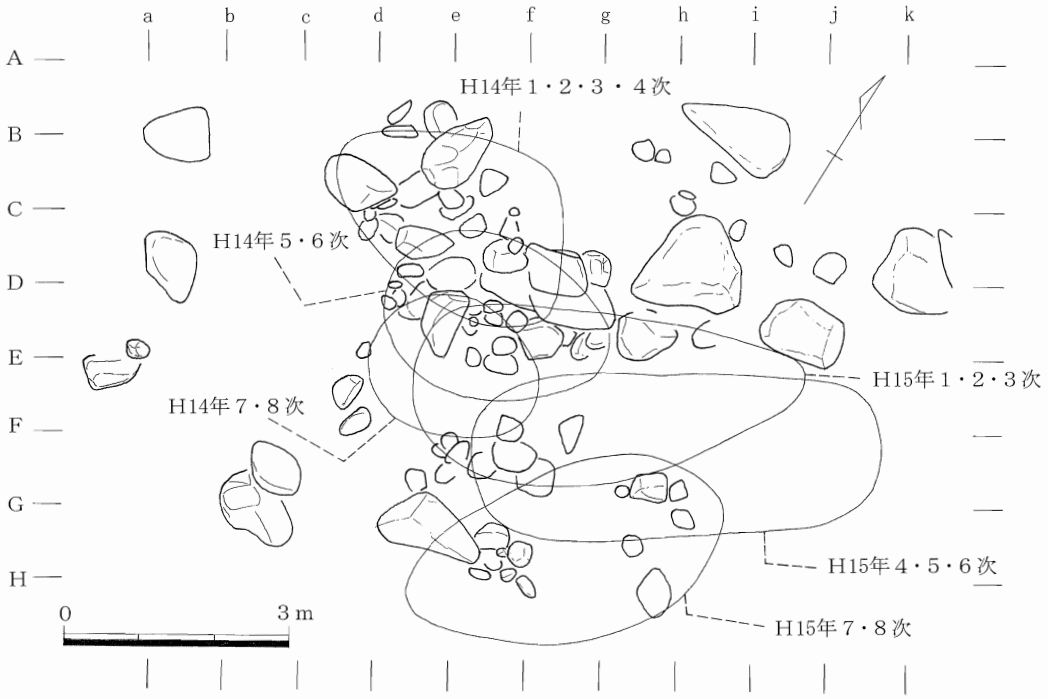


図１　遺物取上げ次別区別

取り上げた遺物は主に土器であり、すべて破片となっていて、その内訳は次のようである。

	土師器				須恵器				その他
	甕・壷	甑・土製支脚	赤彩坏・皿	その他	蓋・坏類	高坏	甕・壷	その他	
	33400	708	391	346	396	85	171	341	69
計	34845				993				
合計	35916								

これらは細片が多く、器種の特定しがたいものも多いが、ほとんどが律令期に属するもので土

師器の甕類、甑が最も多く、土製支脚も多い。須恵器は数が少ないが坏類が多い。その他とした内には鉄滓や羽口或は桃核なども含まれている。

2．遺構立地の微地形と環境（図２）

土器溜りは南西する山麓下端で斐伊川本流の旧河岸で、その上端に位置する。幅７～８ｍにわたり高さ１ｍ余りの巨岩が斜立して囲み、その隙間は大小の石礫が累積する。花崗岩質母岩のやや湾入した微地形である。これは小さな谷の入口部の旧河岸が漸次洗い出された様相であり、そこへ谷間からの水が滲み出している。そしてこの６～７ｍ間の平均勾配は25～30°ほどであり、落差は約２ｍを測る。そして自然の流入土で粘質湿地となるところである。

この谷間を登ると上布施集落に至り、左手（西側）は孤立する山頂で、中世の山城となっている。上布施地区は既に述べたように古代の布勢郷のうちにあたり、古墳や横穴墓等も散在することなどから拠点的集落の一つであったと思われる（Ｉ編３頁参照）。

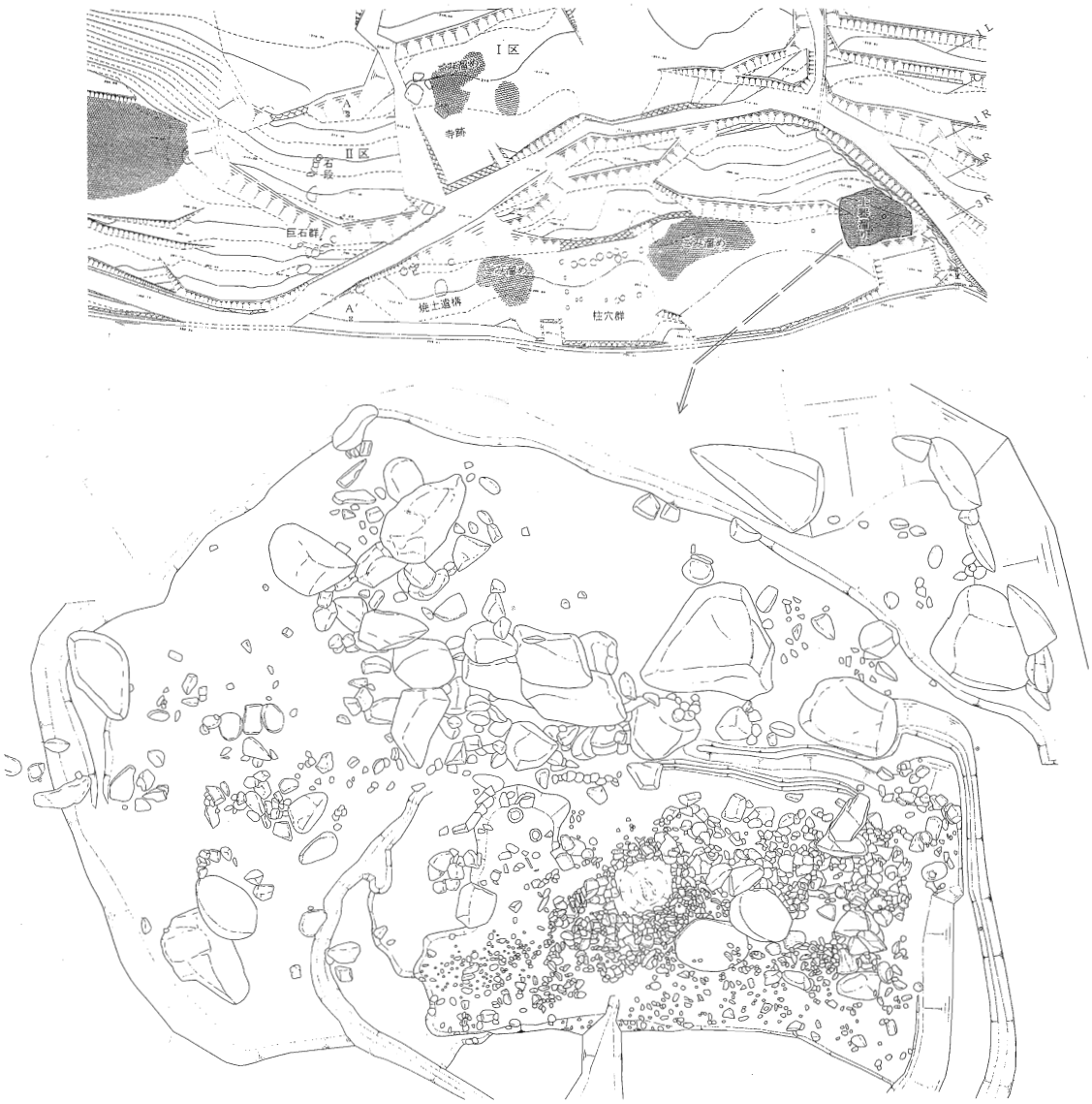


図２　巨石に囲まれた祭祀跡

３．遺構と土器類の堆積状況

１）土器溜りの堆積状況

この土器溜りは土師器片が泥状粘質土にまみれて埋めつくされ堆積していた。外周域の土層によってみると、経年の累積であることは明らかであるが、堆積内にその層準或は理層などは識別が出来なかった。

これらの状況から、調査作業は溜り部の高位置（北西部）から作業可能な深さである10～15cm毎に漸次低位置（南東部）へと、少しずつその位置を移しつゝ掘り下げて２か年合計16次にわたってやっと全面の発掘調査を終えた。

従って遺物の出土は“層”ではなく、任意の“次”であることをことわっておく。

（以下、2002年第１次取り上げは“２－１次”と記し、位置は１ｍ方眼でＡ～Ｈとａ～ｊの組み合わせで表示する）（図４～７）。

因みに土器片の集中堆積する部位のＥｇ～ｈの間において採取した泥土の簡易な粒度分析を行ってその組成をみた。風乾細土18kgについて粒径0.4mm以上は水中篩選で、以下は水中沈降速度で区分した。結果をグラフで示すと次のようである。

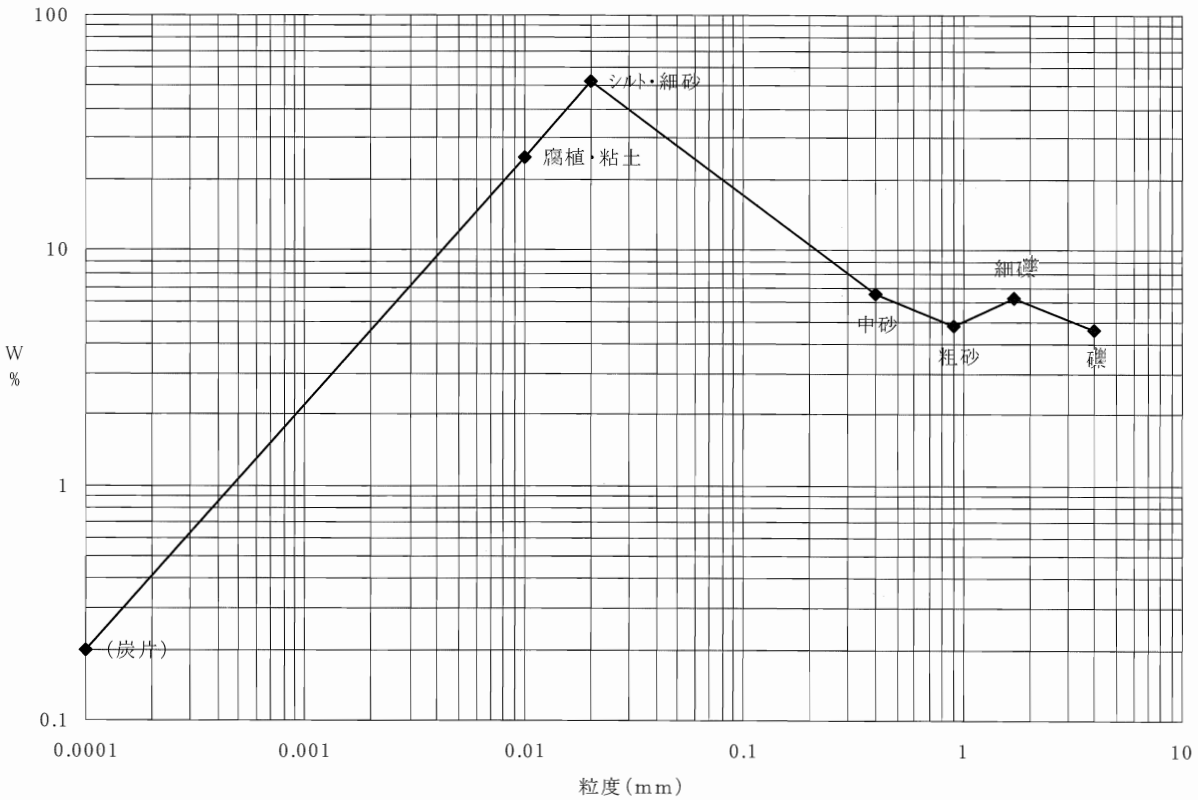


図３　推積土の簡易粒度分析結果

この結果は細砂～シルトが大半であり、粘質の地表土が流入を続けて土器片等を埋没したものと判断した。

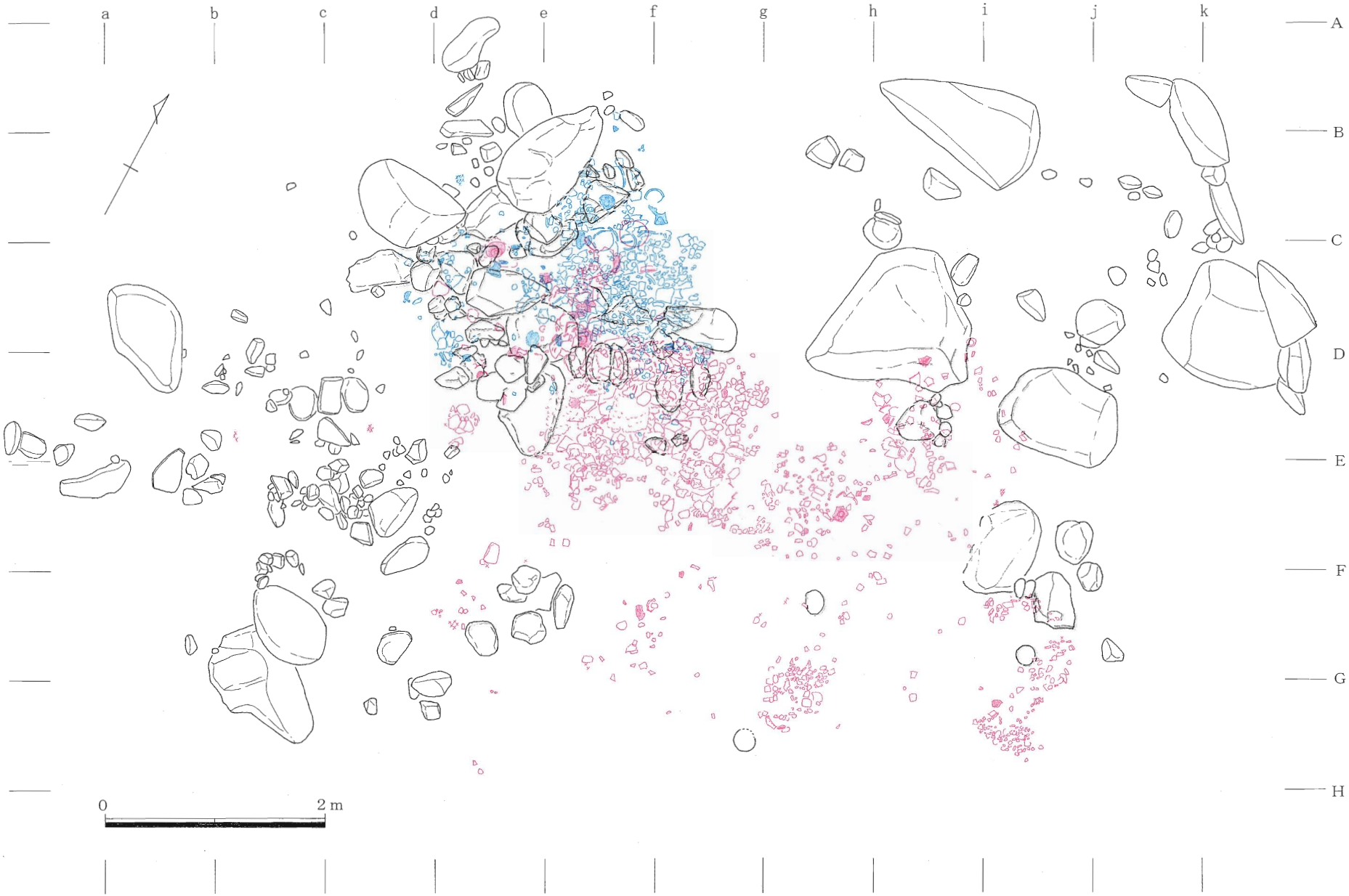


図４　遺物推積状況１（２－１～３－２次平面）

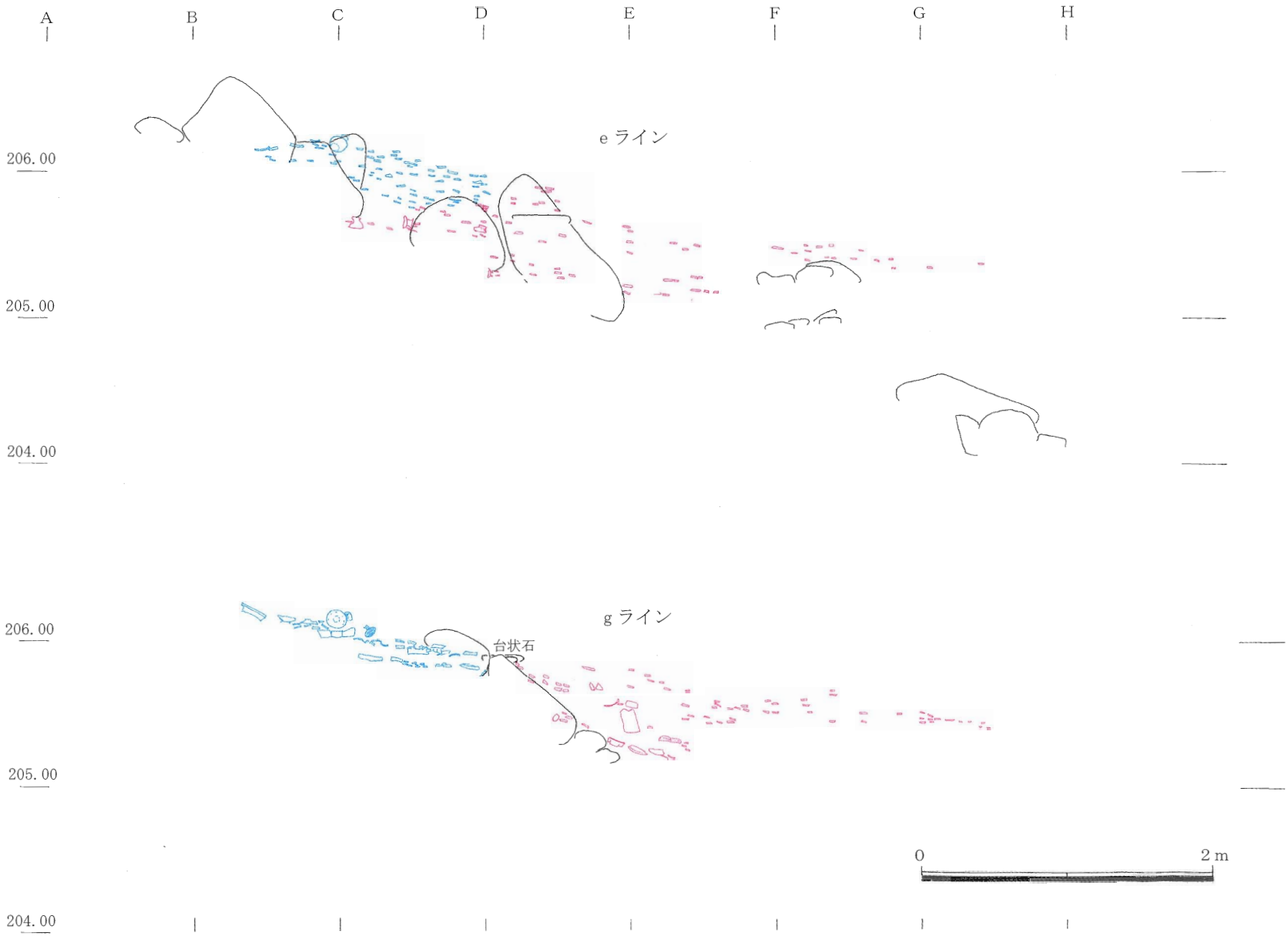


図５　遺物推積状況１（２－１～３－２次断面）

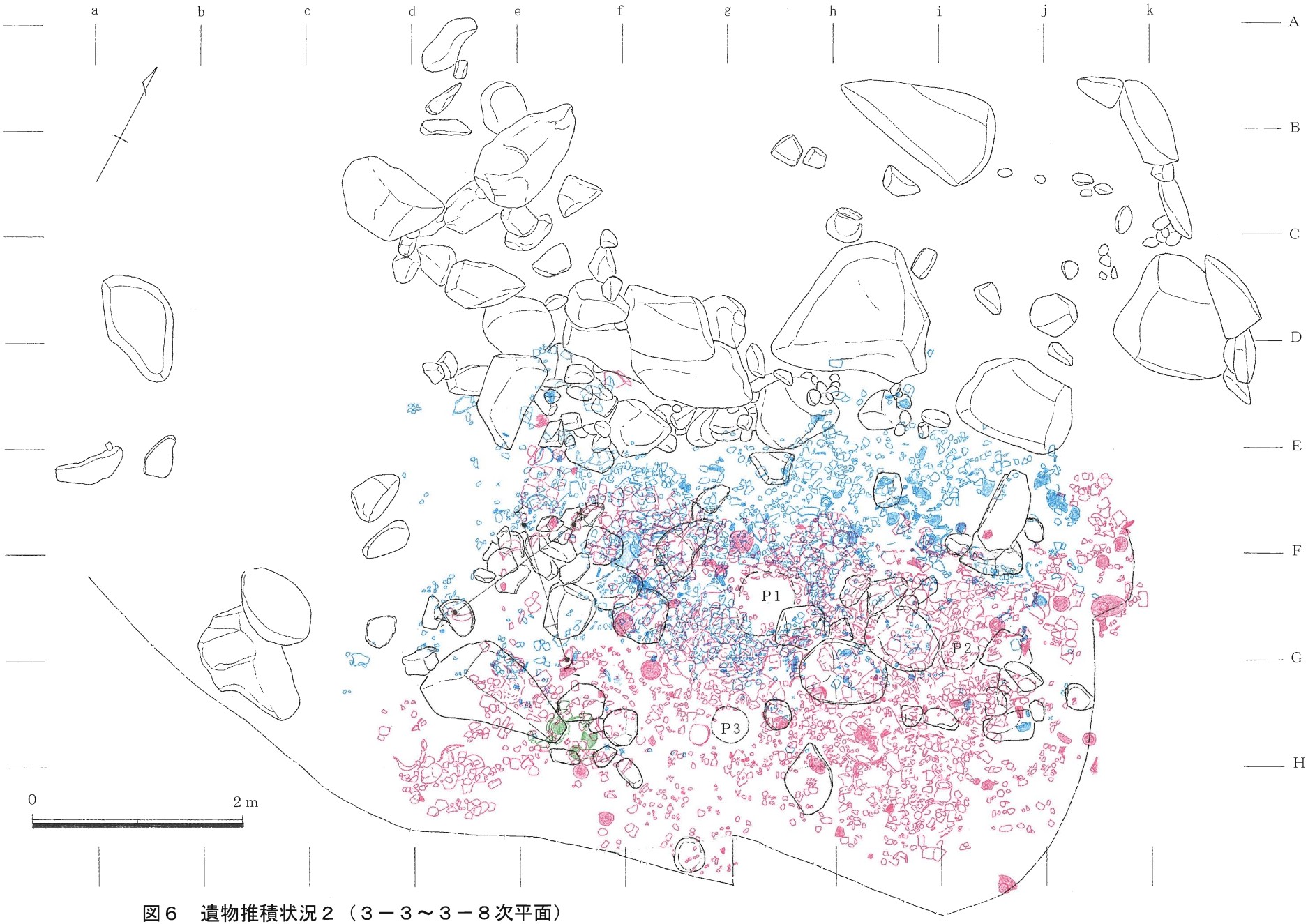


図６　遺物推積状況２（３－３～３－８次平面）

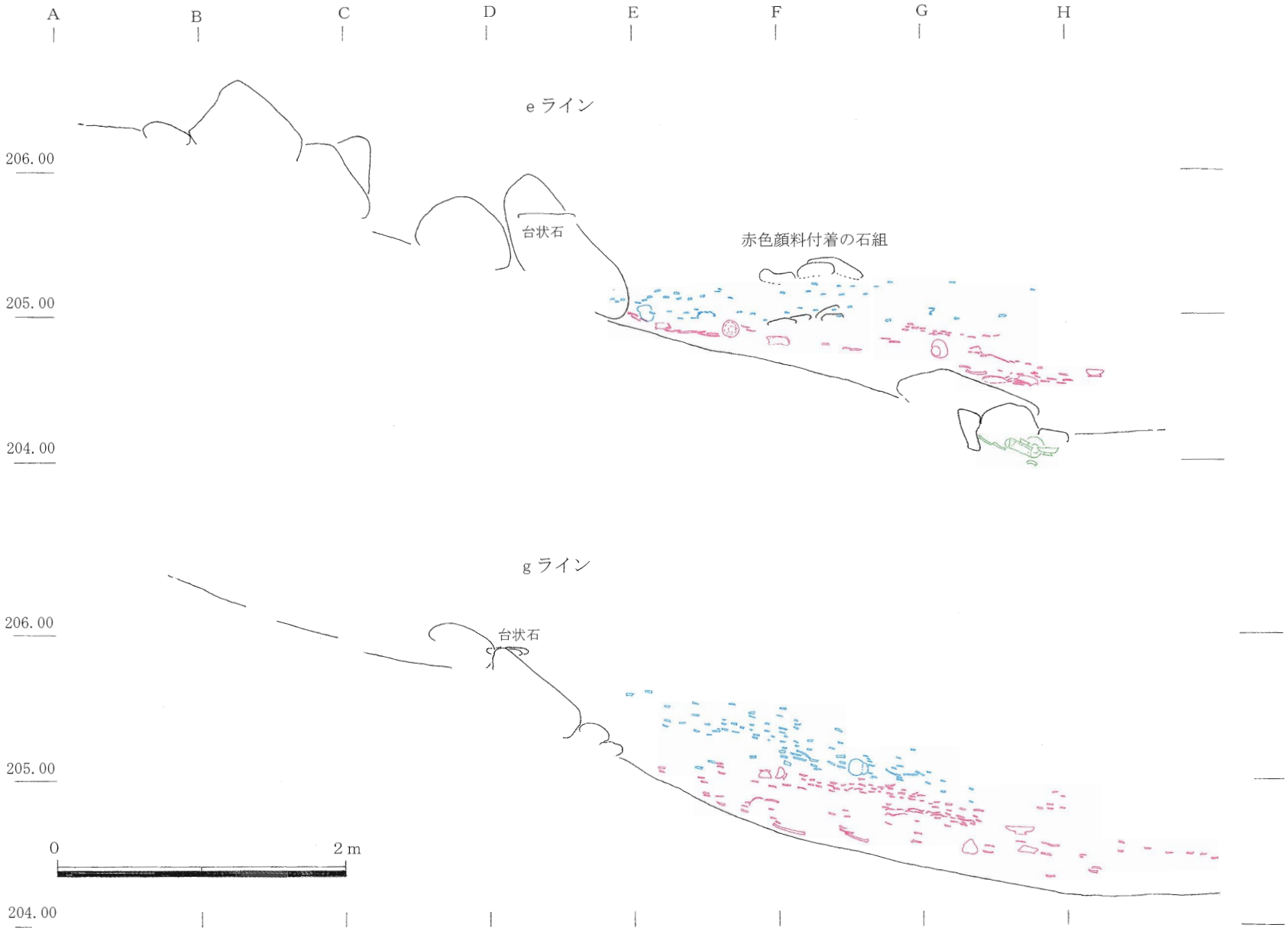
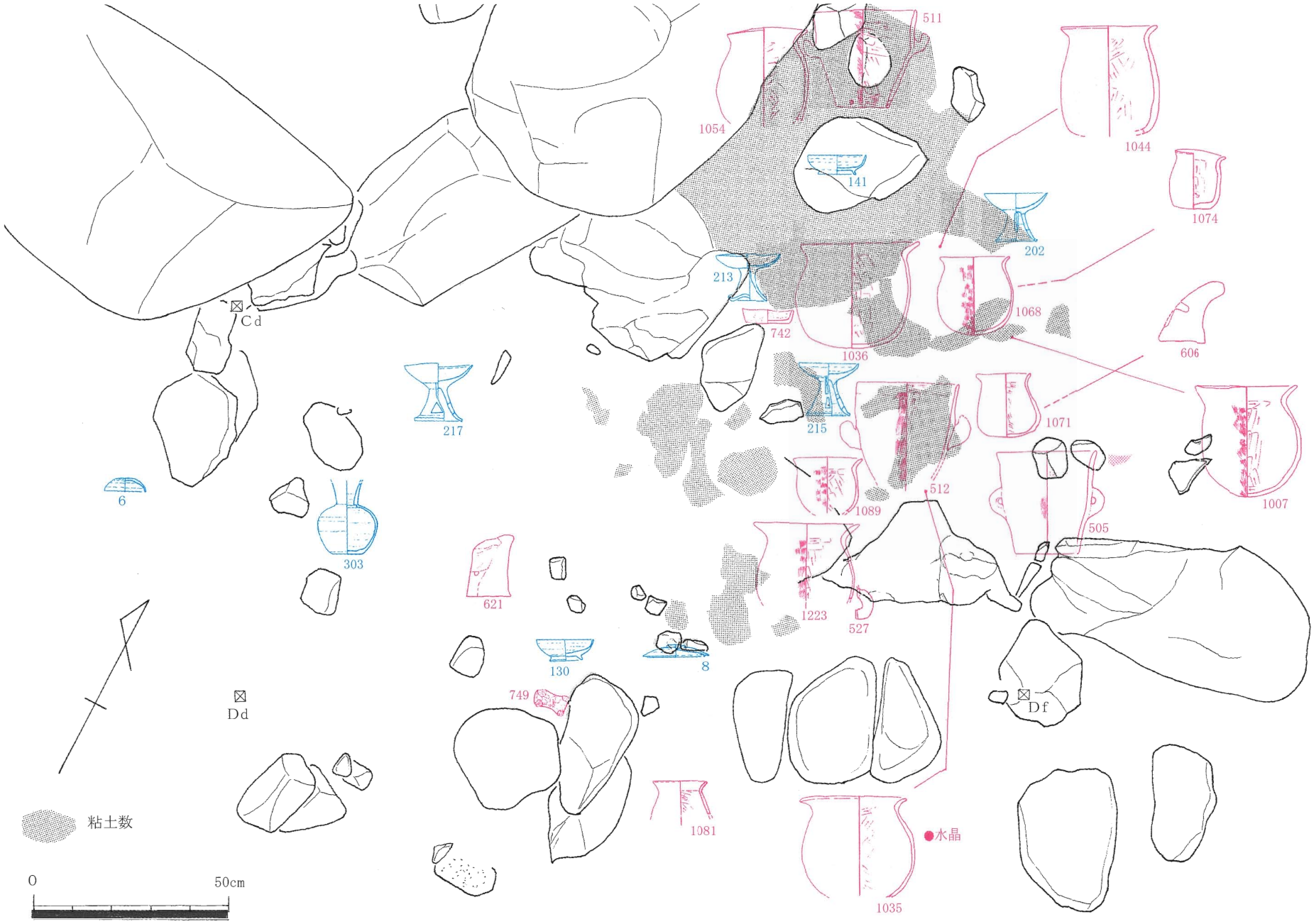

A
B
C
D
E
F
G
H
eライン
206.00
205.00
204.00
台状石
赤色顔料付着の石組
gライン
206.00
205.00
204.00
台状石
0
2m

図７　遺物推積状況２

図８　ステージＡ遺物配置



２）２－１～４次状況　－ステージＡ－（図８・９）

最も高位置にあたり、巨石群の頭部がわずかに露出する前面の約３×2.5mの範囲で、Ｂｄ～ｅ及びＣｄ～ｅ区が中心である。

堆積表土の一隅に土師器の散布が認められ、これを４次にわたって、厚さ約20cmを掘り下げると密な散布面は広がり、土師の甕体が横転して圧し潰れたままの状況のものを含む土器片多数が略円形で浅い皿状面にまとまりをなしていた。この土器片の間には10～15cmほどの山礫がかなり混入しており、厚さ20cm以上の堆積となっている。そのベースとも言うべきあたりの３か所ほどに熱変色した膨潤な粘土塊がみられた。しかし粘土の張り床面というほどではない。

さらにＤ区にかかる前方の縁辺部位には円磨度の高い偏平長円形の川石３個が敷き並べてあり、祭壇様のものとみられる。

この遺構と覚しき範囲については２－４次取り上げが最終面と思われた。２－１～２－４次において検出した遺物のうち原形が分かり、図化出来た品は10点以上に及ぶ。

これらの出土地点からその位置をみると、最も奥まる巨石の近くには須恵器の高坏や坏類がほぼ横に並び、中央あたりには土師器の煤の付いた大小の甕が６個体以上置かれている。その右手傍から奥あたりには甑が２体以上認められる。また祭壇状石敷きのすぐ右脇あたりでは自然形の水晶１個も検出している。なお、赤塗り坏と思われる細片もまれに混入しているが明瞭ではなかった。

この発掘面を“ステージＡ”と呼ぶことにする。

以上のような出土状況はその時点での一つの祭祀情景を示唆しているものと考える。

図９　ステージＡ（ｆライン断面）

３）２－６～８次、３－１・２次　－ステージＢ－（図９）

２－６次からは遺物包含の位置が若干南前方に移る。上記のステージＡ部の下面は流入土と若干の小粘土塊の下は巨岩が斜立しており、その隙間には須恵器等の混入もみられるが、単なる落ち込みとみられた。

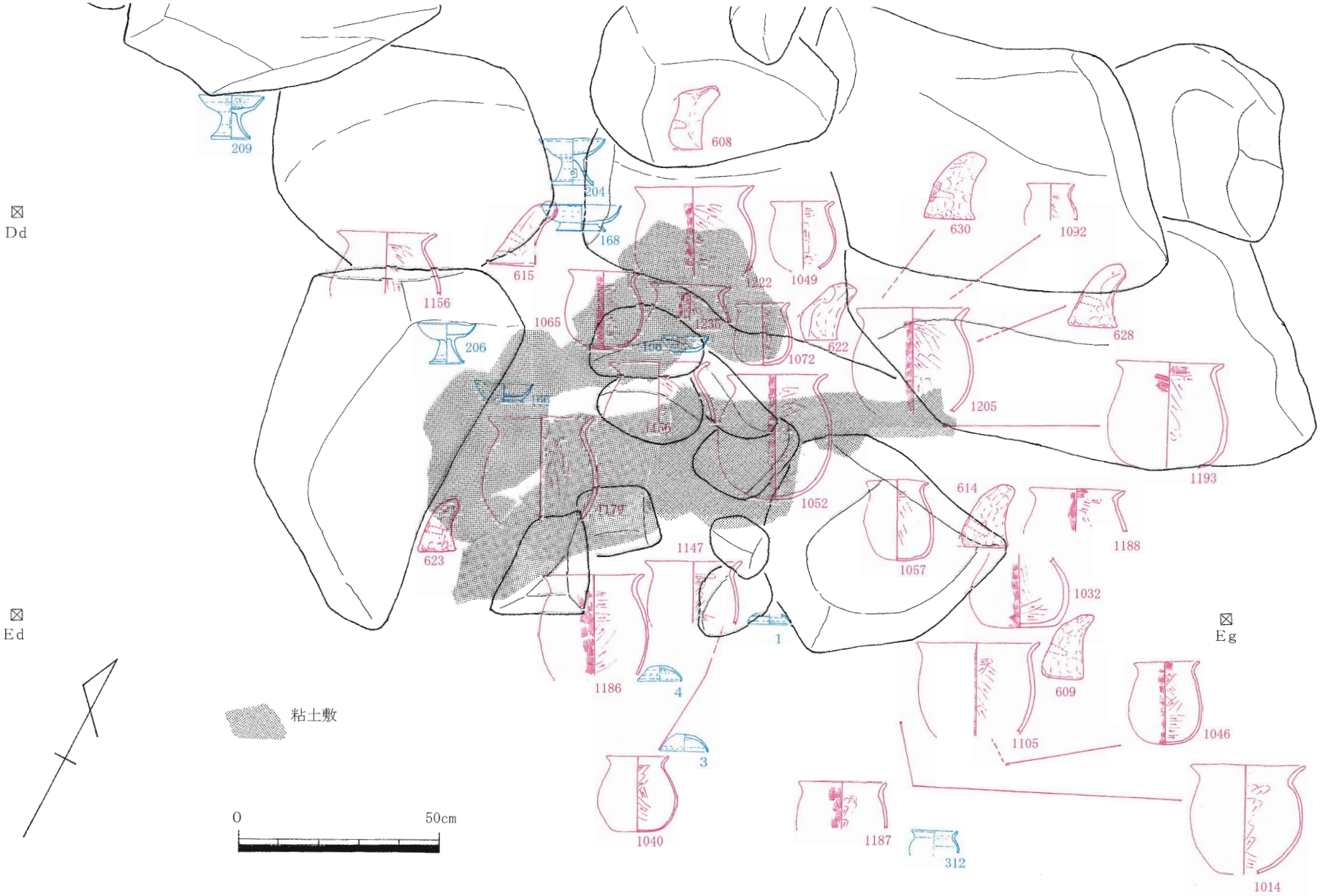


図10　ステージB　遺物配置

ステージＡのレベルから約40㎝下ったこの巨岩の前方下端からは遺物散布面が大きく拡がっていた。Ｄｅ区あたりは破損の程度の軽いものや須恵の完形品などが特に目につく（２－６次）。しかしｇラインあたりから右手は細かく破片化したものの分布が著しく、堆積の差異が感じられる。

前方ではＥｄとＥｅ区にかけて川石６個以上を組み敷いたところがあり、原形は一部損じているようだが祭壇としたところであろう。しかしその直近は幅約60㎝ほどは遺物が殆どなく、泥濘状であり、後世に撹乱を受けたところと思われる。

この範囲内に於いては、巨岩を背景に石組み祭壇までの約1.5×２ｍほどのスペースは一つのステージとみられ、押しつぶれてはいるものの原位置を保つとみられるものが多い。器種としてはやはり甕が多く、甑もあり須恵の高坏や高台付坏がある。また土製支脚も多数あり下面には粘土が敷かれている状態で認められる。しかし、この地点は特にカナケ水の滲出が多く、泥質であることから明瞭な分層は出来なかった。

そこでこれをステージＢと仮定して器種形状の分かる品によってその配置をみることにする。

奥まるあたりはステージＡの下底あたりから前方へ巨岩が斜立しており、その下端はさらに下方の土器片を被うように粘土を敷いて、そこに土器を並べている。須恵の高台付坏や高坏があり、そのあたりから前方へ約１ｍほどの範囲に土製支脚や甕体の潰れが敷きつめたように一面にひろがっている。特異なものとしてやや離れてではあるが小鳥のものと思われる長管骨一片が出土した。土器の個体数は明瞭ではないが、１×1.5ｍほどの面に土製支脚13基以上、甕体10個体分以上及び甑１個体分を数えることができる。この個体数は祭事１回のみの量であるのか複数次であるのかについては明瞭でない。これを仮にステージＢと呼ぶことにする。

なお前述の如く石組み付近は撹乱のためかほとんど原形に復する遺物は無かった。この石組みは山石の露頭部を下敷きに、ひと抱えほどの川石６個を組み敷いたもので、この石の隙間や下面の接地面には赤色の泥質物が著しく付着していた（図12）。この地点あたりは前述のように“カナケ水”の滲出がみられるところで全体に濁った赤橙色の浸潤があるが、この石組部は特別に濃厚で、やや異質かと思われた。この赤泥物については、後日依頼しての分析の結果、“水酸化鉄が主体で部分的ながらCa、Pも見られることからアパタイト（燐灰石）かともおもわれる”とあり、付近のカナケとは幾分の差異があり動物質の混入も考えられよう。

また、ほぼ同レベルでさらに右手（東）側約2.5ｍ隔てたＣｈ～Ｄｈ区あたりにも破損の軽微なものがやや多く、また透明な石英片や桃核もあるなど、大石３個を背景にするこの位置も、もうひとつの場であった可能性がある。しかし直上近くまで表土の撹乱の痕跡があり、また遺物の原位置も特定し難く、結果として明らかなプランは把握出来なかった。

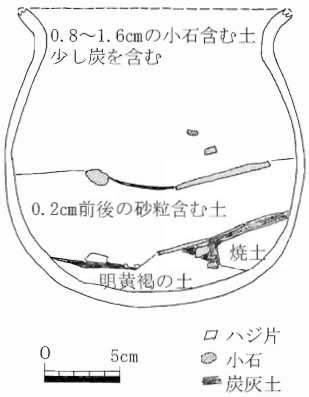


図11　甕（№1068）内推積状況

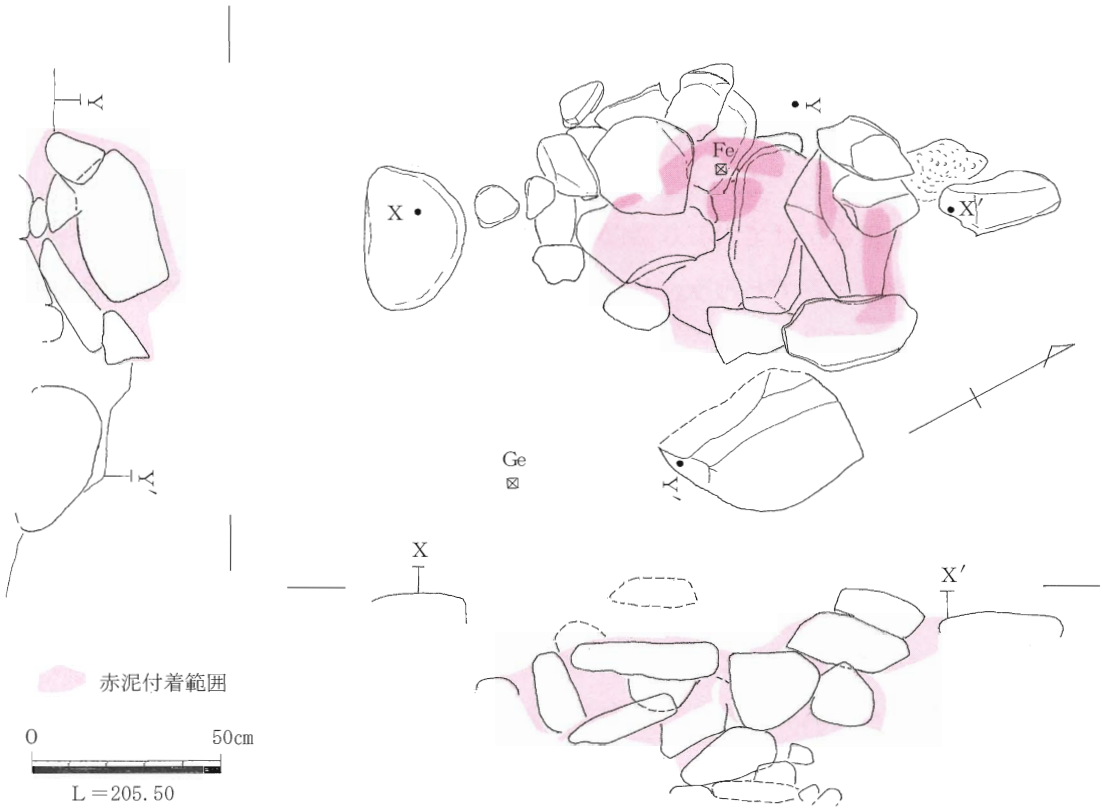


図12　赤泥付着状況

これらの状況のさらに下底にも土器片の散布は中央で厚さ50cmほどにも及ぶが、細片が流入した状態での出土であることから経時的流入堆積と判断した。

このほか、中世の掘立柱の柱穴も３穴以上穿たれており、その為に撹乱を受けている部位があった。

４）３－４・５次　－ステージＣ・Ｃ′－（図13）

斜立する巨石を背景に中段位にあたるＦｆ区及びＦｉ区を中心に、ほとんど圧平されて敷き詰められたような土師甕体の間に須恵器がやや密に分布した。付近には50cm以上の山石又は川石があり、祭祀場面を思わせるステージが２面以上あったと考えられる。

これを仮にステージＣ及びＣ′と呼ぶ。

しかし、中世の掘立柱による柱穴掘削で２か所以上が消滅しており、また、軟弱地面踏圧のためか、土器の破片は細片化していて、復元の困難なものが多いがそのほとんどは甕体である。Ef区及びＥｊ区あたりには赤彩の坏が暗文の施したものを含めて混在し、須恵器では高台付やなしの坏や蓋が多く、横瓶もみられた。また、遺物取上げ時の途中、特に４次取り上げに際してはメノウや水晶の破片が混入しており、これも祭祀用かと思われた。

５）３－６～８次　－ステージＤ－（図14）

上記のＦｆ～Ｆｉ区から緩斜して下ったＧｆからＨｈ区にも同様に圧平され敷き詰めた状態で多くの土師甕片がやや厚く存在した。その間にあって転がり込みを思わせる個体の大破片も混在

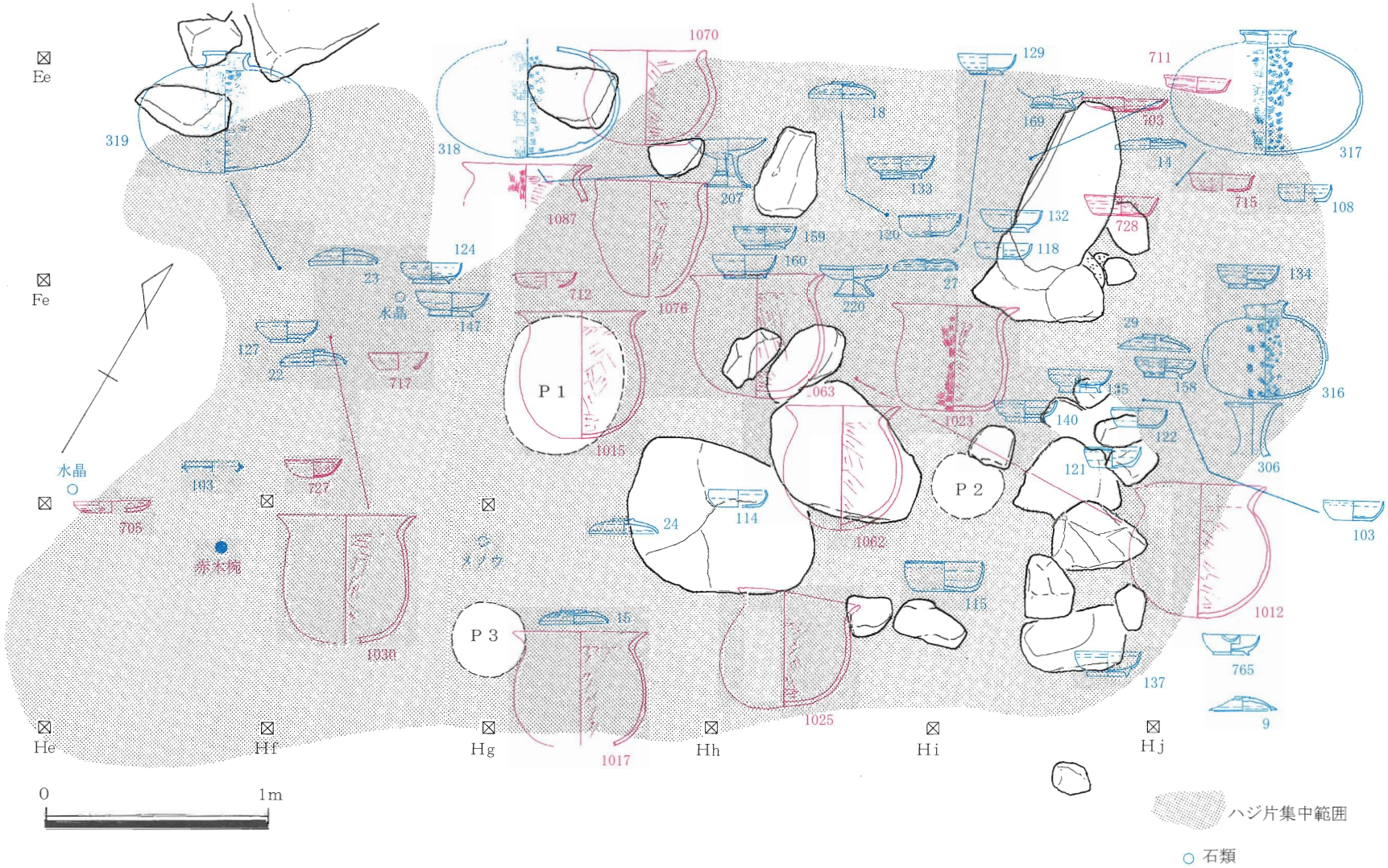


図13　ステージC・C′遺物配置

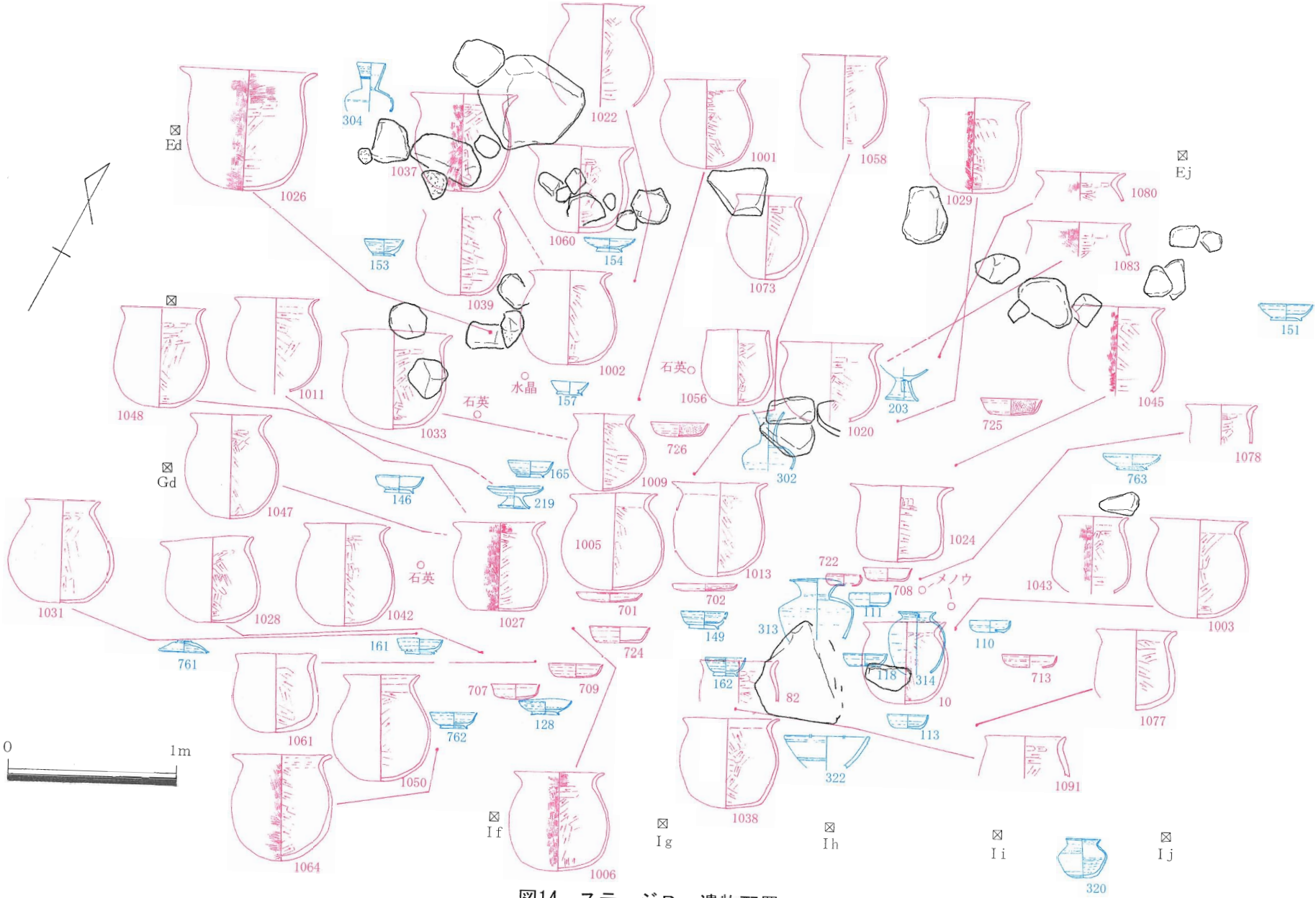


図14　ステージD　遺物配置

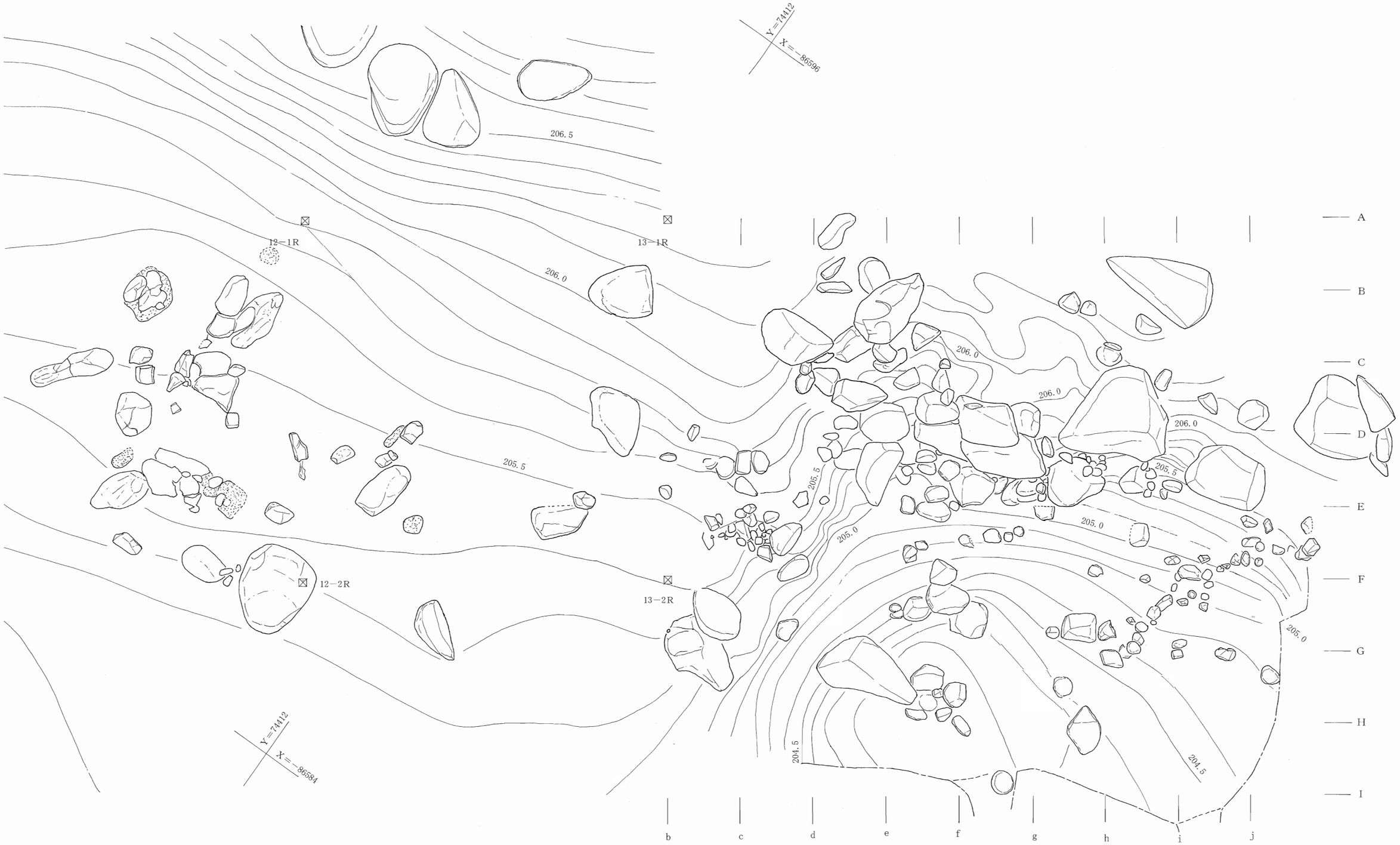


図15　土器溜り遺構　完掘状況

するようになった。赤彩や暗文土器、また器壁の極く薄い布目痕のある土器細片が混入するのもこのあたりである。

上記したように粘土の敷き詰め状況や土製支脚のまとまった出土はみられない。しかし大破片の甕体や赤塗り坏片も混っていて、極く近い位置からの投入又は移動を思わせる。因みに、ベースの甕片の多くは踏圧されたと思われる部位もあり、大石又は巨岩もなく、より上方のステージA～Cの場合と様相が異なる。

最下方８次取り上げ部分は、斜立する大石が漏斗状になっている部分で、この中に破損の軽微な須恵高坏や甕体が転がり込んだ状態であった。おそらく、かつて集った水の漏下するところであっただろう。

4　祭祀遺構の検討と復元の試み

２ヶ年にわたって合計16次の遺物取り上げ状況を述べたが、その中途において、要検討場面をステージA～Dとしていた。以下、これについてその共通点や相違点をふまえて、復元的仮想を試みる。

先ず各ステージの推移順を須恵器の編年観（出雲大谷編年４期～８期）によって辿ると、大まかに上方のステージAから漸次降下してステージDへと移る（図８～14参照）。

これは概ね取上げ次の順とみなしてよかろう。

またステージA及びBは斜めに立つ巨石群の狭間や脇あたりの場で相対的に上段地にあたる。これに対し、ステージC・C′は巨石群の根あたりから前方で、前者から約40㎝落差の中段位であり、ステージDはさらにその前方の傾斜する緩斜面で大石等が目立たない下方位置である。

祭壇状に川石を並べた遺構はステージA～Cにみられるが、C′及び下段位置のステージDには明瞭でない。

ベースとなる面についてみるとステージAでは地面をわずかに窪ませているが、Bでは粘土を敷きC・C′では多数の投棄又は遺棄された土師甕片等を踏圧した面をベースとしている。Dについてはベースの存在が疑わしく、無いとみるのが適当であろう。土器についてみると既に述べたように須恵器ではA・Bにおいて蓋坏が、C～Dでは高台付坏等が多くなり、高坏はAから漸次Dへと減していく。大まかにステージBあたりに須恵蓋坏の上下逆転期があたるようだ。土師器では甑は主としてA・Bにあり、甕は小形はA・Bに、大形では全体に長胴で下膨れ気味の器形ではあるが丸底がB・Cに、へたり気味平底はDに著しい。土製支脚はほぼ全域にわたって存在するが当地方通有の典型的な又状は少なく、角頭が鈍く、ヘラ先或はカモノハシ状に幅広くなるもの、そしてその先端を押圧して擬似双頭状にしたものなど、便化した形態であり、焼成も著しく弱い。これらは主としてB・Cに多い。

その他祭祀用とされるものについてみると、土馬はAに１点のみ。手捏ね土器は多くは坏状でB・C・C′に、漆付着や漆書き（墨書として扱った）等もC・C′に関与している。メノウ片

や水晶片及び色調ある川砂利等も同様のステージに認められる。

これらの状況から配置等を予想してみたい。

ステージＡはカナケ水の滲出するあたりのすぐ上にあたる。

後背に半ば埋もれた巨石群が並び、それに倣って２～３個須恵の高坏が置かれる。約１ｍほど前方には扁平な川石３個を敷き並べて祭壇とし、蓋坏と土馬を供える。中央から右寄りにかけて山石の頭位がのぞく地面に土製支脚や石を支えに甕が据えられ、上には甑が乗る。左手には須恵の小壷があったのか。器に何を盛ったかは分からないが、ごく近くで桃核が出土したことからすると、このような品であったろう、また季節も示唆しているといえよう。そして此処で数度ほぼ同様に繰返し行われたものであろうが、その次数は少なく（図版５参照）、やがて場が移動する。

ステージＢはＡと一部重複する前方の位置で巨石の根本あたりからはカナケ水がわずかに滲出する。またその巨石の狭間にはＡからの遺棄転入とみられる土器類がみられるが、その上から前方へ粘土を粗略に敷いてベースとするが範囲は広くない。この斜立する巨石群にそって須恵の坏を数個並べ、1.5ｍほど前方手前には川石を並べた祭壇をつくる。その付近は粗略な粘土敷きとし、右手寄りに又形の土製支脚上に甕を据える。わずかな粉炭があることから小規模な焚火を行ったと思われる。甕で煮沸する行事であったろう。その間には小形の甕も置かれていたと思われる。手捏ねや赤彩土器等の所謂祭祀土器はあまり用いられていないようだ。

このステージＢでの継続期間は短いとみられる。

ステージＣでは巨石群は背景となり、Ｂでの祭壇石組みのほぼ上あたりに重ねて川石を並べた同様の祭壇をつくる。これはいわば巨石群の前庭部にあたる。このベースには粘土貼りは認められず、軟弱地に遺棄された土器を踏圧した面であり、平坦ではない。あるいはほぼ同じ場での繰返しの結果次別の区別が出来なくなってしまったことも考えられる。凡そ２×３ｍほどの面で、中央奥の石の狭間からは赤いカナケ水が滲み出ていたと思われる。庭面左手寄り気味に横瓶を置き、その前に須恵の輪つまみ蓋と糸切底や高台付の坏が赤彩坏とともに置かれる。また極く薄い布目痕のある所謂製塩土器と呼ばれる細片や水晶、メノウ片も用いられていた。中央から右方へかけては土製支脚に甕を乗せ、火を焚いている。そのまま遺棄したこの甕や土製支脚等は次のときにまた踏圧されて次のベースとなったようだ。

ステージＣ′はステージＣの石に隣接していてこの間の区分は不明瞭である。ひと抱えから人頭大の石が散在する面で、土器片等の踏圧は厚さがやや薄い。土製支脚や甕を中心に据えて火を焚いたため半分炭が若干残っている。それをとりまく散在する石の上に須恵の坏を置き、右やや奥まって赤彩坏を配する。さらに右手やや高目に横瓶や時に長頸壷を置く。ステージＣに近い左手あたりには手捏土器や丈の低い須恵の高坏も置かれることがある。また２～３か所には赤や青色の川砂利が拳大程散布するところがある。ここでは甕の底部は丸底のものが目につく。土製支脚はヘラ先き状或はカモノハシ状のものが多く又状（双頭）は数が少ない。

このＣ′はステージＣとレベルに大差がなく、Ｃ・Ｃ′は一体の遺構である可能性がある。と

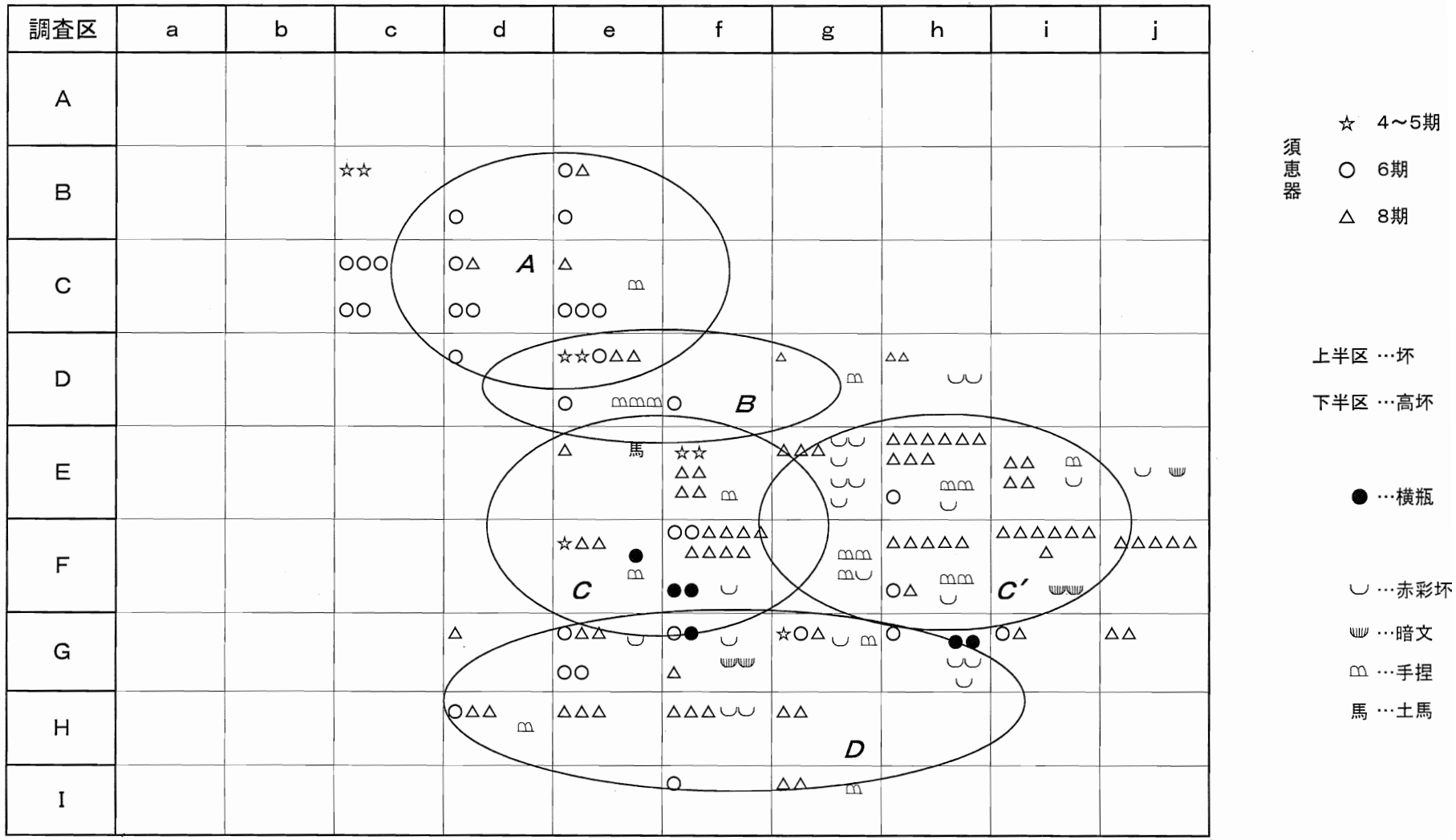


図16　須恵 坏・高坏の年代観別と特殊遺物の分布状況

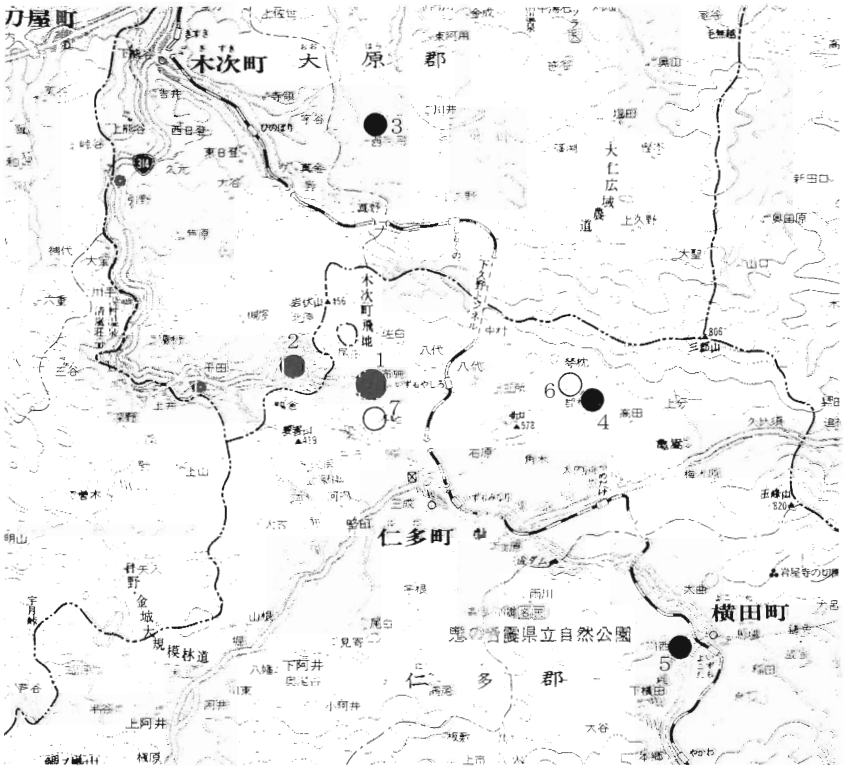
するとそれまでのＡ～Ｂの場合は小規模であった祭事がＣ・Ｃ′段階に移るとその規模が拡大され、その結果器種の配置での差異であると考えることが出来よう。

ステージＤとしたところは遺物が最も多く堆積していた場所であるが、明らかなベースは認め難かった。概ね地山面は赤いカナケ水が浸潤する泥質の緩斜面である。湿度の高い堆積上層には須恵の高台付坏や土師の甕、暗文を施した赤彩坏などが顕著であったが、遺構と覚しきものは見当たらなく、ステージＣやＣ′からの転入又は投入の堆積がみられる。下端近くの２群の狭間に嵌入していた土器は投入された状況を示している。

以上の状況からここでの祭祀はＡ・Ｂステージとした高位置に始まり、Ｃ・Ｃ′ステージでその規模が拡大したと考えられる。石を並べた祭壇と実用の須恵の坏、土師の甕、土製支脚、甑を基本に横瓶や壷或はうるしを用いた墨書土器或はメノウや水晶、カラフルな川砂利等と、特別な意味をもって土馬や赤彩土器を用いている。

特に多く用いられている土師・須恵器は実用の品であることが特異である。

なお、近隣で土馬等の出土から祭祀遺跡とされたところは次の図のようである。



●土馬・陶馬出土地点

○祭祀関跡

1　円満寺遺跡
2　家の上遺跡
3　別所遺跡
4　芝原遺跡
5　上方林遺跡
6　カネツキ免遺跡
7　家ノ脇Ⅱ遺跡

図17　祭祀関連遺跡

5　出土遺物

1）須恵器類（図18～23）

須恵器は993点検出した。土器溜り出土遺物全体の３％弱ほどである。このうち、復元し図化しえたのは、150点にほどであった。以下、器種ごとに述べる。なお、各個体の詳細については観察表をつけている。

図18の１～29は坏蓋である。

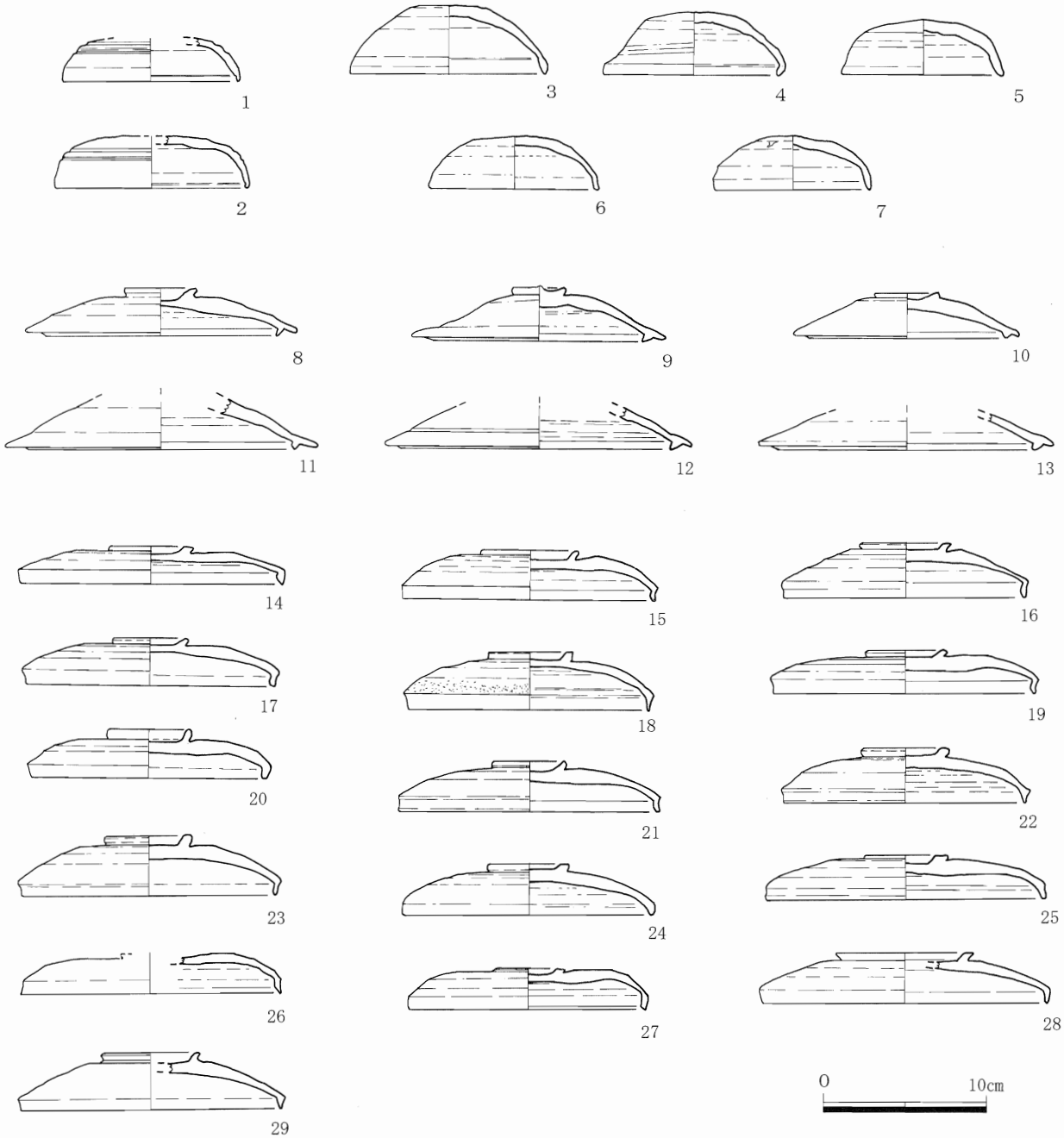


図18　須恵器（蓋）

１・２は口径10.6cm、11.7cmを測り、内外面回転ナデし、２は天井部へラケズリである。体部と天井部の界線は２条の沈線により表現し、端部内面の段は曖昧である。大谷編年出雲４期。この時期の小片はこの他にも数点存在した。

３は口径11.8cm、器高4.3cmで、外面の界線も、内面の段も消滅している。天井部はへラ切り後ナデる。出雲５期である。

４～７は３がさらに小型化し、口径9.4～10.5cmで体部は丸味をもち、天井部はへラ切り、蓋坏反転する直前のものである。４は天井部に“×”へラ記号がある。出雲６期。

８～13は輪状撮みと口縁部内面にかえりがつくものである。８・14・27は酸化焔焼成の為、外面全体或は一部が赤褐色を呈す。８～10は口径12.0～14.2cmでやや小型のもの。８・９は撮み周辺を削る。10は外面に灰釉が被り表面が痘痕状で調整不明である。11～13は撮み部を欠くが、推定復元による口径は15.6～16.4cmとやや大型のものである。内外面とも回転ナデ調整、天井部は不明である。小径のものは大径のものよりやや古相であろう。いずれも出雲６Ｂ期の範疇であろう。

14～29は輪状撮みを有し、口縁内面にかえりがつかないものである。いずれも口径15cm前後のもので、内面、外面体部はナデ、天井部はへラケズリのものと後ナデるものがある。口縁端部は垂直に強く屈曲する。器高が低く撮みが埋没傾向にあるもの（25～27）はやや新相で、26の撮み内には静止糸切り痕が認められる。出雲８期である。その他の器高が高く短く外傾する撮みを有すものは、出雲７期に遡るかもしれない。

図19の101～123は無高台の坏身である。

101～103は口縁内面にやや外傾し、やや高目のかえりがつくもので、101は底部はケズリ、他は回転ナデ調整を施す。いずれも口径12cm前後である。出雲４期。

104・105は口径11.6cm・12.0cmを測り、内外面回転ナデ、底部はへラ切り後粗くナデる。106は口径11.4cm、器高3.0cm、底径5.5cmを測るもので底部切離しは、回転糸切り後軽くナデる。107～123は底部切離しが回転糸切りのもので、口径12～14cmで、総じて内湾気味に立ち上がり口縁端部で短く僅かに屈曲するものである。115は口径17.0cm、器高6.5cmを測る大型の坏で、口縁は内湾しほとんど屈曲しない。112は壷底部の可能性もある。113は胎土に黒色微粒子を含む。117は底部内面に1.8mm径の円形文あり。107～123は口縁端の僅かに屈曲する器形、静止糸切りでなくすべてが回転糸切り調整であることから８世紀中葉以降のものと思われる。

図20・21の124～169は高台坏である。

器形は口縁が内湾するものと直線的に伸びるものがある。底面は明瞭に回転糸切りのもの（129・160・163・164）、静止糸切りのもの（159・161・162）と判別できる個体もあるが、底部切離し後、丁寧にナデ整形したものについては判別できないものがほとんどである。明確に糸切り、ま

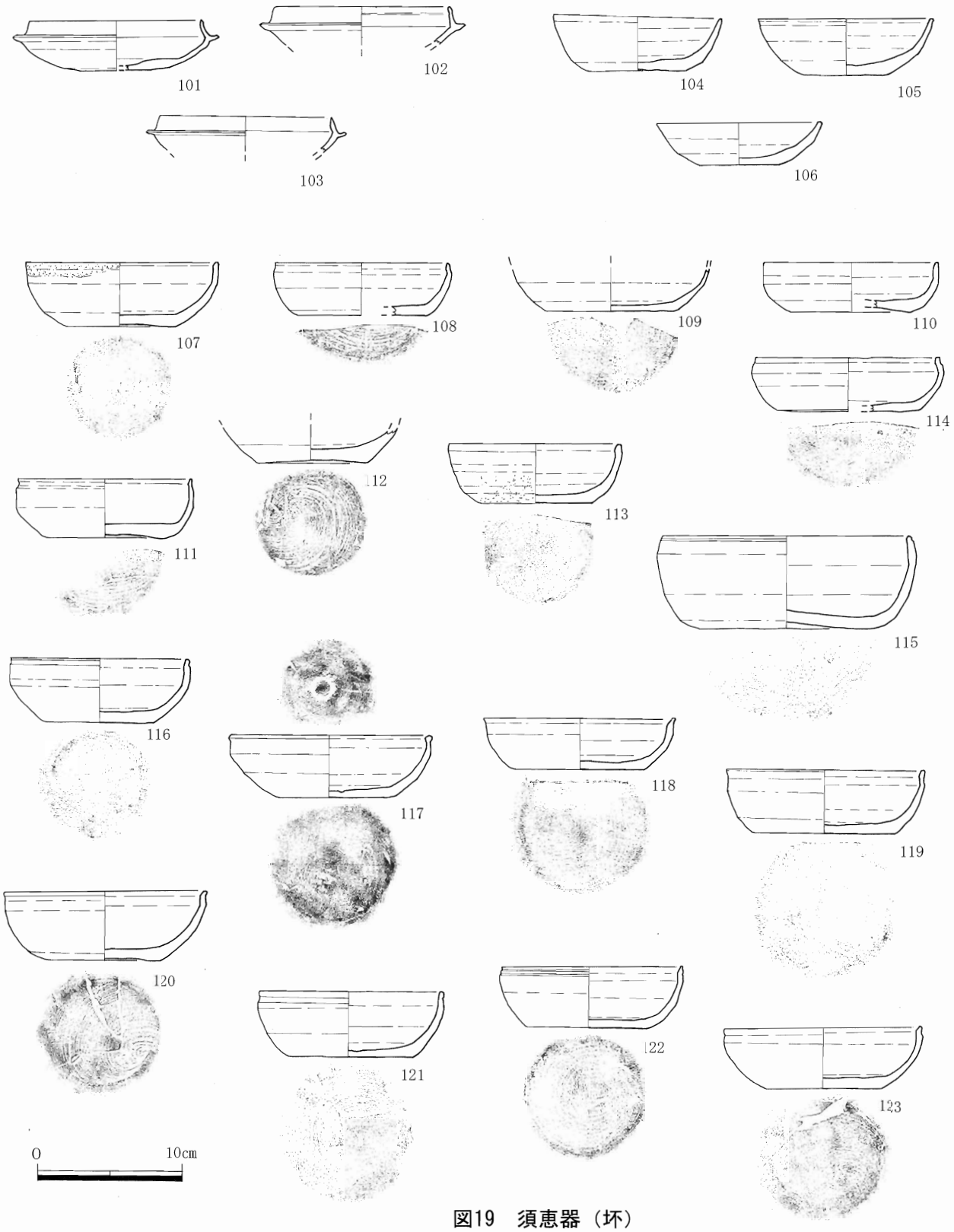


図19　須恵器（坏）

たは痕跡の残るものは土器溜り遺構内の南側のレベルの低い範囲からの出土である。糸切り底のものは底部から口縁にかけての立ち上がりが直線的なものが多く、ナデたり、糸切りが明瞭でないものは内湾傾向にある。129は底面に小角三点スタンプ文が押印されている。窯印であろうか。

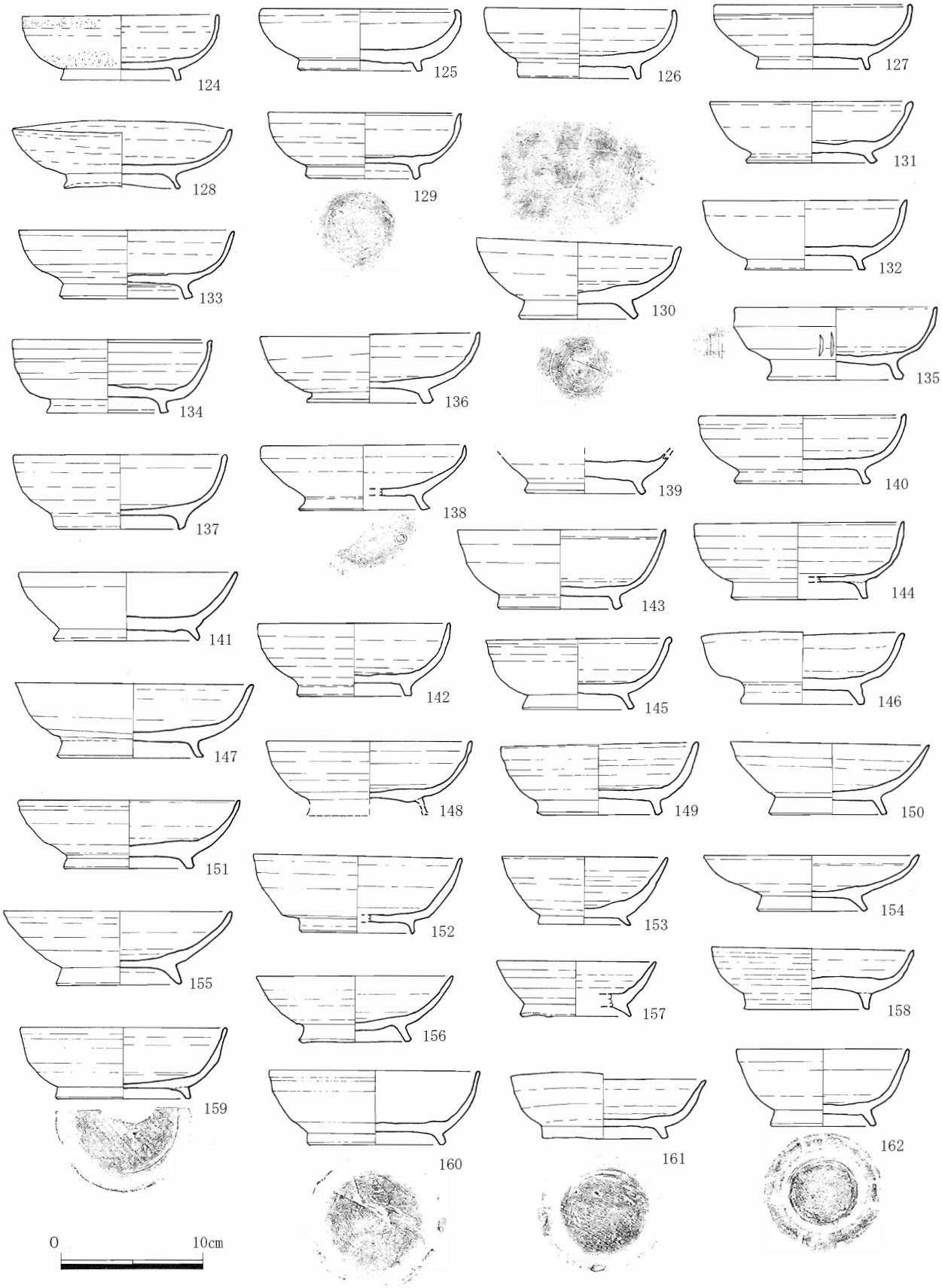

124
125
126
127
128
129
130
131
132
133
134
135
136
137
138
139
140
141
142
143
144
145
146
147
148
149
150
151
152
153
154
155
156
157
158
159
160
161
162
0
10cm

図20　須恵器（高台坏）

130の底内面にはランダムなヘラ描き線、底外面にはヘラ描き直線が認められる。135体部外面には２条の刻印がある。138の高台内外底面には８㎜径の円形竹管文が認められる。153外面口縁部には３条のヘラ描き線あり。158の胎土には黒色微粒子を含む。165は高台内外底面に○の中に×したようなヘラ記号がある。168はやや大型の坏で口径19.8㎝をはかる。外に踏ん張った高目の高台がつく。

169は坏というより高台付の皿で、内外面回転糸切りし、底面は切離し後強くナデる。他の高台坏よりやや後出するものと考えられる。調整で静止糸切りは回転糸切りに先行し、平行する時期もあると考えられる[※1]が、当遺跡においては土器溜り出土で明確な土層区分はできない為時期の細分は困難である。以上は、概ね８世紀の内のそんなに下らない時期とみて大過ないであろう。

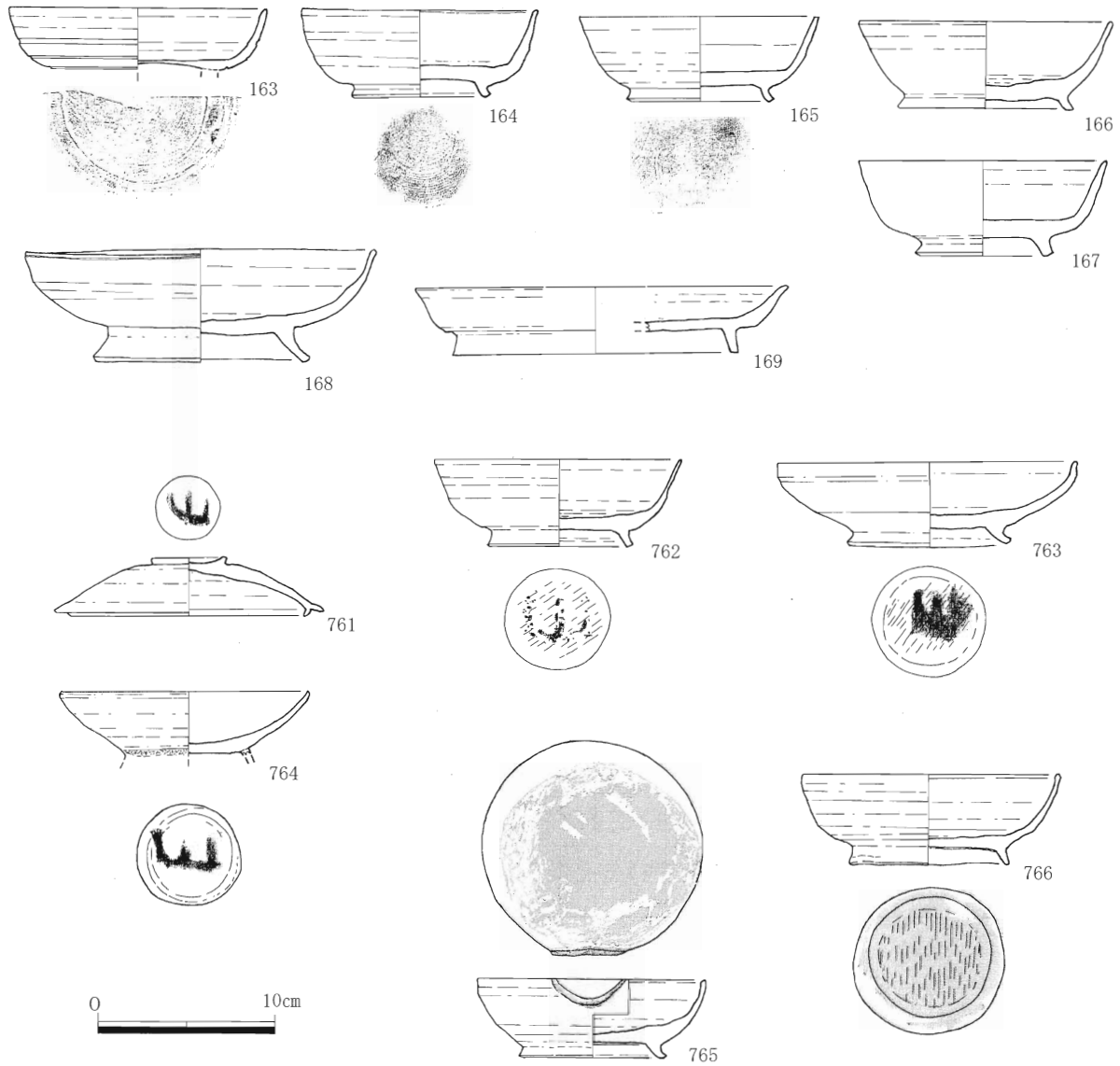


図21　須恵器（高台坏）

図21の761～766は墨書または漆書きした須恵器である。

761は輪状撮みと口縁内面にかえりをもつ出雲６期の坏蓋で、天井部周辺はヘラケズリ、撮み部はナデる。その撮み内に“山”？の字を書く。墨書か漆書きであるかは判然としない。762は高台坏で体部から口縁への立ち上がりは直線的で、高台内には静止糸切り痕を残す。高台内に漆書きの“山”？を書いている。漆書きの為かなり風化して剥落ちている。763も高台坏。外傾しながら立ち上がる体部が口縁部で強く垂直に屈曲するもので、高台内に静止糸切り痕を微かに残す。763に書かれた文字もやはり“山”？であるが、器壁に墨書の染みこんだ痕跡が判る程度である。764も高台坏で底部から口縁に皿状に大きくひらく器形で底面はヘラケズリ後ナデている。“山”の字を淡く墨書する。器形・胎土・法量等から１とセットであるかもしれない。765の高台坏は口縁の一部を打欠くもの。高台内には一面に淡墨が認められ、内底面と打欠き部にも黒色樹脂（漆）が認められ、転用硯、または転用片口としての使用を窺わせるものである。類例として、出雲国府跡[※2]においてハソウの口頸部を欠き、円孔に木製の栓がはめ込まれて、内部全面、外面肩部及び頸部の割れ口に漆が付着しているものが出土している。器種は異なるが、器の一部を打欠き、漆を入れ、注ぐという転用の事例として類似するものと考えられる。高台坏766の高台内にも黒色樹脂（漆）が一面に認められ、転用硯と思われる。これらは土器溜りの下位からの出土であった。

図22の201～220は高坏である。

201～214は低脚無蓋高坏である。いずれも坏部は浅い皿状を呈し、すかしは一段である。

201～203はすかしが台形状で１方向のみである。204は直径1.0cmの円形すかしをもつ。205は三角形すかしと線刻すかしが２方向にはいる。206～213はすかしが線刻になるもので206～209・211～213は２方向、210は３方向にすかしをもつ。214はすかしが消滅するものである。これらは出雲６期を中心とする時期のもので、やや遡るものもあるかもしれない。

215～218は長脚無蓋高坏である。やはり坏部は浅く、すかしはいずれも２方２段すかしである。217は上段のすかしが線刻となるものである。218は長脚とするには脚部が低いが２方２段すかしで、上下段ともすかしが線刻になるものである。これらも低脚のものと同様の時期と考えられる。

219・220は非常に脚部が低く坏部は浅い皿状の体部をもち口縁部で垂直に強く屈曲するタイプである。口径は16.8・15.5cm、器高6.9・7.2cmを測る。219の坏部の下方はヘラケズリする。このタイプの品は管見の限り周辺の遺跡では知らない。口縁端、脚端のつくり等から上記のものよりやや後出するものであろうか。

図23・24の301～323は壷・甕類である。

301～307は長頸壷で、口がラッパ状に大きく開きやや肩が張るもの（301・302・306）と口縁部が直行し、なで肩もの（303・304）がある。前者は03年度５・６次出土で形態的に底部に高台

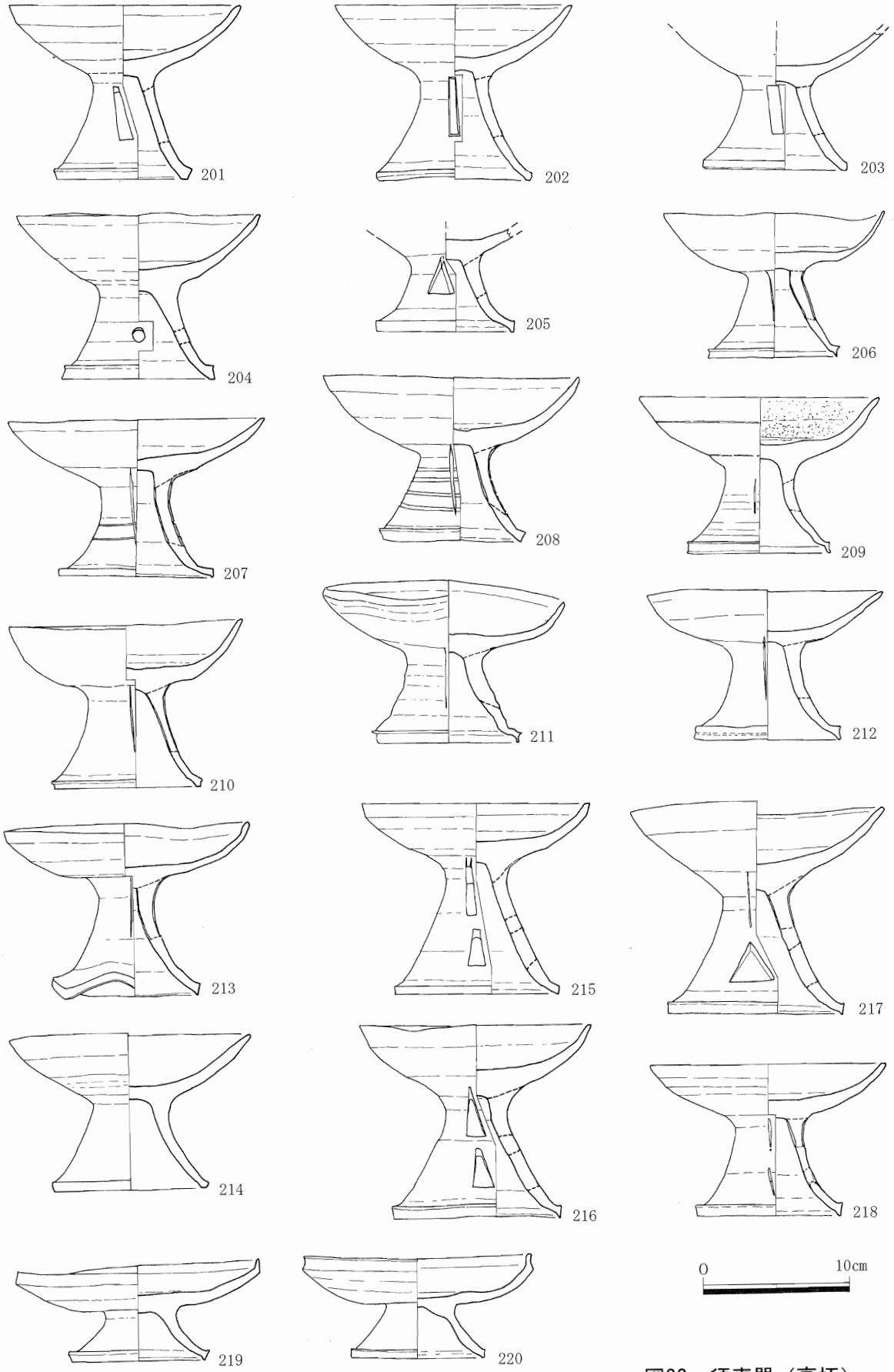

201
202
203
204
205
206
207
208
209
210
211
212
213
214
215
216
217
218
219
220
0
10cm

図22　須恵器（高坏）

が付くものと考えられ、後者は深浅なく出土し無高台と考えられる。

305・307は胴部のみの残存であるが後者のグループであろう。303・305には体部に“×”のヘラ記号が、307には頸部に円形刺突文が施される。前者は大谷編年出雲７～８期、後者は５～６期であろう。

308は小型壷の底部で、底部切り離しは回転糸切りである。坏身である可能性もある。309～311は壷の底部で309は無高台、310・311は高台が付く。309は胴部下半から回転ヘラケズリし、底部はヘラ切り後ナデる。310は高台にすかしの退化したようなヘラ切り痕が認められる。309は出雲

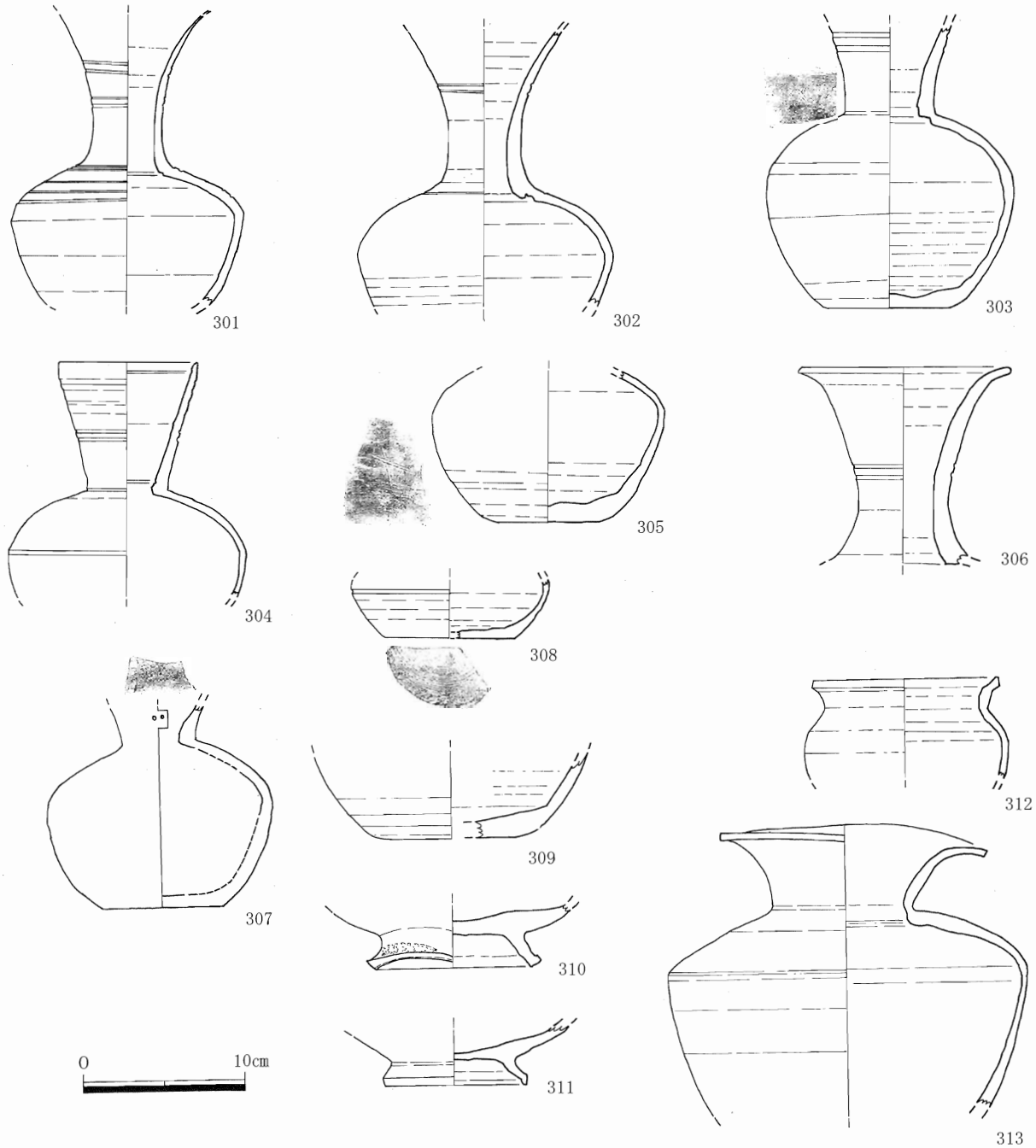


図23　須恵器（壷）

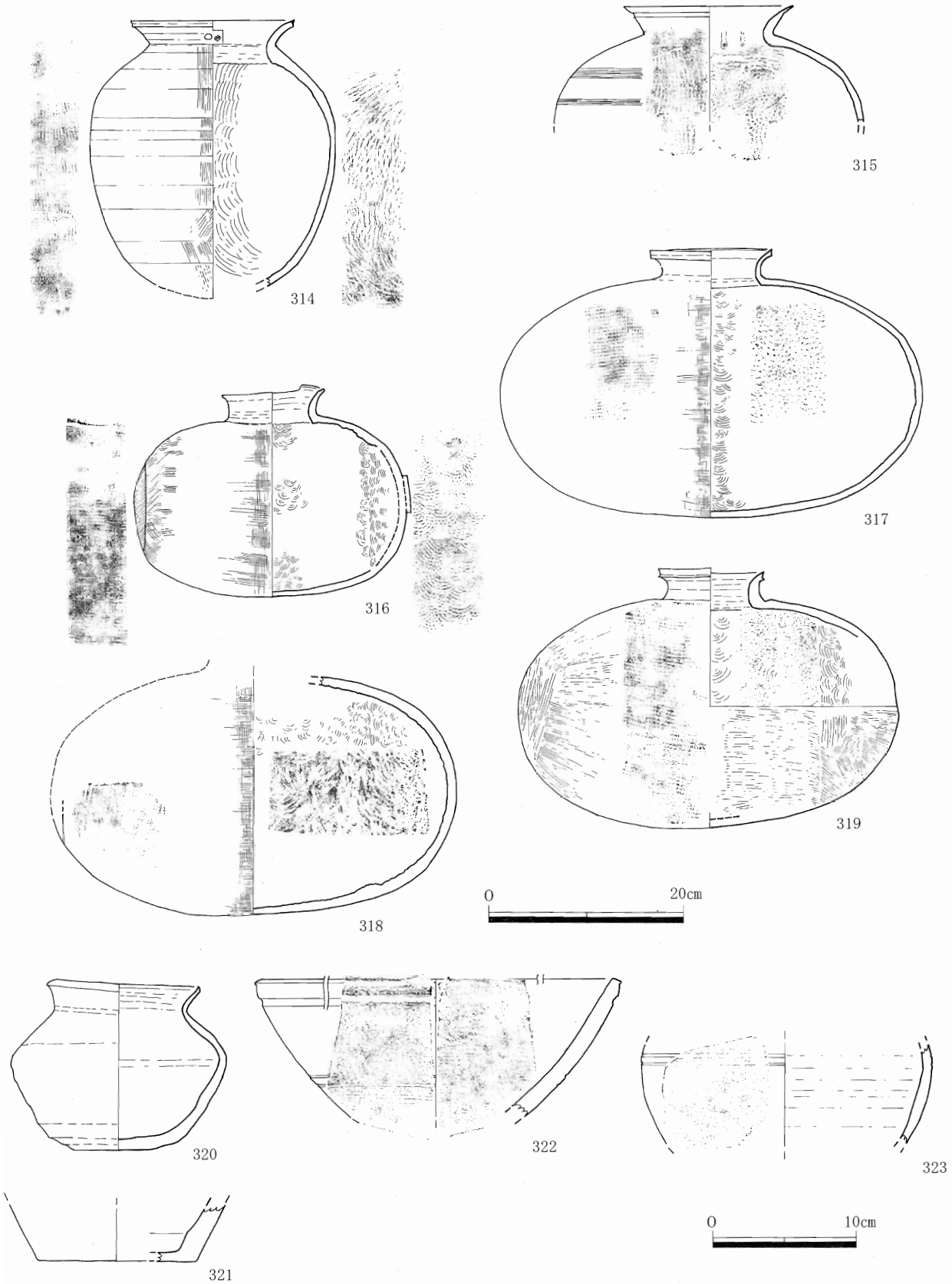


図24　須恵器（壷・横瓶・他）

５期、長い高台を有する310・311は６期の範疇であろう。312は小型壷で口縁外面にはっきりと稜をもつもので内外とも回転ナデである。313は広口壷で口縁は広くラッパ状に外反し、肩は強く張る。

314・315は甕である。314は口径16.7cm、器高28.8cm、最大胴径25.0cmを測り、容量を推算すると7.3㍑ほどである。頸部から短く外反した口縁外面には面をつくり、外面は格子状タタキ、内面は同心円状タタキを施す。頸部には円形浮文と四弁の印花文？が横並びに施される。窯印であろうか。315は頸部から短く外反した口縁は先尖り気味におさめるもので、内外面タタキ調整で、外面・口縁内面に灰釉を被り淡い緑色を呈す。

316 ～ 319は横瓶である。何れも03年度４～７次出土である。316～318には重ね焼きの痕跡が認められ、316・319には閉塞取り付けの痕跡がある。316には外面に須恵器片が付着している。316～318は外面はタタキ、カキメ調整し、内面は同心円状タタキを施す。319には外面にカキメ調整はみられない。316 は口径10.5cm、器高 21.7cm、胴長 28.0cmを測り、口縁は頸部から単純に外反する口縁である。317～319 は口径11.0cm～12.7cm、胴長 40cm前後と316 より大型の一群である。口縁端部も317・319は外面に稜をもち面をなす。

320 は短頸の壷で内外面とも自然釉を被る。底部周辺はケズる。321は底径11cmを測り砂粒を多く含むが焼成はよい。焼締陶であろうか。322 は鉢形状のもので内外の特徴的なタタキがみられる。323 は排土中出土のもので器形は丸味を帯びる破片で、外面には櫛状工具による紋様、その直下に２条の沈線が巡る。その他は回転ナデ調整である。321～323 は土器溜りの中心となる時期よりやや下る時期のものであろう。

以上、様々な須恵器をみてみると遺物のボリュームが増す中心となる時期は７世紀後葉～８世紀中葉と考えられる。

註

※１　「史跡出雲国府跡」『風土記の丘地内遺跡発掘調査報告書14』Ｐ145に、14号土坑出土遺物は坏身底部の切り離しは静止糸切り・回転糸切りの両者があるが、前者の比率が高い（８世紀前半）、５号土坑下層出土遺物の坏身底部の切離しは回転糸切り（８世紀後半）とある。

※２　島根県教育委員会：『史跡出雲国府跡』昭和50年３月

参考文献

島根県教育委員会：『高広遺跡発掘調査報告書』1984.3

大谷晃二：「出雲地域の須恵器の編年と地域色」『島根考古学会誌第11集』　島根考古学会　1994

島根県教育委員会：「家の脇遺跡　原田遺跡１区　前田遺跡4区」『尾原ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書４』2004.3

島根県教育委員会：「家の後Ｉ遺跡　垣ノ内遺跡」『尾原ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書２』2003.3

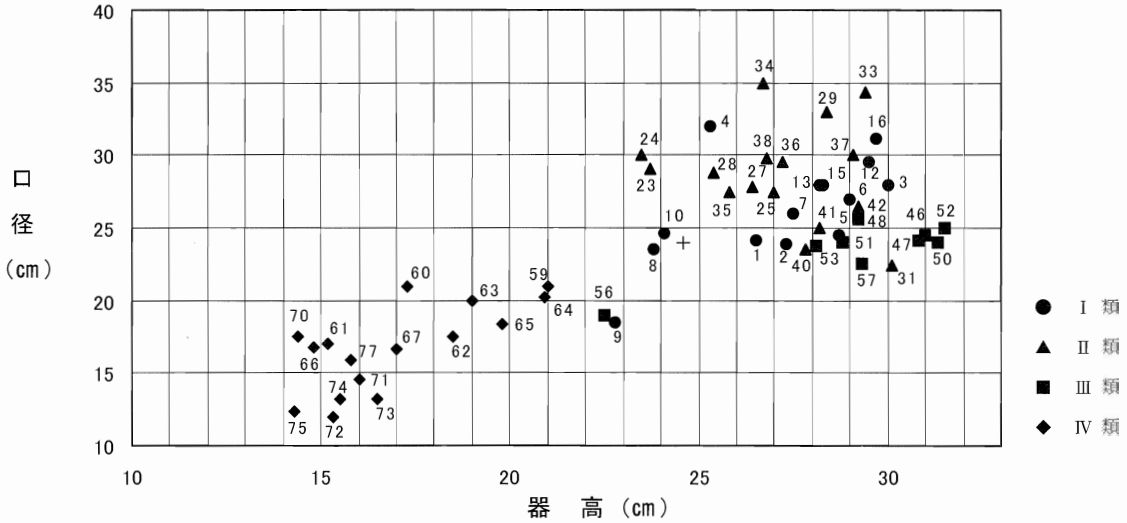
松江市教育委員会：『出雲国庁跡発掘調査概報』1970

大川　清　鈴木公雄　工楽善通　編：『日本土器事典』　雄山閣　1996

２）土師器類（図25～51）

土師器は34845片を数え、土器溜り出土遺物全体の約97％を占め、その内訳は甕類・土製支脚・甑等であった。それぞれ250点・50点・14点を復元しえた。なお、赤彩土器・製塩土器・手捏ね土器・土馬については特殊遺物として後述する。

図25～38は甕類である。今回出土した甕類は個体数で言えば、250点を超える。これだけまとまって出土するのは近隣では希有な事例である。また、底部が平底というか、“へたる”形のものが多くみられた。この甕類を残りの良いものを中心に形状に着目し分類する。甕個々の詳細については観察表を見て頂きたい。口径・器高ともに計れるものは分布図にあげている。分布図の数字は図の個体番号と同じである。口径40cmを超える大型のもの（グラフには未掲載）、口径23～35cm・器高23～32cmの中型のもの、口径12～22cm・器高13～22cmの小型のものとはっきりと分布がまとまっている。これは、甕の使用用途によるものかどうか判らないが、製作時に既に意識的に造り分けていたと考えることができよう。



甕の口径と器高

Ⅰ類 … 中型・大型の品で、底部が丸底を呈すもの。

Ⅱ類 … 中型・大型の品で、底部がへたり[※1]底（平底）を呈すもの。

Ⅲ類 … 中型・大型の品で、長胴型を呈すもの。

Ⅳ類 … 小型のもの。概ね口径が20cm以下のもの。

Ⅴ類 … 上記の分類が不可能なもの。

また、この甕類については煤・コゲ等の有無での分類も試みた。

Ⅰ類（1001～1022）

ここに分類できたものは22点である。口縁部は総じて頸部で強く屈曲し短く外反した端部を丸くおさめるものが多いようである。この中で外面調整がハケメのもの（1004・1006～1008・1019・1021）とナデるもの（1001～1003・1005・1009～1018・1020・1022）がある。1006・1019は外面

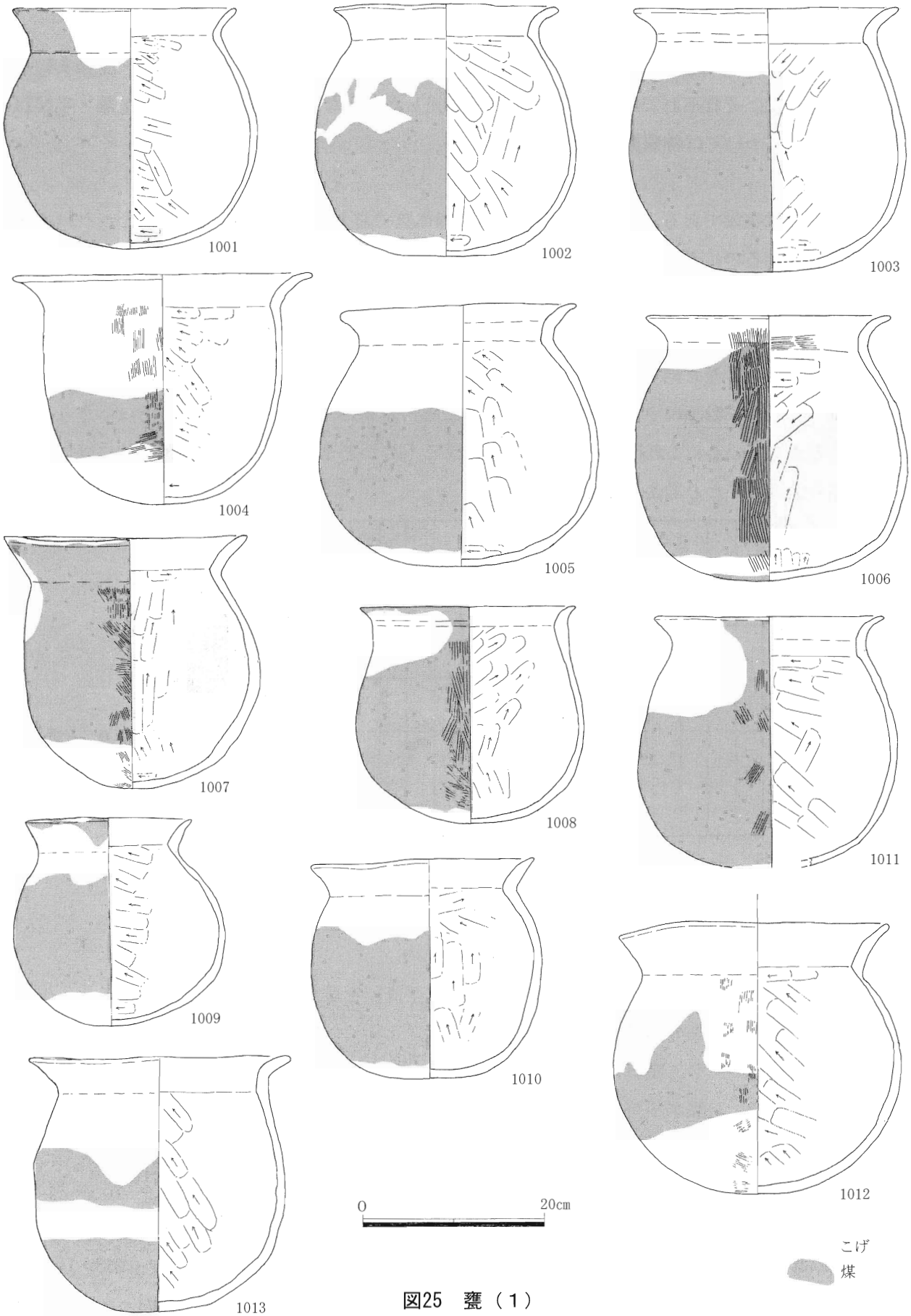

1001
1002
1003
1004
1005
1006
1007
1008
1011
1009
1010
1012
1013
0
20cm
こげ
煤

図25　甕（1）

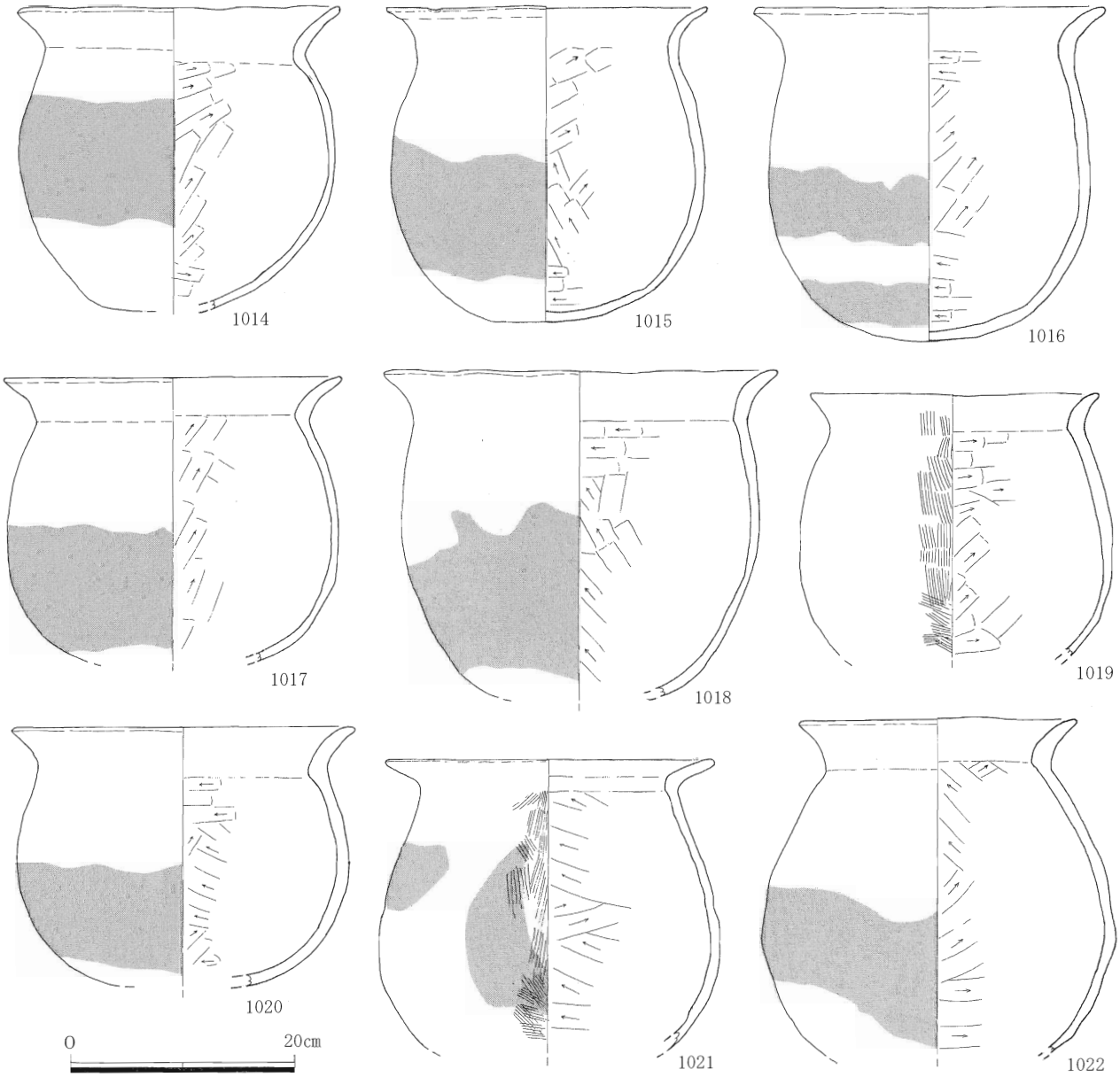


図26　甕（２）

だけでなく内面口縁～頸部にも横方向にハケメがみられる。内面頸部以下はケズリ調整である。口径<胴径タイプの安定した甕がほとんどであるが、口径>胴径タイプ、やや鍋型にちかいもの（1004・1016・1018・1020）も数点みられる。1001は外面の煤の付着が底部から口縁にかけて帯状に３単位みられる。このことは他のものでははっきりとは判らなかったが、この個体に限っては土器の下に支点を三つ用いて煮炊きした明確な証拠と考えられる。

Ⅱ類（1023～1045）

Ⅱ類は底部を意識して平坦に作っているグループである。Ⅰ類と比して外面ハケメ調整のものが目立つ（1023・1026・1027・1029・1032・1036・1037・1043～1045）。内面は頸部までがナデ、

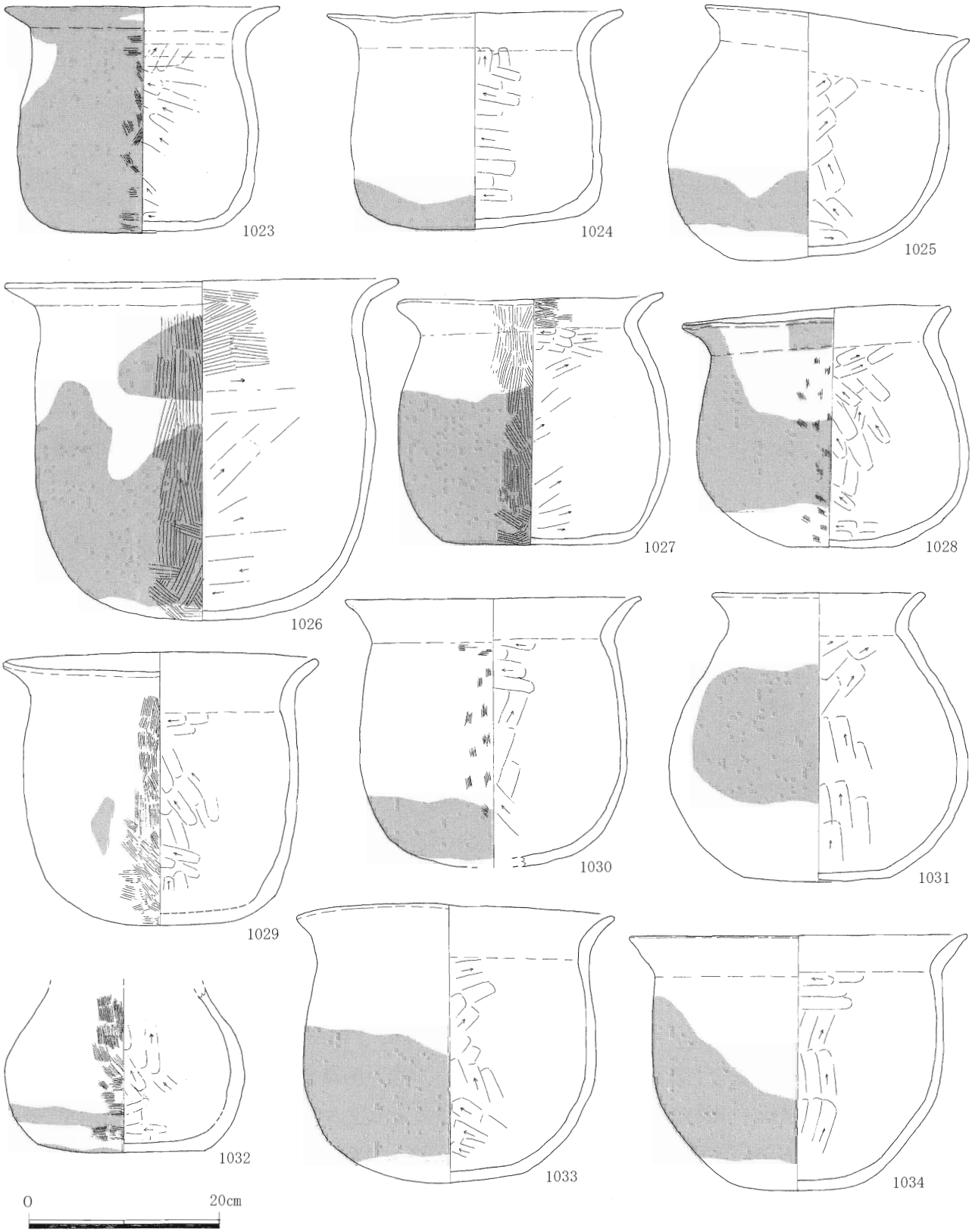

1023
1024
1025
1026
1027
1028
1029
1030
1031
1032
1033
1034
0
20cm

図27　甕（3）

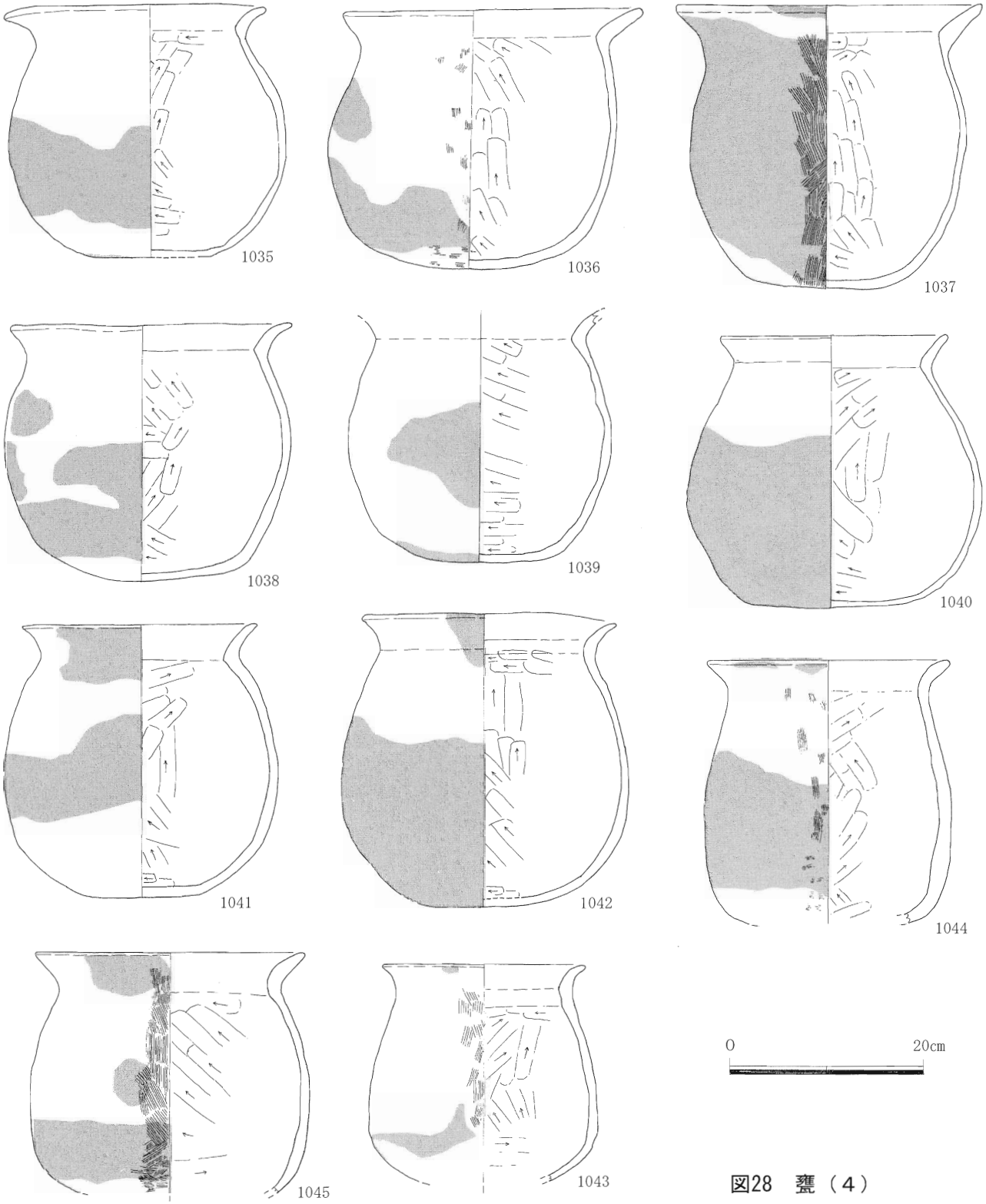


図28　甕（4）

以下をケズルものが大半であるが、頸部までをハケメ調整するもの（1026・1027・1045）もある。口径＞胴径タイプがⅠ類よりやや目立つ（1023・1024・1026・1029・1030・1033・1034・1036・1037）。これは製作上、底部がへたり底の為どうしても口縁が開き気味の鍋状になるからではなかろうか。

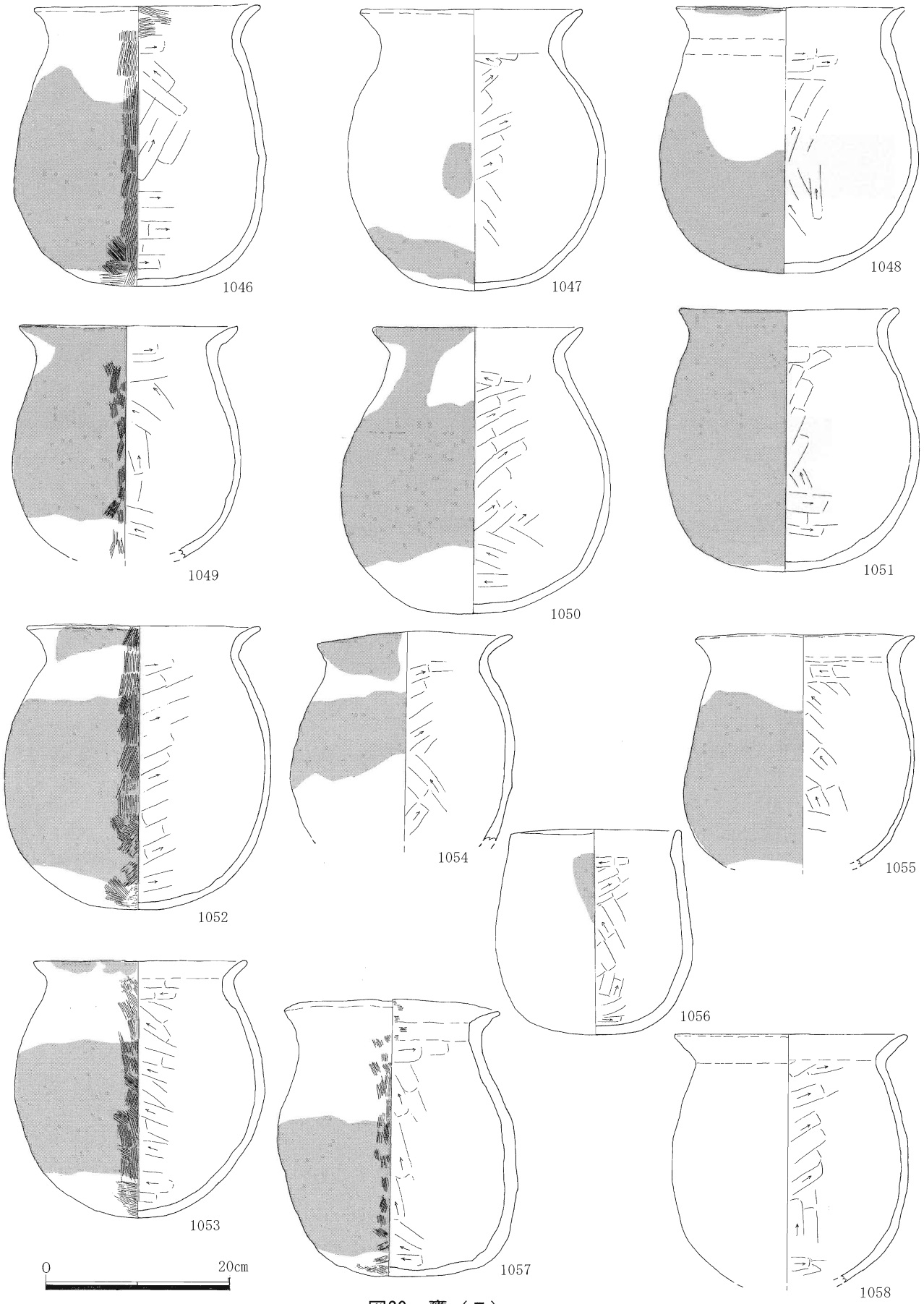

1046
1047
1048
1049
1050
1051
1052
1053
1054
1055
1056
1057
1058
0
20cm

図29　甕（5）

Ⅲ類（1046～1058）

Ⅲ類は胴部が“ウリ”状を呈し、胴最大径部が下位に下がった位置にある長胴型のグループである。口縁部は概ね頸部で屈曲し外反するタイプであるが、1056のように胴部から口唇部まで直線的に伸びるものもある。外面調整はナデるもの（1047・1048・1050・1051・1054・1056・1058）とハケメのもの（1046・1049・1052・1053・1057）があり、1055はハケメを施した後、丁寧にナデ仕上げする。内面頸部以下は総じてケズる。

Ⅳ類（1059～1092）

Ⅳ類は全体に小型で口径が概ね20cm以下のものである。ただし、1078以降は口縁部のみの残存で口径にのみ頼る。外面調整がナデのものが大半であるが、ハケメ調整のもの（1059・1064・1065・1068・1077・1079・1083・1086・1087・1089・1090）もある。1066・1067・1080は全体的にはナデ調整であるが一部ハケメがみられる。内面口縁部にハケメが施されるのは1079・1086・1087で、その他はナデる。

Ⅴ類（1093～1236）

Ⅴ類は上記Ⅰ～Ⅳ類への分類が個体の残存が僅かの為、若しくは分類にあたっての着目部が欠損している為、分類不可能であったものである。Ⅴ類にしたものは口縁部は残存又は図上復元し得たものであるので、口径、調整により大まかにグルーピングし掲載している。総じて縊れた頸部からやや外反気味に短く肥厚する口縁端部である。1093～1125は口径30cm以上のもの。この中で1111～1125は外面に、または内外両面がハケメ調整のものである。これ以外はナデ調整である。1126～1226は口径が20～30cmの中型のもの。この中で1182～1226は外面にハケメがみられるものである。1227～1236は口径20cm以下のものである。この中で1231～1236にはハケメがみられる。ハケメ調整としたもの以外のものは基本的にナデ調整である。

甕の煤・コゲの付着状況について

今回、土器溜りから出土した甕の大半には煤・コゲ等の付着がみられた。ここでは上記の甕の形状と煤・コゲの付着状況で分類可能なものに限りとりあげ個々に観察した。
外面の煤、内面のコゲについては以下のように分類する。

Ａａ類…外面に煤があり、内面にコゲがあるもの。
Ａｂ類…外面に煤があり、内面にコゲがないもの。
Ｂａ類…外面に煤がなく、内面にコゲがあるもの。
Ｂｂ類…外面に煤がなく、内面にコゲがないもの。

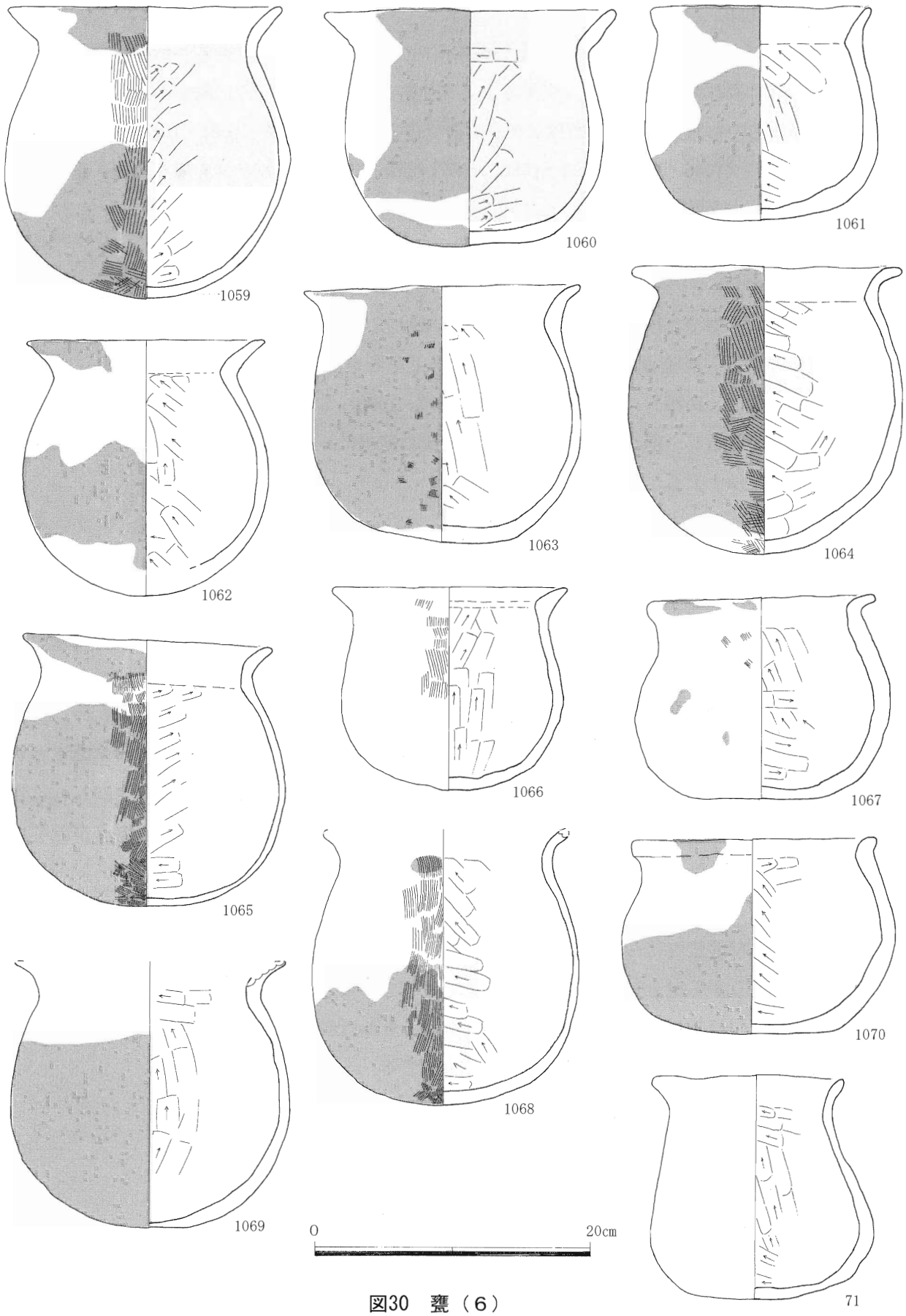

1059
1060
1061
1062
1063
1064
1065
1066
1067
1068
1069
1070
71
0
20cm

図30　甕（6）

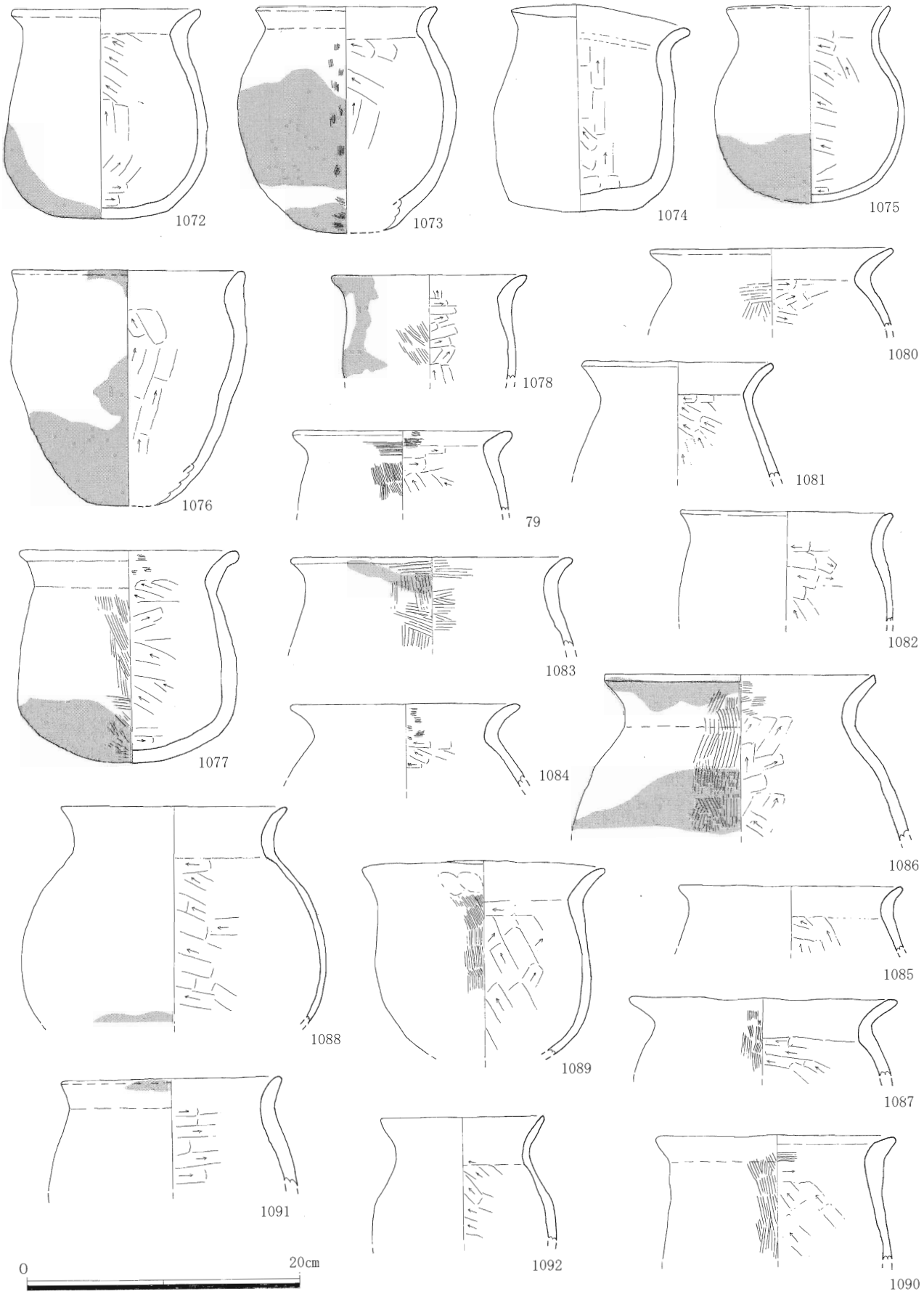

1072
1073
1074
1075
1076
1078
1080
1081
79
1082
1077
1083
1084
1086
1088
1089
1085
1087
1091
1092
1090
0
20cm

図31　甕（7）

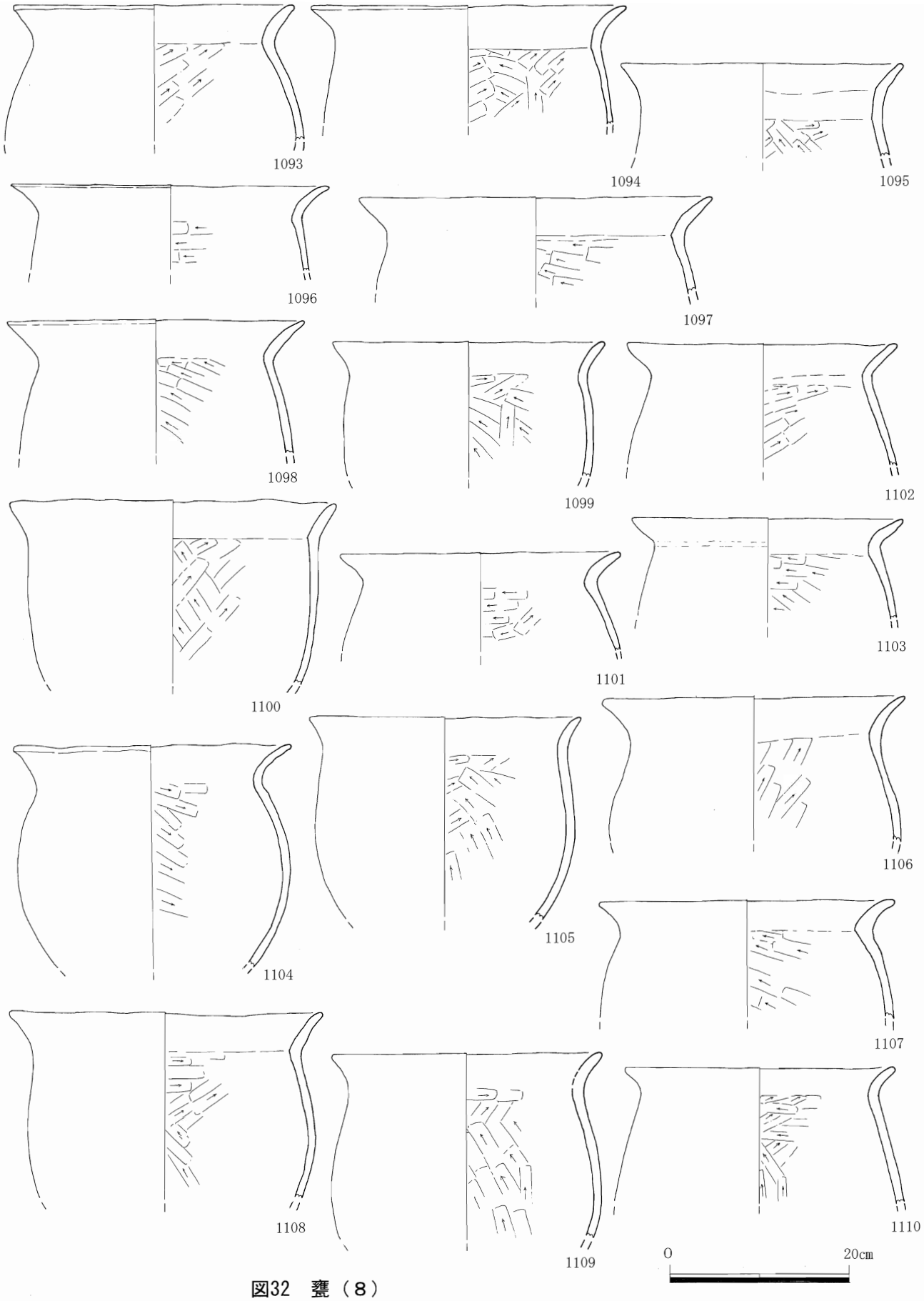

1093
1094
1095
1096
1097
1098
1099
1102
1100
1101
1103
1104
1105
1106
1107
1108
1109
1110
0
20cm

図32　甕（8）

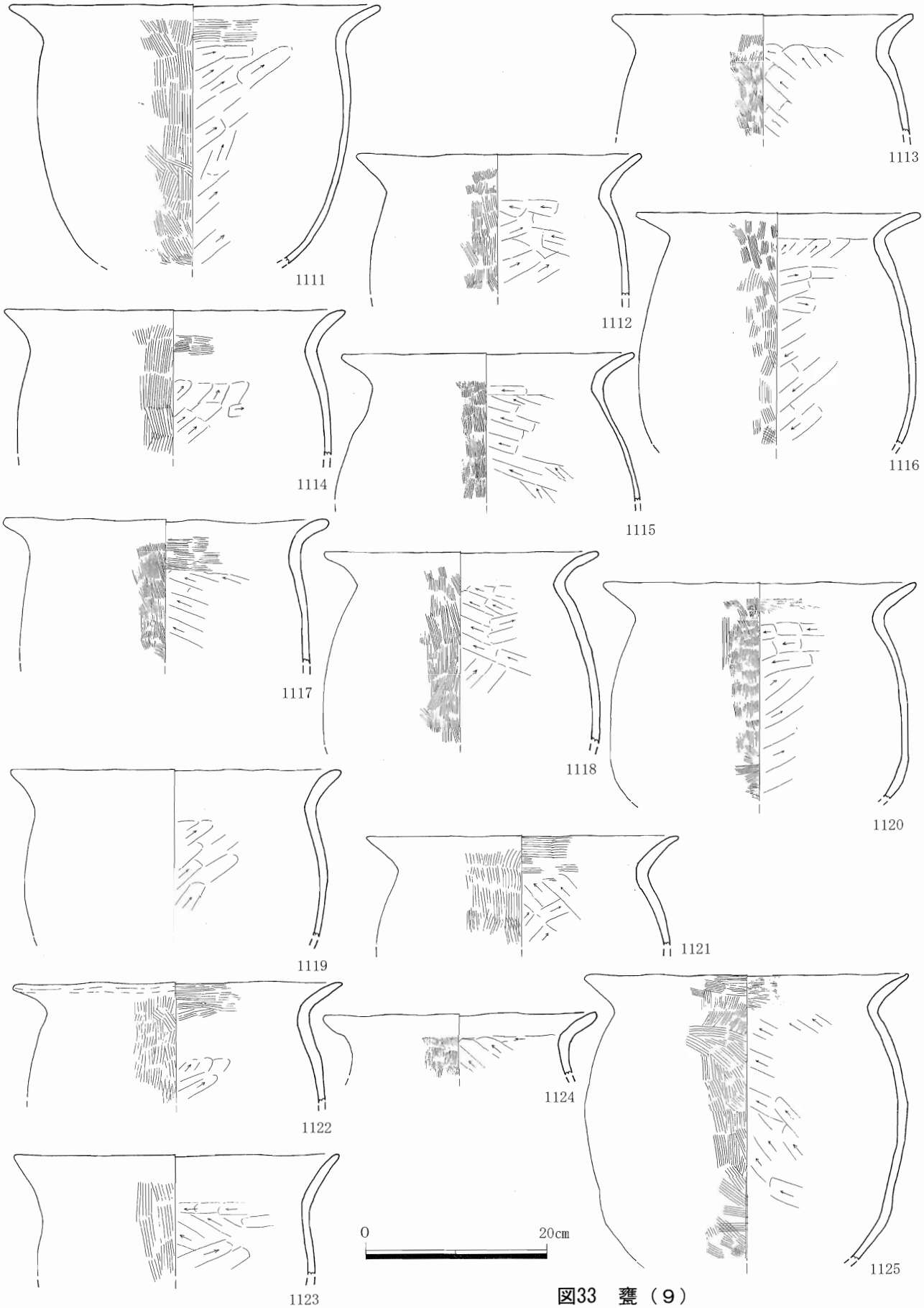

1111
1112
1113
1114
1115
1116
1117
1118
1119
1120
1121
1122
1123
1124
1125
0
20cm

図33　甕（9）

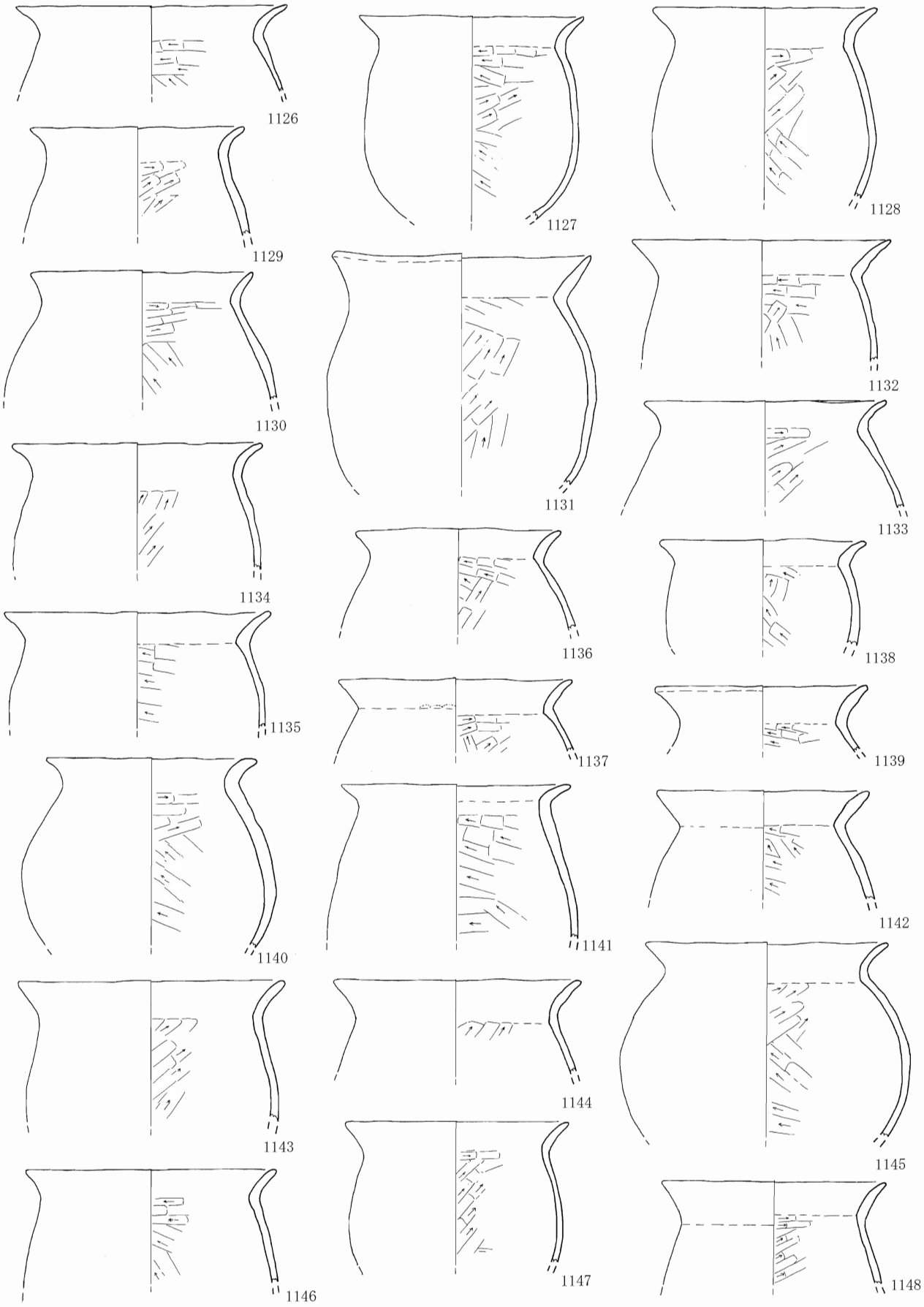

1126
1127
1128
1129
1130
1131
1132
1133
1134
1135
1136
1137
1138
1139
1140
1141
1142
1143
1144
1145
1146
1147
1148
0
20cm

図34　甕（10）

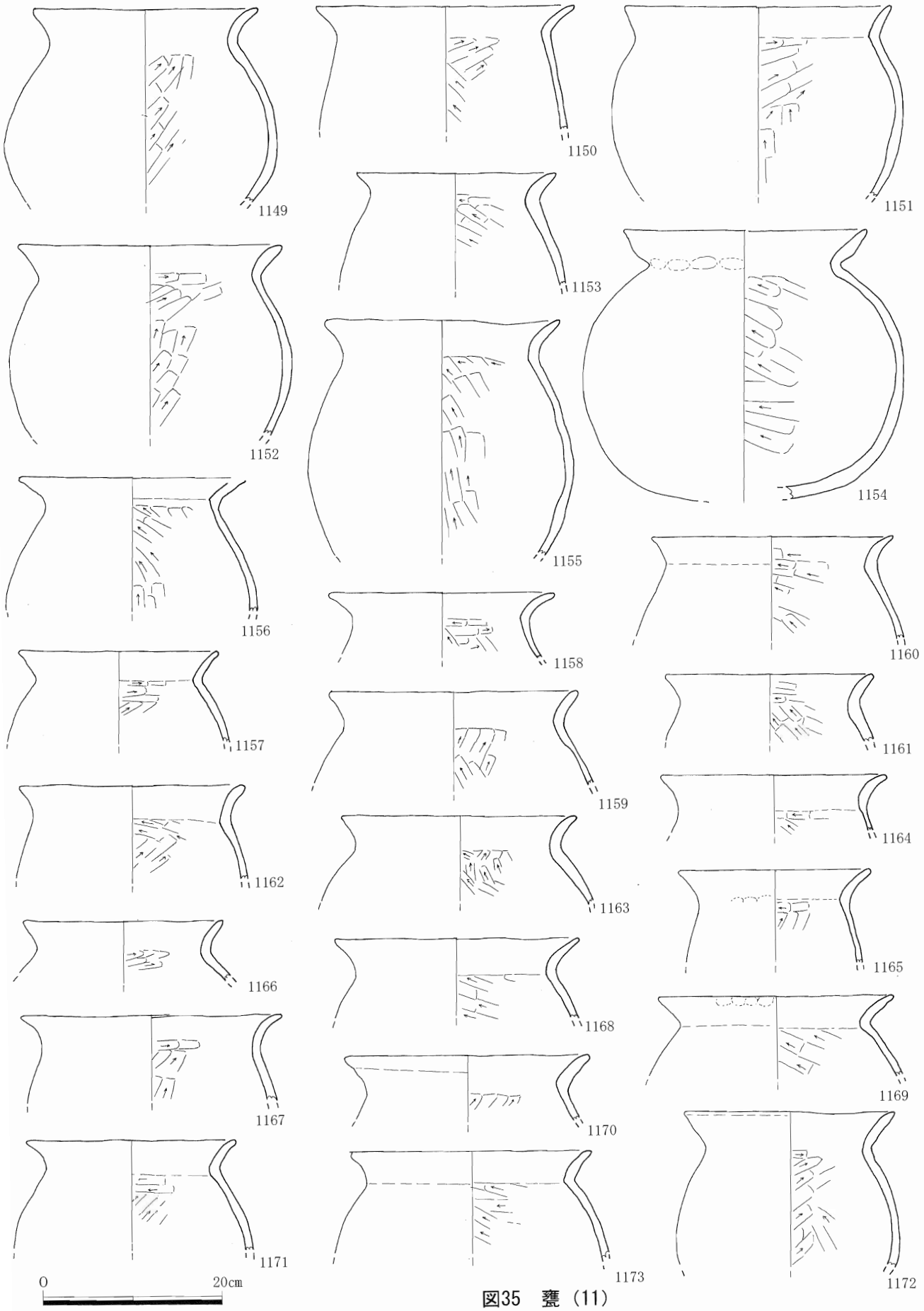

1149
1150
1151
1152
1153
1154
1155
1156
1157
1158
1159
1160
1161
1162
1163
1164
1165
1166
1167
1168
1169
1170
1171
1172
1173
0
20cm

図35　甕（11）

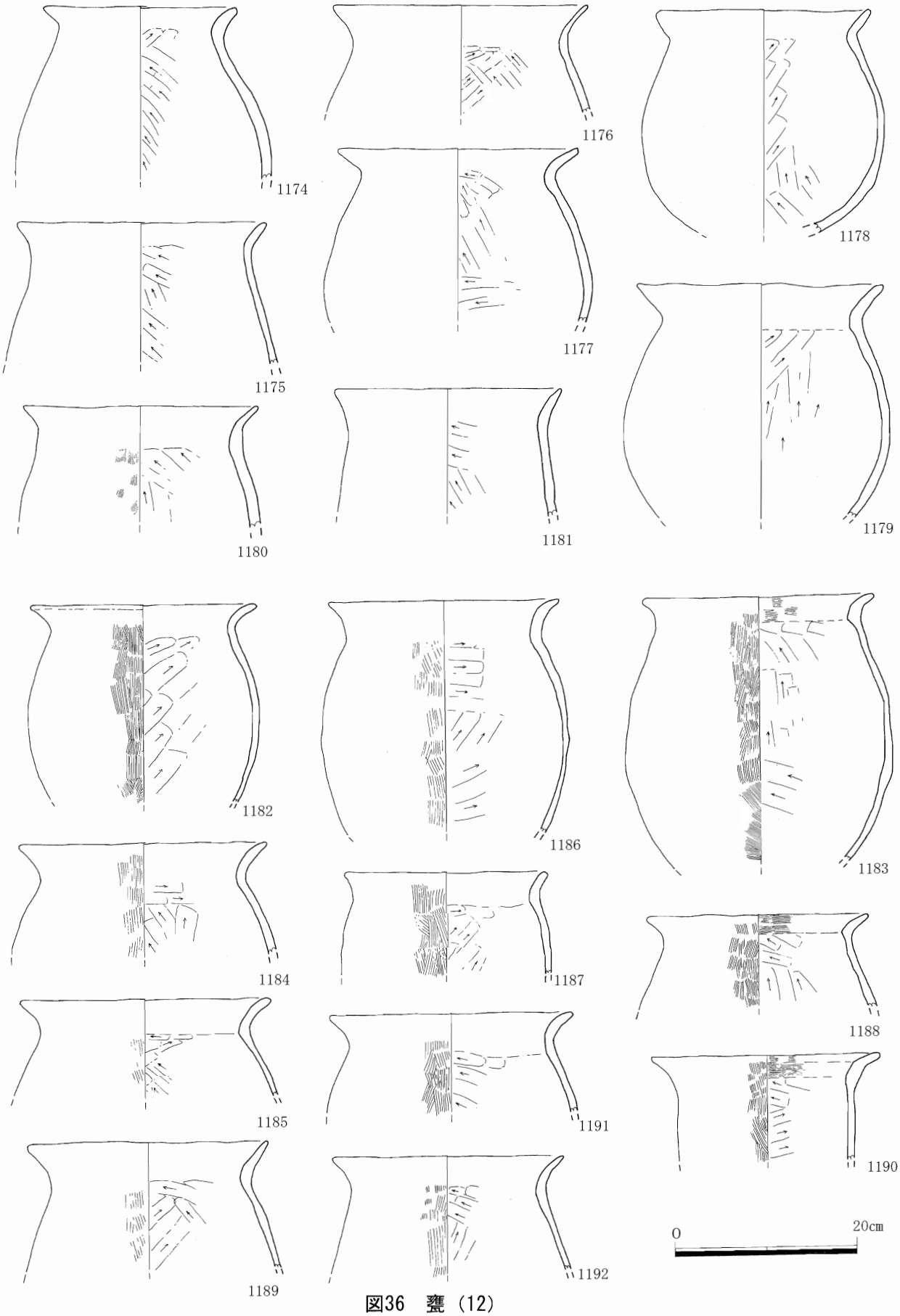

1174
1176
1178
1175
1177
1179
1180
1181
1182
1186
1183
1184
1187
1188
1185
1191
1190
1189
1192
0
20cm

図36　甕（12）

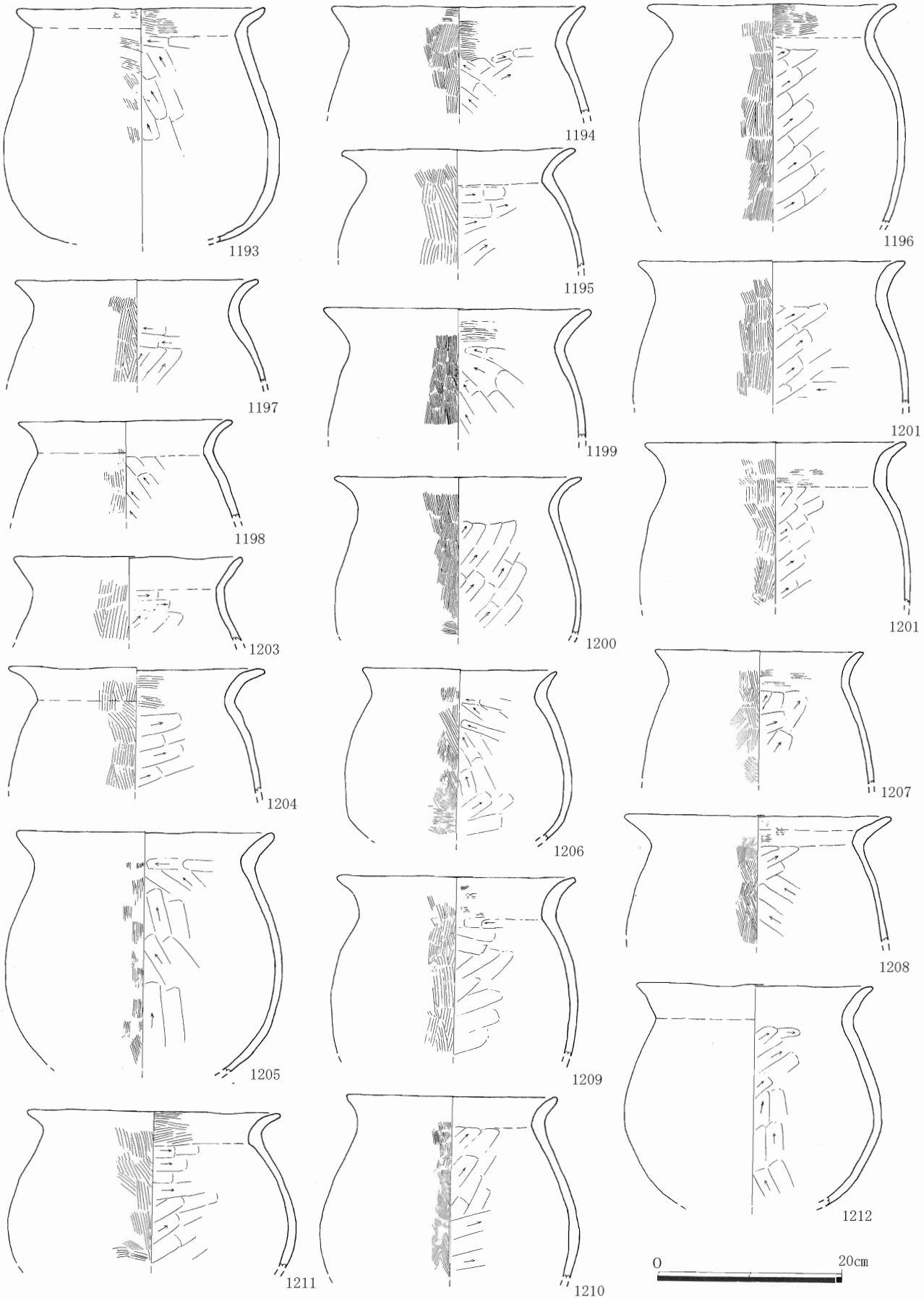

1193
1194
1196
1195
1197
1199
1201
1198
1200
1201
1203
1204
1206
1207
1208
1205
1209
1212
1211
1210
0
20cm

図37　甕（13）

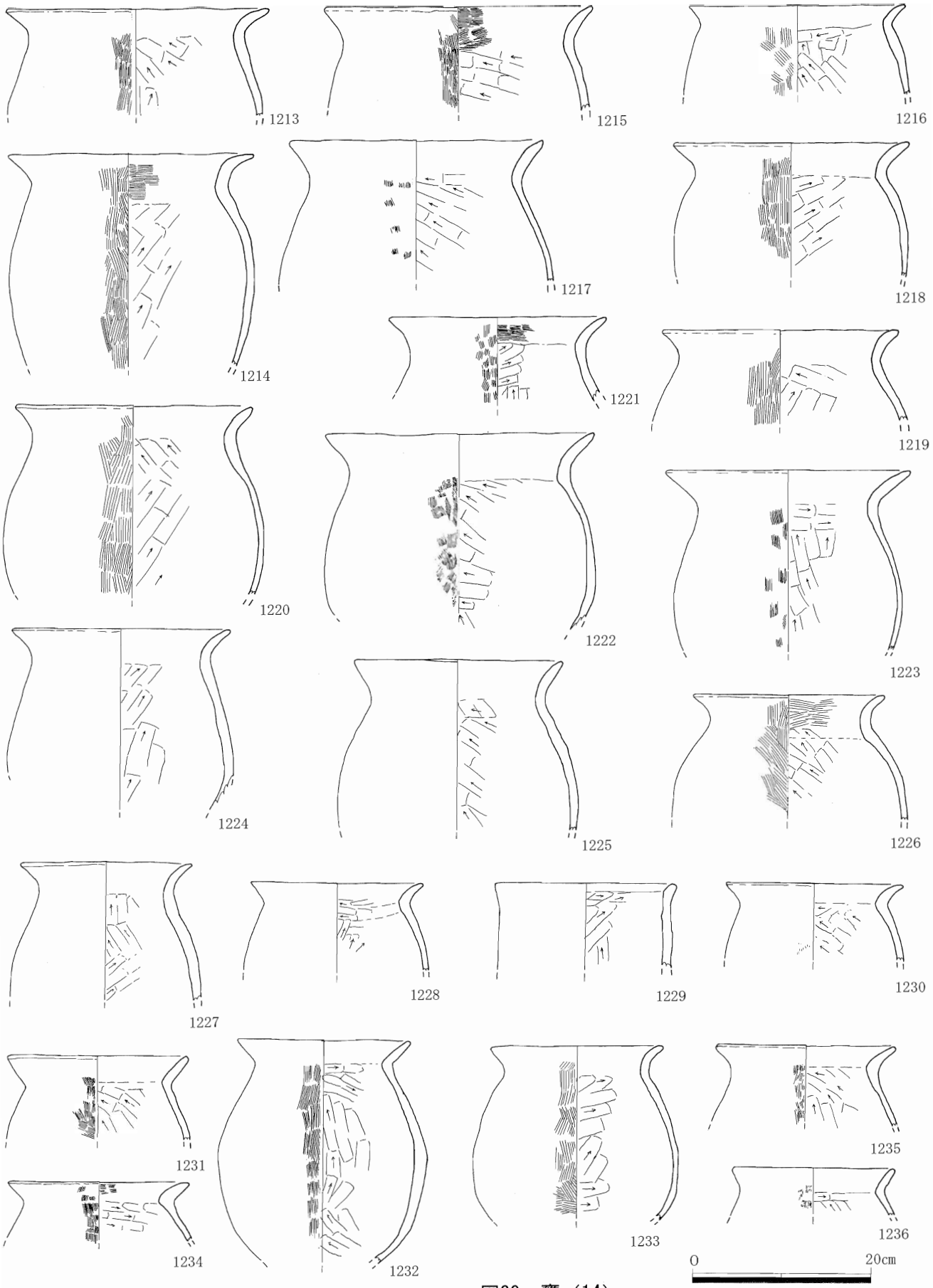
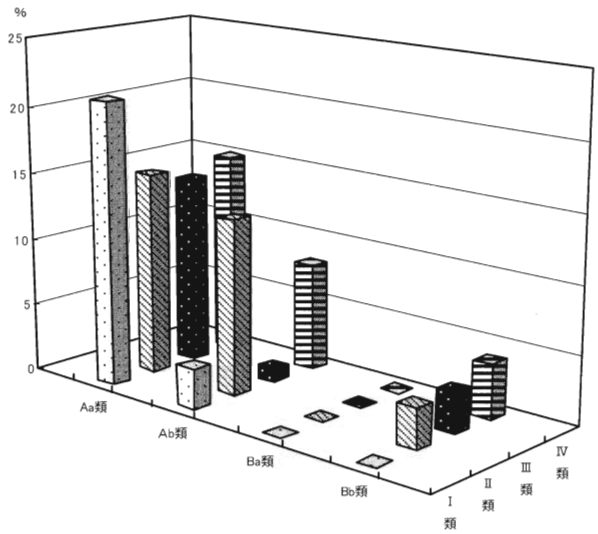

1213
1215
1216
1214
1217
1218
1221
1219
1220
1222
1223
1224
1225
1226
1227
1228
1229
1230
1231
1232
1233
1235
1234
1236
0
20cm

図38　甕（14）

Ａａ類は甕の内部にものを入れて煮炊きした痕跡のあるものである。Ａｂ類は内部にはコゲがないので水等の液体状のものを入れて火をかけたものであろう。Ｂａ類はいずれの形状でも０であったが外面から火を受けずに内面にコゲをつくるのは物理的にあり得ないのは当然である。Ｂｂ類は内外面ともコゲ・煤の付着がないもの。これは煮炊きをせず貯蔵用の容器として用いていた可能性と祭祀用に形式的に用いられたため、の二通り考えられる。



数字は%

	Ⅰ類	Ⅱ類	Ⅲ類	Ⅳ類	
Ａａ類	21	15	14	15	65
Ａｂ類	3	13	1	8	25
Ｂａ類	0	0	0	0	0
Ｂｂ類	0	3	3	4	10
合 計	24	31	18	27	100

図39 甕形状とコゲ・煤の付着状況

外・内面の煤・コゲの有無と甕の形状に着目し分類したのが、上記のグラフ・表である。分類に必要な情報を得られる部位が残っているもので分類可能な71個体を100%とし、それぞれの数値を%で示している。

どの形状の甕でもＡａ類が一番多くみられる。小型のⅣＡａ類の存在は形状・法量により調理の用途が違うことを意味しているように思われる。

Ⅰ類のＢｂ類が０であるのは丸底で煮炊きに使用するなど、土製支脚等何らかの上に乗せるのにはいいが、直接地面等に置くには安定感が悪く貯蔵用に向かないためであろうか。Ⅰ類の約90%はＡａである。ということは丸底を呈するⅠ類はほとんどのもので内面にコゲが付着しており、中にものをいれて煮炊きする専用のものであった可能性がある。

Ⅱ類ではＡｂ類の割合が他と比べ高いのが目に付く。外面に煤が付き、内面にコゲがないのは水沸騰用で上に甑を乗せる専用の甕があったことの可能性を示すものではないだろうか。土器溜り出土の復元し得た甑と甕の対になる関係は決め手に欠け確定出来なかったが、中には内面口縁～頸部にかけて肌が擦れていて甑の使用を窺わせるものもあった。また、26は口径40.4㎝と大形の甕であるが、復元した甑でこの大形の甕に乗りうるものは存在しなかった。外面には煤が付着している為、貯蔵用とは考えにくい。単純に液体を沸騰させたか、対となる甑片を復元できなかったか、どちらかであろう。

Ⅲ類とⅣ類はほとんど同じような割合であるが、Ⅳ類のＡｂ類がやや高めの数値を示している。小型のⅣ類に相応しい甑はなかったので、これは単純に液体を火にかけたのであろう。

Ｉ類以外のＢｂ類が僅かばかりの数値を示している。これは穀物等の保存用か、小型のⅣ類については、保存用とは考えにくいので、ここでの祭祀の大半が日用品を使用しているが極稀れに祭祀用の小型品を用いていた、ということになるのであろうか。

煤・コゲ付着の甕について気づいたことをあげてみた。大量の甕片が出土したとはいえ、完形に近いものしか対象にできずやや客観性に欠けるかもしれない。また甕自体の使用回数や、今回は煤・コゲの付着の有無にのみ着目したが、それぞれの付着位置にも様々ありパターン化できるかもしれない。筆者の力不足で今回はこのようにまとめてみたが今後の反省課題である。

図40～42は甑である。

口縁部から基底部までほぼ寸胴で、ほとんど窄まらないもの（501～507）と、胴部が張り気味で基底部にかけて窄まるもの（508～514）がある。

501・503・506～508・510・513・514は外面はナデ調整、内面は下方から上方へケズリで、502・504・505・509・511・512は内面は同様であるが、外面はハケメである。現存する破片についてしか判らないが、基底部直上に孔を有するもの（501・502・506・508・509・511）があり、501・502は90°の位置に４箇所の孔が認められる。把手についてみると形状は斜め上方に角状を呈すものが大半であるが、505・506は環状で、４は把手上方は器面に接してはいるが貼り付けてはいない、角状と環状の中間的なものである。501・503・507・508・510・512・513には焼成時に付いた黝斑が残る。

515～529は甑の把手片である。形状は上方に短く弧を描く角型のもの（515～525）と環状のもの（526～528）がある。517は角型のもののうち、明らかに小形で弧を描く形状でなく小突起状のもの。518・528には赤色顔料の痕跡が認められる。調整はナデ仕上げのもの（515・516・518・520・521・523・525～529）とハケメのもの（517・519・522・524）がある。

図43～47は土製支脚である。土製支脚は計532片出土したが、粉々に割れているもの、溶けてもろいものがほとんどで接合し、掲載できたものは50個体ほどである。これらを孔の有無・突起の形態により次のように分類した[※2]。なお、個体の詳細については観察表を載せている。

Ｉ－Ａ類…２方向突起。胴部穿孔なし。

Ｉ－Ｂ類…２方向突起。胴部に貫通孔。

Ｉ－Ｃ類…２方向突起。胴部に非貫通孔。

Ⅱ－Ａ類…３方向突起。背面の突起は前方突起より短い。

Ⅱ－Ｂ類…３方向突起。背面の突起は環状を呈する。

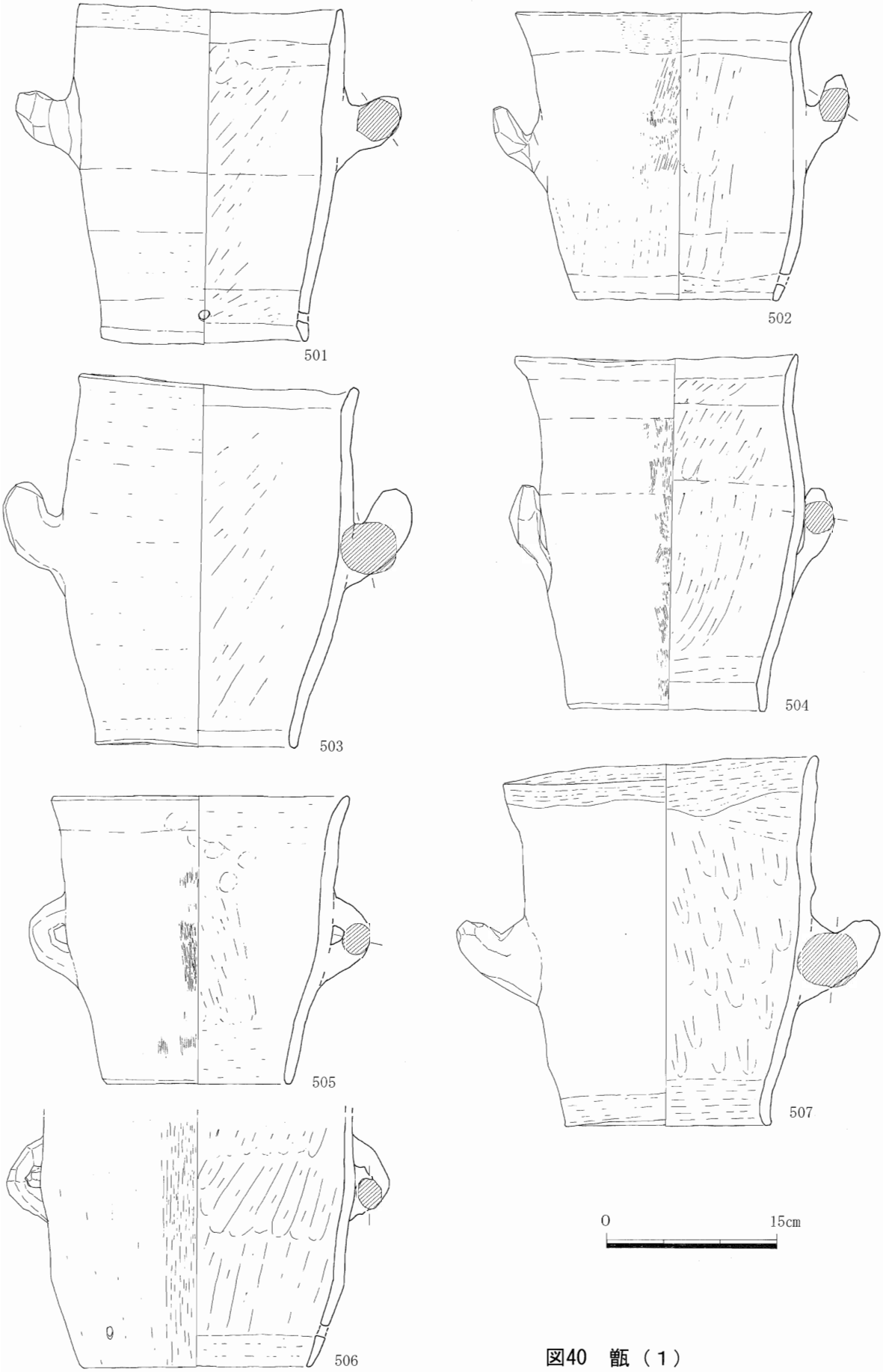


図40　甑（1）

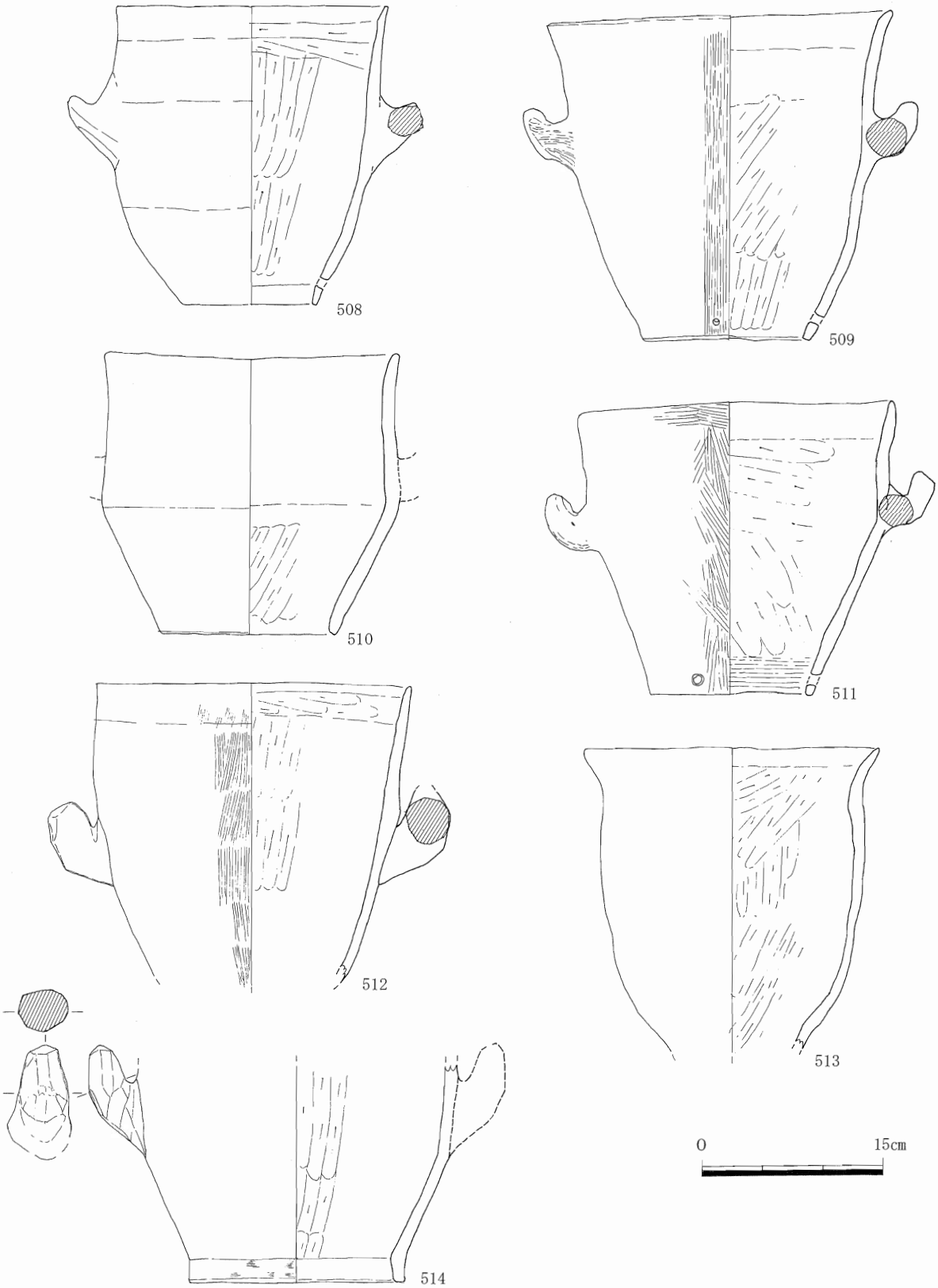


図41　甑（2）

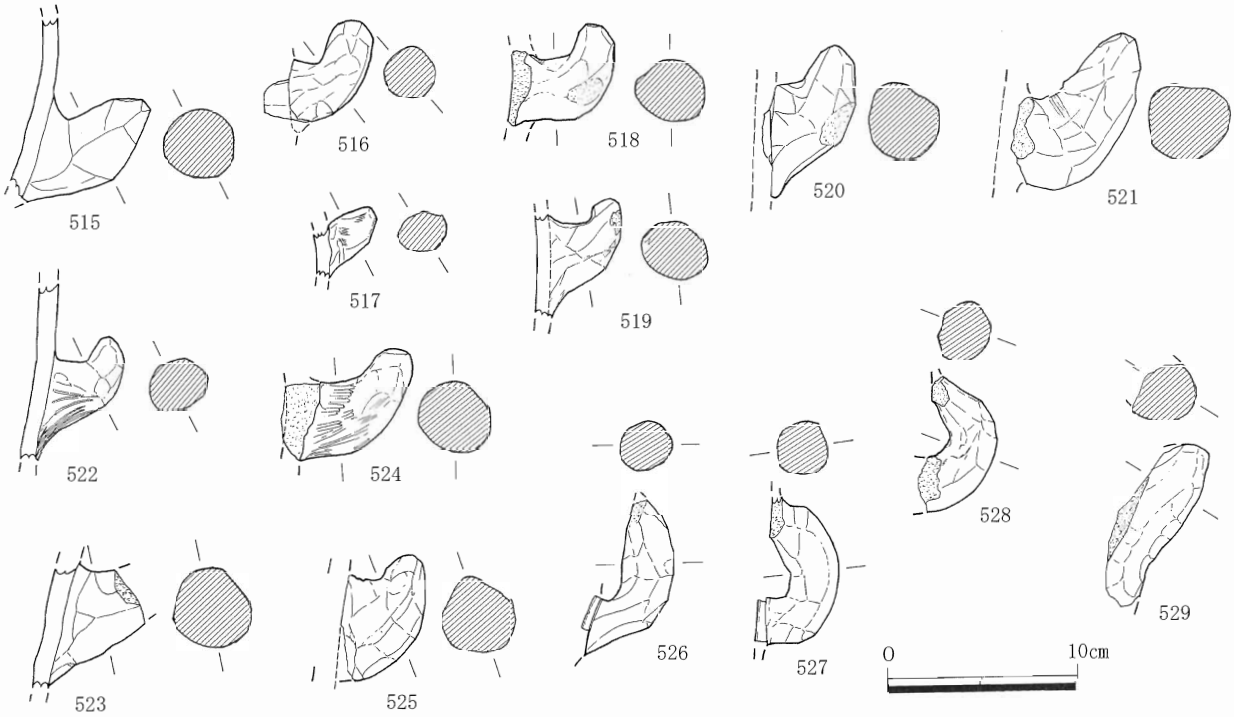


図42　把手

Ⅱ-C類…３方向突起。背面の突起はヒレ状を呈する。

Ⅲ-A類…３方向突起。胴部に貫通孔。

Ⅲ-B類…３方向突起。胴部背面に非貫通孔。

Ⅲ-C類…３方向突起。胴部は中空で上方から穿孔する。

Ⅳ-A類…１方向突起。胴部穿孔なし。

Ⅳ-B類…１方向突起。胴部に貫通孔。

Ⅳ-C類…１方向突起。胴部背面に非貫通孔。

上記のうち、本遺跡土器溜り出土の土製支脚はⅠ-C類・Ⅱ-B類・Ⅳ-A類・Ⅳ-C類の４種類であった。

Ⅰ-C類（601～615）

突起が２方向に延びるもので、胴部背面に非貫通孔を有するものである。

このなかでも、底面が平底のもの（601・602・605・606・609・610・612・614・615）、上げ底のもの（603・604・607）があり、底部に製作時についた繊維痕があるもの（601）があった。高さは14.9cm～19.1cmほどで、ずんぐりした印象のものが多い。ここに挙げたもののなかには、突起の非常に短小なもの（602・603・607・612～614）も含んでいる。背面の非貫通孔の進入方向は上向きのもの（601・610・611）、下向きのもの（602・603・605～607・609・614・615）、ほぼ水平のもの（604・608・612）がある。

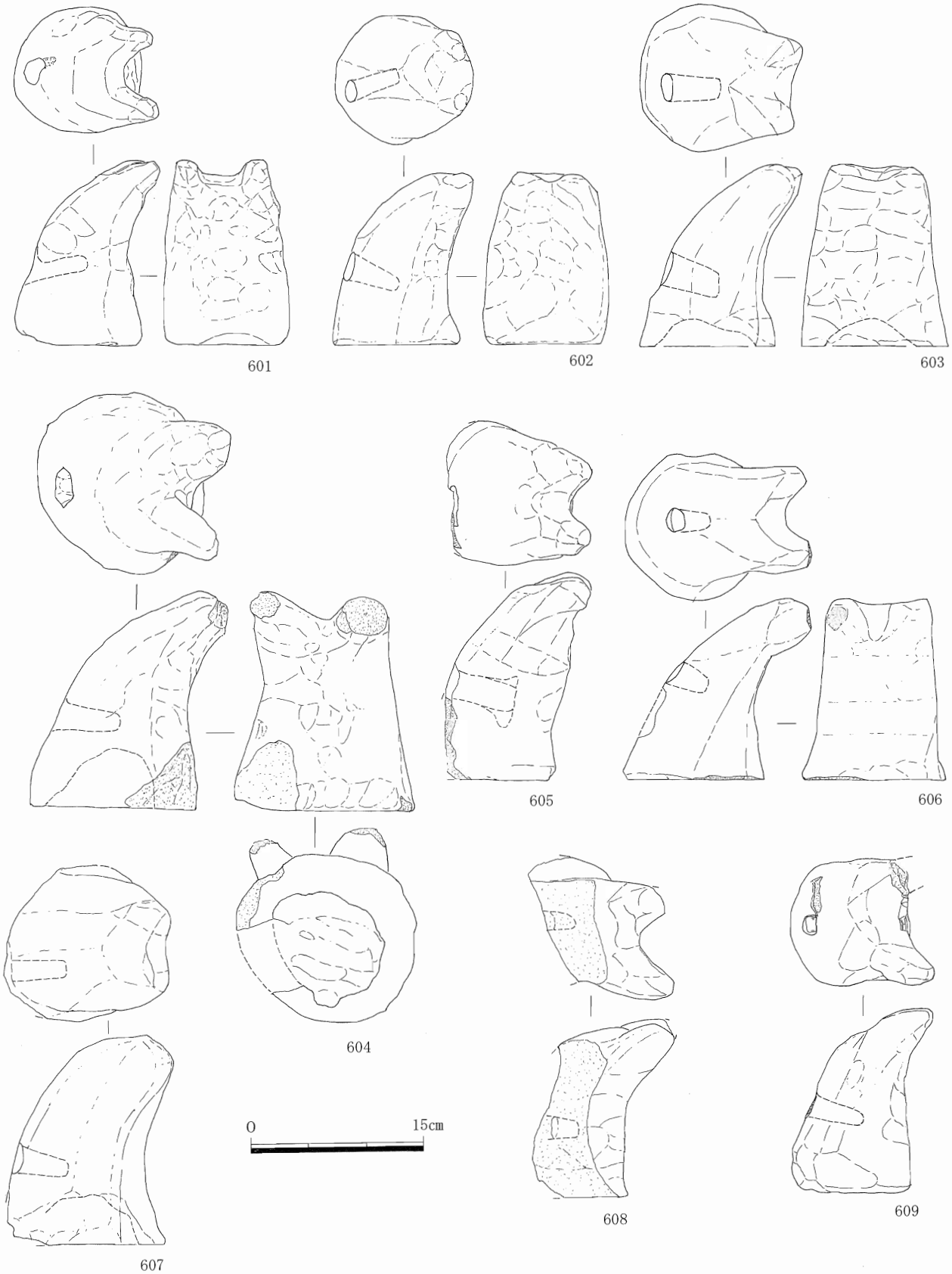


図43　土製支脚（1）

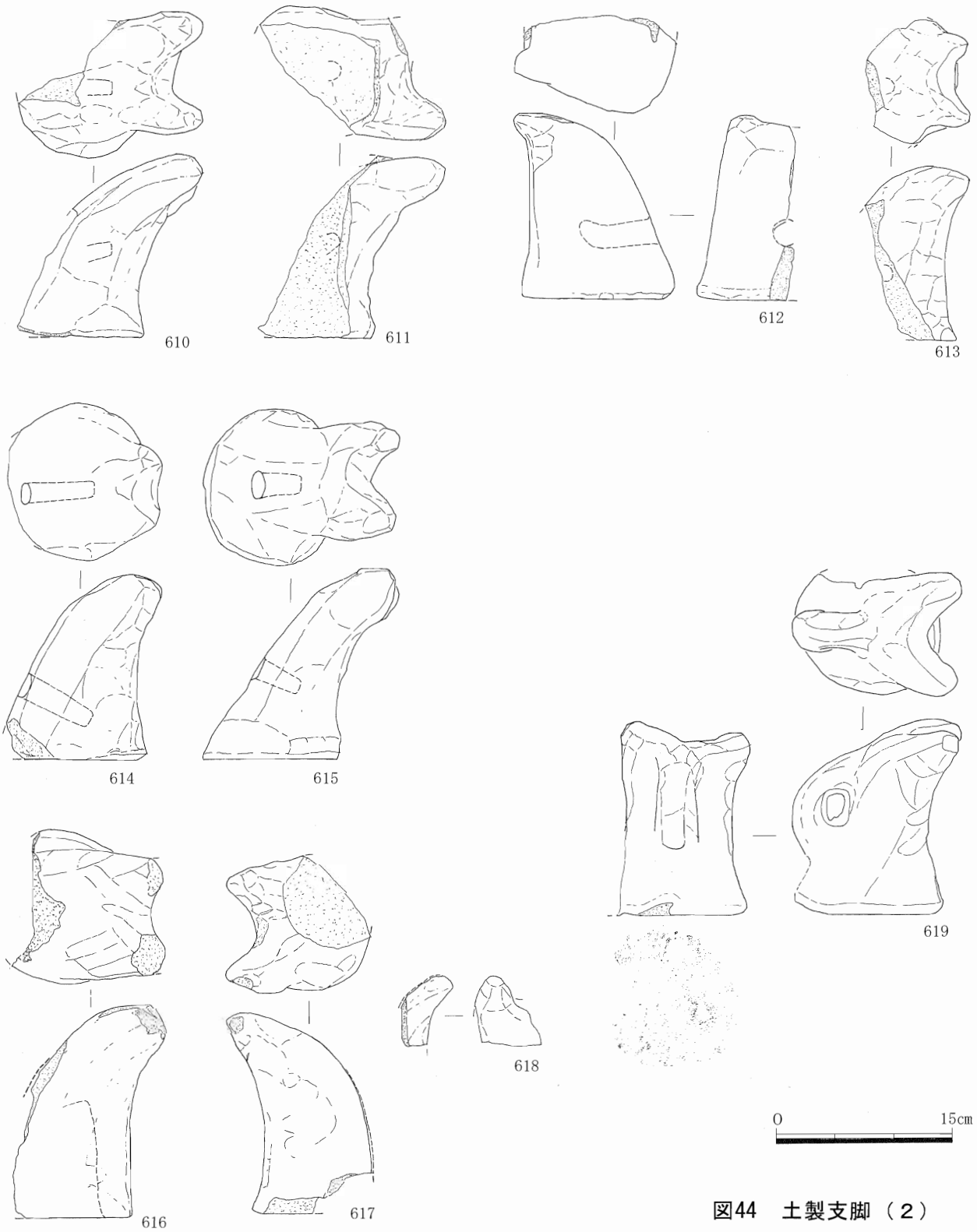


図44　土製支脚（２）

Ⅰ類不明品（616～618）

突起が２方向に延びるが、胴部の穿孔の有無が不明のものである。

616はナデ調整で底部は上げ底、焼成は良好で明赤褐色を呈す。617は腹面に指頭圧痕が顕著で平底である。背面は半分が破損しているが、もともと穿孔がなくⅠ-A類であった可能性もある。

618は破片の形状からⅠ類の突起の片方であると思われ、焼成は良好でにぶい黄褐色を呈す。

Ⅱ-B類（619）

突起が３方向に延びるもので、背面突起は環状を呈すものである。

底面は平底で全面ナデ調整、腹面には指頭圧痕も認められ、橙色～暗灰黄色を呈し、焼きは良好のようである。高さは16.9cmで今回出土したものの中では中型の部類に属す。

Ⅳ-A類（620～624）

突起が１方向に延びるもので、胴部に穿孔のないものである。

620は高さ15.3cm、残りが良く全体にナデ調整をおこなっている。底部は上げ底となっており焼成は良く、にぶい黄橙色を呈す。621は胴部背面に二箇所の浅い窪みがあるが、非貫通孔とは考えにくい。622は高さ14.0cm、砂粒を多く含む胎土で、焼きは良くなく明黄褐色を呈している。背面側が薄く破損し剥離しているが、穿孔は無いとみられる。623は高さ12.9cmを測る非常に小型の品で底部は平底、砂粒を多く含み焼成は不良である。表面は風化のため摩滅しているため調整不明。胎土、器形、質感等から622・623はセットのうちの二つではないかと思われる。624はほぼ完形で高さ15.9cm、ナデ調整し指頭圧痕が腹面に顕著である。底面は平底で、焼成は良く橙色を呈す。

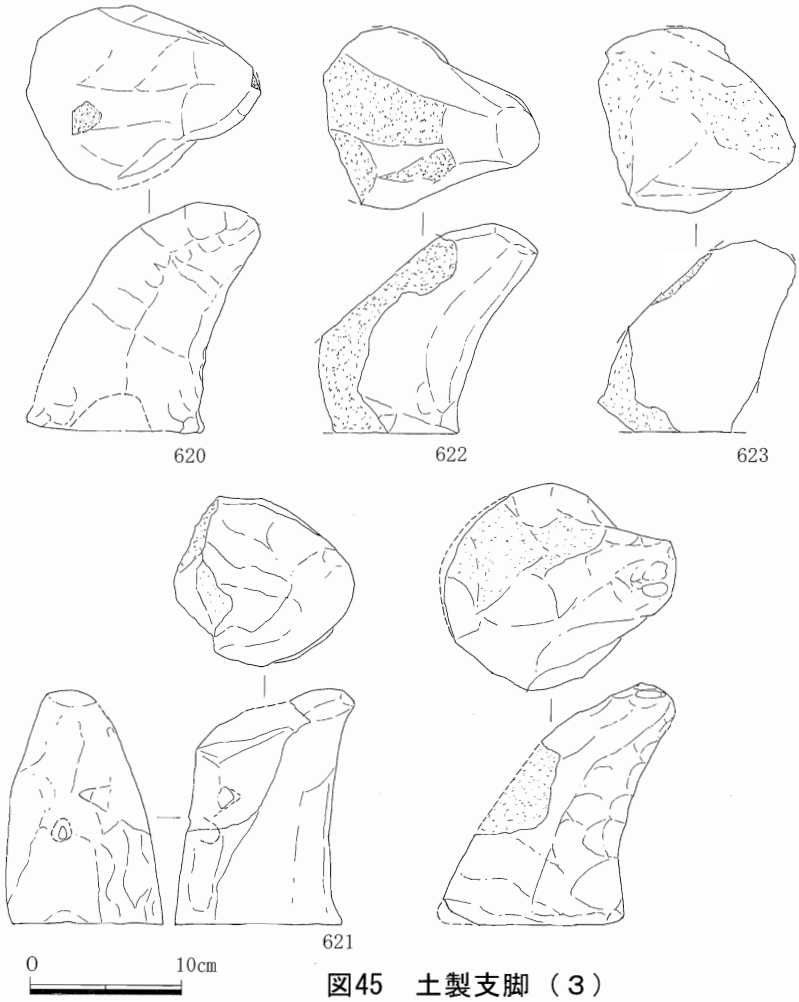


図45　土製支脚（３）

Ⅳ-C類（625～637）

突起が１方向に延びるもので、胴部背面に非貫通孔を有すものである。

底部に注目すると平底のもの（626・628・630・632・633・635・636）、上げ底のもの（625・629・637）がある。風化のため判別し難いもの以外はナデ調整でほとんどの個体に指頭圧痕が認められる。高さは13.6～19.1cmほどで、１方向突起としてあげているがずんぐりとしていて突起とは表現するには抵抗のあるものもある。背面からの非貫通孔は径が総じて1.5～２cm強ほどで、

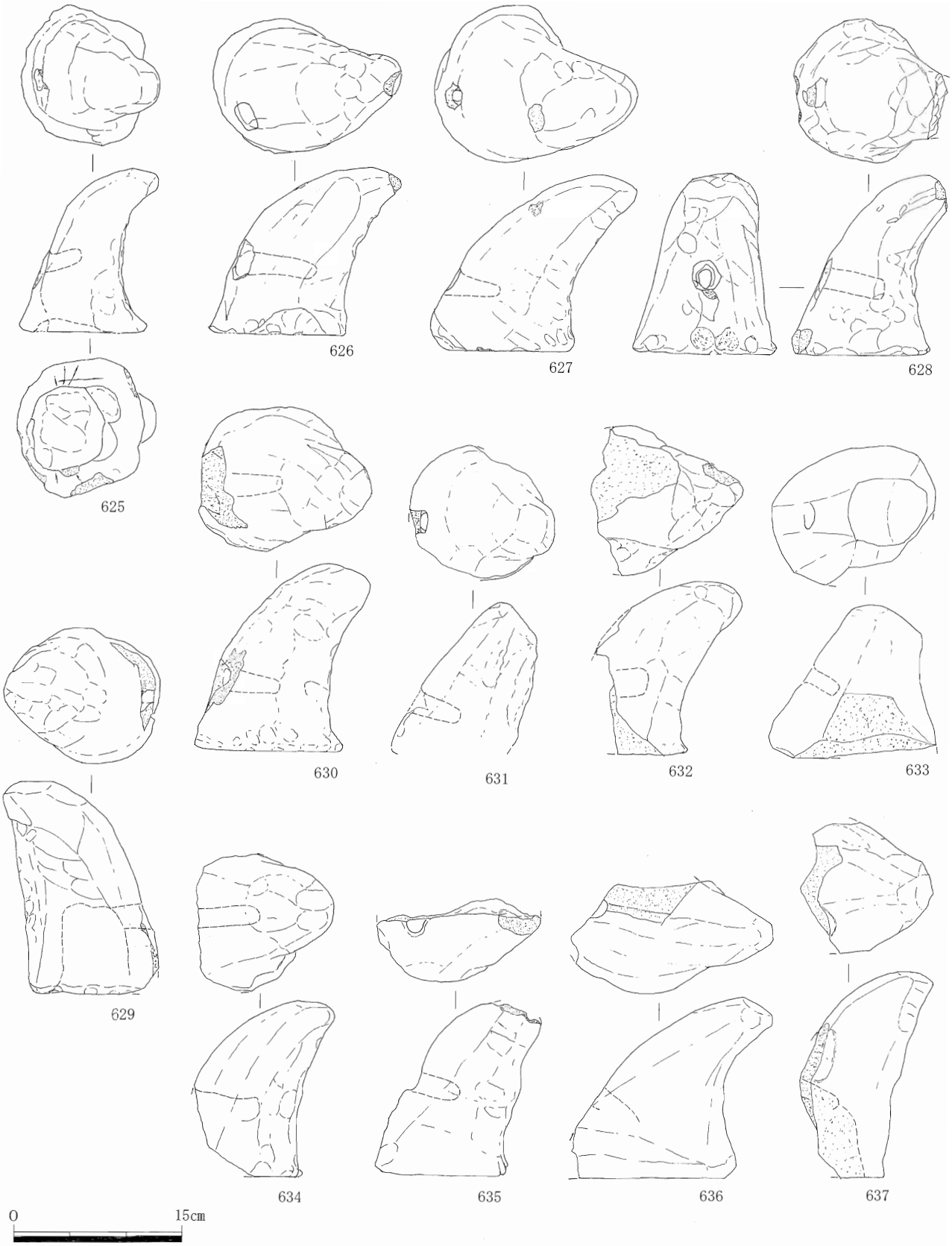


図46　土製支脚（４）

孔の進入方向は上向きのもの（625）、下向きのもの（628・630・631・633・635～637）、水平のもの（626・627・629・632・634）があり、629は背面の孔が上げ底に貫通している。

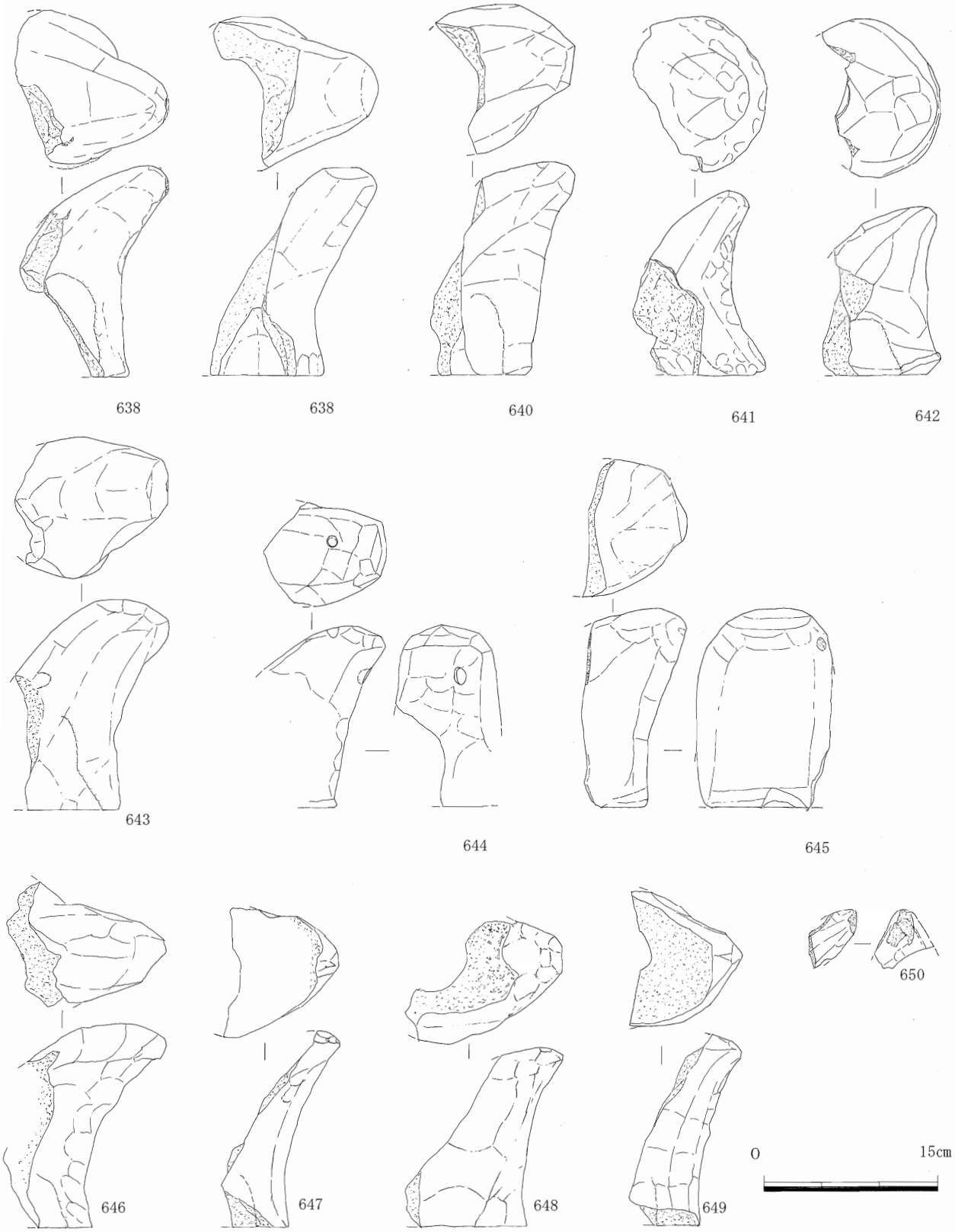


図47　土製支脚（5）

Ⅳ類不明品（638～650）

突起は１方向であるが、穿孔の有無が不明なものである。

破損部位を見ると背面胴部から底部にかけてのものが多く、底部はほとんどが上げ底である。腹面側の底部が残り、背面側の底部が破損している状況をみると背面側に孔があり一番弱い部分が破損しているのではないだろうか。そうするとこの不明品に挙げたもののほとんどをⅣ-C類に含むべきものかもしれない。

以上、形態毎にまとめたが、全体的に高さが高いものは底部が上げ底になる傾向が見られる。これは何を意味するのだろうか。焼成時に中まで火が通り易くするためなのか、粘土を節約するためなのか、この両方を意図したものか、何か別の理由からか、意図的でないのか判然としない。

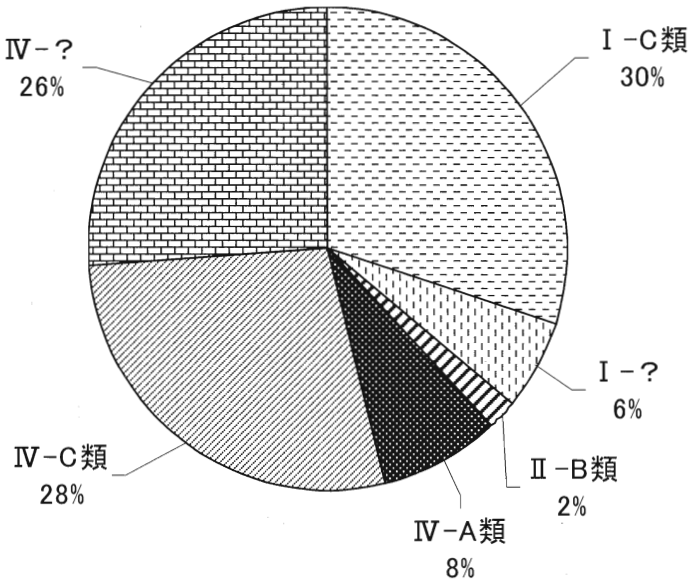


図48　土製支脚　形式別構成図

今回、二つの角が極短小で瘤状のものもⅣ類として分類しているが、１方向突起と２方向突起の中間的、過渡期的なものとも思われる。ただ、半湿地状の土器溜り出土で出土層区分もまま成らず、Ⅰ類のものとⅣ類のものが上下混在した状況であった。

この土器溜り出土の土製支脚の年代は、同じく土器溜り出土須恵器等から７世紀末～８世紀と考えられ、岩橋氏の分類の後半期にあたる。これまで雲南地域で、これだけまとまった土製支脚の出土例はなく、比較的短い期間のものであると考えられるため非常に意義深いものであろう。

この時期の山陰の他の地域の土製支脚は、松江周辺ではⅡ類が優勢で、出雲周辺ではⅠ類が優勢である。[※3]　上記の形式別構成図をみると当遺跡土器溜り出土のものにはⅡ類はほとんどなくⅠ類の圧倒的な優位が窺える。ただ、それにもまして他の地域ではまず見られないⅣ類が不明も含めると実に60％を超える。山陰地方で見られないとなると、山陽側の影響をうけたのだろうか。または、当地方で独自に変化していったのだろうか。今後の検討課題である。今後、当地域の資料の増加、特に岩橋分類の前半期のものの資料の増加に期待したい。

３）特殊遺物（図49～51）

701～728は赤色顔料を塗布する土師器である。いずれの土器も内外面とも赤塗りしてあり、概ね胎土は密で水簸している。これら赤彩土器の詳細は観察表に挙げた。

701～706は皿である。口径17～20cmを測り、口縁は緩く内湾しながら立ち上がるもの（701～704）と強く屈曲し直立気味に短く立ち上がるもの（705・706）がある。701・702は底面をナデる。703～705は底面をヘラケズリする。

707～728は坏である。坏の中には椀状を呈すものも一部あるが、明確な線引きが出来ないため、今回は一括坏とした。坏は口縁の形状、暗文の有無により４つに分類した。

707～716・718・720は暗文がなく内湾気味に立ち上がり、口縁端部で僅かに外反する器形のものである。口径は13～18cmほどで、底部はケズリ放しのものが多く、平底にならずやや丸底のものが目立つ。

717・719は暗文がなく底部縁辺で強く屈曲し、やや内湾気味に立ち上がり直線的に伸び口縁端で丸くおさめるものである。このタイプのものでは平底のものが多いようである。717は体部中ほどで外面に僅かに二段の稜をもつ。内外面回転ナデ、底面は静止ケズリであるようだ。719は口唇内側に僅かにアクセントを有し先細る。

721～723は暗文がなく口縁が直立気味乃至は内傾するものである。721は口径11.0cmを測り、腹部あたりで器壁が最も厚く口縁端部にかけて尖る。赤色顔料が厚く塗布されるようだ。722は口径10.0cmほどの小型品で、内湾しながら立ち上がり口縁端部でアクセントを有し内傾し丸くおさまる、有蓋坏である。内外面回転ナデ、底部周辺は回転ヘラケズリ、底部は静止ヘラケズリである。723は高台の付く坏である。内外面とも回転ナデ調整し、その後高台部を付けている。高台内面は不明である。

724～728は暗文を施すもの。内面に放射状暗文を施すものは器壁に対して垂直でなく、斜方向である。724は平底の底部からほぼ直線的に外傾し口縁に至る。内外面ともナデ、底部は丁寧に磨く。内側面に放射状暗文が、内底面には螺旋状暗文がみられる。725はやや丸味をおびた底部から直線的に外傾しながら立ち上がり口縁端部で僅かな段を有し先細る。内外面とも回転ナデ、底面は磨く。外面には塗り刷毛目痕が残る。暗文は724同様である。726は器形、暗文ともほぼ同様のもの。727は口径13.0cm、器高4.0cmとやや小型の品で丸い底部から内湾しながら立ち上がる半球状の器形で、口縁端部で僅かにアクセントをもち外傾する。底面は磨く。暗文は上記と同様であるが、器壁の状態が悪く特に内底面の螺旋状暗文は微かに残る程度である。728は724と同じような器形・調整であるが、内外面は斜格子状に暗文をもち底面は螺旋状である。暗文を有する品の遺物取上次数をみてみると03年度６・７次に集中している。以上の暗文を有する赤彩土器は器形、暗文の構成等、飛鳥Ⅳ～Ⅴ期の坏Ｃに類似する。近隣地域をみてみると赤彩土器は、三刀屋町馬場遺跡、出雲市三田谷Ⅰ遺跡、木次町垣ノ内遺跡などで比較的まとまって出土している。時期は概ね奈良期の所産とみて大過ないだろう。

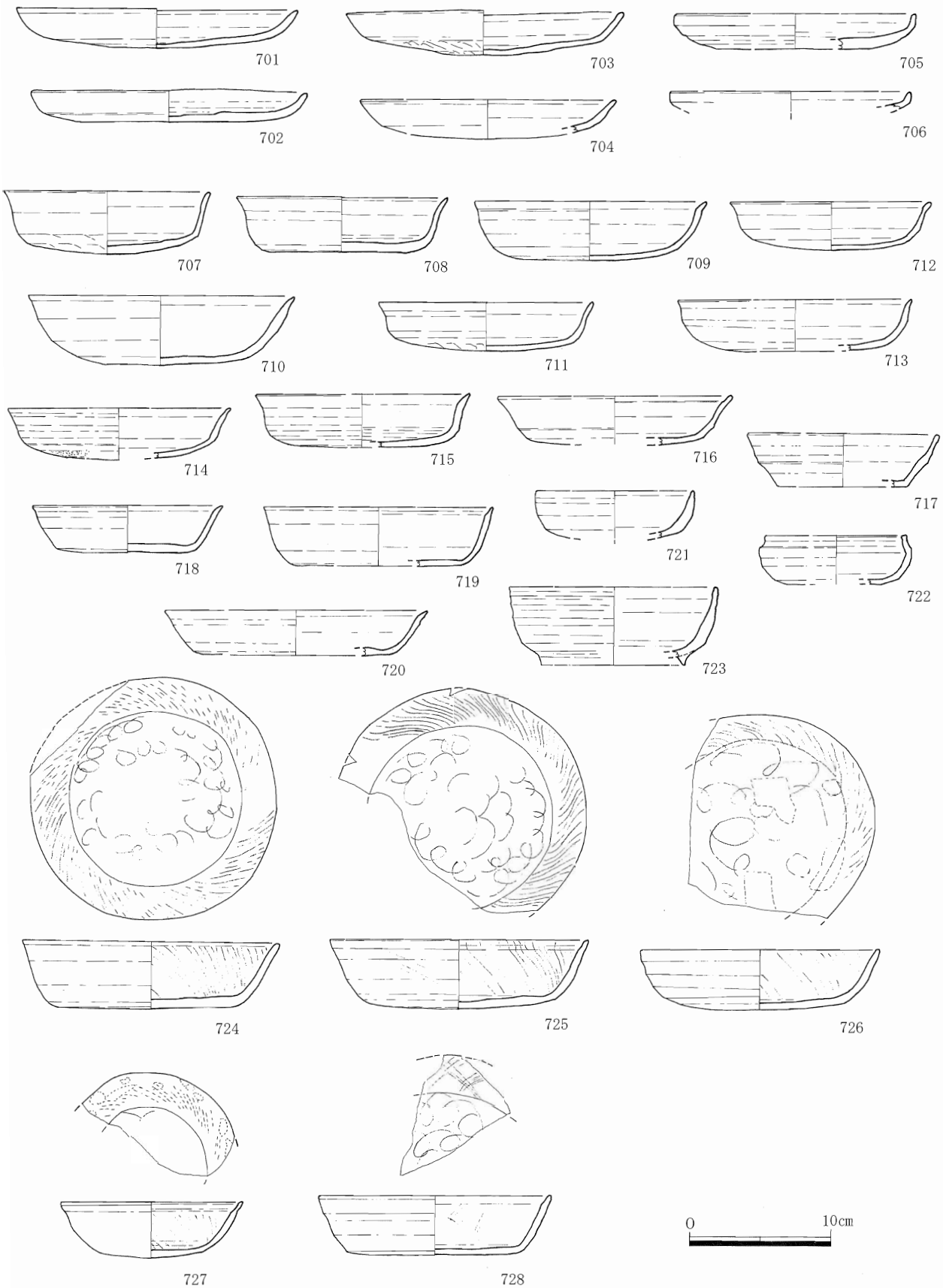

701
703
705
702
704
706
707
708
709
712
710
711
713
714
715
716
717
718
719
721
722
720
723
724
725
726
727
728
0
10cm

図49　赤彩土器

図50は手捏ね土器と土馬である。

729～732・735は非常に小型で粗雑、簡単な作りで内容積も僅かのものである。733・734・736～738は上記のものよりやや大型で底面を有する椀型の手捏ね土器。739・740はどちらも口径11.5㎝を測る椀型で、内外面とも丁寧なナデを施す。741は口径12㎝ほどで器高が5.5㎝とやや高めの椀型を呈す。742は復元法量が口径12.8㎝、底径11.0㎝、器高3.5㎝で、口径と底径の差が少なく底部端で強く屈曲し、外傾しながら直線的に短く伸びおさめる、皿型の品である。743は底部のみの残存で非常に雑な作りのものである。742同様皿型のものであろうか。744は高台坏である。口径15㎝、器高4.8㎝、坏部は内外全面に指頭圧痕が残り、後付け高台する。745・746は口径10.7㎝・9.3㎝を測る?というより小壷といった類のものである。内外面ともナデ調整であるがわりに丁寧な作りである。747は口径22.3㎝の浅鉢型の手捏ね土器である。法量に比して器壁が厚手の作りで、丁寧なナデを施す。748は口径11㎝ほど、胴部最大径16.0㎝、器高12.7㎝を測る片口壷である。内面はケズリ、外面はナデ、外面大部分に煤が付着する。

749は土馬である。現存する長さが8.8㎝、高さ3.7㎝、胴部径3.4㎝で、頭部、尾部、四肢を欠く胴部のみの出土であった。手捏ねで作られ、残存する体部からは粗雑なつくりである。鞍等を付けない裸馬で、破損面からすると頭部は起き気味に付き、尾はほぼ水平に付くものであろうか。

図51の750～758は所謂製塩土器である。何れも03年度範囲において出土。750～757は内面に布目を有するものである。750は口縁部を内側へ肥厚させ、肥厚下位に布目を施す。751～753・755～757は薄手のつくりで、外面はナデ、内面は布目痕が残る。758は布目のないもので、器壁は極薄く指頭圧痕も顕著で、外面は風化がひどいが内外面ともナデ仕上げであろう。

759は土師質の低脚坏脚端で内外面とも回転ナデ調整である。760は椀型になる口縁片で、やや厚手、内湾する口縁端上面を平坦に整形している。外面には３本の沈線で区画された紋様帯を有し、上位紋様帯内には刺突文を横位に連続させ、下位には直径６㎜ほどの竹管を加工した施文具による草花文を巡らせる。胎土は緻密で調整も丁寧な品である。これは加茂町湯後遺跡、三刀屋町馬場遺跡出土の香炉と類似する。中世の所産である。上方から土器溜りへ流れ込んだのだろう。

この他特殊遺物として赤塗り木質椀・水晶・浜礫様小石・吹子の羽口・桃の核などが出土している。墨書・漆書き土器についてはすでに須恵器のところでふれた。山の字を墨書、或は漆書きする個体が４点（図21の761～764）、図21の高台坏765は転用硯としても転用片口としても使用している。高台坏766も転用硯である。

赤塗り木質椀は風化が著しく、脆弱で図化することはできず、高台部が欠けていた。材質は不明である。

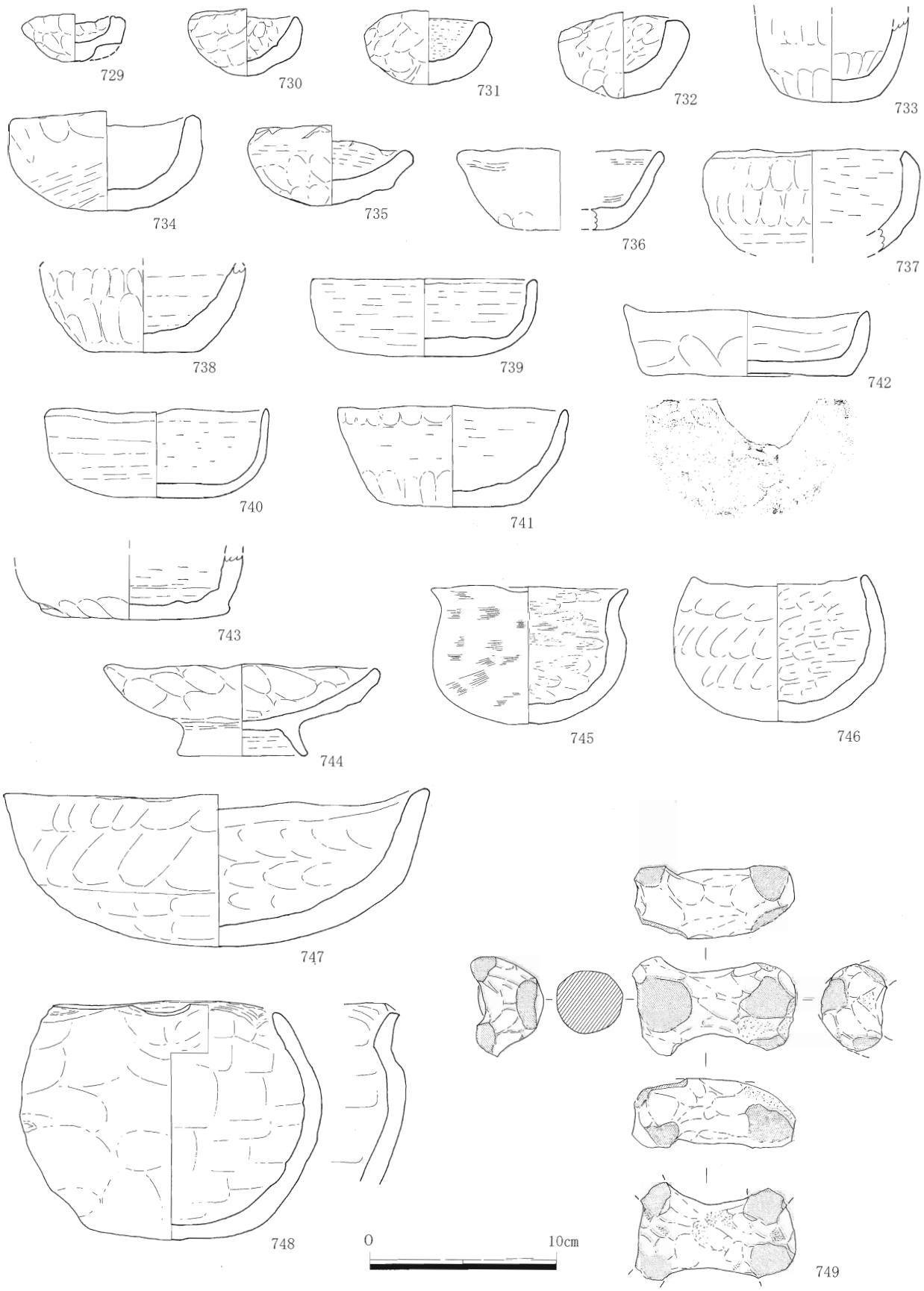

729
730
731
732
733
734
735
736
737
738
739
740
741
742
743
744
745
746
747
748
749
0
10cm

図50　手捏土器・土馬

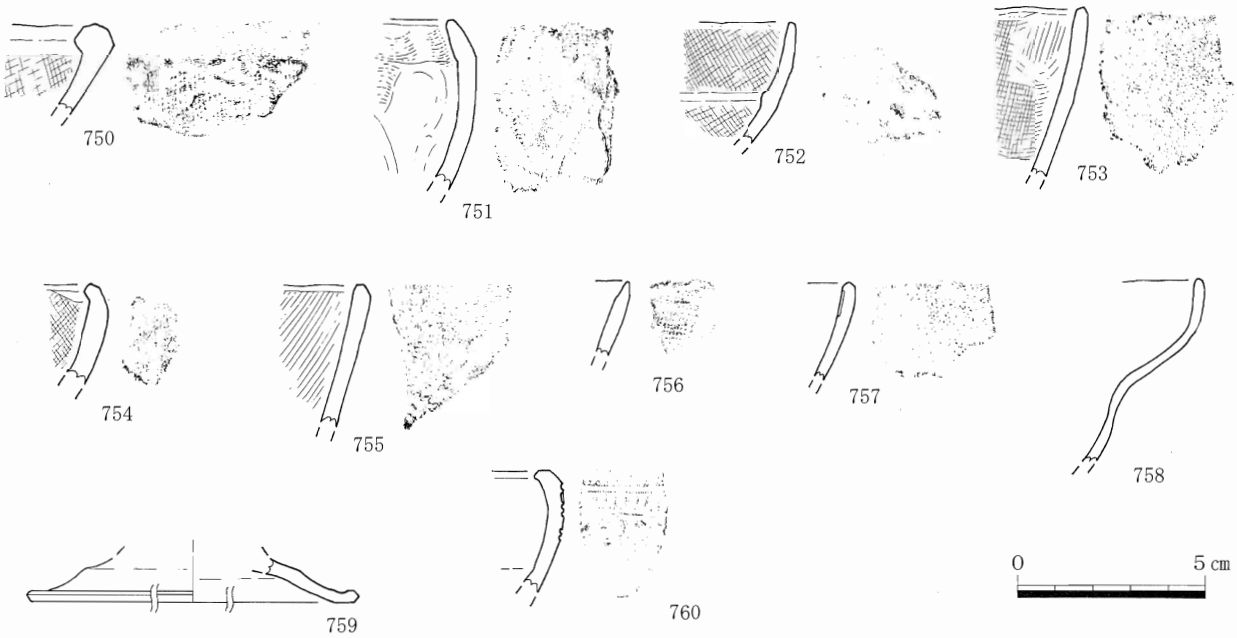


図51　製塩土器・他

羽口についてはその製作技法において特筆すべき事項が認められる。このことについては第５項において述べることとする。

以上、土器溜り内出土遺物をみてきたが、「史跡 出雲国府跡」の14号土坑出土遺物と当遺跡出土須恵器（特に蓋・高台坏・無高台坏）、土師器赤彩土器（暗文）・甕等は似通った形式のものと考えられる。因みに14号土坑出土遺物は８世紀前半の時代が当てられている。当遺跡土器溜り出土遺物の中心となる時期もほぼ同様と考えて大過ないだろう。

註

※１　「へたる」…尻餅をつく。尻をつけて座る。へたばって座り込む。の意（広辞苑より）

※２　岩橋孝典氏の山陰地域土製支脚分類案（「山陰地域の古墳時代～奈良時代の炊飯具について」『古代文化研究』第11号）を基に本遺跡出土の土製支脚を分類した。Ⅳ類については、遺物に孔の有無が存在したため、さらに細分している。

※３　上記の岩橋氏の記述に「…土製支脚の形式分類によるⅠ類の分布の中心は西部出雲地域の神戸川下流域であり、Ⅱ類の分布の中心は松江市南東部・東出雲町・八雲村である。…」としている。

参考文献

島根県教育委員会：「垣ノ内遺跡」『尾原ダム建設に伴う埋蔵文化財調査報告書２』2003.3

木次町教育委員会：「家の上遺跡」『尾原ダム建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書１』1998.3

島根県教育委員会：「湯後遺跡」『中国横断自動車道尾道松江線建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書12』2001.3

島根県教育委員会：「家ノ脇Ⅱ遺跡」『尾原ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書４』2004.3

島根県教育委員会：「馬場遺跡」『中国横断自動車道尾道松江線建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書』2001.3

島根県教育委員会：「三田谷Ⅰ遺跡」『斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅷ』2000.3

島根県教育委員会：「渋山池遺跡・原ノ前遺跡」『一般国道九号安来道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調報告書西地区Ⅶ』　1997. 3

大東町教育委員会：「角田遺跡・又下遺跡　付 大東高校グラウンド遺跡他資料」『大東高校校地拡張に伴う発掘調査報告書』　1988.3

小林正史・柳瀬昭彦：「コゲとススからみた弥生時代の米の調理方法」『日本考古学』第13号　日本考古学協会　2002.5

島根県教育委員会：「史跡 出雲国府跡」『風土記の丘地内遺跡発掘調査報告書14』2003.3

大川　清　鈴木公雄　工楽善通　編：『日本土器事典』　雄山閣　1996

６　遺物の年代観

円満寺遺跡の土器溜り出土遺物は、遺構の立地、性格等から土層区分が困難であり、単純に新古を言えない。レベルの下方に位置するものは上方から流れ込む可能性はあるが、その逆は基本的にはあり得ない。しかし、すべてが流れ込むということは考えがたく出土年、取上げ次で大まかな傾向は見て取れるはずである。ここでは時期の判る須恵器を基準に、この地で祭祀が行われていた時期を考えてみる。

当遺跡土器溜り遺構出土遺物の最も古い時期のものは、大谷出雲４期の蓋坏であるが、遺構上位からの数点の出土で、後世の流れ込みであろう。この地で祭祀を行っていたと考えられる期間は、須恵器蓋坏の口径が小さくなり、輪状撮みと口縁内面にかえりを有す出雲５～６期（特に６期）から坏蓋は輪状撮みをもち口縁が直立し、高台坏は体部が丸味を帯び、土師器の坏・皿を伴い、一部は暗文を有す出雲国庁編年の第２乃至は第３形式を中心とする時期が考えられる。降る時期のものも一部認められるが、相当量のボリュームがあるのは上記の時期である。絶対年代では７世紀後半～８世紀前半であろうか。

前述のとおり層位により新古は言い辛いが、遺物の出ようで気付いたことを挙げてみる。

蓋坏・高台坏等から02年度取り上げからはほぼすべてが出雲６期のもの（遺構の初段階）で、03年度取り上げからは６期のものも流れ込み混じるが８期より新相（遺構の終末期）を呈すもの

が大半を占める。取上げ年度・次数は任意のものであるが、年度により遺物の時期が明確に違いをみせた。

これを物差しにすると、横瓶は03年度４～７次でまとまって出土している。祭祀遺構終末期のみ使用しているようだ。製塩土器と呼ばれているもの・赤彩土器、特に暗文を有するものは横瓶と同様の出土である。土馬は02年度出土であるが、手捏ねのミニチュア土器の９割が03年度からのものであった。

このことはこの場所で行う祭祀の前期段階と後～末期では祭祀に使用する器種構成が異なることを意味すると考えられる。

表１　　円満寺遺跡出土須恵器観察表

図No	出土地点	種類	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	調整 外面	調整 内面	色調 外面	色調 内面	備考
1	02-8次Ef	須恵器	蓋	10.6			回転ナデ	回転ナデ	N7/0(灰白)	2.5GY7/2(明オリーブ灰)	
2	02-3次Bc	須恵器	蓋	11.7	3.3		回転ナデ　回転ヘラケズリ	回転ナデ	N6/0(灰)	N7/0(灰白)	
3	02-6次Cc.Dc.Cd.Dd.De.Df　7次De	須恵器	蓋	11.8	4.3		回転ナデ　ヘラ切り	回転ナデ	5GY7/1(明オリーブ灰)～7.5GY5/1(緑灰)	10YR7/2(灰白)	
4	02-8次De.Ee	須恵器	蓋	10.5	3.9		回転ナデ　ヘラ切り　ナデ	回転ナデ	2.5GY'7/1(明オリーブ灰)	N7/0(灰白)	天井部刻線
5	03-8次Ge	須恵器	蓋	10.0	3.5		回転ナデ　回転ヘラケズリ ヘラ切り	回転ナデ			
6	02-1次Ｃｃ. 6次Df.Dg	須恵器	蓋	10.4	3.3		回転ナデ　ヘラ起し ナデ	回転ナデ			
7	02-5次Dd	須恵器	蓋	9.4	3.4		回転ナデ　ヘラ起し　ナデ	回転ナデ			
8	02-1次Be,3次Cd	須恵器	蓋	14.2	3.0		回転ナデ　回転ケズリ	回転ナデ			
9	03-5次Gi	須恵器	蓋	12.8	3.3		回転ナデ　回転ケズリ	回転ナデ			外面自然釉被る
10	03-7次Hd	須恵器	蓋	12.0	2.8		回転ナデ　回転ケズリ？	回転ナデ			外面自然釉被る
11	03-3次Ff	須恵器	蓋	16.0			回転ナデ	回転ナデ			
12	03-7次If	須恵器	蓋	16.4			回転ナデ	回転ナデ			
13	03-1次Ff	須恵器	蓋	15.6			回転ナデ	回転ナデ			
14	03-4次Ei	須恵器	蓋	16.0	2.4		回転ナデ　回転ケズリ	回転ナデ			
15	03-5次Gg	須恵器	蓋	15.4	3.1		回転ナデ　回転ケズリ	回転ナデ			
16	03-7次Fh	須恵器	蓋	14.8	3.5		回転ナデ　回転ケズリ	回転ナデ			
17	03-7次Ｇｆ	須恵器	蓋	14.9	3.0		回転ナデ　回転ケズリ	回転ナデ			
18	03-0次Fi.4次Fh	須恵器	蓋	14.7	3.7		回転ナデ　回転ケズリ	回転ナデ			
19	03-1次Eg.2次.Eh	須恵器	蓋	16.0	2.7		回転ナデ　回転ケズリ	回転ナデ			外面自然釉被る
20	03-7次He	須恵器	蓋	14.2	3.1		回転ナデ　回転ケズリ	回転ナデ			
21	03-7次He	須恵器	蓋	16.0	3.2		回転ナデ　回転ケズリ	回転ナデ			
22	03-4次Ff	須恵器	蓋	14.7	3.5		回転ナデ　回転ケズリ	回転ナデ			
23	03-4次Ge	須恵器	蓋	15.5	3.8		回転ナデ　回転ケズリ	回転ナデ			
24	03-4次Fh	須恵器	蓋	15.1	3.2		回転ナデ　回転ケズリ	回転ナデ			
25	03-5次Eh	須恵器	蓋	17.1	2.7		回転ナデ　回転ケズリ	回転ナデ			
26	03-1次Eg.3次Ff	須恵器	蓋	15.8			回転ナデ　回転ケズリ 回転糸切り？	回転ナデ			
27	03-4次Fh	須恵器	蓋	14.5	2.6		回転ナデ　回転ケズリ	回転ナデ			
28	03-5次Ff	須恵器	蓋	17.3	3.2		回転ナデ　回転ケズリ	回転ナデ			
29	03-5次Fj	須恵器	蓋	15.8	3.5		回転ナデ　回転ケズリ	回転ナデ			
101	02-1次Bc	須恵器	坏	12.0	3.5		回転ナデ	回転ナデ　ケズリ	N6/0(灰)	N5/0(灰)	
102	03-4次Gg	須恵器	坏	12.0			回転ナデ	回転ナデ	5Y6/1(灰)～5/1(灰)	5Y6/1(灰)	自然釉被る
103	03-5次Fe	須恵器	坏	11.8			回転ナデ	回転ナデ	N6/0(灰)	N6/0(灰)	
104	03-4次Ef	須恵器	坏	11.6	4.0		回転ナデ　ヘラケズリ ヘラ起し	回転ナデ			

図No	出土地点	種類	器種	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	調整 外面	調整 内面	色調 外面	色調 内面	備考
105	02-8次De.Ee	須恵器	坏	12.0	4.0		回転ナデ　ヘラ起し	回転ナデ			
106	03-2次Eh.Gg	須恵器	坏	11.4	3.0	5.5	回転ナデ　回転糸切り ナデ	回転ナデ			
107	03-4次Fj	須恵器	坏	13.2	4.5	7.6	回転ナデ　回転ケズリ 回転糸切り	回転ナデ			黝斑あり
108	03-5次排水溝中	須恵器	坏	12.0	3.7	9.0	回転ナデ　回転糸切り	回転ナデ			
109	03-4次Gg.5次Fj	須恵器	坏			9.0	回転ナデ　回転糸切り	回転ナデ			
110	03-6次Hg.7次Hh	須恵器	坏	12.0	3.5	8.0	回転ナデ　回転ケズリ 回転糸切り	回転ナデ			
111	03-5次Gh	須恵器	坏	12.0	4.2	8.0	回転ナデ　回転糸切り	回転ナデ			
112	03-1次Eg	須恵器	坏			7.4	回転ナデ　回転糸切り	回転ナデ			壷の可能性アリ
113	03-3次Ff.6次Ff	須恵器	坏	11.8	4.2	7.5	回転ナデ　回転ケズリ 回転糸切り	回転ナデ			胎土に黒色微粒子
114	03-4次Fh.6次Hf	須恵器	坏	12.5	3.8	9.8	回転ナデ　回転糸切り	回転ナデ			
115	03-2次P2.5次Gi	須恵器	坏	17.0	6.5	12.0	回転ナデ　回転ケズリ 回転糸切り	回転ナデ			
116	03-7次Ｉg	須恵器	坏	12.2	4.5	7.4	回転ナデ　回転糸切り	回転ナデ			
117	03-3次Ｅh	須恵器	坏	14.0	4.4	7.4	回転ナデ　回転糸切り	回転ナデ			底部内面に円形文
118	03-4次Ei.6次Gh	須恵器	坏	13.2	3.6	9.0	回転ナデ　回転糸切り	回転ナデ			
119	03-1次Eg.2次Fg.3次Fg	須恵器	坏	13.6	4.5	9.5	回転ナデ　回転糸切り	回転ナデ			
120	03-1次Fi.2次Fy.4次Fh.4次Fi	須恵器	坏	14.0	4.9	7.6	回転ナデ　回転糸切り	回転ナデ			
121	03-4次Gj	須恵器	坏	12.7	4.7	9.0	回転ナデ　回転ケズリ 回転糸切り	回転ナデ			
122	03-5次Fj	須恵器	坏	12.5	5.4	8.4	回転ナデ　回転糸切り	回転ナデ			
123	03-4次Fi	須恵器	坏	13.6	4.1	8.0	回転ナデ　回転糸切り	回転ナデ			
124	03-5次Ff	須恵器	高台坏	13.8	4.7		回転ナデ　ナデ	回転ナデ			
125	03-5次He	須恵器	高台坏	14.4	4.4		回転ナデ　ナデ	回転ナデ			
126	02-7次De	須恵器	高台坏	13.5	5.0		回転ナデ　ナデ	回転ナデ			自然釉被る
127	03-4次Ff	須恵器	高台坏	14.0	4.6		回転ナデ　回転ケズリ 糸切り？　ナデ	回転ナデ			
128	03-7次Hf	須恵器	高台坏	15.4	4.8		回転ナデ　ナデ	回転ナデ			
129	02-7次Ef.03-4次Fi	須恵器	高台坏	13.5	4.7		回転ナデ　回転糸切り	回転ナデ			小角３点スタンプ文 自然釉被る
130	02-3次Cd	須恵器	高台坏	14.3	5.8		回転ナデ　ナデ	回転ナデ			底面内外にヘラ刻線
131	03-2次Eh	須恵器	高台坏	14.4	4.4	(9.1)	回転ナデ　ナデ	回転ナデ			
132	03-5次Ei.P2	須恵器	高台坏	14.4	4.9	(8.5)	回転ナデ　ナデ	回転ナデ			
133	03-3次Eh.4次Eh	須恵器	高台坏	15.2	4.9		回転ナデ　糸切り？ ナデ	回転ナデ　ナデ			
134	03-5次Fj	須恵器	高台坏	14.0	5.2		回転ナデ　ナデ	回転ナデ			
135	03-5次Fi	須恵器	高台坏	14.2	5.2		回転ナデ　静止糸切り ナデ	回転ナデ			外面に刻印あり
136	03-6次Gg	須恵器	高台坏	15.4	5.1	(8.8)	回転ナデ　ナデ	回転ナデ			
137	03-2次Eh.4次Gj	須恵器	高台坏	15.0	5.3	(9.2)	回転ナデ　回転糸切り ナデ	回転ナデ			
138	03-1次Dh	須恵器	高台坏	14.2	4.7		回転ナデ　ナデ	回転ナデ			底面に円形竹管文
139	03-2次Ff	須恵器	高台坏				回転ナデ　ナデ	回転ナデ			
140	03-5次Fi	須恵器	高台坏	14.6	4.9	(9.5)	回転ナデ　回転糸切り ナデ	回転ナデ			
141	02-1次Be	須恵器	高台坏	15.2	4.9	(10.2)	回転ナデ　ナデ	回転ナデ			
142	03-7次Ig	須恵器	高台坏	13.6	5.2	(8.1)	回転ナデ　ナデ	回転ナデ			外面灰被り
143	03-7次Hf	須恵器	高台坏	14.6	5.7	(8.8)	回転ナデ　ナデ	回転ナデ			
144	03-1次Fe	須恵器	高台坏	14.8	5.4		回転ナデ　静止糸切り ナデ	回転ナデ			
145	03-1次Dh	須恵器	高台坏	13.0	5.1	(7.8)	回転ナデ　回転糸切り ナデ	回転ナデ			
146	03-6次Ge.7次Ge	須恵器	高台坏	14.3	5.2	(8.6)	回転ナデ　回転糸切り ナデ	回転ナデ			外面灰被り
147	03-5次Ff	須恵器	高台坏	16.8	5.4		回転ナデ　回転ケズリ 静止糸切り　ナデ	回転ナデ			
148	03-6次Ff	須恵器	高台坏	14.3			回転ナデ　回転糸切り	回転ナデ			
149	03-7次Gg	須恵器	高台坏	13.9	5.2	(8.7)	回転ナデ	回転ナデ			外面灰被り
150	02-6次Dg	須恵器	高台坏	14.0	5.2		回転ナデ　ナデ	回転ナデ			
151	03-6次Fj	須恵器	高台坏	15.6	4.9		回転ナデ　糸切り？ ナデ	回転ナデ			
152	03-4次Ef.5次Hg.Hh	須恵器	高台坏	14.6	5.5		回転ナデ	回転ナデ			
153	03-6次Ee	須恵器	高台坏	11.7	4.8		回転ナデ　回転ケズリ	回転ナデ			削り出し高台 口縁部にヘラ記号あり

図No	出土地点	種類	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	調整 外面	調整 内面	色調 外面	色調 内面	備考
154	03-2次Ef. 6次Ef	須恵器	高台坏	15.2	4.0	7.9	回転ナデ　ナデ	回転ナデ			
155	02-7次De.8次De.Ee.03-7次Ff	須恵器	高台坏	16.2	5.3		回転ナデ　ナデ	回転ナデ			自然釉被る
156	02-1次Ｄｆ.Ce	須恵器	高台坏	13.8	4.8	(8.0)	回転ナデ　ナデ	回転ナデ			
157	03-6次Fe	須恵器	高台坏	11.2	3.9	(7.6)	回転ナデ　ナデ	回転ナデ			
158	03-5次Ei	須恵器	高台坏	14.4	4.5		回転ナデ　回転糸切り	回転ナデ			胎土に黒色微粒子
159	03-4次Eh	須恵器	高台坏	14.5	5.1	(9.5)	回転ナデ　静止糸切り	回転ナデ			
160	03-4次Eh	須恵器	高台坏	14.7	5.4	(9.5)	回転ナデ　回転糸切り	回転ナデ			部分的に滲炭
161	03-6次He	須恵器	高台坏	13.1	4.7		回転ナデ　回転ケズリ 静止糸切り	回転ナデ			
162	不明	須恵器	高台坏	13.2	5.5	(7.4)	回転ナデ　回転ケズリ 静止糸切り	回転ナデ			
163	03-7次Hf	須恵器	高台坏	14.6			回転ナデ　回転糸切り	回転ナデ			
164	03-3次Eh.Ef	須恵器	高台坏	13.4	5.1	(7.8)	回転ナデ　回転ケズリ 回転糸切り	回転ナデ			
165	03-7次Ff	須恵器	高台坏	13.5	4.9		回転ナデ　糸切り？ ナデ	回転ナデ			底内面にヘラ記号
166	02-7次De.Ef	須恵器	高台坏	14.4	5.0		回転ナデ　ナデ	回転ナデ			
167	03-4次Ei.Fi.Eh	須恵器	高台坏	14.1	5.5		回転ナデ　ナデ	回転ナデ			
168	02-7次De～Ef	須恵器	高台坏	19.8	3.9		回転ナデ　回転ケズリ 糸切り？　ナデ	回転ナデ			
169	03-5次Gd～Hd	須恵器	高台皿	21.2	3.9		回転ナデ　糸切り？ ナデ	回転ナデ			
761	03-7次Hd	須恵器	蓋	13.7	3.4		回転ナデ　ナデ 回転ケズリ	回転ナデ			輪状撫み内に“山”？ 764とセットか
762	03-6次He	須恵器	高台坏	14.1	5.0		回転ナデ　回転ケズリ 静止糸切り	回転ナデ			底面に“山”？
763	03-6次Fi	須恵器	高台坏	17.0	5.0		回転ナデ　ナデ 静止糸切り	回転ナデ			底面に“山”？
764	03-7次Hf	須恵器	高台坏	14.2			回転ナデ　回転ケズリ ナデ	回転ナデ			底面に“山”？ 761とセットか
765	03-5次Gi	須恵器	高台坏	13.0	4.5	(8.0)	回転ナデ　ナデ	回転ナデ			底部内外面・口縁打欠き部に漆？・炭？付着　転用片口・転用硯か
766	03-7次If	須恵器	高台坏	14.7	5.2	(8.8)	回転ナデ　ナデ 静止糸切り	回転ナデ			底外面に漆？付着 転用硯か
201	03-2次Df.6次Ef	須恵器	高坏	15.8	12.2	9.0	回転ナデ	回転ナデ　ナデ			
202	02-1次Be.2次Be.3次Bc	須恵器	高坏	16.2	12.2	10.6	回転ナデ	回転ナデ　ナデ			
203	03-7次Fh	須恵器	高坏			9.8	回転ナデ	回転ナデ　ナデ			
204	02-6次Ce. 03-2次De	須恵器	高坏	16.6	11.5	10.4	回転ナデ	回転ナデ　ナデ			
205	02-5次Cc	須恵器	高坏			9.4	回転ナデ	回転ナデ　ナデ			
206	02-5次De.7次De.03-2次De	須恵器	高坏	15.0	10.2	8.8	回転ナデ	回転ナデ　ナデ			
207	03-3次Eg.4次Eh.Fh	須恵器	高坏	17.6	12.0	10.6	回転ナデ　回転ケズリ	回転ナデ　ナデ			
208	03-2次Ef.6次Df.7次De	須恵器	高坏	17.4	11.4	9.2	回転ナデ	回転ナデ　ナデ			
209	02-6次Df.Dg	須恵器	高坏	16.3	10.8	9.8	回転ナデ	回転ナデ　ナデ			カナケ付着
210	02-5次Ce	須恵器	高坏	16.0	11.6	10.3	回転ナデ	回転ナデ　ナデ			焼成不良
211	03-8次Ge	須恵器	高坏	15.9	11.3	9.6	回転ナデ	回転ナデ　ナデ			坏部に刻線
212	02-6次 Cc.Dc.Cd.Dd.Ce	須恵器	高坏	16.0	10.5	9.9	回転ナデ	回転ナデ　ナデ			
213	02-1次Bd.Ce. 2次Ce.03-7次Ef	須恵器	高坏	16.8	12.0	10.1	回転ナデ　回転ケズリ	回転ナデ　ナデ			重ね焼き痕あり
214	02-6次Cc.Dc.Cd.Dd. 03-2次Dd	須恵器	高坏	16.5	10.9	10.3	回転ナデ	回転ナデ　ナデ			重ね焼き痕あり
215	02-4次Ce	須恵器	高坏	15.6	13.3	11.2	回転ナデ	回転ナデ　ナデ			
216	02-5次Ce	須恵器	高坏	15.8	13.4	11.4	回転ナデ	回転ナデ　ナデ			
217	02-1次Cd.4次Ce	須恵器	高坏	17.4	14.8	12.0	回転ナデ	回転ナデ　ナデ			
218	03-6次Ge.8次Ge	須恵器	高坏	16.0	10.5	9.8	回転ナデ	回転ナデ　ナデ			
219	03-6次Gf	須恵器	高坏	16.8	6.9	9.2	回転ナデ　回転ケズリ	回転ナデ　ナデ			
220	03-5次Fh	須恵器	高坏	15.5	7.2	9.0	回転ナデ　回転ケズリ	回転ナデ　ナデ			焼き歪み
301	03-7次Ge	須恵器	長頸壷				回転ナデ　回転ケズリ	回転ナデ	5Y8/2(灰白)～10G5/1(青灰)		
302	03-5次Fg.6次Ff.Fi	須恵器	長頸壷				回転ナデ	回転ナデ	N6/0(灰)～7/0(灰白)		
303	02-7次De2次Cd.4次Eh	須恵器	長頸壷				回転ナデ　回転ケズリ ヘラ切り	回転ナデ	N6/0(灰)～7/0(灰白) 5YR6/1(褐灰)	N6/0(灰)～7/0(灰白)	外面肩部にヘラ記号あり　灰被り
304	03-5次Ee.6次De	須恵器	長頸壷	8.4			回転ナデ	回転ナデ	N7/0(灰白)		外面自然釉被り

図No	出土地点	種類	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	調整 外面	調整 内面	色調 外面	色調 内面	備考
305	03-7次Ff	須恵器	長頸壺				回転ナデ　回転ケズリ ヘラ切り	回転ナデ	N6/0(灰)～3/0(暗灰)	N7/0(灰白)～5/0(灰)	外面下位にヘラ記号あり　漆？付着
306	03-5次Fj	須恵器	長頸壺	12.6			回転ナデ	回転ナデ	N6/0(灰)～7.5Y6/1(灰)	7.5Y6/1(灰)	外面自然釉被り
307	03-7次Fe	須恵器	長頸壺				回転ナデ　回転ケズリ ヘラ切り	回転ナデ	N7/0(灰白)～2.5GY5/1(オリーブ)		頸部に円形刺突文 外面自然釉薬被る
308	03-5次Hg～Hh	須恵器	壺底部				回転ナデ　回転糸切り	回転ナデ	5BG6/1(青灰)		坏の可能性あり
309	03-2次Dh	須恵器	壺底部				回転ナデ　回転ケズリ	回転ナデ	5Y7/1(灰白)～6/1(灰)		
310	03-4次Eh	須恵器	壺底部			(9.4)	回転ナデ　ヘラ切り　ナデ	回転ナデ	N4/0(灰)～7/0(灰白)	N7/0(灰白)	透かし？あり
311	03-7次Ge	須恵器	壺底部			(8.8)	回転ナデ　ヘラ切り　ナデ	回転ナデ	7.5Y7/2(灰白)～5/1(灰)	7.5Y7/2(灰白)	
312	02-7次Df	須恵器	小壺	11.3			回転ナデ	回転ナデ	N7/0(灰白)～6/0(灰)		
313	03-6次Gh	須恵器	広口壺	16.3			回転ナデ	回転ナデ	N6/0(灰)		
314	03-6次Hh.Fg	須恵器	甕	16.7	28.8		格子状タタキ目　カキメ	同心円状タタキ目 ナデ	N5/0(灰)		頸部に円浮文と四ツ目押印文
315	03-2次Dg. 5次Eg.Fg.6次Eg	須恵器	甕？	17.6			格子状タタキ目　カキメ	同心円状タタキ目 ナデ	N6/0(灰)～4/0(灰)	N7/0(灰白)	自然釉被る
316	03-5次Jf	須恵器	横瓶	10.5	21.7		格子状タタキ目　カキメ	同心円状タタキ目 ナデ	N6/0(灰)		重ね焼き痕あり 須恵器片付着
317	03-4次Eh.5次Ei. 6次Gh	須恵器	横瓶	12.6	27.7		格子状タタキ目　カキメ	同心円状タタキ目 ナデ			重ね焼き痕あり
318	03-6次Eg.7次Ff	須恵器	横瓶	11.0	26.6		格子状タタキ目　カキメ	同心円状タタキ目 ナデ			重ね焼き痕あり 容量12ℓほどか
319	03-4次Ff	須恵器	横瓶				平行タタキ目　カキメ	同心円状タタキ目 ナデ			
320	03-7次Hi	須恵器	小壺	10.0	11.8	5.1	回転ナデ　回転ケズリ ヘラ切り	回転ナデ	10R4/3(赤褐)～2.5Y8/1(灰白)		自然釉被る
321	03-5次He～Hf	須恵器	底部			11.0	回転ナデ　ヘラ切り　ナデ	回転ナデ	5PB7/1(明青灰)		焼締陶
322	03-6次Hh	須恵器	鉢				格子状タタキ目	同心円状タタキ目 ナデ	7.5Y6/1(灰)～ 7.5GY6/1(緑灰)	7.5Y6/1(灰)	亀山様式か？
323	03-排土中	須恵器	炻器				回転ナデ	回転ナデ	5Y6/1(灰) 7.5YR5/3(にぶい褐)	2.5GY7/1(明オリーブ灰)	外面に縄目？

表２　円満寺遺跡出土土師器甕観察表

図No	出土地点	種類	器種	形状	残存率(%)	口径(cm)	器高(cm)	調整 外面	調整 内面	焼成	色調 内面	備考
1001	03-7次Ff	土師器	甕	丸底	80	24.2	26.5	ナデ	ナデ　ケズリ	良好	10YR7/3（にぶい黄橙）～2/1（黒）	
1002	03-6次Ef	土師器	甕	丸底	70	23.9	27.3	ナデ	ナデ　ケズリ	良好	7.5YR8/2（灰白）～2/1（黒）	
1003	03-6次Gh.Gi	土師器	甕	丸底	70	28.0	30.0	ナデ	ナデ　ケズリ	良好	5YR6/4（にぶい橙）～4/1（褐灰）～2/1（黒褐）	
1004	03-6次Ej.7次Gd.Gj	土師器	甕	丸底	50	32.0	25.3	ハケメ	ナデ　ケズリ	良好	5YR6/6（橙）～4/1（褐灰）	
1005	03-6次Gf	土師器	甕	丸底	70	24.5	28.7	ナデ	ナデ　ケズリ	良好	5YR7/3（にぶい橙）～2/1（黒褐）	
1006	03-6次Hf.7次Hf	土師器	甕	丸底	60	27.0	29.0	ハケメ	ナデ ケズリ ハケメ	普通	7.5YR6/4（にぶい橙）～4/1（褐灰）～2/1（黒）	
1007	02-2次Ce	土師器	甕	丸底	50	26.0	27.5	ハケメ　ナデ	ナデ　ケズリ	普通	5YR7/4（にぶい橙）～2/1（黒褐）	
1008	03-4次Fd	土師器	甕	丸底	90	23.5	23.8	ハケメ　ナデ	ナデ　ケズリ	普通	10YR8/3（浅黄橙）～3/2（黒褐）	
1009	03-7次Ff	土師器	甕	丸底	80	18.5	22.8	ナデ	ナデ　ケズリ	良好	7.5YR6/4（にぶい橙）～2/1（黒）	
1010	03-6次Gh	土師器	甕	丸底	60	24.6	24.1	ナデ	ナデ　ケズリ	良好	5YR5/4（にぶい赤褐）～2/2（黒褐）	
1011	03-7次Gf	土師器	甕	丸底	60	25.0		ナデ	ナデ　ケズリ	良好	7.5YR6/4（にぶい橙）～2/1（黒）	
1012	03-4次Fi	土師器	甕	丸底	50	29.5	29.5	ナデ	ナデ　ケズリ	良好	7.5YR7/3（にぶい橙）～7/2（明褐灰）～4/1（褐灰）	
1013	03-7次Gg	土師器	甕	丸底	90	28.0	28.2	ナデ	ナデ　ケズリ	良好	7.5YR7/6（橙）～4/2（灰褐）	
1014	02-6～7次Ee～Ef	土師器	甕	丸底	50	29.4		ナデ	ナデ　ケズリ	良好	10YR7/2（にぶい黄橙）～3/1（黒褐）	
1015	03-5次Fg.6次Gf	土師器	甕	丸底	60	28.0	28.3	ナデ	ナデ　ケズリ	良好	5YR6/6（橙）～2/1（黒褐）	
1016	03-4次Eh.Fd	土師器	甕	丸底	60	31.1	29.7	ナデ	ナデ　ケズリ	良好	2.5YR6/8（橙）～4/2（灰赤）	
1017	03-5次Gg	土師器	甕	丸底	30	30.0		ナデ	ナデ　ケズリ	普通	7.5YR7/6（橙）～7/3（にぶい橙）～3/1（黒褐）	
1018	03-4次Fi	土師器	甕	丸底	30	38.5		ナデ	ナデ　ケズリ	良好	7.5YR7/4（にぶい橙）～7/2（明褐灰）～4/1（褐灰）	
1019	03-8次Df	土師器	甕	丸底	60	24.0		ハケメ	ハケメ　ケズリ	やや不良	5YR7/4（にぶい橙）～10YR8/2（灰白）	
1020	03-6次Fh	土師器	甕	丸底	40	29.7		ナデ	ナデ　ケズリ	良好	5YR7/3（にぶい橙）～3/2（暗赤褐）	
1021	03-5次Fg	土師器	甕	丸底	50	28.8		ナデ　ハケメ	ナデ　ケズリ	普通	7.5YR6/4（にぶい橙）～3/1（黒褐）	
1022	03-6次Ef	土師器	甕	丸底	50	25.5		ナデ	ナデ　ケズリ	普通	7.5YR8/2（灰白）～4/2（灰褐）	
1023	03-4次Gi.5次Fi.Fj	土師器	甕	平底	80	29.1	23.7	ハケメ	ナデ　ケズリ	良好	10YR7/2（にぶい黄橙）～3/1（黒褐）～2/1（黒）	
1024	03-6次Gh	土師器	甕	平底	80	30.0	23.5	ナデ	ナデ　ケズリ	普通	10YR7/2（にぶい黄橙）～3/1（黒褐）～1.7/1（黒）	
1025	03-5次Gh.6次Gh	土師器	甕	平底	70	27.5	27.0	ナデ	ナデ　ケズリ	良好	7.5YR7/4（にぶい橙）～3/1（黒褐）	
1026	03-7次Fe	土師器	甕	平底	80	40.4	35.2	ハケメ	ハケメ　ケズリ	良好	10YR7/4（にぶい黄橙）～4/2（灰黄褐）	
1027	03-7次Gf	土師器	甕	平底	80	27.8	26.4	ハケメ	ハケメ　ケズリ	良好	10YR8/3（浅黄橙）～2/1（黒）	
1028	03-7次Hf	土師器	甕	平底	70	28.8	25.4	ナデ	ナデ　ケズリ	良好	10YR8/3（浅黄橙）～2/1（黒）	
1029	03-6次Fh	土師器	甕	平底	70	33.0	28.4	ハケメ	ナデ　ケズリ	やや不良	10YR7/4（にぶい黄橙）～2/2（黒褐）	

図No	出土地点	種類	器種	形状	残存率(%)	口径(cm)	器高(cm)	調整 外面	調整 内面	焼成	色調 内面	備考
1030	03-5次Ff	土師器	甕	平底	40	31.0		ナデ	ナデ　ケズリ	普通	7.5YR7/3（にぶい橙）～3/1（黒褐）	
1031	03-6次Ge	土師器	甕	平底	40	22.4	30.1	ナデ	ナデ　ケズリ	普通	7.5YR7/4（にぶい橙）～3/1（黒褐）	
1032	02-8次De.Ee	土師器	甕	平底	50			ハケメ	ケズリ	普通	10R6/6（赤橙）～3/1（暗赤灰）	
1033	03-6次Gg	土師器	甕	平底	90	34.4	29.4	ナデ	ナデ　ケズリ	良好	10YR8/3（浅黄橙）～3/1（黒褐）	
1034	03-7次Ge	土師器	甕	平底	70	35.0	26.7	ナデ	ナデ　ケズリ	良好	7.5YR7/4（にぶい橙）～5/4（にぶい褐）	
1035	02-3次Ce	土師器	甕	平底	90	27.4	25.8	ナデ	ナデ　ケズリ	やや不良	10YR8/2（灰白）～2/1（黒）	
1036	02-2次Ce	土師器	甕	平底	60	29.5	27.2	ナデ	ハケメ　ケズリ	やや不良	5YR6/6（橙）～3/2（暗赤褐）	
1037	03-7次Ef	土師器	甕	平底	60	30.0	29.1	ハケメ	ハケメ　ケズリ	普通	5YR6/4（にぶい橙）～2/1（黒褐）	
1038	03-7次Hg	土師器	甕	平底	80	29.8	26.8	ナデ	ナデ　ケズリ	普通	5YR6/6（橙）～2/2（黒褐）～6/3（にぶい橙）	
1039	03-7次Ee	土師器	甕	平底	50			ナデ	ナデ　ケズリ	良好	7.5YR4/2（灰褐）～7/4（にぶい橙）	
1040	02-7次Df	土師器	甕	平底	90	23.5	27.8	ハケメ　ナデ	ナデ　ケズリ	やや不良	7.5YR8/6(浅黄橙)～2/1(黒)～10YR6/2(灰黄褐)	
1041	03-5次Eh.Fh.6次Gf	土師器	甕	平底	50	25.0	28.2	ナデ	ナデ　ケズリ	良好	5YR4/1（褐灰）～5/4（にぶい赤褐）	
1042	03-7次Ge	土師器	甕	平底	90	26.5	29.2	ナデ	ナデ　ケズリ	良好	7.5YR8/2（灰白）～4/1（褐灰）	
1043	03-6次Gi	土師器	甕	平底	60	20.8		ハケメ	ナデ　ケズリ	普通	10YR6/2（灰黄褐）～5/1（褐灰）	
1044	02-2次Ce	土師器	甕	平底	40	25.0		ハケメ	ナデ　ケズリ	普通	5YR7/3（にぶい橙）～2/2（黒褐）	
1045	03-6次Gh	土師器	甕	平底	50	28.0		ハケメ	ナデ　ケズリ	良好	7.5YR7/4（にぶい橙）～2/2（黒褐）	
1046	02-8次Df	土師器	甕	長胴型	90	24.5	31.0	ハケメ	ハケメ　ケズリ	普通	7.5YR8/3（浅黄橙）～2/1（黒）	
1047	03-7次Gf	土師器	甕	長胴型	40	24.2	30.8	ナデ	ナデ　ケズリ	良好	7.5YR6/4（にぶい橙）～2/2（黒褐）	
1048	03-6次Gf	土師器	甕	長胴型	80	25.6	29.2	ナデ	ナデ　ケズリ	良好	5YR6/3（にぶい橙）～3/1（黒褐）	
1049	02-7次De	土師器	甕	長胴型	50	24.2		ハケメ　ナデ	ナデ　ケズリ	良好	5YR6/4（にぶい橙）～2/2（黒褐）	
1050	03-7次He	土師器	甕	長胴型	80	24.0	31.3	ナデ	ナデ　ケズリ	良好	5YR5/6（明赤褐）～1.7/1（黒）	
1051	03-7次Ef.Ff	土師器	甕	長胴型	70	24.0	28.8	ナデ	ナデ　ケズリ	普通	7.5YR7/4（にぶい橙）～2/1（黒）	吹きこぼれ痕明瞭
1052	02-8次Df	土師器	甕	長胴型	90	25.0	31.5	ハケメ	ナデ　ケズリ	普通	5YR8/3（淡橙）～5/2（灰褐）～2/1（黒褐）	
1053	02-5次Ce.6次Ce	土師器	甕	長胴型	70	23.8	28.1	ハケメ	ナデ　ケズリ	良好	7.5YR7/2（明褐灰）～2/2（黒褐）	
1054	02-2次Be	土師器	甕	長胴型	50	22.0		ナデ	ナデ　ケズリ	普通	7.5YR8/3（浅黄橙）～6/2（灰褐）～3/1（黒褐）	
1055	03-8次Ge	土師器	甕	長胴型	70	23.6		ハケメ　丁寧なナデ	ナデ　ケズリ	良好	5YR5/4（にぶい赤褐）～2/1（黒褐）	
1056	03-7次Fg	土師器	甕	長胴型	70	19.0	22.5	ナデ	ナデ　ケズリ	普通	10YR8/2（灰白）～6/1（褐灰）	
1057	02-7次Ef	土師器	甕	長胴型	90	22.5	29.3	ハケメ　ナデ	ナデ　ケズリ	普通	5YR7/4（にぶい橙）～2/1（黒褐）	
1058	03-6次Gg	土師器	甕	長胴型	40	25.0		ナデ	ナデ　ケズリ	良好	7.5YR2/1（黒）～5/6（明褐）	
1059	02-1次Ce	土師器	甕	小型	80	21.0	21.0	ハケメ	ナデ　ケズリ	良好	5YR7/8（橙）～3/1（黒褐）	
1060	03-7次Ef	土師器	甕	小型	100	21.0	17.3	ナデ	ナデ　ケズリ	良好	2.5YR7/4（淡赤橙）～5YR3/2（暗赤褐）	
1061	03-7次Hf	土師器	甕	小型	70	17.0	15.2	ナデ	ナデ　ケズリ	普通	5YR6/4(にぶい橙)～4/3(にぶい赤褐)～3/1(黒褐)	
1062	03-4次Fi	土師器	甕	小型	30	17.5	18.5	ナデ	ナデ　ケズリ	良好	5YR6/3（にぶい橙）～2.5YR4/2（灰赤）	
1063	03-5次Fh	土師器	甕	小型	90	20.0	19.0	ナデ	ナデ　ケズリ	良好	7.5YR7/3（にぶい橙）～4/2（灰褐）	
1064	03-7次He	土師器	甕	小型	30	20.2	20.9	ハケメ	ナデ　ケズリ	普通	5YR8/1（灰白）～4/1（褐灰）	
1065	02-8次De～Ee	土師器	甕	小型	80	18.4	19.8	ハケメ	ナデ　ケズリ	良好	10YR8/3（浅黄橙）～2/2（黒褐）	
1066	02-2次Be.Ce.Df.3次Ce	土師器	甕	小型	90	16.8	14.8	ハケメ　ナデ	ナデ　ケズリ	やや不良	5YR7/8（橙）～7.5YR5/4（にぶい橙）	
1067	03-1次Dd	土師器	甕	小型	70	16.6	17.0	ハケメ　ナデ	ナデ　ケズリ	やや不良	10YR8/1（灰白）～5YR5/2（灰褐）	
1068	02-3次Ce	土師器	甕	小型	80			ハケメ	ナデ　ケズリ	普通	7.5YR8/3（浅黄橙）～3/2（黒褐）	
1069	03-4次Ff	土師器	甕	小型	50			ナデ	ナデ　ケズリ	普通	5YR5/3（にぶい赤褐）～3/2（暗赤褐）	
1070	03-5次Eg	土師器	甕	小型	80	17.5	14.4	ナデ	ナデ　ケズリ	良好	7.5YR7/2（明褐灰）～4/1（褐灰）	
1071	02-3次Ce	土師器	甕	小型	90	14.5	16.0	ナデ	ナデ　ケズリ	やや不良	7.5YR8/4（浅黄橙）～7/3（にぶい橙）～2/1（黒）	
1072	02-8次Df	土師器	甕	小型	70	12.0	15.3	ナデ	ナデ　ケズリ	普通	7.5YR8/4（浅黄橙）～2/2（黒褐）	
1073	03-7次Eg	土師器	甕	小型	40	13.2	16.5	ナデ	ナデ　ケズリ	良好	7.5YR8/3（浅黄橙）～5YR3/1（黒褐）	
1074	02-2次Be	土師器	甕	小型	90	13.2	15.5	ナデ	ナデ　ケズリ	普通	5YR7/6（橙）～7.5YR5/4（にぶい褐）	
1075	02-6次Df.De	土師器	甕	小型	60	12.3	14.3	ナデ	ナデ　ケズリ	普通	7.5YR8/3（浅黄橙）～3/1（黒褐）	
1076	03-4次Eg	土師器	甕	小型	50	16.6		ナデ	ナデ　ケズリ	普通	7.5YR7/3（にぶい橙）～4/2（灰褐）	
1077	03-6次Gh.Hg	土師器	甕	小型	100	15.9	15.8	ハケメ	ナデ　ケズリ	良好	10YR7/3（にぶい黄橙）～3/1（黒褐）	
1078	03-6次Gh	土師器	甕	小型	30	14.3		ナデ	ナデ　ケズリ	良好	7.5YR8/2（灰白）～6/1（褐灰）～2/1（黒）	
1079	02-2次Ce	土師器	甕	小型	20	16.0		ハケメ	ハケメ　ケズリ	普通	7.5YR7/6（橙）	
1080	03-6次Fh	土師器	甕	小型	20	17.8		ナデ　ハケメ	ナデ　ケズリ	普通	2.5Y8/1（灰白）	
1081	02-1次Ce	土師器	甕	小型	20	14.0		ナデ	ナデ　ケズリ	普通	5YR7/3（にぶい橙）	
1082	03-7次Hg	土師器	甕	小型	10	15.0		ナデ	ナデ　ケズリ	良好	2.5Y7/2（灰黄）～6/1（黄灰）	
1083	03-6次Fg	土師器	甕	小型	20	20.0		ハケメ	ナデ　ケズリ	普通	5YR6/6（橙）～7/6（橙）	
1084	03-3次Fg	土師器	甕	小型	20	16.0		ナデ	ナデ　ケズリ	普通	2.5YR3/3（暗赤褐）～3/2（暗赤褐）	

図No	出土地点	種類	器種	形状	残存率(%)	口径(cm)	器高(cm)	調整 外面	調整 内面	焼成	色調 内面	備考
1085	03-3次Eh	土師器	甕	小型	10	16.0		ナデ	ナデ　ケズリ	普通	10YR8/1（灰白）	
1086	03-5次He～Hf	土師器	甕	小型	40	19.0		ハケメ	ハケメ　ケズリ	良好	5YR7/6（橙）～3/2（暗赤褐）	
1087	03-4次Eg	土師器	甕	小型	20	19.6		ハケメ	ハケメ　ケズリ	普通	7.5YR7/6（橙）	
1088	03-5次De	土師器	甕	小型	40	15.0		ナデ	ナデ　ハケメ	普通	2.5YR7/4（淡赤橙）～5/2（灰赤）～2/1（赤黒）	
1089	02-3次Ce	土師器	甕	小型	30	17.6		ハケメ	ナデ　ケズリ	普通	10YR8/3（浅黄橙）～7.5YR8/3（浅黄橙）	
1090	02-1次De	土師器	甕	小型	30	17.5		ハケメ	ハケメ　ケズリ	普通	7.5YR7/6（橙）～2/2（黒褐）	
1091	03-7次He	土師器	甕	小型	40	16.0		ナデ	ナデ　ケズリ	普通	10YR7/2（にぶい黄橙）	
1092	02-7次Df	土師器	甕	小型	30	11.8		ナデ	ナデ　ケズリ	やや不良	10YR8/2（灰白）	
1093	03-7次Gf	土師器	甕		20	31.0		ナデ	ナデ　ケズリ	良好	10YR8/2（灰白）～3/4（暗褐）～3/1（黒褐）	
1094	03-5次Fi	土師器	甕		20	34.4		ナデ	ナデ　ケズリ	良好	7.5YR6/4（にぶい橙）～6/2（褐灰）	
1095	03-7次Ee.Hd	土師器	甕		10	31.2		ナデ	ナデ　ケズリ	良好	7.5YR7/6（橙）～4/1（褐灰）	
1096	03-6次Gh	土師器	甕		10	35.0		ナデ	ナデ　ケズリ	良好	7.5YR6/4（にぶい橙）～5YR1.7/1（黒）	
1097	03-5次Fh.Fi	土師器	甕		10	39.0		ナデ	ナデ　ケズリ	良好	7.5YR6/4（にぶい橙）～1.7/1（黒）～8/2（灰白）	
1098	03-5次Fh.6次Fh	土師器	甕		30	32.4		ナデ	ナデ　ケズリ	普通	7.5YR7/6（橙）～6/3（にぶい褐）	
1099	03-2次Ef	土師器	甕		10	30.0		ナデ	ナデ　ケズリ	良好	7.5YR3/1（黒褐）～10YR8/1（灰白）	
1100	03-6次Gf.7次Gf	土師器	甕		50	36.0		ナデ	ナデ　ケズリ	良好	5YR6/6（橙）～3/1（黒褐）～2/1（黒褐）	
1101	03-4次Fi.5次Gh	土師器	甕		20	31.0		ナデ	ナデ　ケズリ	普通	10YR8/2（灰白）～7.5YR6/2（灰褐）	
1102	03-7次Hg	土師器	甕		10	30.0		ナデ	ナデ　ケズリ	良好	10YR7/3（にぶい黄橙）～4/1（褐灰）	
1103	03-4次Eh.5次Gh	土師器	甕		30	30.0		ナデ	ナデ　ケズリ	良好	2.5YR8/2（灰白）～10YR5/1（褐灰）	
1104	03-6次Hf.7次He	土師器	甕		50	31.0		ナデ	ナデ　ケズリ	やや不良	2.5YR7/2（灰黄）～10YR5/1（褐灰）	
1105	02-8次Ef	土師器	甕		10	30.0		ナデ	ナデ　ケズリ	良好	10YR5/1（褐灰）～8/4（浅黄橙）～7.5YR7/6（橙）	
1106	03-6次Hc	土師器	甕		30	33.4		ナデ	ナデ　ケズリ	良好	7.5YR8/3（浅黄橙）～5/2（灰褐）	
1107	03-5次Fh	土師器	甕		20	32.8		ナデ	ナデ　ケズリ	良好	7.5YR6/4（にぶい橙）～5YR7/3（にぶい橙）	
1108	03-5次Gh.6次Gh	土師器	甕		60	35.0		ナデ	ナデ　ケズリ	良好	7.5YR8/2(灰白)～10YR7/3(にぶい黄橙)～7.5YR1.7/1(黒)	
1109	03-6次Gg	土師器	甕		30	30.0		ナデ	ナデ　ケズリ	やや不良	7.5YR4/2(灰褐)～1.7/1(黒)～2.5YR5/4(にぶい赤褐)	
1110	03-1次Dh	土師器	甕		20	30.0		ナデ	ナデ　ケズリ	やや不良	7.5YR8/2（灰白）～5/2（灰褐）～5YR5/1（褐灰）	
1111	03-7次Ge.Gf	土師器	甕		50	40.6		ナデ　ハケメ	ハケメ　ケズリ	良好	7.5YR7/2(明褐灰)～4/1(褐灰)	
1112	03-4次Gg	土師器	甕		10	31.0		ナデ　ハケメ	ハケメ ナデ ケズリ	普通	7.5YR7/4（にぶい橙）～4/1（褐灰）	
1113	03-5次Fh.Fi	土師器	甕		30	33.0		ナデ　ハケメ	ナデ　ケズリ	普通	7.5YR7/4（にぶい橙）～3/1（黒褐）	
1114	03-5次Ff.6次Hf	土師器	甕		30	37.0		ナデ　ハケメ	ハケメ ナデ ケズリ	普通	10YR8/2（灰白）～7.5YR5/2（灰褐）	
1115	03-7次Gf	土師器	甕		50	32.0		ナデ　ハケメ	ナデ　ケズリ	普通	5Y7/1(灰白)～10YR8/3(浅黄橙)～7/2(にぶい黄橙)	
1116	03-7次Ge	土師器	甕		70	31.0		ナデ　ハケメ	ナデ　ケズリ	良好	10YR8/2（灰白）～7/1（灰白）～6/1（褐灰）	
1117	03-6次Gi	土師器	甕		30	35.4		ナデ　ハケメ	ハケメ ナデ ケズリ	やや不良	7.5YR7/6（橙）～8/3（浅黄橙）～4/2(灰褐)	
1118	03-4次Fg	土師器	甕		20	30.0		ナデ　ハケメ	ナデ　ケズリ	良好	10YR8/3（浅黄橙）～2/1（黒）	
1119	03-6次Gh.Hh	土師器	甕		40	36.0		ナデ　ハケメ	ナデ　ケズリ	やや不良	5YR8/3（淡橙）～6/1(褐灰)～7.5YR2/1(黒)	
1120	03-5次Ej	土師器	甕		30	34.0		ナデ　ハケメ	ナデ ハケメ ケズリ	普通	5YR7/6（橙）～10YR2/2（黒褐）	
1121	03-4次Ee	土師器	甕		10	34.0		ナデ　ハケメ	ハケメ ナデ ケズリ	良好	10YR8/3（浅黄橙）～2.5YR8/2（灰白）	
1122	03-2次Ee	土師器	甕		30	36.0		ナデ　ハケメ	ナデ ハケメ ケズリ	普通	7.5YR8/3（浅黄橙）～10YR8/2（灰白）	
1123	02-2次Ce	土師器	甕		10	35.3		ナデ　ハケメ	ナデ　ケズリ	普通	10YR8/2（灰白）～7.5YR8/2（灰白）	
1124	02-2次Ce	土師器	甕		10	30.0		ナデ　ハケメ	ナデ ハケメ ケズリ	良好	2.5YR6/8（橙）～5YR3/2（暗赤褐）	
1125	03-6次Gf	土師器	甕		60	35.2		ハケメ	ナデ ハケメ ケズリ	普通	7.5YR7/8（黄橙）～7/6（橙）～3/1（黒褐）	吹きこぼれ痕 黒斑
1126	03-4次Fh.Fg	土師器	甕		10	29.0		ナデ	ナデ　ケズリ	良好	7.5YR8/3（浅黄橙）～5YR5/2（褐灰）	
1127	03-5次Gg	土師器	甕		20	24.0		ナデ	ナデ　ケズリ	普通	5YR7/4（にぶい橙）～2/2（黒褐）	
1128	03-5次Fh	土師器	甕		20	24.0		ナデ	ナデ　ケズリ	良好	5YR4/1（褐灰）～2/1（黒褐）	
1129	03-6次Fi.Ee	土師器	甕		20	23.0		ナデ	ナデ　ケズリ	普通	10YR8/3（浅黄橙）～6/2（灰黄褐）	
1130	03-5次Ef	土師器	甕		20	25.4		ナデ	ナデ　ケズリ	良好	10YR8/3（浅黄橙）～4/2（灰黄褐）	
1131	03-5次Fh.6次Fh	土師器	甕		60	27.3		ナデ	ナデ　ケズリ	良好	7.5YR7/6（橙）～2/1（黒）	
1132	03-5次Gg	土師器	甕		20	28.0		ナデ	ナデ　ケズリ	普通	10YR8/4（浅黄橙）	
1133	03-4次Eh.Fh	土師器	甕		20	26.0		ナデ	ナデ　ケズリ	やや不良	5YR5/6(明赤褐)～7.5YR6/2(灰褐)～5YR1.7/1(黒)	
1134	03-6次Gh	土師器	甕		40	27.0		ナデ	ナデ　ケズリ	良好	5YR5/2（灰褐）～7.5YR4/1（褐灰）	
1135	03-5次Fh.6次Fh	土師器	甕		50	28.8		ナデ	ナデ　ケズリ	良好	7.5YR6/4（にぶい橙）～4/2（灰褐）	
1136	03-5次Ej.Fj	土師器	甕		50	22.2		ナデ	ナデ　ケズリ	良好	7.5YR4/2（灰褐）～5YR1.7/1（黒）	
1137	03-7次Hg.Hf	土師器	甕		30	25.0		ナデ	ナデ　ケズリ	良好	10YR8/2（灰白）～7.5YR3/1（黒褐）	
1138	03-2次Ef.3次Ef	土師器	甕		50	22.0		ナデ	ナデ　ケズリ	良好	2.5Y8/3（淡黄）～5/1（黄灰）	
1139	03-7次Hf	土師器	甕		30	23.0		ナデ	ナデ　ケズリ	良好	5YR5/4（にぶい赤褐）～2/1（黒褐）	

図No	出土地点	種類	器種	形状	残存率(%)	口径(cm)	器高(cm)	調整 外面	調整 内面	焼成	色調 内面	備考
1140	02-4次Bd	土師器	甕		70	22.6		ナデ	ナデ ケズリ	普通	7.5YR8/4(浅黄橙)～2.5YR7/6(橙)～5YR2/1(黒褐)	
1141	03-5次Eg.6次Eg	土師器	甕		60	24.6		ナデ	ナデ ケズリ	良好	7.5YR7/3(にぶい橙)～10YR8/3(浅黄橙)～10YR3/1(黒褐)	
1142	03-7次Hh	土師器	甕		10	22.8		ナデ	ナデ ケズリ	良好	7.5YR3/1 (黒褐) ～10YR3/1 (黒褐)	
1143	03-6次Ff.Gf	土師器	甕		30	28.4		ナデ	ナデ ケズリ	良好	7.5YR6/4 (にぶい橙) ～2/1 (黒)	
1144	03-6次Gh	土師器	甕		30	26.5		ナデ	ナデ ケズリ	良好	7.5YR7/3 (にぶい橙) ～6/2(灰褐) ～5/1(褐灰)	
1145	03-7次He	土師器	甕		40	26.0		ナデ	ナデ ケズリ	良好	7.5YR6/3(にぶい褐)～5/3(にぶい褐)～2/2 (黒褐)	
1146	03-6次Hh	土師器	甕		10	27.0		ナデ	ナデ ケズリ	良好	5YR6/4 (にぶい橙) ～10YR2/1 (黒)	
1147	02-6～7次Ee～Ef	土師器	甕		10	24.0		ナデ	ナデ ケズリ	良好	7.5YR4/1 (褐灰) ～5YR2/1 (黒褐)	
1148	03-4次Eh	土師器	甕		20	24.0		ナデ	ナデ ケズリ	良好	5YR7/8 (橙) ～5/4 (にぶい赤褐)	
1149	03-6次Ee	土師器	甕		70	25.0		ナデ	ナデ ケズリ	良好	5YR6/6 (橙) ～5/3 (にぶい赤褐)	
1150	03-4次Fg	土師器	甕		20	28.6		ナデ	ナデ ケズリ	良好	5YR6/6 (橙) ～4/2 (灰褐)	
1151	03-7次Fh	土師器	甕		20	29.6		ナデ	ナデ ケズリ	良好	7.5YR5/2 (灰褐) ～4/1 (褐灰)	
1152	03-7次Fh	土師器	甕		20	29.4		ナデ	ナデ ケズリ	良好	10YR7/2 (にぶい黄橙) ～4/1 (褐灰)	
1153	03-6次Eg	土師器	甕		40	22.0		ナデ	ナデ ケズリ	良好	10YR8/4(浅黄橙)～7.5YR8/3(浅黄橙)～7.5YR3/1(黒褐)	
1154	03-7次Ff	土師器	甕		30	27.0		ナデ	ナデ ケズリ	良好	7.5YR7/3 (にぶい橙)～7/4 (にぶい橙)～2/1 (黒)	
1155	03-7次Gh	土師器	甕		70	26.0		ナデ	ナデ ケズリ	良好	7.5YR6/3 (にぶい褐)～5/2 (灰褐)～3/1 (黒褐)	
1156	02-7次De	土師器	甕		10	25.0		ナデ	ナデ ケズリ	普通	5YR6/6 (橙) ～10YR4/2 (灰黄褐)	
1157	03-4次Fh	土師器	甕		10	22.0		ナデ	ナデ ケズリ	普通	10YR7/3 (にぶい黄橙) ～8/3 (浅黄橙)	
1158	03-4次Ef	土師器	甕		10	25.0		ナデ	ナデ ケズリ	普通	10YR8/3 (浅黄橙) ～4/1 (褐灰)	
1159	03-6次Gi	土師器	甕		20	27.4		ナデ	ナデ ケズリ	良好	5YR6/6(橙)～2.5YR6/4(にぶい橙)～7.5YR3/1(黒褐)	
1160	03-6次Hf	土師器	甕		20	26.4		ナデ	ナデ ケズリ	良好	7.5YR8/4(浅黄橙)～8/3(浅黄橙)～5YR6/4(にぶい橙)	
1161	03-5次Gi.Gh	土師器	甕		20	23.0		ナデ	ナデ ケズリ	良好	7.5YR7/4(にぶい橙)～7/3(にぶい橙)～3/1(黒褐)	
1162	03-5次Fg	土師器	甕		10	25.0		ナデ	ナデ ケズリ	良好	2.5YR4/6(赤褐)～5YR6/6(橙)～7.5YR8/3(浅黄橙)	
1163	03-7次He.Hf	土師器	甕		20	26.0		ナデ	ナデ ケズリ	良好	7.5YR7/3(にぶい橙)～6/3(にぶい褐)～1.7/1 (黒)	
1164	03-7次Hf	土師器	甕		20	25.0		ナデ	ナデ ケズリ	良好	7.5YR4/1 (褐灰) ～10YR2/1 (黒)	
1165	03-5次Ef.7次Ff	土師器	甕		20	21.4		ナデ	ナデ ケズリ	普通	10YR7/2(にぶい黄橙)～7.5YR4/1(褐灰)～1.7/1(黒)	
1166	03-6次Gf.7次Ge	土師器	甕		10	22.0		ナデ	ナデ ケズリ	良好	7.5YR7/3(にぶい橙)～6/3(にぶい褐)～4/2 (灰褐)	
1167	03-5次Fh	土師器	甕		10	29.0		ナデ	ナデ ケズリ	普通	7.5YR7/3 (にぶい橙) ～5/2 (灰褐)	
1168	03-5次Fh	土師器	甕		10	27.0		ナデ	ナデ ケズリ	普通	7.5YR5/2 (灰褐)～7/4 (にぶい橙)～3/1 (黒褐)	
1169	03-7次Hg	土師器	甕		10	27.0		ナデ	ナデ ケズリ	普通	7.5YR7/6 (橙) ～5/3 (にぶい褐) ～2/2 (黒褐)	
1170	03-7次Hf	土師器	甕		10	27.0		ナデ	ナデ ケズリ	良好	7.5YR6/4(にぶい橙)～7/3(にぶい橙)～5YR2/1(黒褐)	
1171	03-7次Ge.Fg.Hd.Ge	土師器	甕		40	23.2		ナデ	ナデ ケズリ	普通	10YR2/2(黒褐)～7.5YR6/6(橙)～10YR3/3(暗褐)	
1172	02-5次Be	土師器	甕		40	23.4		ナデ	ナデ ケズリ	良好	7.5YR7/4(にぶい橙)～6/3(にぶい褐)～10YR3/1(黒褐)	
1173	03-6次Gi	土師器	甕		20	26.5		ナデ	ナデ ケズリ	普通	5YR6/6 (橙) ～6/4 (にぶい橙) ～3/1 (黒褐)	
1174	02-2次Ce	土師器	甕		40	21.0		ナデ	ナデ ケズリ	やや不良	7.5YR7/4(にぶい橙)～5YR7/4(にぶい橙)～5YR2/2(黒褐)	
1175	03-6次Gg	土師器	甕		10	27.0		ナデ	ナデ ケズリ	良好	5YR6/6(橙)～7.5YR6/4(にぶい橙)～1.7/2(黒褐)	
1176	03-7次Gg	土師器	甕		20	27.6		ナデ	ナデ ケズリ	良好	7.5YR7/4 (にぶい橙) ～5YR5/2 (灰褐)	
1177	02-1次Cd	土師器	甕		30	26.0		ナデ	ナデ ケズリ	良好	7.5YR7/4(にぶい橙)～5/3(にぶい褐)～6/3(にぶい褐)	
1178	03-7次Ig	土師器	甕		70	24.0		ナデ	ナデ ケズリ	良好	10YR4/2 (灰黄褐) ～6/2 (灰黄褐) ～2/1 (黒)	
1179	02-6～7次Ee～Ef	土師器	甕		70	26.6		ナデ	ナデ ケズリ	普通	5YR4/3 (にぶい赤褐)～5/2 (灰褐)～2/1 (黒褐)	
1180	03-7次Gg	土師器	甕		30	25.4		ナデ	ナデ ケズリ	普通	7.5YR8/3 (浅黄橙) ～7/6 (橙)	
1181	03-5次Fg	土師器	甕		30	24.8		ナデ	ナデ ケズリ	普通	7.5YR8/3 (浅黄橙) ～7/3 (にぶい橙)	甑？
1182	02-4次Ce	土師器	甕		30	24.5		ナデ ハケメ	ナデ ケズリ	普通	10YR8/3 (浅黄橙) ～5YR3/1 (黒褐)	
1183	02-6次Df.De	土師器	甕		40	25.0		ナデ ハケメ	ナデ ハケメ ケズリ	普通	7.5YR7/6 (橙) ～4/3 (褐) ～2/2 (黒褐)	
1184	02-6～7次Ee～Ef	土師器	甕		20	27.2		ナデ ハケメ	ナデ ハケメ ケズリ	やや不良	7.5YR7/4 (にぶい橙) ～5YR2/2 (黒褐)	
1185	03-7次Ge	土師器	甕		20	27.0		ナデ ハケメ	ナデ ケズリ	良好	7.5YR7/4 (にぶい橙) ～2/1 (黒)	
1186	02-6～7次Ee～Ef	土師器	甕		60	25.0		ナデ ハケメ	ナデ ケズリ	良好	7.5YR7/6 (橙) ～4/3 (褐)	
1187	02-7次Ef	土師器	甕		30	22.0		ナデ ハケメ	ナデ ハケメ ケズリ	良好	7.5YR6/6 (橙) ～2/2 (黒褐)	
1188	02-7次Df	土師器	甕		20	24.0		ナデ ハケメ	ナデ ハケメ ケズリ	普通	5YR7/6 (橙) ～3/1 (黒褐)	
1189	03-6次Gg.7次Gg	土師器	甕		50	26.0		ナデ ハケメ	ナデ ケズリ	良好	10YR7/2 (にぶい黄橙) ～3/1 (黒褐)	
1190	03-7次Ge	土師器	甕		10	24.6		ナデ ハケメ	ナデ ハケメ ケズリ	良好	7.5YR2/1 (黒) ～10YR4/1 (褐灰)	
1191	03-2次Dd.Df	土師器	甕		20	26.4		ナデ ハケメ	ナデ ハケメ ケズリ	普通	10YR8/2 (灰白) ～7/2 (にぶい黄橙)	
1192	03-5次Fi	土師器	甕		30	25.0		ナデ ハケメ	ナデ ケズリ	良好	10YR8/2 (灰白) ～7.5YR6/2 (灰褐)	
1193	02-7次Df.8次Df	土師器	甕		70	27.0		ナデ ハケメ	ナデ ハケメ ケズリ	普通	5YR7/4 (橙)～7.5YR2/1 (黒)～5YR7/3 (にぶい橙)	
1194	03-5次Fi	土師器	甕		10	27.8		ナデ ハケメ	ナデ ハケメ ケズリ	良好	5YR7/3 (にぶい橙) ～4/1 (褐灰)	

図No	出土地点	種類	器種	形状	残存率(%)	口径(cm)	器高(cm)	調整 外面	調整 内面	焼成	色調 内面	備考
1195	03-7次Gg	土師器	甕		50	25.6		ナデ ハケメ	ナデ ケズリ	良好	7.5YR7/2 (明褐灰) ～5/1 (褐灰)	
1196	03-5次Ef.6次Ef	土師器	甕		60	27.0		ナデ ハケメ	ナデ ハケメ ケズリ	良好	7.5YR7/4 (にぶい橙) ～10YR3/1 (黒褐)	
1197	03-6次Eg	土師器	甕		10	26.4		ナデ ハケメ	ナデ ケズリ	良好	7.5YR7/3 (にぶい橙) ～2/2 (黒褐)	
1198	03-4次Ff	土師器	甕		20	23.0		ナデ ハケメ	ナデ ケズリ	良好	7.5YR7/3 (にぶい橙) ～10YR8/3 (浅黄橙)	
1199	03-4次Ff.5次Gf	土師器	甕		20	29.0		ナデ ハケメ	ナデ ハケメ ケズリ	良好	7.5YR6/3 (にぶい褐) ～6/4 (にぶい橙)	
1200	03-5次Ff	土師器	甕		20	27.0		ナデ ハケメ	ナデ ハケメ ケズリ	良好	7.5YR8/3(浅黄橙)～2.5YR7/6(橙)～2.5YR4/2(灰赤)	
1201	03-5次Ef	土師器	甕		20	29.0		ナデ ハケメ	ナデ ケズリ	良好	7.5YR7/4(にぶい橙)～4/2(灰褐)～10YR8/2(灰白)	
1202	03-6次Ge	土師器	甕		30	28.4		ナデ ハケメ	ナデ ハケメ ケズリ	良好	10YR7/4 (にぶい黄橙) ～7.5YR4/1 (褐灰)	
1203	03-6次Hf.7次Hf	土師器	甕		10	25.0		ナデ ハケメ	ナデ ケズリ	良好	5YR7/4 (にぶい橙) ～5/2 (灰褐)	
1204	03-5次Eh.7次Fh	土師器	甕		50	28.0		ナデ ハケメ	ナデ ハケメ ケズリ	良好	7.5YR8/2 (灰白) ～2/1 (黒)	
1205	02-8次Ef	土師器	甕		40	28.0		ナデ ハケメ	ナデ ケズリ	普通	5YR7/8 (橙) ～3/2 (暗赤褐)	
1206	03-5次Fh.Fi	土師器	甕		60	21.4		ナデ ハケメ	ナデ ケズリ	良好	5YR5/3 (にぶい赤褐)～4/1 (褐灰)～3/1 (黒褐)	
1207	03-4次De.6次De	土師器	甕		50	22.7		ナデ ハケメ	ナデ ハケメ ケズリ	良好	10YR8/2 (灰白) ～1.7/1 (黒)	
1208	03-4次Eg.Fg	土師器	甕		30	29.0		ナデ ハケメ	ナデ ハケメ ケズリ	普通	7.5YR8/4 (浅黄橙) ～7/3 (にぶい橙)	
1209	03-5次Gd～Hd. 6次Gd.7次He	土師器	甕		70	26.0		ナデ ハケメ	ナデ ハケメ ケズリ	良好	5YR7/4 (にぶい橙) ～4/1 (褐灰)	
1210	03-8次Df	土師器	甕		70	23.0		ナデ ハケメ	ナデ ハケメ ケズリ	良好	7.5YR7/4(にぶい橙)～3/1(黒褐)～5YR7/4(にぶい橙)	
1211	03-6次Gg.7次Gg	土師器	甕		60	27.4		ナデ ハケメ	ナデ ハケメ ケズリ	普通	7.5YR8/2(灰白)～3/1 (黒褐)～5YR7/3(にぶい橙)	
1212	03-7次He.Hf	土師器	甕		60	25.6		ナデ ハケメ	ナデ ケズリ	良好	10YR8/2(灰白)～7.5YR7/2(明褐灰)～5/2(灰褐)	
1213	03-5次Fi	土師器	甕		10	29.0		ナデ ハケメ	ナデ ケズリ	良好	7.5YR7/3(にぶい橙)～8/2(灰白)～2.5YR4/1(赤灰)	
1214	03-7次Ee.Hd	土師器	甕		60	27.0		ナデ ハケメ	ナデ ハケメ ケズリ	普通	7.5YR7/2(明褐灰)～5/3(にぶい褐)～5YR2/1(黒褐)	
1215	03-4次Ff	土師器	甕		20	29.4		ナデ ハケメ	ハケメ ケズリ	良好	5YR6/6 (橙) ～3/1 (黒褐)	
1216	02-6次Dg	土師器	甕		10	24.0		ナデ ハケメ	ナデ ケズリ	やや不良	7.5YR7/4 (にぶい橙) ～4/2 (灰褐)	
1217	03-7次Ef	土師器	甕		10	28.0		ナデ ハケメ	ナデ ケズリ	良好	7.5YR5/2 (灰褐) ～7/2 (明褐灰)	
1218	03-6次Hf.7次Ff	土師器	甕		20	26.0		ナデ ハケメ	ナデ ハケメ ケズリ	普通	7.5YR2/1 (黒) ～6/3 (にぶい褐)	
1219	03-7次Fc	土師器	甕		10	26.0		ナデ ハケメ	ナデ ハケメ ケズリ	普通	7.5YR6/3 (にぶい褐)～7/3 (にぶい橙)～2/1 (黒)	
1220	03-5次Eh.7次Fh	土師器	甕		40	26.0		ナデ ハケメ	ナデ ハケメ ケズリ	普通	7.5YR6/3 (にぶい褐)～7/2 (明褐灰)～2/1 (黒)	
1221	02-2次Cd	土師器	甕		20	24.0		ナデ ハケメ	ナデ ハケメ ケズリ	良好	5YR5/4(にぶい赤褐)～5/(にぶい赤褐)～3/2(暗赤褐)	
1222	02-6～7次Ee～Ef. 7次De	土師器	甕		50	29.6		ナデ ハケメ	ナデ ケズリ	やや不良	5YR7/6 (橙) ～2/2 (黒褐)	
1223	02-2次Ce	土師器	甕		40	27.0		ナデ ハケメ	ナデ ハケメ ケズリ	普通	10YR2/1 (黒) ～5YR4/3 (にぶい赤褐)	
1224	03-5次Fh	土師器	甕		20	24.0		ナデ ハケメ	ハケメ ケズリ	普通	7.5YR3/1 (黒褐) ～5/1 (褐灰)	
1225	03-4次Fh.5次Fh	土師器	甕		30	23.0		ナデ ハケメ	ナデ ケズリ	良好	7.5YR8/6 (浅黄橙) ～7/4 (にぶい橙)	
1226	03-7次Gf.Hf	土師器	甕		30	20.8		ナデ ハケメ	ナデ ハケメ ケズリ	良好	5YR6/4 (にぶい橙) ～2/1 (黒褐)	
1227	03-4次Dh	土師器	甕		40	19.0		ナデ	ナデ ケズリ	良好	7.5YR6/3 (にぶい褐) ～3/1 (黒褐)	
1228	03-7次Gf	土師器	甕		10	19.0		ナデ	ナデ ケズリ	普通	7.5YR3/1 (黒褐) ～7/3 (にぶい橙)	
1229	02-5次De	土師器	甕		20	20.0		ナデ	ナデ ケズリ	普通	7.5YR5/3 (にぶい褐) ～3/1 (黒褐)	甑？
1230	03-6次Hh	土師器	甕		30	19.8		ナデ	ナデ ケズリ	良好	5YR7/4 (にぶい橙) ～2/1 (黒褐)	
1231	03-2次Eg	土師器	甕		10	20.0		ナデ ハケメ	ナデ ハケメ ケズリ	普通	10YR8/4 (浅黄橙) ～7.5YR7/3 (にぶい橙)	
1232	03-2次Ee.Eg	土師器	甕		30	19.4		ナデ ハケメ	ナデ ケズリ	良好	7:5YR7/4 (にぶい橙)～4/1 (褐灰)～3/1 (黒褐)	
1233	03-5次Ei	土師器	甕		60	19.0		ナデ ハケメ	ナデ ケズリ	普通	7.5YR4/1 (褐灰) ～3/1 (黒褐) ～7/2 (明褐灰)	
1234	03-7次Ge	土師器	甕		20	20.0		ナデ ハケメ	ナデ ハケメ ケズリ	普通	7.5YR7/3 (にぶい橙) ～3/1 (黒褐)	
1235	02-8次De	土師器	甕		20	20.0		ナデ ハケメ	ナデ ケズリ	普通	7.5YR7/4(にぶい橙)～3/1(黒褐)～5YR3/3(暗赤褐)	
1236	03-2次Ef	土師器	甕		10	18.0		ナデ ハケメ	ナデ ケズリ	普通	5YR8/4 (淡橙) ～8/3 (淡橙)	

表３　円満寺遺跡出土甑観察表

図No	出土地点	種類	器種	残存率(%)	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	調整	胎土	焼成	色調	備考
501	03-6次Ge.Gh	土師器	甑	80	23.0	30.0	18.0	ナデ ケズリ	粗砂含む	良好	10YR6/2 (灰黄褐) ～3/1 (黒褐)	底径は基底部径　黝斑あり
502	03-6次Fe.Ef. 7次Ff	土師器	甑	70	26.0	25.4	17.6	ナデ ケズリ ハケメ	粗砂含む	良好	7.5YR6/6 (橙) ～7/4 (にぶい橙)	底径は基底部径
503	02-7次Ef.8次Df	土師器	甑	90	23.9	32.0	17.3	ナデ ケズリ	細砂含む	良好	10YR7/4 (にぶい黄橙) ～3/1 (黒褐)	底径は基底部径　黝斑あり
504	02-6次De.Df. 03-7次Ef.Ff	土師器	甑	60	25.0	32.6	16.0	ナデ ケズリ ハケメ	粗砂含む	良好	7.5YR6/4 (にぶい橙)～7/4 (にぶい橙)	底径は基底部径
505	02-2次Ce	土師器	甑	30	25.8	25.6	16.0	ナデ ケズリ ハケメ	微砂含む	良好	10YR6/3 (にぶい黄橙)	底径は基底部径
506	03-4次Ef.6次Ef	土師器	甑	30			20.0	ナデ ケズリ	粗砂含む	良好	10YR6/2 (灰黄褐) ～3/1 (黒褐)	底径は基底部径
507	03-7次Fh	土師器	甑	90	25.5	32.0	17.7	ナデ ケズリ	粗砂含む	良好	10YR6/3 (にぶい黄橙) ～3/1 (黒褐)	底径は基底部径　黝斑あり
508	03-6次Fg.7次Gg	土師器	甑	70	22.6	25.0	11.0	ナデ ケズリ	粗砂含む	良好	7.5YR6/4(にぶい橙)～2.5YR6/2(灰褐)	底径は基底部径　黝斑あり

図No	出土地点	種類	器種	残存率(%)	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	調整	胎土	焼成	色調	備考
509	03-7次Ff.Ge	土師器	甑	70	28.4	27.4	13.6	ナデ ケズリ ハケメ	粗砂含む	良好	10YR6/3 (にぶい黄橙)	底径は基底部径
510	03-2次De	土師器	甑	40	24.0	23.5	15.5	ナデ ケズリ	微砂含む	良好	10YR6/3 (にぶい黄橙) ～3/1 (黒褐)	底径は基底部径 黝斑あり
511	02-1次Be	土師器	甑	60	25.7	24.5	13.5	ナデ ケズリ ハケメ	粗砂含む	良好	10YR7/3 (にぶい黄橙) ～3/1 (黒褐)	底径は基底部径
512	02-4次Ce	土師器	甑	70	26.0			ナデ ケズリ ハケメ	細砂含む	良好	10YR6/4 (にぶい黄橙) ～1/2 (黒褐)	黝斑あり
513	03-5次Ef	土師器	甑	30	24.2			ナデ ケズリ	粗砂含む	良好	10YR6/2 (灰黄褐) ～2/1 (黒)	黝斑あり
514	02-6次De.Df	土師器	甑	20			17.8	ナデ ケズリ	粗砂含む	良好	7.5YR5/4 (にぶい褐)	底径は基底部径
515	03-0次	土師器	把手					ナデ	細砂含む	良好	10YR7/3(にぶい黄橙)～6/3(にぶい黄橙)	
516	03-7次Fe	土師器	把手					ナデ	微砂含む	良好	2.5YR6/2 (灰黄) ～4/1 (黄灰)	
517	03-7次Hi	土師器	把手					ナデ ハケメ	微砂含む	良好	10YR6/3 (にぶい黄橙) ～3/1 (黒褐)	
518	03-5次Gd～Hd	土師器	把手					ナデ	細砂含む	良好	素10YR7/3(にぶい黄橙) 塗2.5YR6/6(橙)	赤塗り
519	03-6次Fi	土師器	把手					ナデ ケズリ ハケメ	微砂含む	良好	10YR6/2(灰黄褐)～7.5YR6/4(にぶい橙)	
520	02-中段6TNo7	土師器	把手					ナデ	微砂含む	良好	7.5YR7/4 (にぶい橙) ～7/6 (橙)	
521	03-6次Eg	土師器	把手					ケズリ後ナデ	微砂含む	良好	10YR7/3 (にぶい黄橙) ～3/1 (黒褐)	黝斑あり
522	03-7次Gf	土師器	把手					ハケメ ケズリ	粗砂含む	良好	10YR7/3 (にぶい黄橙)～5/2 (灰黄褐)	黝斑あり
523	03-6次Fh	土師器	把手					ナデ	粗砂含む	良好	10YR5/1 (褐灰) ～3/1 (黒褐)	
524	03-7次Ge	土師器	把手					ハケメ ケズリ	微砂含む	良好	7.5YR6/4 (にぶい橙) ～5/2 (灰褐)	
525	03-6次Fh	土師器	把手					ナデ	微砂含む	良好	10YR7/4 (にぶい黄橙)	
526	02-2次Ce	土師器	把手					ナデ	細砂含む	良好	10YR3/1 (黒褐)	黝斑あり
527	02-1次Ce	土師器	把手					ナデ	細砂含む	良好	7.5YR7/6 (橙)	
528	03-6次Fe	土師器	把手					ナデ	粗砂含む	良好	素10YR7/3(にぶい黄橙) 塗7.5YR6/6(橙)	赤塗り
529	03-2次Dg	土師器	把手					ナデ	細砂含む	普通	10YR7/4 (にぶい黄橙)	

表４　円満寺遺跡出土土製支脚観察表

図No	出土地点	窯耐形状	残存率(%)	高さ(cm)	底部形状	調整	胎土	色調	備考
601	03-4次Ee	ＩＣ	ほぼ完形	16.3	平底	ケズリ ナデ	微砂含む	2.5Y6/3(にぶい黄)～6/4(にぶい黄)	底部に製作時に下敷きにしていた繊維痕あり
602	03-7次He	ＩＣ	ほぼ完形	15.0	平底	ナデ	細砂含む	10YR6/3(にぶい黄橙)～7.5YR6/6(橙)	
603	03-7次Hd	ＩＣ	ほぼ完形	16.0	上げ底	ナデ	細砂含む	10YR7/2(にぶい黄橙)～5/2 (灰黄褐)	
604	03-5次Fj	ＩＣ	ほぼ完形	19.1	上げ底	ケズリ ナデ	微砂含む	10YR6/3(にぶい黄橙)～7/3 (にぶい黄橙)	
605	03-7次Ge	ＩＣ	90	18.3	平底	ナデ	微砂含む	10YR7/3(にぶい黄橙)～3/1(黒褐)	
606	02-2次Ce	ＩＣ	ほぼ完形	15.8	平底	ナデ	細砂含む	7.5YR6/8(橙)～3/3(暗褐)	
607	03-5次Fh	ＩＣ	80	18.3	上げ底	ナデ	粗砂含む	10YR6/4(にぶい黄橙)～6/2 (灰黄褐)	
608	02-7次Df	ＩＣ	60	15.5		ナデ	粗砂含む	5YR5/6(明赤褐)～4/3(にぶい赤褐)	
609	02-7次Ff	ＩＣ	90	16.2	平底	ナデ	微砂含む	10YR6/4(にぶい黄橙)～4/1(褐灰)	
610	02-6次De	ＩＣ	70	15.7	平底	ナデ	粗砂含む	10YR7/4(にぶい黄橙)～3/1(黒褐)	
611	03-6次Ge	ＩＣ	60	15.6		ナデ	粗砂含む	10YR6/3(にぶい黄橙)	
612	03-7次Hd	ＩＣ	50	15.8	平底	ナデ	微砂含む	5YR6/6(橙)～3/1(黒褐)	
613	03-1次Eh	ＩＣ	60	14.9		ナデ	粗砂含む	10YR7/6(明黄褐)～6/6(橙)	
614	02-7次Ef	ＩＣ	90	15.8	平底	ナデ	細砂含む	10YR7/4(にぶい黄橙)～5/2(灰黄褐)	
615	02-7～8次De	ＩＣ	ほぼ完形	16.3	平底	ナデ	粗砂含む	7.5YR6/8(橙)～5YR3/3(暗赤褐)	
616	03-7次Ig	Ｉ？	80	18.2	上げ底	ナデ	微砂含む	10YR7/2(にぶい黄橙)～2.5YR5/6(明赤褐)	
617	02-6次De	Ｉ？	70	17.2	平底	ナデ	微砂含む	10YR6/6(明黄褐) ～5/3(にぶい黄褐)	
618	03-3次Ef	Ｉ？	10			ナデ	砂粒をほとんど含まない	10YR6/3(にぶい黄橙)	
619	03-4次Ff	ⅡＢ	90	16.9	平底	ナデ	微砂含む	5YR6/6(橙)～2.5Y5/2(暗灰黄)	底部に製作時に下敷きにしていた繊維痕あり
620	03-4次Ff	ⅣＡ	ほぼ完形	15.3	上げ底	ナデ	微砂含む	10YR6/4(にぶい黄橙)	
621	02-3次Cd	ⅣＡ	80	15.5	平底	ナデ	微砂含む	10YR6/4(にぶい黄橙)～10YR4/1(褐灰)	
622	02-8次Df	ⅣＡ	80	14.0	平底	ナデ	粗砂含む	10YR6/6(明黄褐)～7.5YR5/6(明褐)	２３とセットか
623	02-8次Df	ⅣＡ	80	12.9	平底	風化の為不明	粗砂含む	7.5YR6/6(橙)～5/3(にぶい褐)	２２とセットか
624	02-6次De	ⅣＡ	ほぼ完形	15.9	平底	風化の為不明	細砂含む	7.5YR7/6(橙)～5/3(にぶい褐)	
625	02-6次Ce	ⅣＣ	ほぼ完形	14.6	上げ底	ケズリ ナデ	微砂含む	7.5YR5/2(灰褐)～7/6 (橙)	底面に条痕あり
626	03-7次Ge	ⅣＣ	ほぼ完形	14.9	平底	ナデ	細砂含む	10YR7/4(にぶい黄橙)～5/2(灰黄褐)	底面に条痕あり
627	02-5次De	ⅣＣ	ほぼ完形	15.8	平底	ナデ	微砂含む	10YR6/2(灰黄褐)～7/2(にぶい黄橙)	
628	02-7次Df	ⅣＣ	ほぼ完形	16.1	平底	ナデ	微砂含む	10YR5/3(にぶい黄褐)～7/4(にぶい黄橙)	
629	02-4次Ff	ⅣＣ	90	19.1	上げ底	ケズリ ナデ	微砂含む	10YR4/2(灰黄褐)～7.5YR7/4(にぶい橙)	孔は上げ底に貫通
630	02-7次Df	ⅣＣ	ほぼ完形	16.7	平底	ナデ	細砂含む	7.5YR7/4(にぶい橙)～7/6(橙)	底面に条痕あり

図No	出土地点	突起形状	残存率(%)	高さ(cm)	底部形状	調　整	胎　土	色　調	備　考
631	03-2次De	ⅣC	80			風化の為不明	微砂含む	5YR6/8(橙)～7.5YR7/4(にぶい橙)	
632	03-6次Fe	ⅣC	60	15.5	平底	ナデ	細砂含む	10YR7/2(にぶい黄橙)～4/1(褐灰)	
633	02-6次Cc.Dc	ⅣC	70	13.6	平底	風化の為不明	粗砂含む	5YR6/8(橙)～10YR7/6(明黄褐)	ずんぐりした頂部
634	02-6次De.Df	ⅣC	70	15.6	上げ底	ナデ	微砂含む	10YR6/3(にぶい黄橙)～8/4(浅黄橙)	
635	03-5次Fi	ⅣC	50	15.4	平底	ナデ	微砂含む	10YR6/3(にぶい黄橙)～5/2(灰黄褐)	高さは現存長
636	02-6次Cc.Dc	ⅣC	70	16.1	平底	ナデ	粗砂含む	7.5YR6/6(橙)～4/2(灰褐)	
637	03-3次Eg	ⅣC	70	18.2	上げ底	ナデ	粗砂含む	10YR4/2(灰黄褐)～5YR5/6(明赤褐)	
638	03-6次Ge	Ⅳ?	70	18.4	上げ底	ナデ	微砂含む	10YR6/4(にぶい黄橙)～7.5YR5/4(にぶい褐)	
639	03-7次Hf	Ⅳ?	70	18.1	上げ底	ナデ	細砂含む	10YR6/4(にぶい黄橙)～5/2(灰黄褐)	
640	03-4次Ge	Ⅳ?	70	18.5	上げ底	ナデ	細砂含む	10YR6/3(にぶい黄橙)	
641	03-2次Ef	Ⅳ?	70	16.1	上げ底	ナデ	微砂含む	10YR7/3(にぶい黄橙)～7.5YR5/4(にぶい褐)	
642	03-4次Ei	Ⅳ?	70	14.5	上げ底	ナデ	細砂含む	10YR7/3 (にぶい黄橙)～6/2(灰黄褐)	
643	03-3次Eg	Ⅳ?	80	18.2	上げ底	ナデ	粗砂含む	5YR5/6(明赤褐)～2.5Y5/2(暗灰黄)	
644	03-2次Ff	Ⅳ?	50	15.8		ナデ	粗砂含む	10YR6/4(にぶい黄橙)～5/3(にぶい黄褐)	
645	03-5次Fh	Ⅳ?	60	17.3	平底	ナデ	粗砂含む	2.5YR5/6(明赤褐)～10YR4/2(灰黄褐)	底部腹部端にV字の凹みあり
646	03-2次Ef.6次Fh	Ⅳ?	50	17.5	上げ底	ナデ	微砂含む	10YR7/4(にぶい黄橙)～6/3(にぶい黄橙)	
647	03-5次Ef	Ⅳ?	40	17	上げ底	ナデ	粗砂含む	5YR5/6(明赤褐)～2/1(黒褐)	
648	03-7次Hd	Ⅳ?	60	15.5	平底	ナデ	微砂含む	10YR7/3(にぶい黄橙)～4/1(褐灰)	
649	03-6次Gh	Ⅳ?	40	16.6	上げ底	ナデ	微砂含む	10YR6/3(にぶい黄橙)～5YR6/6(橙)	
650	02-5次Df	Ⅳ?	10			ナデ	微砂含む	5YR7/6(橙)～5/2(灰褐)	

☆Ⅰ類（突起が2方向に延びるもの）・ⅠA類（胴部穿孔なし）・ⅠB類（胴部貫通孔）・ⅠC類（胴部背面に非貫通孔）
☆Ⅱ類（突起が3方向　〃　）・ⅡA類（背面突起は前方より短い）・ⅡB類（背面突起は環状）・ⅡC類（背面突起はヒレ状）
☆Ⅲ類（Ⅰ・Ⅱの折衷型）・ⅢA類（貫通孔）・ⅢB（非貫通孔）・ⅢC（胴部は中空で上方から穿孔）
☆Ⅳ類（突起が1方向のもの）・ⅣA類（胴部穿孔なし）・ⅣB類（胴部貫通孔）・ⅣC類（胴部背面に非貫通孔）

表５　円満寺遺跡出土赤彩土器観察表

図No	出土地点	種　類	器種	残存率(%)	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	調　整	胎　土	焼　成	色　調	備　考
701	03-6次Gf	赤彩土器	皿	90	19.8	2.7		回転ナデ	密	普通	素7.5YR7/4（にぶい橙）　塗5YR6/6（橙）	
702	03-7次Gg	赤彩土器	皿	90	19.5	2.2		回転ナデ　ヘラナデ	密	普通	素2.5Y7/2（灰黄）　塗5YR5/6（明赤褐）	
703	03-4次Ei	赤彩土器	皿	50	19.6	2.9		ナデ　ケズリ	密	普通	素10YR7/4（にぶい黄橙）　塗5YR6/6（橙）	
704	03-2次Eg.Fg	赤彩土器	皿	10	18.0	(2.8)		回転ナデ　ケズリ	密	普通	素10YR7/3（にぶい黄橙）　塗5YR6/6（橙）	
705	03-5次Ge	赤彩土器	皿	30	17.0	2.5	10.5	回転ナデ　ケズリ	密	普通	素2.5Y7/1（灰白）　塗5YR6/6（橙）	6と同一か
706	03-3次Ef.Eg.4次Eg	赤彩土器	皿	10	17.0			回転ナデ	密	普通	素2.5Y7/1（灰白）　塗5YR6/6（橙）	5と同一か
707	03-7次Hf	赤彩土器	坏	90	14.5	4.4		回転ナデ　ケズリ	やや密	やや良好	素2.5Y7/3（浅黄）　塗5YR6/6（橙）	
708	03-6次Gh	赤彩土器	坏	90	14.7	3.9	9.3	回転ナデ	密	やや良好	素7.5YR7/4（にぶい橙）　塗5YR6/6（橙）	
709	03-7次Hf	赤彩土器	坏	70	16.2	4.2		回転ナデ　ケズリ	密	やや良好	素10YR8/2(灰白)　塗5YR6/6(橙)～4/1(褐灰)	
710	02-2次Ee.03-4次Ej	赤彩土器	坏	70	18.6	4.9		回転ナデ	やや密	やや良好	素10YR8/3(浅黄橙)　塗5YR6/4(にぶい橙)	
711	03-4次Ei	赤彩土器	坏	50	15.0	3.5		回転ナデ　回転ヘラケズリ	密	やや良好	素5YR8/2（灰白）　塗2.5YR5/6（明赤褐）	
712	03-4次Eg	赤彩土器	坏	50	14.4	3.4		回転ナデ　回転ヘラケズリ	密	やや不良	素10YR8/2(灰白)　塗5YR5/3(にぶい赤褐)	
713	03-6次Gh	赤彩土器	坏	40	16.4	(3.7)		回転ナデ	密	やや良好	素10YR8/2（灰白）　塗2.5YR6/6（橙）	
714	03-2次Eg	赤彩土器	坏	30	15.6	(3.7)		回転ナデ	密	良好	素10YR8/2(灰白)　塗2.5YR6/6(橙)	
715	03-4次Ej.5次Ej	赤彩土器	坏	50	15.0	3.8		回転ナデ　回転ヘラケズリ	やや密	やや良好	素2.5Y7/3(浅黄)　塗5YR6/6(橙)	
716	03-1次Eh.2次Eh	赤彩土器	坏	30	16.4	3.5		回転ナデ　回転ヘラケズリ	密	普通	素2.5Y8/3(浅黄)　塗5YR6/6(橙)	
717	03-4次Fh	赤彩土器	坏	20	13.6	3.7	9.0	回転ナデ　ケズリ	密	普通	素7.5YR7/6(橙)　塗2.5YR6/6(橙)	
718	Dh	赤彩土器	坏	40	13.4	3.3		回転ナデ　ケズリ後ナデ	やや密	普通	素2.5Y7/3(浅黄)　塗5YR5/6(明赤褐)	
719	03-2次Dh	赤彩土器	坏	20	16.0	4.2	11.2	回転ナデ	密	やや不良	素10YR8/3（浅黄橙）　塗7.5YR6/6（橙）	
720	03-5次Fg.Gg.6次Gg.Hh	赤彩土器	坏	20	18.4	3.3	13.0	回転ナデ　ケズリ後ナデ	やや密	普通	素7.5YR7/3（にぶい橙）　塗2.5YR6/6（橙）	
721	03-5次Eg	赤彩土器	坏	30	11.0	(3.8)		回転ナデ　ヘラ切り後ナデ	細砂含む	やや良好	素10YR8/3（浅黄橙）　塗5YR6/6（明赤褐）	
722	03-6次Gh	赤彩土器	坏	20	10.0	3.5	6.2	回転ナデ　回転ヘラケズリ	やや密	普通	素7.5YR7/3（にぶい橙）　塗2.5YR6/6（橙）	
723	03-P1.2次Ff.Fg.5次Gg	赤彩土器	坏	40	14.6	5.6	(10.0)	回転ナデ	密	普通	素10YR8/2（灰白）　塗2.5YR5/6（明赤褐）	
724	03-7次Gf.Gg.Hf	赤彩土器	坏	100	18.1	4.9	12.5	回転ナデ	やや密	やや良好	素10YR8/2（灰白）　塗2.5YR6/8（橙）	暗文あり
725	03-6次Fh.Fi	赤彩土器	坏	80	18.2	5.0	13.6	回転ナデ　ミガキ	密	やや良好	素2.5YR8/3（淡黄）　塗2.5YR6/6（橙）	暗文あり
726	03-6次Fi.Gf.7次Fg.Gg.Hg	赤彩土器	坏	70	16.8	4.3	11.6	回転ナデ　ミカキ	密	普通	素7.5YR7/2(暗褐灰)　塗2.5YR5/6(明赤褐)	暗文あり
727	03-6次Gf	赤彩土器	坏	40	13.0	4.0	12.4	ナデ	密	普通	素5Y8/2（灰白）　塗2.5YR6/8（橙）	暗文あり
728	03-4次Ei	赤彩土器	坏	20	16.4	4.3		ナデ　ミガキ	密	やや不良	素10YR8/3(浅黄橙)　塗2.5YR5/8(明赤褐)	暗文あり

表６　円満寺遺跡手捏ね土器観察表

図No	出土地点	種類	器種	残存率(%)	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	調整	胎土	焼成	色調	備考
729	03-7次Fe	手捏ね		100				ナデ　指頭圧痕	微砂含む	良好	10YR7/3（にぶい黄橙）～2/1（黒）	黝斑あり
730	03-1次Fg（P1）	手捏ね		90				ナデ　指頭圧痕	細砂含む	良好	10YR7/3（にぶい黄橙）	
731	03-1次Dg	手捏ね		100				ナデ　指頭圧痕	粗砂多し	良好	10YR7/2（にぶい黄橙）～6/2（灰黄褐）	
732	03-4次Eh	手捏ね		90				ナデ　指頭圧痕	粗砂多し	良好	10YR8/3（浅黄橙）～7/3（にぶい黄橙）	
733	03-4次Eh	手捏ね		60				ナデ　指頭圧痕	粗砂多し	良好	2.5YR7/3（浅黄）～5/1（黄灰）～3/1（黒褐）	黝斑あり
734	03-2次Ee	手捏ね		30				ナデ　指頭圧痕	粗砂多し	良好	5YR7/6（橙）～10YR8/6（黄橙）～4/1（褐灰）	
735	03-7次Hd	手捏ね		100				ナデ　指頭圧痕	粗砂多し	良好	10YR7/2（にぶい黄橙）～5/1（褐灰）	
736	03-2次De	手捏ね		20				ナデ　指頭圧痕	粗砂多し	良好	10YR4/1（褐灰）～2.5YR8/3（淡黄）	
737	02-5次De	手捏ね		20				ナデ　指頭圧痕	粗砂多し	良好	5YR6/8（橙）	
738	03-6次Fg	手捏ね		40				ナデ　指頭圧痕	粗砂多し	やや不良	5YR5/1（褐灰）	
739	03-6次Gg	手捏ね	坏	90				ナデ	細砂多し	良好	2.5YR5/6（明赤褐）～4/2（灰赤）	黝斑あり
740	不明	手捏ね	坏	90				ナデ	やや密	良好	10YR7/3（にぶい黄橙）～3/1（黒褐）～8/1（灰白）	黝斑あり
741	03-7次Ef.Gf	手捏ね	坏	70				ナデ　指頭圧痕	細砂多し	良好	10YR8/3（浅黄橙）～6/2（灰黄褐）	
742	02-4次Ce	手捏ね	皿	50				ナデ　指頭圧痕	微砂多し	やや不良	7.5YR5/4（にぶい褐）	
743	03-4次Fg	手捏ね						ケズリ後ナデ	細砂多し	良好	10YR7/2（にぶい黄橙）～4/2（褐灰）～7.5YR6/1（褐灰）	
744	02-1T.03-2次P1	手捏ね	高台坏	30				ナデ　指頭圧痕	やや密	やや良	7.5YR8/6（浅黄橙）～8/2（褐灰）～5YR5/1（褐灰）	
745	03-5次Fh	手捏ね	小壷	90				ナデ	微砂含む	良好	5YR7/6（橙）～10YR7/2（にぶい黄橙）～6/2（灰黄褐）	黝斑あり
746	03-5次Ei	手捏ね	小壷	90				ナデ	微砂含む	やや良	7.5YR7/4（にぶい橙）	
747	03-3次Ff.5次Fh	手捏ね	浅鉢	60				ナデ　指頭圧痕	微砂含む	良好	10YR7/3（にぶい黄橙）～4/1（褐灰）	
748	03-4次Ee	手捏ね	片口壷	100				ナデ　ケズリ	細砂含む	やや不良	10YR8/3（浅黄橙）～3/1（黒褐）	外面に煤付着
749	02-5次Ee	手捏ね	土馬					ナデ	微砂含む	普通	7.5YR5/2（灰褐）～3/1（黒褐）～10YR7/4（にぶい黄橙）	

表７　円満寺遺跡出土製塩土器等観察表

図No	出土地点	種類	器種	残存率(%)	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	調整	胎土	焼成	色調	備考
750	03-6次Gh	土師器	製塩土器	小片				外－ナデ　内－布目	粗砂含む	やや不良	7.5YR7/4（にぶい橙）	布目あり
751	03-7次Ff	土師器	製塩土器	小片				外－ナデ　内－布目	微砂含む	良好	7.5YR6/3（にぶい褐）	布目あり
752	03-2次Fe	土師器	製塩土器	小片				外－ナデ　内－布目	微砂含む	やや不良	10YR7/3（にぶい黄橙）	布目あり
753	03-5次Fj	土師器	製塩土器	小片				外－ナデ　内－布目	細砂含む	良好	5YR7/4（にぶい橙）	布目あり
754	03-6次Hf	土師器	製塩土器	小片				外－ナデ　内－布目	粗砂含む	良好	7.5YR6/4（にぶい橙）	布目あり
755	03-6次Gf	土師器	製塩土器	小片				外－ナデ　内－布目	粗砂含む	やや不良	10YR8/3（浅黄橙）～7/3（にぶい黄橙）	布目あり
756	03-排土中	土師器	製塩土器	小片				外－ナデ　内－布目	微砂含む	やや良好	7.5YR6/4（にぶい橙）	布目あり
757	03-5次Ff	土師器	製塩土器	小片				外－ナデ　内－布目	微砂含む	やや良好	2.5Y7/2（灰黄）～6/2（灰黄）	布目あり
758	03-6次He	土師器	製塩土器	小片				外－ナデ　内－ナデ	細砂含む	やや良好	5YR6/6（橙）～4/4（にぶい赤褐）	
759	03-1次Gg	土師器	脚端	小片				内・外-回転ナデ	微砂含む	良好	外－10YR6/3（にぶい黄橙） 内－10YR5/2（灰黄褐）	
760	03-5次Gh	土師器	香炉	小片				内・外－ナデ	微砂含む	良好	10YR7/3（にぶい黄橙）	中世所産か

7．混入した製鉄関係遺物の検討

土器溜り部分に夥しい土器片に混じって鉄滓と吹子の羽口片が採取された。

鉄滓は錆土塊状で原形不明のものが多かった。そのうちから直径10cm余の小さな椀形のものを分析試料に供した。

羽口片は２個体分の破片を採取し、そのうち長さ10cm余の円筒形（半分に割れている）で先端の熔損状況のよく分かる個体の縦断1/4を分析に供した。またこの個体の内孔面には竹の節の圧痕が認められ、これについては別途の検討を行った。(図52)

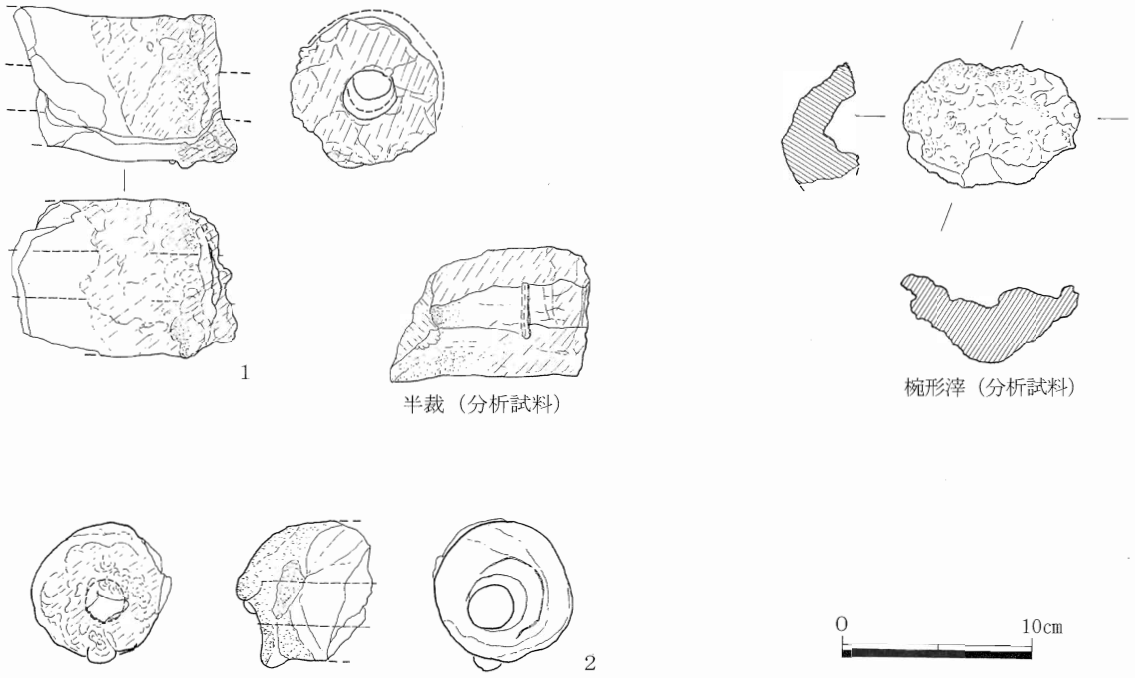


図52　鉄関連遺物

１）鉄滓について

小型の椀形滓について分析の結果から全鉄分、造滓成分、及び酸化チタンの含量と顕鏡組織にみられるウスタイトやファイヤライトの形状から砂鉄系精錬鍛冶滓と判定された（付編Ⅱ参照)。これによって当該遺跡の直近において同時代に砂鉄を原料とした製鉄が行われていたことが分る。

２）羽口について

分析結果から同時に分析した律令期の土師器の胎土とほぼ同様の一般的な粘土を用いたもので、その耐火度は低いと判定された。この羽口には併せて指摘されたように内孔面に竹の節の圧痕があり、竹の中子のまま焼き抜きしたと考えるのが妥当。しかし成分分析から焼成、非焼成の判断は困難である、とされた。

この羽口について、窪田蔵郎氏に指導を願っていたところ来県の機会があり、持参して実見の上で検討頂いた。以下、その所見を私信から抜書きする。

「内側に竹の痕のある羽口は初見でした。竹を割って髄抜(ずぬき)とし、これを芯にして粘土で成形した後、乾燥させてから内側からバラバラにして引抜けば出来ないことはありませんが、内壁面に割れ目傷、または引き傷が残ります。竹をそのまま入れたとすれば、円錐形に近いテーパーを持ったものでない限り、製作は不可能であって、円筒形で芯に竹を入れた場合は節部が引っ掛かって抜けません。そのまま焼成したらそこに焼成痕が残るはずです。職人の技能とは申せ、不思議な遺物です。」或はまた別信で「竹の先端に粘土で羽口先端を造り付け、天日干しにして使用したものではないか。突込みは３寸程度で火床の熱影響で幾分焼成もされるでしょう。これ以外には一寸考えられません。」と。

この竹芯痕の残る羽口の、特に製作方法については以上のように、村川義行氏（和鋼博物館）、及び窪田蔵郎氏（製鉄史）の所見、見解に負うところがすべてである。

要約すると次のようである。

∴　竹芯痕の残る羽口はこれまで事例がなく、これが初見である。

∴　同時採取の鉄滓は砂鉄系精練鍛冶滓であり、この作業に用いられた羽口と想定される。

∴　羽口製作方法に関して特に問題となるのは古今に一般的な髄抜き技法ではなく、芯の竹に厚板状粘土を巻きつける方法であること。

∴　この羽口はごく普通の土を用いて耐火度は低い。焼成品か否かは明確でない。

∴　孔径、外径ともに鍛冶用の一般的な法量である。

８　「赤い水」について

当該遺跡は立地や局部的環境の項において、前述したように“赤い水”の滲出する岩の狭間を選んでの祭祀とみることが出来る。この赤い水は当地において“カナケ（鉄気）”と呼び鉄錆色の泥状をなし、澱みながら粘性の流れとなるものである。主成分は水酸化鉄であることは化学分析の結果[※1]をみても明らかである。普通一般には地下から滲出し尾垂れる水は無色透明の清水であるが、土質や含有物等によっては変化するのは当然である。特に奥出雲地方をはじめ、古代から製鉄が行われたところでは、投棄した鉄滓層を経由した水分は、多くの水酸化鉄を含み赤錆色の粘性を帯びた水となる。つまりこれが“カナケ水”でる。

赤い色は古く縄文時代以降多く用いられており、赤色は血液のイメージから生命の根源・聖・豊饒を意味し、衰耄・邪・悪霊・穢れの対義とするのが大方の見解[※2]である。

古代国家成立のころ、中央での修祓祭祀は、地方の鄙びた集落においてもこれに倣った祭祀を行うとき、赤く塗った器とともに、斎の場として岩間を伝う赤い水の窪地は最も適したところであったと考えられる。

註

※１　本書付編Ⅱ参照

２　例えば施朱や朱（赤）色顔料等の考古学的検討等は　市毛勲：『朱の考古学』　雄山閣　昭和59年年など。

９　むすび

円満寺遺跡のうち、土器集積遺構は約７×８ｍほどの範囲での祭祀跡であった。特に土器片等が多く取上げ点数３万点以上の堆積である。２ヶ年を要した調査から得られた知見や指摘事項を記してむすびとする。

１）この祭祀遺構はかつて斐伊川河岸で、北側は比高約100ｍで神名備形に峻立する水手山がある。そこから斐伊川に下る狭く急勾配の谷間の最下端部にこの祭祀遺構が所在する。斜立する巨石群に半ば囲まれ、滲み出る水で半湿状で礫の多い９×７ｍほどの窪地に継続して営まれている。遺物は都度毎にその場に据えたまま、或は下方への投棄を繰返した結果30～50㎝にも及ぶ堆積となったものである。

２）祭祀は奥まるところに巨石が並び概ね２～３ｍほど直底面と看做し、底前面に石を組み敷いて祭壇とする、脇に須恵や赤彩の暗文の土師坏などを並べ、ときに土馬・水晶片なども加える。須恵の壷・横瓶等もみられる。奥寄りには土製支脚と数個から10個近い土師甕（鍋）・甑などが並び、若干の火を焚く。また時に桃の実も供されたとみられる。この他後年次には漆で文字（山）を書いた坏も加わる。

３）土器等の観察から祭祀は高位置に始まり漸次下段地へ移り、その下方はそれぞれの投棄の場としていた。

４）祭祀の場として、特に“赤い水”の滲出するところも選地の理由の一つと考えられる。

５）ここで用いた土師の甕はそのほとんどに煤が強く付着し、内面にも炭化物のみられるものもある。これらはすべて実用としての日常用いていた品であることは異例といえよう。

６）漆付着や塗付、或は漆で文字を書いた土器を少数ではあるが用いていることは事例に乏しい。特に片口状の漆容器[※1]や文字を漆書きしたものは祭祀跡において希例であり、混入していた鉄滓や羽口とともに当該集落の生業との関わりと考えられる。

７）この甕及び土製支脚の形状は特徴的なものが多く、甕は長胴形とは若干趣を異にする。土製支脚は双頭形から単頭形への便化かとみられ、土製支脚の焼成はすべてが不良で臨時的製作かと思われる。

８）ここでの祭器には通例のような仮器は極く少数で、大多数を占める甕等は実用の品を用いていることは特記すべき事項である。そして推定される配置はのちの密教系壇具配列[※2]に類似する点も多く、また修験道の湯釜等[※3]にも一脈通ずるものかと思料される。

以上

註

※１　『史跡出雲国府跡』環境整備報告書昭和50年島根県教育委員会刊・の中で松本は瑞の口頸を除いて胴部の円孔に栓をして漆の容器として用いたことを挙げ、古代漆の何らかの特殊な使用法を示すか、としている。

※２　阪田宗彦：『仏教の法具』日本の美術№282　至文堂1989年　Ｐ76

※３　蔵田　蔵：『仏具』　日本の美術№16　至文堂1967年　Ｐ94

付　　編

付編Ⅰ

円満寺遺跡より出土木材および木炭の^{14}C年代測定

大阪府立大学先端科学研究所
アイソトープ総合研究センター
川野瑛子・柴田せつ子

1　はじめに

島根県仁多町教育委員会より測定依頼を受けた円満寺遺跡より出土した木材、木炭のメタノール液体シンチレーション法［1、2］による^{14}C年代測定結果について報告する。

2　原理と約束ごと

Ｌｉｂｂｙ［3］によって確立されたこの測定法は、生きている生物体の^{14}C濃度は大気中の^{14}C濃度とほぼ等しく、その死後新たな^{14}Cの取り込みは行なわれないので^{14}Cはその半減期で減少する。したがって生物遺体中の^{14}C濃度（A）と、その生物が生きていたときの^{14}C濃度（A_0）を測定すれば現代までに経過した年数（ｔ）が次式から計算できる。

$$t = \frac{T_{1/2}}{0.693} \cdot \ln \frac{A_0}{A}$$

大気中^{14}C濃度が経年、地域に関係なく一定であると言う仮定のもとに成立しているので、A_0は、現在の自然界の^{14}C濃度を測定すればよいことになる。現在、国際的な標準物質としてアメリカ標準局（ＮＩＳＴ）からシュウ酸［SRM4990C］が準備されていて、1982年の国際会議でその値の74.59%値をA.D. 1950年の（Ａ０）の値に置き換えることが約束された。

3　測定方法

試料は炭化物とし、燃焼させて生じる炭酸ガスをメタノールへ導く。このメタノールの^{14}C放射能を液体シンチレーション法により測定し、前項の式より試料の年代を計算する。

1）試料の前処理

① 試料に付着している土などの夾雑物は除去する。試料は、小片に砕く。

② １Ｎ－塩酸で、数時間加熱処理。

③ 管状炉を用いて、窒素気流中で500℃、５時間処理し炭化物とした。

2）メタノールの合成

炭化物試料を燃焼管中で燃焼させ炭酸ガス（CO2）とし、LiAlH4と反応させメタノールを合成する。方法としては直接法と分離法がある。通常用いる直接法とはCO２とLiAlH4を直接反応させる方法である。分離法は試料量が少ない場合に適用する。今回はNo1、NO2、NO3、NO4については直接法を、NO5、NO6は分離法を採用した。

CO_2からメタノール合成の化学反応式は次のとおりである。合成後、２度蒸留を繰り返し分離精製を行なった。

$$4CO_2 + 3LiAlH_4 \xrightarrow[\text{室　温}]{\text{ジェチルカルビトール}} LiAl(OCH_3)_4 + 2LiAlO_2$$

$$LiAl(OCH_3)_4 + 4ROH \xrightarrow[\sim 5℃]{} 4CH_3OH + LiAl(OR)_4$$

ROH　;　n－ブチルカルビトール

標準シュウ酸からメタノールの合成は、標準シュウ酸に硫酸酸性過マンガン酸カリ水溶液を滴下することによりCO_2を発生させ、$LiAlH_4$と反応させて合成した。

精製法は試料メタノールと同様の方法で行った。

３）液シンチレーションカウンターによるメタノールの^{14}C放射能測定

パッカード社製のトライカーブ2260XL型を使用、測定領域は18.4～84.0 KeVに設定。シンチレーターとしてはButyl-PBDの30g、bis-MSBの0.45gをキシレン1Lに溶かしたものを用いた。測定は試料カクテルとバックグランドカクテルを100分ずつ交互に行い、必要な時間繰り返し測定した。標準シュウ酸から合成したメタノール試料についても同じ方法により液シン測定を行った。

４　^{14}C年代値の算出と結果

前項の液シン測定で得られた標準シュウ酸、試料及びバックグランドの測定値（dpm/gC）を用いて前述の式により試料の年代値を計算することができる。ここでＮＩＳＴシュウ酸値A_0は、13.576±0.020 dpm/gCを用いた。計算に際して^{14}Cの半減期としてはＬｉｂｂｙの提唱している5568年を使用した。また、^{14}C年代値の表示法としては、1950年を起点としてこの年より幾年前であるかで示してあり、年代値の後にB.P.を添えるのが慣例である。

^{14}C年代値には必ず測定誤差が伴い、その相対誤差１％は80年となる。誤差は、通常１標準誤差で表示、これは繰り返し測定を行った場合、測定値が誤差の範囲に入るものが全測定の68％であることを意味する。２標準誤差をとる場合は誤差の範囲は２倍になるが95％がその範囲にはいる。

最後に^{14}C年代値の結果を示す。また較正曲線（ＯxCal　v3. 5, 1998）［４］を用いて^{14}C年代から暦年代（範囲と確率）を算出した。（表１、図１～７）

参考文献

[1] S. Shibata, E. Kawano, T. Nakabayashi, S. Kawamura and O. Yamada, Ann. Rep. Rad. Ctr. Osaka 27, 99 (1986/1987)

[2] S. Shibata, E. kawano and T. nakabayashi, Radiocarbon 39(1) 79-87(1987)

[3] W. F. Libby, Radiocarbon Dating, 2nd Ed., the Univ. of Chicago Press, Chicago(1955)

[4] Oxcal v3.5 ; Stuiver et al., Radiocarbon 40(3) 1041-1083(1998)

表1

試料名	当方コード	14C年代値 y. BP	較正年代（暦年代） 範　囲	確　率
No1	OR-161	427±30BP	1439AD～1475AD	(68.2%)
No2	OR-162	287±34BP	1520AD～1580AD	(43.2%)
			1620AD～1660AD	(25.0%)
No3	OR-163	309±33BP	1520AD～1600AD	(54.6%)
			1620AD～1650AD	(13.6%)
No4	OR-164	240±29BP	1640AD～1670AD	(47.2%)
			1780AD～1800AD	(21.0%)
No5	OR-165	1339±107BP	600AD～820AD	(65.5%)
			840AD～860AD	(2.7%)
No6	OR-166	1167±66BP	770AD～900AD	(51.3%)
			910AD～960AD	(16.9%)

図1

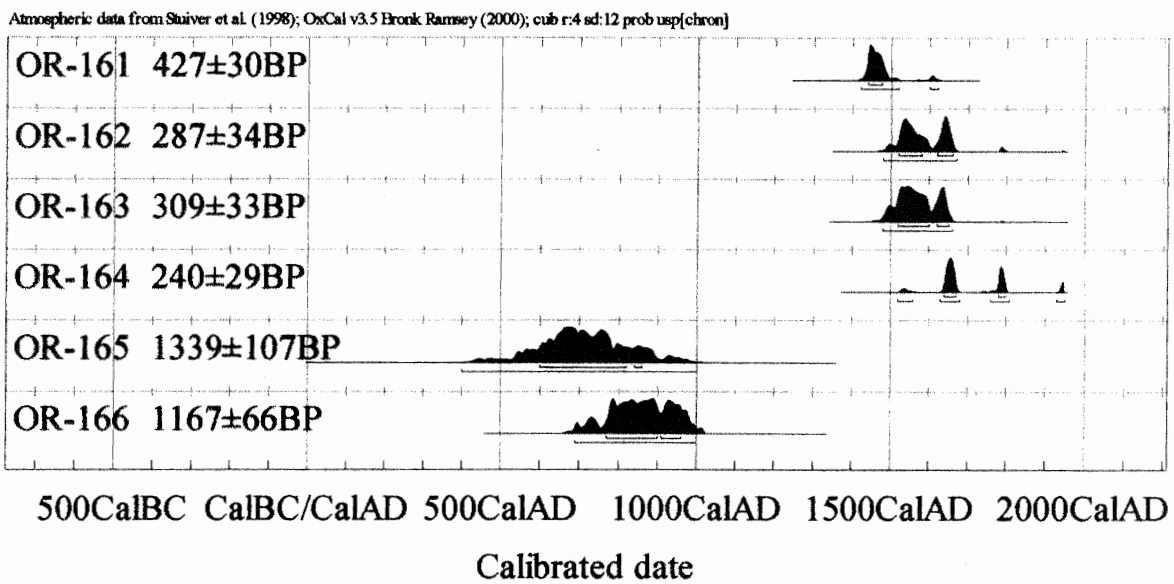


図2

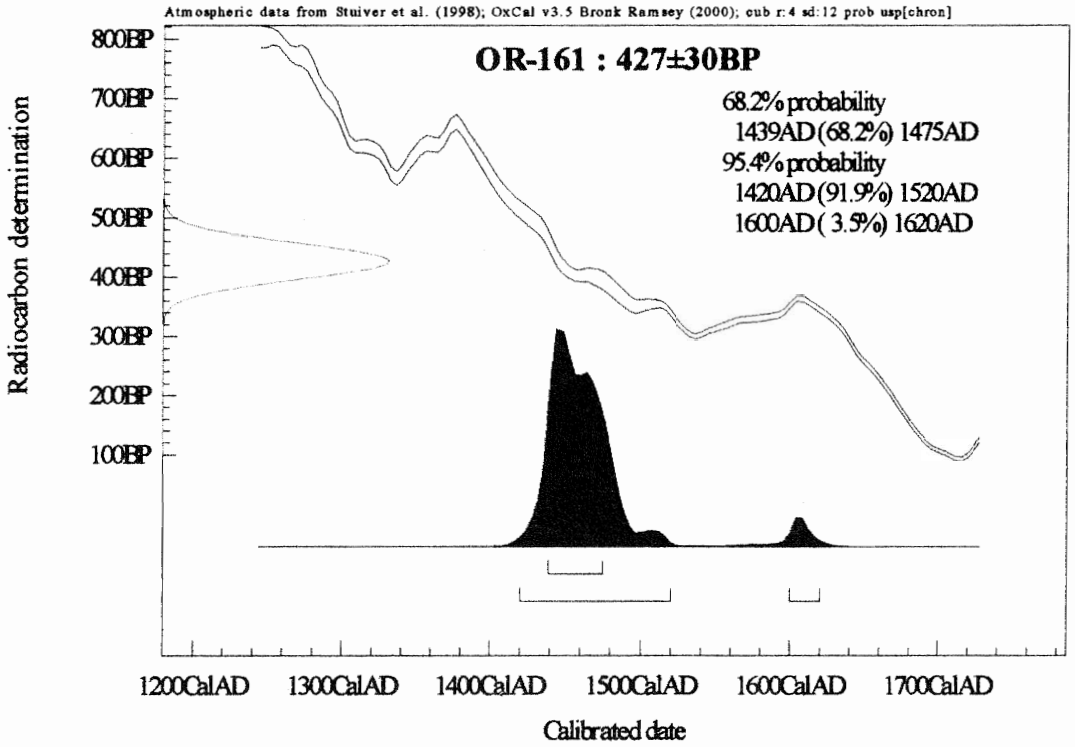

Atmospheric data from Stuiver et al. (1998); OxCal v3.5 Bronk Ramsey (2000); cub r:4 sd:12 prob usp[chron]
OR-161 : 427±30BP
68.2% probability
1439AD (68.2%) 1475AD
95.4% probability
1420AD (91.9%) 1520AD
1600AD (3.5%) 1620AD
Radiocarbon determination
800BP
700BP
600BP
500BP
400BP
300BP
200BP
100BP
1200CalAD
1300CalAD
1400CalAD
1500CalAD
1600CalAD
1700CalAD
Calibrated date

図3

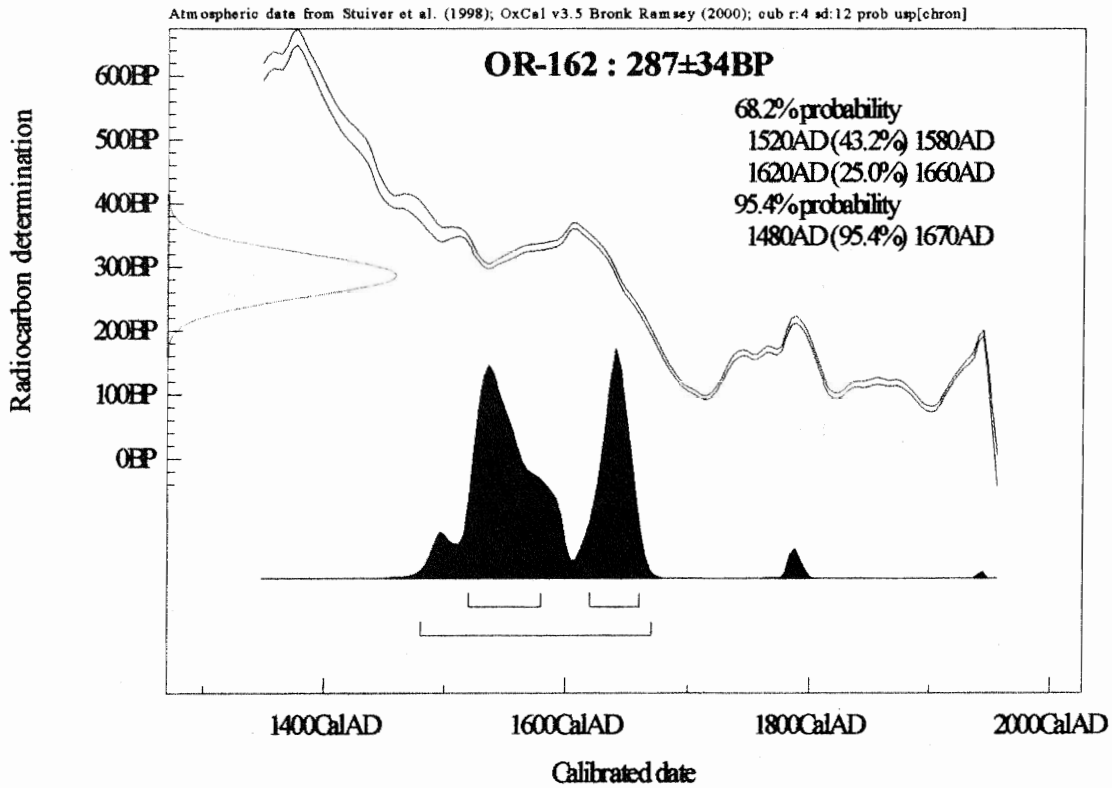

Atmospheric data from Stuiver et al. (1998); OxCal v3.5 Bronk Ramsey (2000); cub r:4 sd:12 prob usp[chron]
OR-162 : 287±34BP
68.2% probability
1520AD (43.2%) 1580AD
1620AD (25.0%) 1660AD
95.4% probability
1480AD (95.4%) 1670AD
Radiocarbon determination
600BP
500BP
400BP
300BP
200BP
100BP
0BP
1400CalAD
1600CalAD
1800CalAD
2000CalAD
Calibrated date

図4

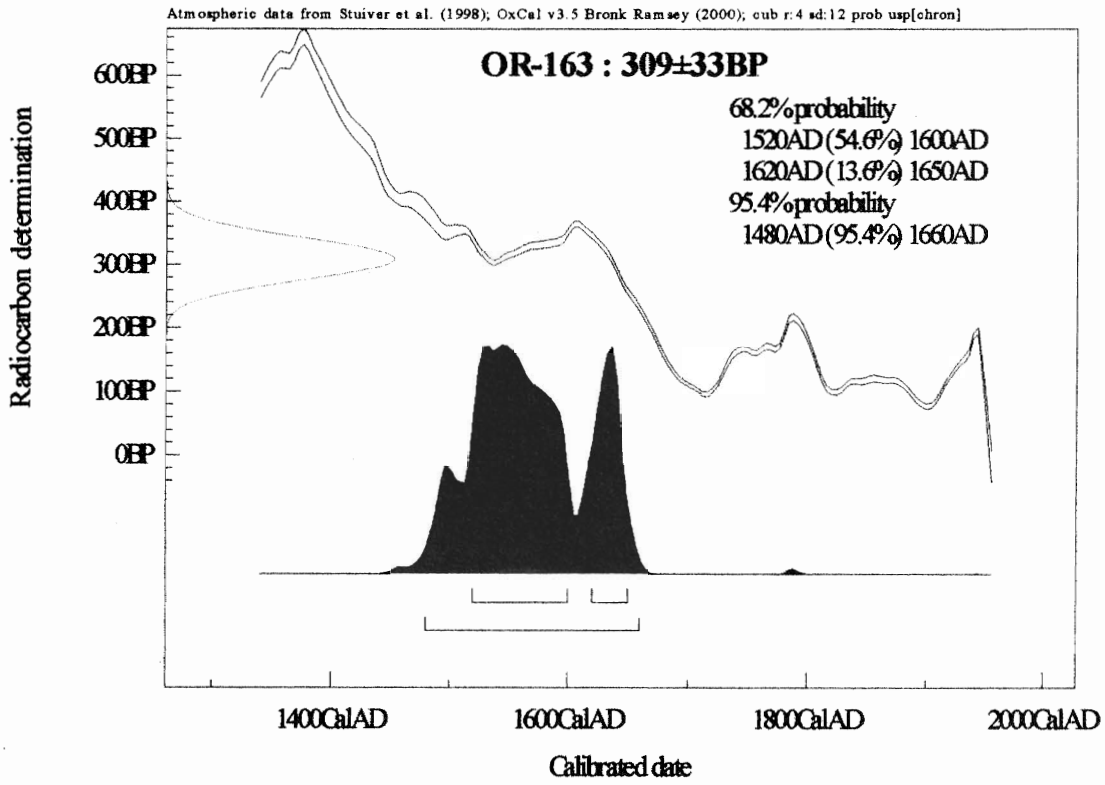

Atmospheric data from Stuiver et al. (1998); OxCal v3.5 Bronk Ramsey (2000); cub r:4 sd:12 prob usp[chron]
OR-163 : 309±33BP
68.2%probability
1520AD(54.6%) 1600AD
1620AD(13.6%) 1650AD
95.4%probability
1480AD(95.4%) 1660AD
Radiocarbon determination
600BP
500BP
400BP
300BP
200BP
100BP
0BP
1400CalAD
1600CalAD
1800CalAD
2000CalAD
Calibrated date

図5

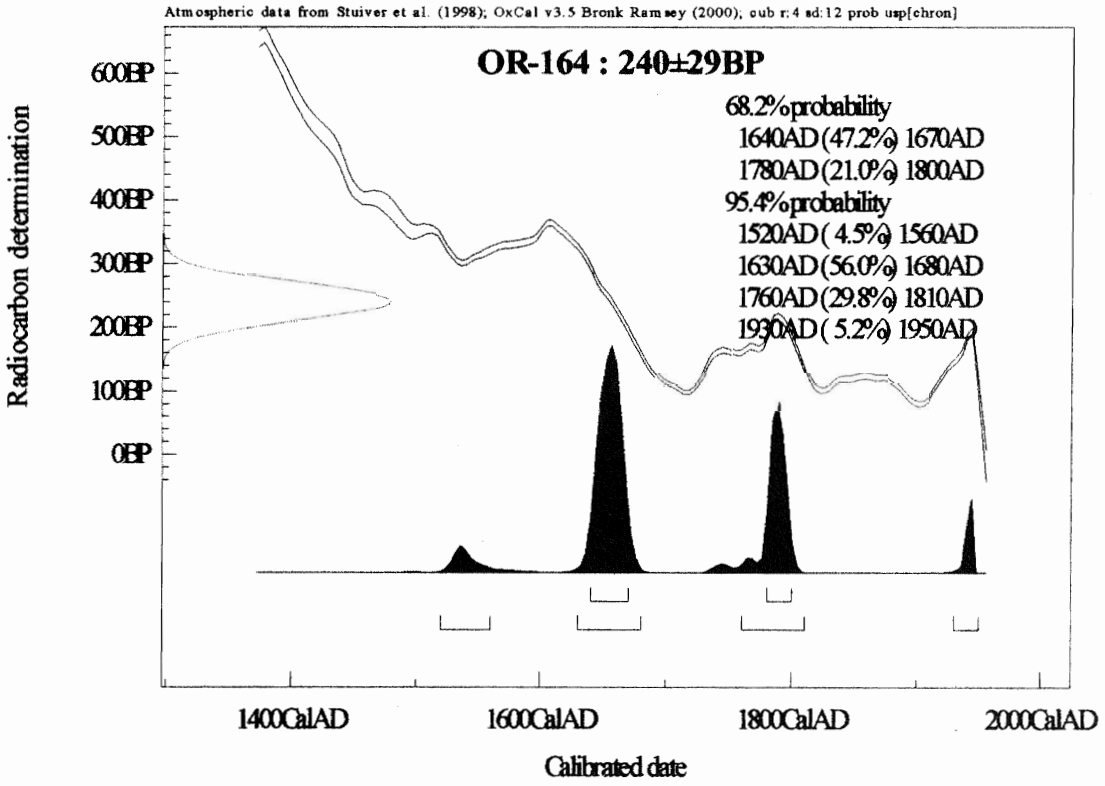

Atmospheric data from Stuiver et al. (1998); OxCal v3.5 Bronk Ramsey (2000); cub r:4 sd:12 prob usp[chron]
OR-164 : 240±29BP
68.2%probability
1640AD(47.2%) 1670AD
1780AD(21.0%) 1800AD
95.4%probability
1520AD(4.5%) 1560AD
1630AD(56.0%) 1680AD
1760AD(29.8%) 1810AD
1930AD(5.2%) 1950AD
Radiocarbon determination
600BP
500BP
400BP
300BP
200BP
100BP
0BP
1400CalAD
1600CalAD
1800CalAD
2000CalAD
Calibrated date

図6

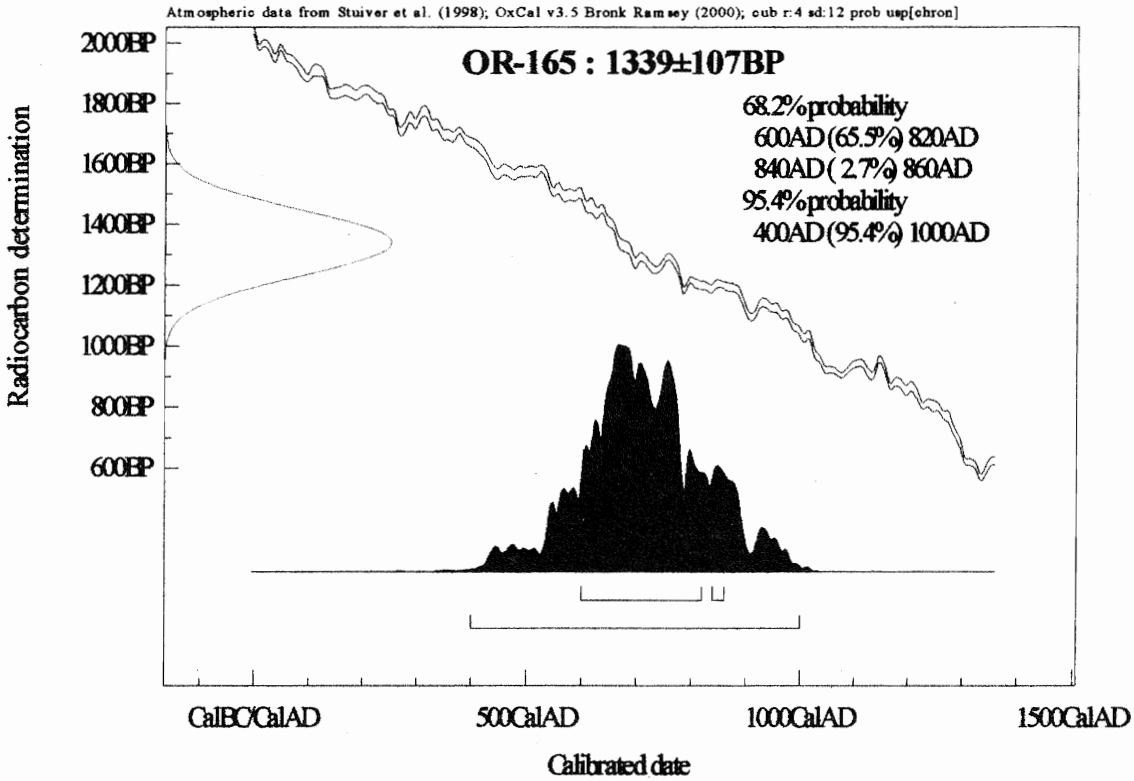
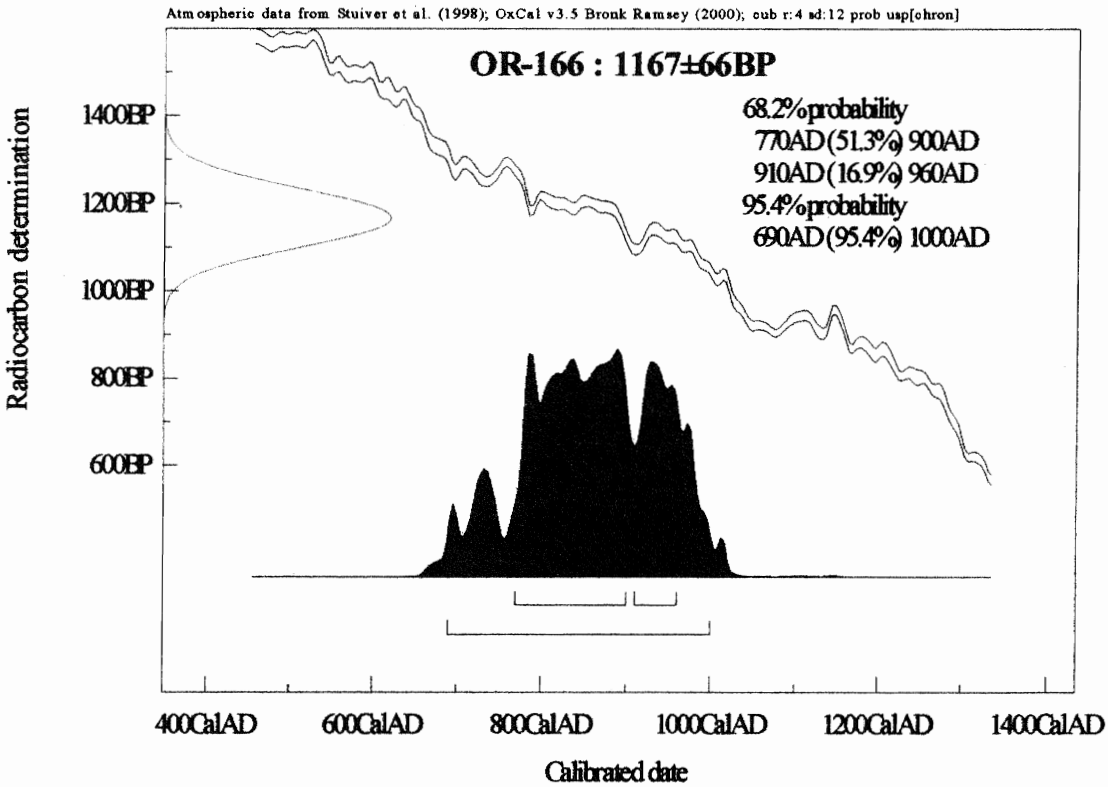

Atmospheric data from Stuiver et al. (1998); OxCal v3.5 Bronk Ramsey (2000); cub r:4 sd:12 prob usp[chron]
OR-165 : 1339±107BP
68.2%probability
600AD (65.5%) 820AD
840AD (2.7%) 860AD
95.4%probability
400AD (95.4%) 1000AD
Radiocarbon determination
2000BP
1800BP
1600BP
1400BP
1200BP
1000BP
800BP
600BP
CalBC/CalAD
500CalAD
1000CalAD
1500CalAD
Calibrated date

図7


Atmospheric data from Stuiver et al. (1998); OxCal v3.5 Bronk Ramsey (2000); cub r:4 sd:12 prob usp[chron]
OR-166 : 1167±66BP
68.2%probability
770AD (51.3%) 900AD
910AD (16.9%) 960AD
95.4%probability
690AD (95.4%) 1000AD
Radiocarbon determination
1400BP
1200BP
1000BP
800BP
600BP
400CalAD
600CalAD
800CalAD
1000CalAD
1200CalAD
1400CalAD
Calibrated date

デ　ー　タ

＊δ-15(Nist)
＊δ-22.9(Sample)

(但しNBSシュウ酸S-18-19DATA 使用)

	BG	dev	Scpm	dev	Sdpm	dev	Eff tSIE	C (g) Me (g)	dpm/gC	dev	t. TIME (min)	BP	dev	NIST	dev	BP ＊(Delta補正)	dev
37959 OR-161 No 1 (木)	2.322	0.021	18.287	0.062	33.772	0.116	0.542 204.7	2.625 7.000	12.865	± 0.044	5000	432	± 30	13.576	± 0.020	427	± 30
37966 OR-162 No 2 (木)	2.326	0.022	18.617	0.075	34.364	0.139	0.542 205.4	2.625 7.000	13.091	± 0.053	5000	292	± 35	13.576	± 0.020	287	± 34
37995 OR-163 No 3 (木)	2.280	0.022	18.471	0.072	34.273	0.133	0.539 198.3	2.625 7.000	13.056	± 0.051	5000	313	± 33	13.576	± 0.020	309	± 33
38000 OR-164 No 4 (木)	2.300	0.021	18.555	0.063	34.567	0.117	0.537 194.5	2.625 7.000	13.168	± 0.045	5000	245	± 30	13.576	± 0.020	240	± 29
38007 OR-165 No 5 (木炭)	2.289	0.025	2.879	0.038	5.402	0.072	0.533 188.3	0.470 7.000	11.485	± 0.153	5000	1343	± 108	13.576	± 0.020	1339	± 107
38012 OR-166 No 6 (木炭)	2.300	0.025	5.354	0.043	10.030	0.082	0.534 189.3	0.855 7.000	11.734	± 0.096	5000	1171	± 67	13.576	± 0.020	1167	± 66

付編Ⅱ

円満寺遺跡　出土品の調査

安来市体育文化振興財団・和鋼博物館

村 川 義 行・三奈木義博

尾原ダムの建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査における、島根県仁多町の円満寺遺跡発掘調査で出土した遺跡遺物について調査した結果を報告する。

1　出土品明細および調査方法

1 - 1．供試材

表１に出土品調査試料の明細を示す。

表１　円満寺遺跡出土品調査試料

試料No.	名　称	出土場所	出土状況他
1	赤 泥 物 質	奈良時代祭祀遺構（土品溜り）	祭壇状石敷の下面
2	沈着かなけ（鉄気）	奈良時代祭祀遺構（土品溜り）	泥状沈着物
3	赤　色　土	遺構付近真砂土　（比較用）	町内採取の赤色土
4	赤彩土器片	奈良時代祭祀遺構（土品溜り）	内外面赤色塗彩の皿片
5	赤 木 椀 片	奈良時代祭祀遺構（土品溜り）	赤漆塗り木椀片
6	鉄　　滓	奈良時代祭祀遺構（土品溜り）	小さい碗形滓、全重200ｇ
7	羽　口　片	奈良時代祭祀遺構（土品溜り）	筒状 内面は竹中子痕か

1 - 2．調査項目および方法

各試料の調査項目を表２に示す。

表２．　各試料の調査項目

No	名称	目視観察	化学分析	顕微鏡組織	SEM観察	EDX分析	X線回折
1	赤 泥 物 質	○	—	—	○	○○	○
2	沈着かなけ	○	—	—	○	○	○
3	赤　色　土	○	—	—	○	○	○
4	赤彩土器片	○	—	—	○	○○	○
5	赤 木 椀 片	○	—	—	○	○	○
6	鉄　　滓	○	○	○	○	○	—
7	羽　口　片	○	○	—	—	○	—

（1）目視観察

形状、色等を目視により観察する。

（2）化学組成分析

供試材の化学組成分析は次の方法で実施した。

全鉄分(T･Fe)、金属鉄(M･Fe)、酸化第一鉄(FeO)：容量法。

硫黄(S)：燃焼赤外線吸収法。

二酸化珪素(SiO2)、酸化アルミニウム(Al2O3)、酸化カルシウム(CaO)、酸化マグネシウム(MgO)、酸化マンガン(MnO)、二酸化チタン(TiO2)、五酸化燐(P2O5)、酸化バナジウム(V2O5)：誘導結合プラズマ発光分光分析（ICP法)。

（３） 顕微鏡組織

切出して樹脂に埋め込み、エメリー研磨紙の＃150、＃240、＃320、＃600、＃1000と順を追って研磨し、最終はダイヤモンドの３μ～１μで仕上げてから金属組織および鉱物相を観察した。

（４）SEM-EDX定性分析

顕微鏡組織観察試料にカーボン蒸着を施した後、走査型電子顕微鏡（SEM）により電子線を照射し、発生する２次電子、反射電子を検出し、表面組織形態の観察と、電子線を照射した微小部から発生する特性Ｘ線をエネルギー分散型Ｘ線検出器（EDX）で検出して定性元素分析を行い鉱物相の組成を同定した。

（５）Ｘ線回折

粉体化した試料にＸ線を照射し、結晶構造の解析により鉱物相を同定する。

２ 調査結果

２－１．外観写真

No.１～３に試料外観写真を示す。なお、No.４の赤彩土器片については図１に同じ様な片とともに示す。No.５～７については切断前の試料形状を図２・３に示す。また、No.７の羽口片については半割りした内面を示す。

２－２．外観目視観察

No.1　赤泥物質　：　褐色の粉体で明褐色や灰色の粉体も混ざっている。

No.2　沈着かなけ　：　明褐色の粉体で混ざりものは見られない。

No.3　赤色土　：　赤色と白色が層状になった土。

No.4　赤彩土器片　：　土器の両面に赤色に塗りが行なわれた皿状物。

No.5　赤木椀片　：　木片の両面に黒色と赤色の塗りが行なわれている。

No.6　鉄滓　：　出土品が半割りされており、褐灰色と明褐色部分が見られる。

No.7　羽口片　：　筒状で出土したものを1/4分割されており、太い方が高温に曝されて灰黒色になっており、反対側は灰色である。

２－３．化学分析

調査試料のうち、鉄滓と羽口片について化学分析を行なった。この結果を表３に示す。

鉄滓は全鉄分（T・Fe）は44.58%、造滓成分（SiO2＋Al2O3＋CaO＋MgO＋Na2O＋K2O）は35.41%である。またTiO2が2.01%より考えると砂鉄系精錬鍛冶滓と推定される。[1)]

羽口片はCaO、MgOが高く、またNa、Kも高い。羽口成分よりKTECで整理された式[2)]で耐火

表３．　鉄滓および羽口片の化学成分分析値（wt%）

No	名称	SiO2	CaO	MgO	TiO2	Al2O3	Na	K	FeO	Fe2O3	T・Fe
6	鉄滓	24.74	1.42	0.66	2.01	5.92	0.71	0.59	41.51	17.60	44.58
7-1	羽口片(内)	63.93	1.60	1.78	0.72	19.97	1.69	1.14	0.31	2.77	2.18
7-2	羽口片(外)	62.53	1.51	1.01	0.92	19.13	1.78	1.19	1.02	2.46	2.51

度を推定すると1152℃と1234℃となり、かなり耐火性が悪い。これらのことより羽口材料は通常の粘土と考えられる。

２－４．　顕微鏡組織

図４に鉄滓の顕微鏡組織を示す。白色粒状のウスタイトと灰色長柱状のファイヤライト主体の組織がみられる。

２－５．ＳＥＭ観察、ＥＤＸ分析およびＸ線回折

調査試料のＳＥＭ観察とＥＤＸ分析結果を図５～11に示す。また、Ｘ線回折結果を図12、13に示す。

これらを基に構成を検討すると次のように推定される。

・No.１　赤泥物質

泥の色の異なる部分での基本的な成分に差はなく、Fe,Si,Alの酸化物、水酸化物主体と考えられる。ただし、EDX分析でＰの大きなピークが見られるが、Ｘ線回折ではハッキリしたピークが見られない。CaもEDXで検出されており、アパタイトではないかと考えられるが定かではない。

・No.２　沈着かなけ

EDXではSi,Fe,Alの3元素が検出されSiO2とFe水酸化物が主体で、Al2O3も若干含まれていると考えられる。

・No.３　赤色土

EDXではSi,Alが主成分であり、SiO2とAlSi水酸化物系が検出されている。他に赤色成分と考えられるFe,Mgが少量検出される。

・No.４　赤彩土器片

表面の赤塗はEDX,X線回折ともにNO.3とほぼ同じと考えられる。土器部分はFeが少なく粘土成分と考えられる。

・No.５　赤木椀片

木片の表面はEDX分析より、ほとんどがHgとSである。これは赤色塗料は良く使用されている硫化水銀（HgS）である。

・No.６　鉄滓

SEM組織とFDX分析より鉄滓の白色粒状はウスタイトで、灰色長柱状のファイヤライトが主体となり、角張ったウルボスピネルが見られ、マトリックスはガラス質と考えられる。

・No. 7　羽口片

化学分析より一般的な粘土と考えられ、SEMからは特に変わったものは見られない。

EDX分析結果はNo. 4（B）の土器と同じである。

3　まとめ

・No. 1　赤泥物質

この泥のみEDXより多量のPが検出される。ただし、X線回折では物質が特定できずどのようなものか明確には解らない。あえて推定すれば粘土成分、Fe水酸化物（ゲーサイト）、砂鉄及びアパタイト（骨）の混ざった物ではないかと考えられる。ただ、こ　の土がどのようなものかは定かでない。

・No. 2　沈着かなけ

かなけであるFe水酸化物（ゲーサイト）と粘土の混ざったものと考えられる。

・No. 3　赤色土

基本は粘土成分であり、鉄分が多いために赤色になったと考えられる。

・No. 4　赤彩土器片

表面の赤塗はNO. 3とほぼ同じと考えられ赤色土を塗って焼成したものと考えられる。土器部分はFeが少なく通常の粘土成分と考えられる。これはNo. 7の羽口とほぼ同じ成分である。

・No. 5　赤木椀片

木片の表面に硫化水銀（HgS）を用いて赤くした漆器と考えられる。

・No. 6　鉄滓

鉄滓は化学成分より砂鉄系精錬鍛冶滓と推定される。ガラス質にウスタイトとファイヤライト及び少量のウルボスピネルが晶出した組織となっている。

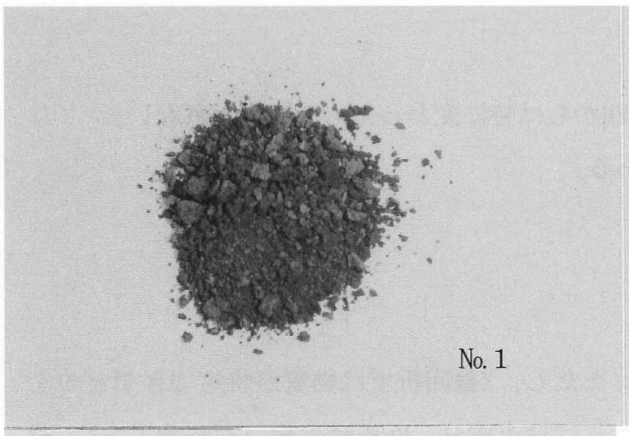
・No. 7　羽口片

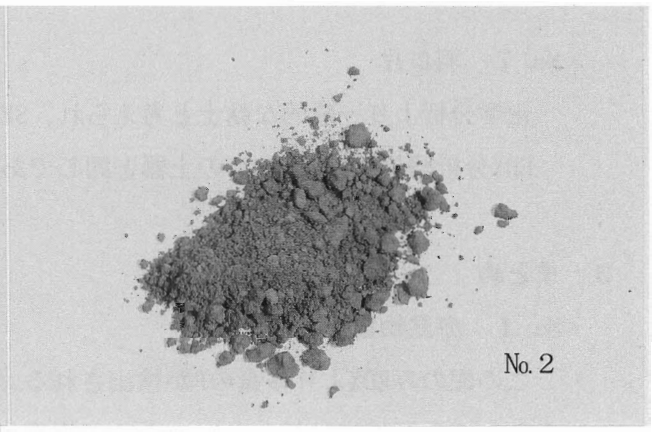
化学分析より一般的な粘土と考えられる。羽口としては耐火度は低く特別に羽口用として選別されたものではないと考えられる。また羽口は内面に竹を中子にしてできた節様の痕跡が見られるが定かでない。羽口の全体像が不明なので更に不明確になるが、もし羽口に竹の中子が使用されたと仮定すると、中子があるまま使用すると送風の障害となる可能性が大きい。使用目的からして、中子を燃やし易い中空の竹を用い、一度焼成して竹を除去して使用したと考えた方が妥当である。化学成分分析値から焼成、非焼成の判断は困難である。

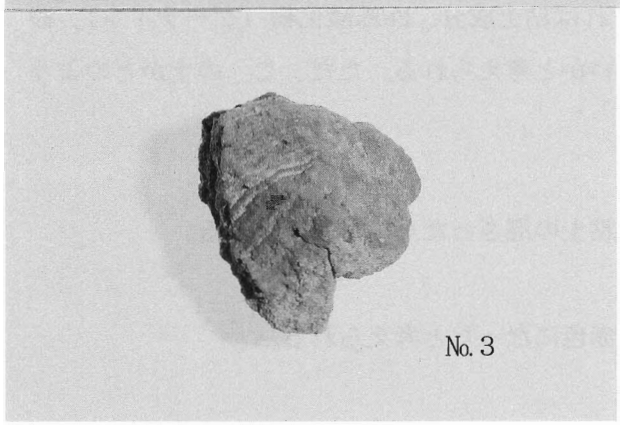
参考文献

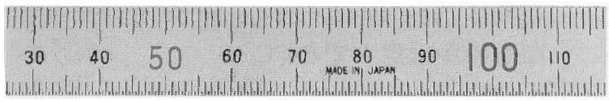
1）小川太一：2002/1「分析側から見た鉄関連遺物発屈調査への期待」『鉄の歴史－その技術と文化フォーラム』　論文集、日本鉄鋼協会、鉄関連遺物分析評価研究会

2）岡原他（川鉄テクノリサーチ）：2003/3「古志本郷遺跡Ｖ」『第９章　古志本郷遺跡官衙遺構に伴う鍛冶関　連遺物の分析・調査』

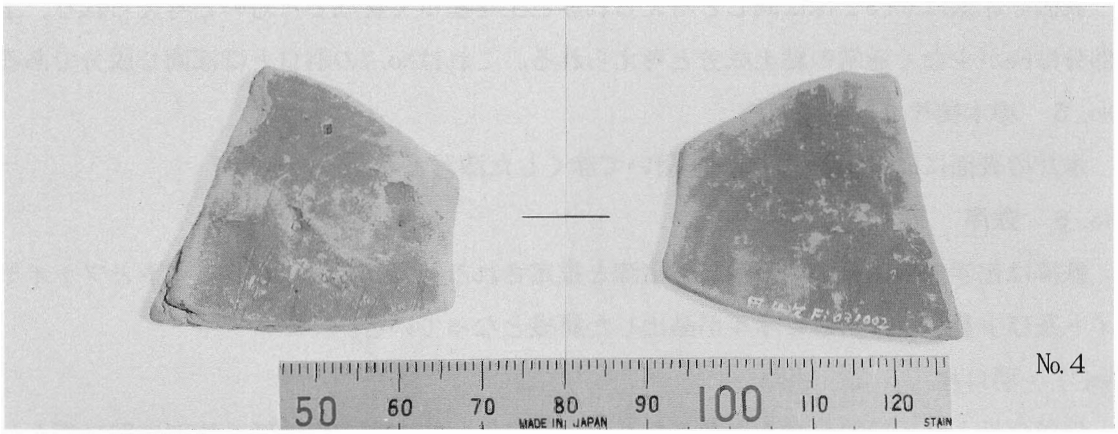








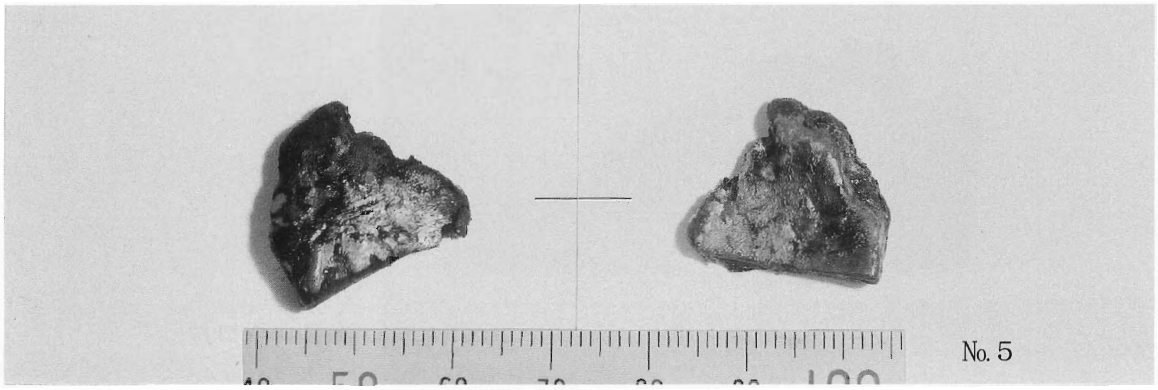
1　赤泥物質
2　沈着かなけ（鉄気）
3　比較用赤色土



No. 4　赤彩土器片

出土した赤彩土器片
（No. 4 試料含む）

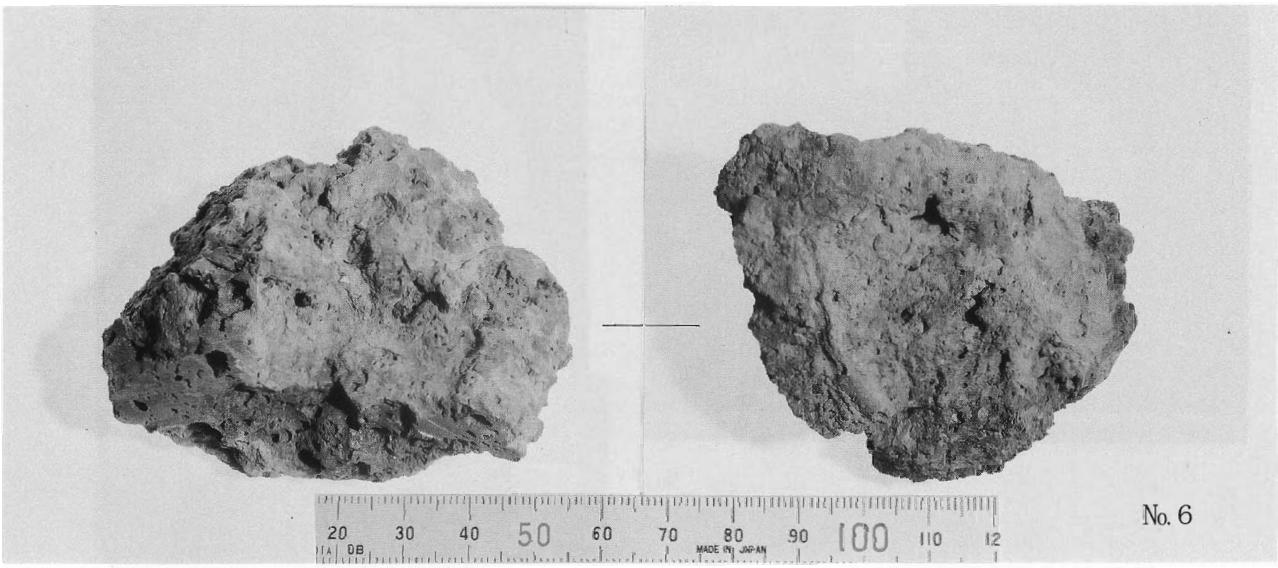
図１　供試試料（１）

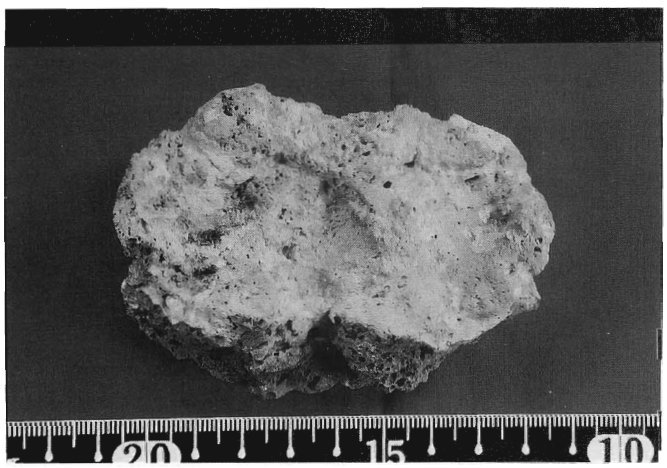


No. 5　赤木椀

←

切断前



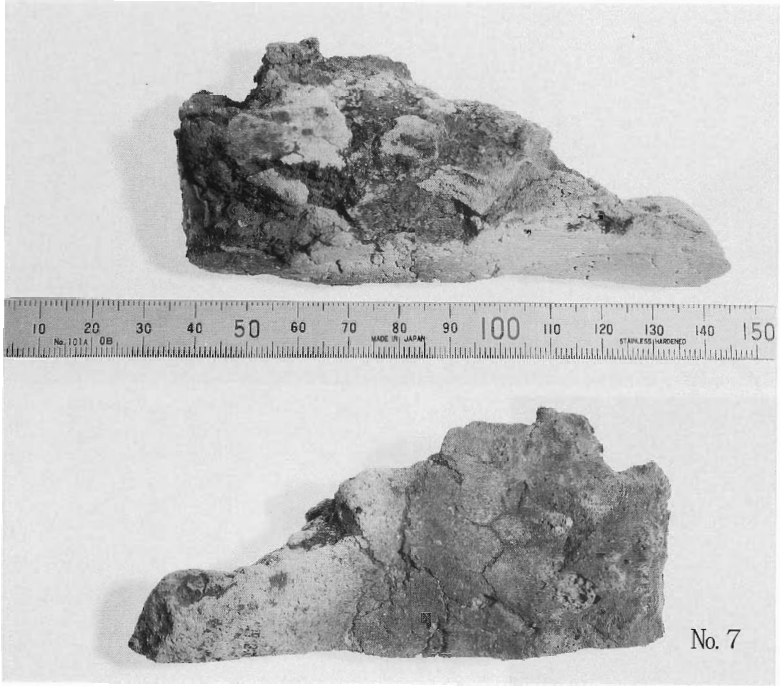


No. 6　鉄滓試料

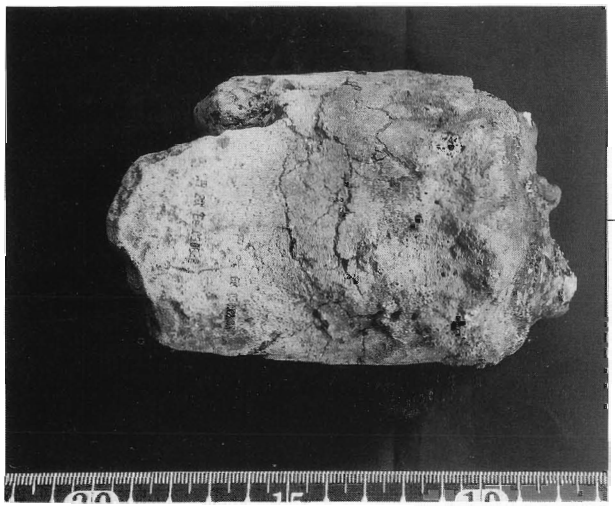
←

切断前

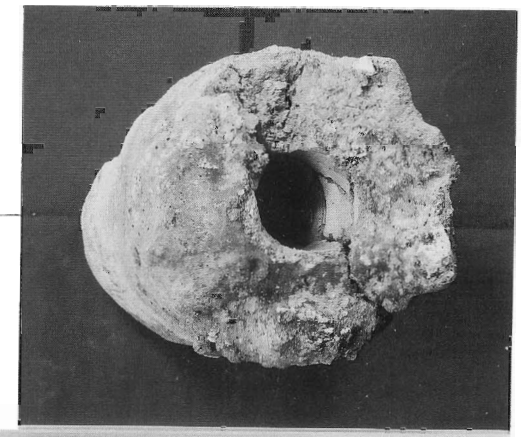
図２　供試試料（２）

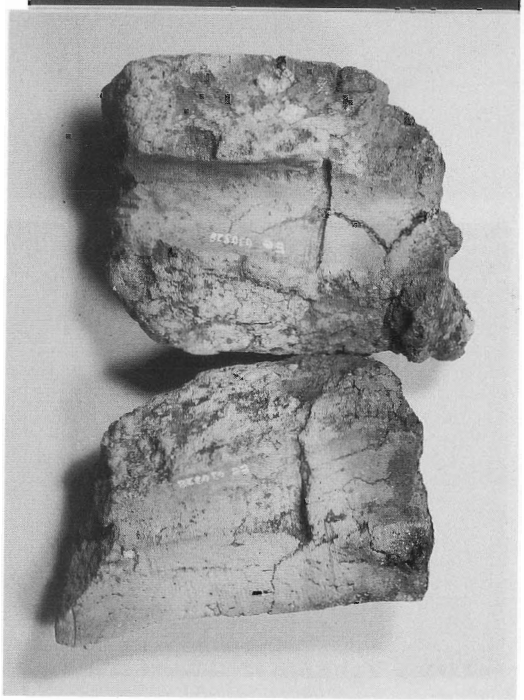


No. 7　羽口片



No. 7

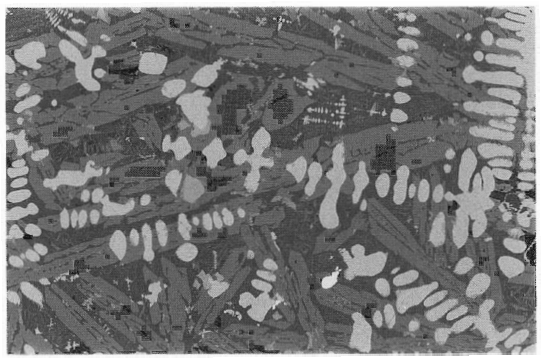




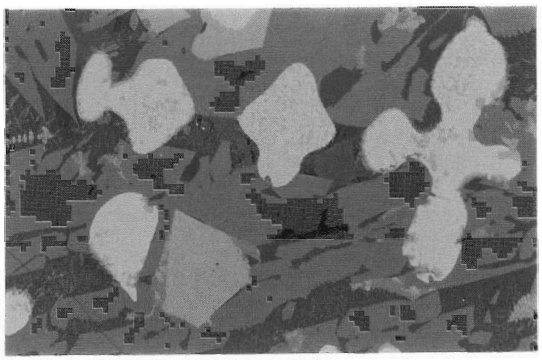
No. 7　羽口片

→切断後の内面状況

図３　供試試料（３）

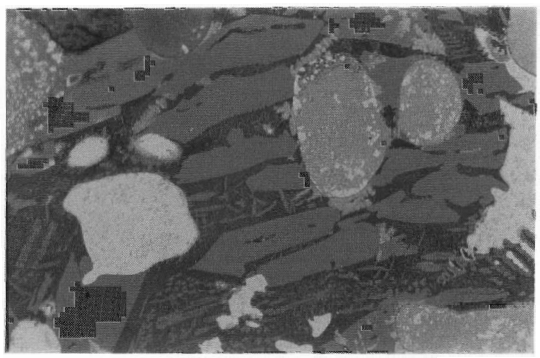


（×100）

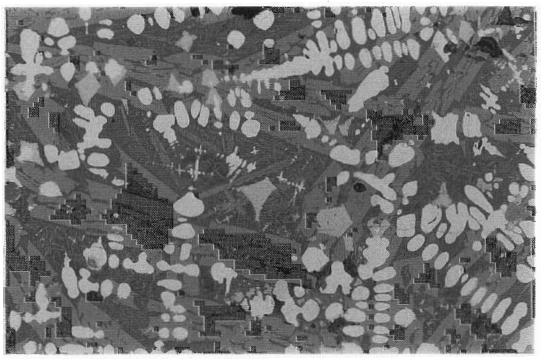


（×400）

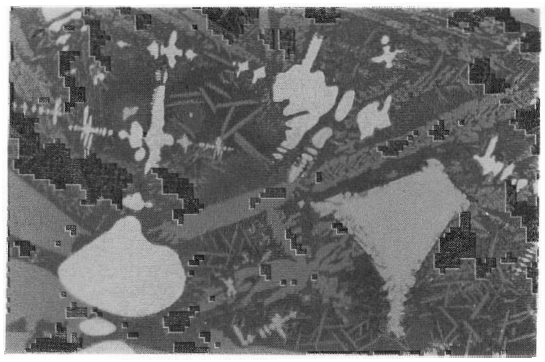
（×100）



（×400）

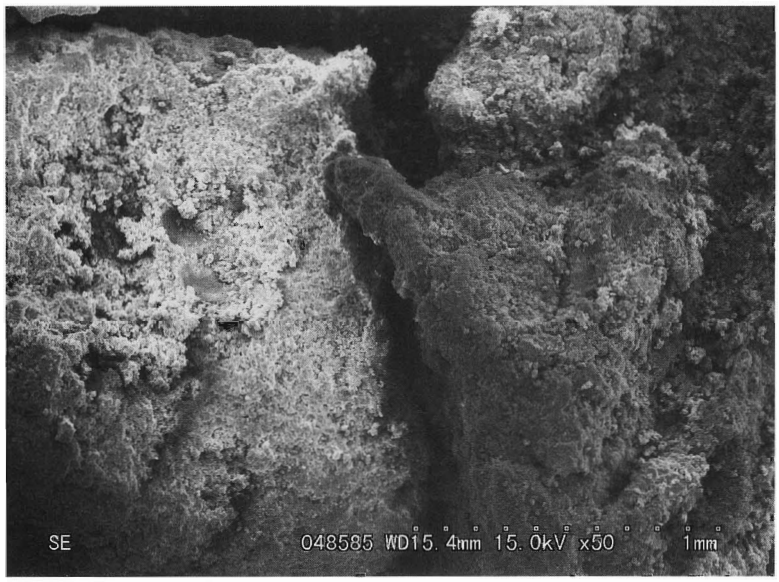


（×100）

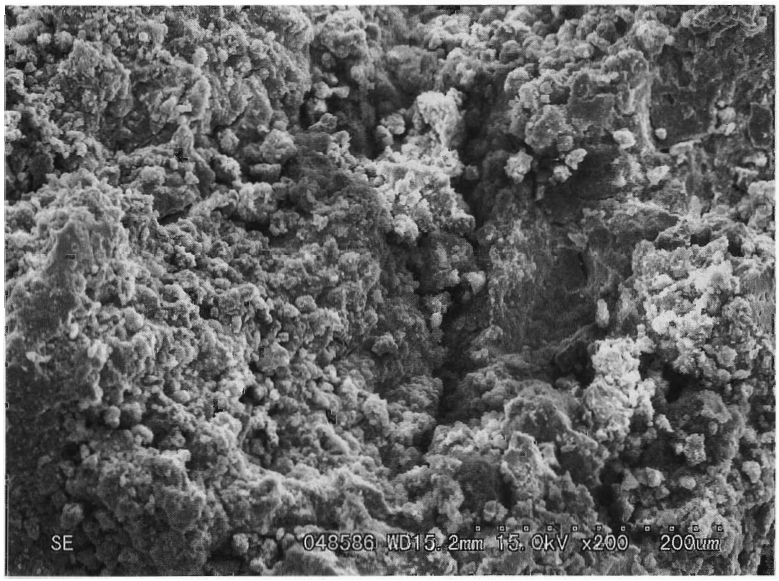


（×400）

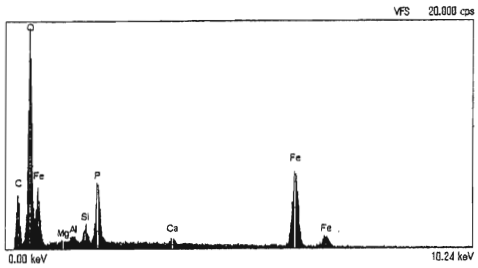
図４　鉄滓（No.６）の顕微鏡組織

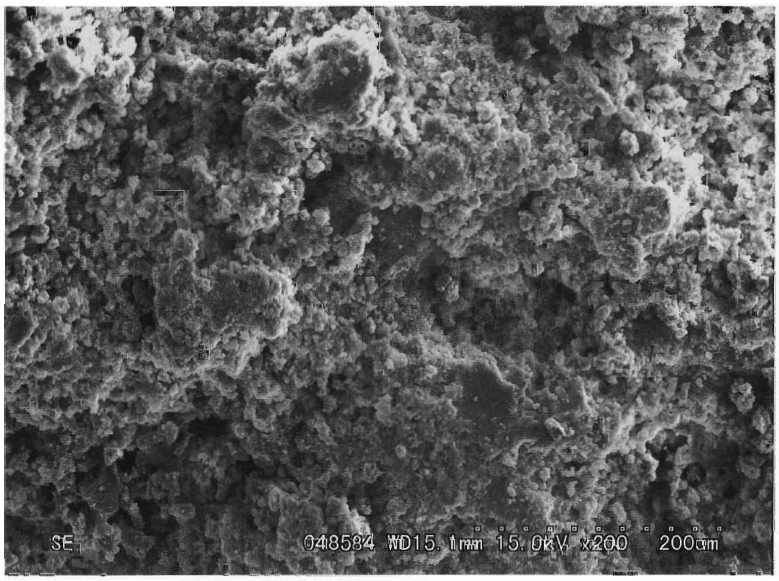


（A）低倍率



（B）薄色部分（左側）





（C）濃色部分（右側）

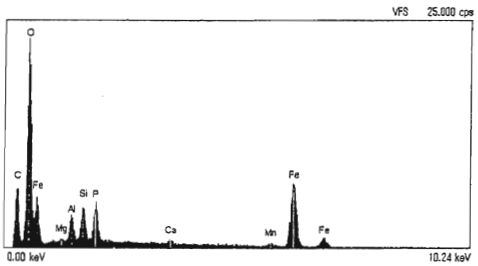
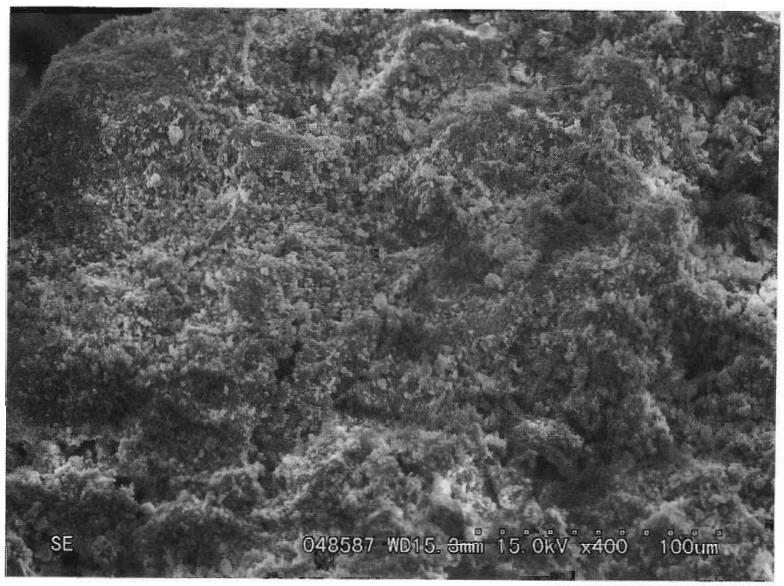
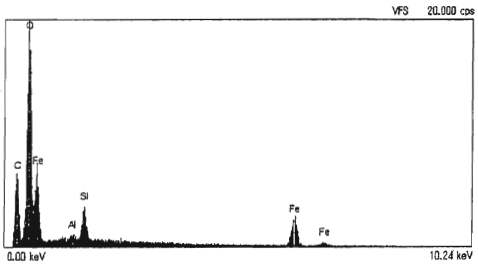


図５　赤泥物質（No.１）のSEM像とEDX微小部分析





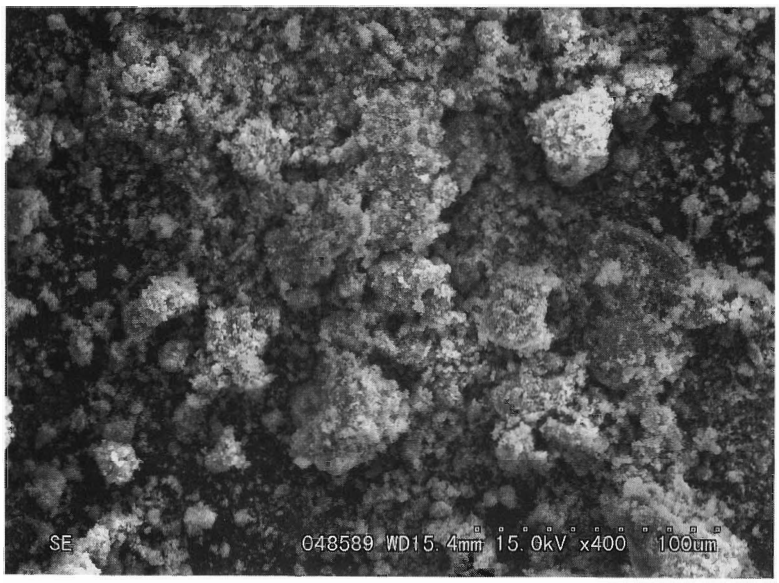
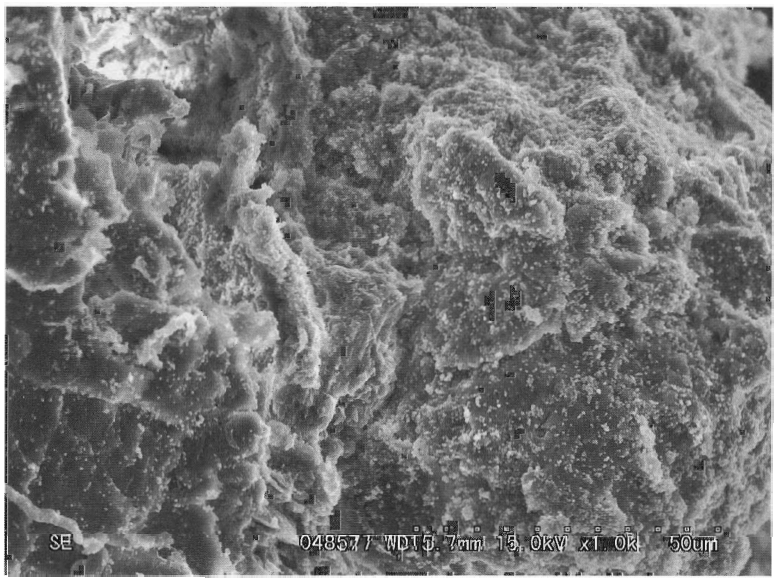
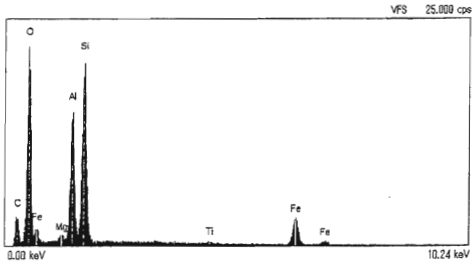


図６　沈着かなけ（No.２）のSEM像とEDX微小部分析





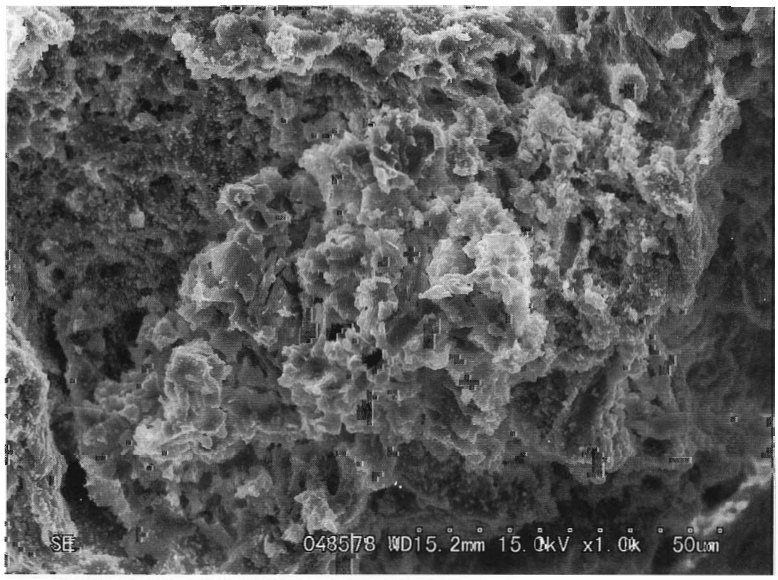
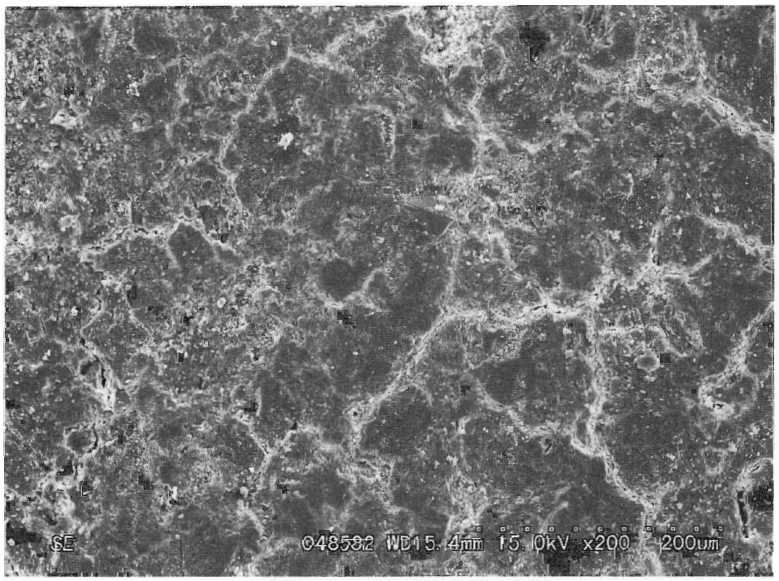
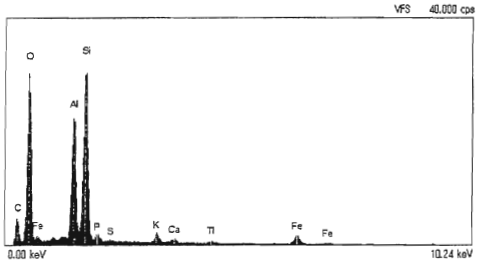
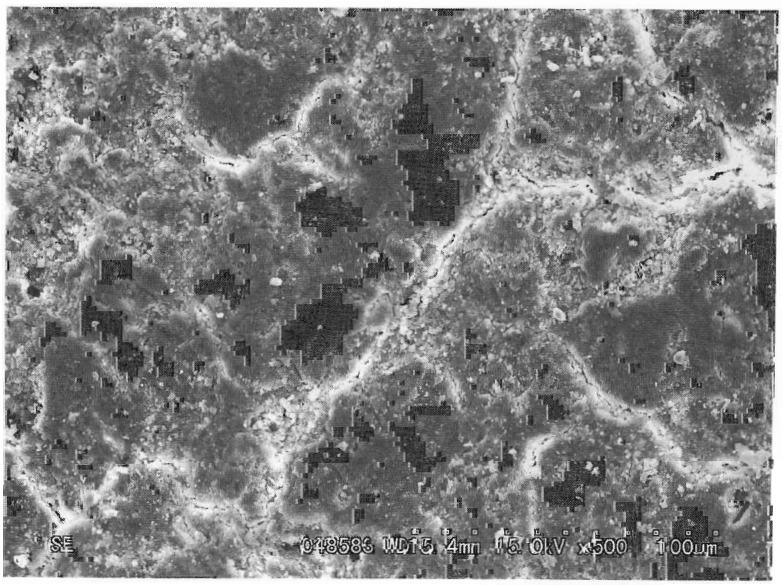


図７　赤色土（No.３）のSEM像とEDX微小部分析



（A）赤色付着物





（B）土器

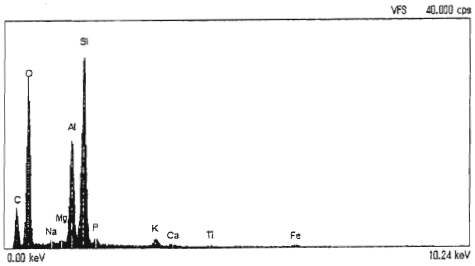
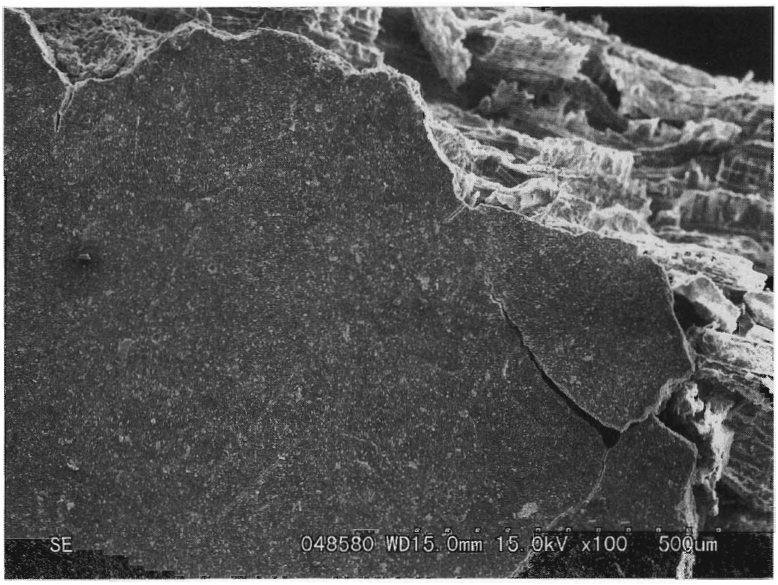
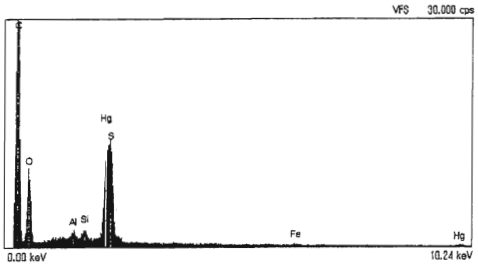


図８　赤塗土器片（No.４）のSEM像とEDX微小部分析





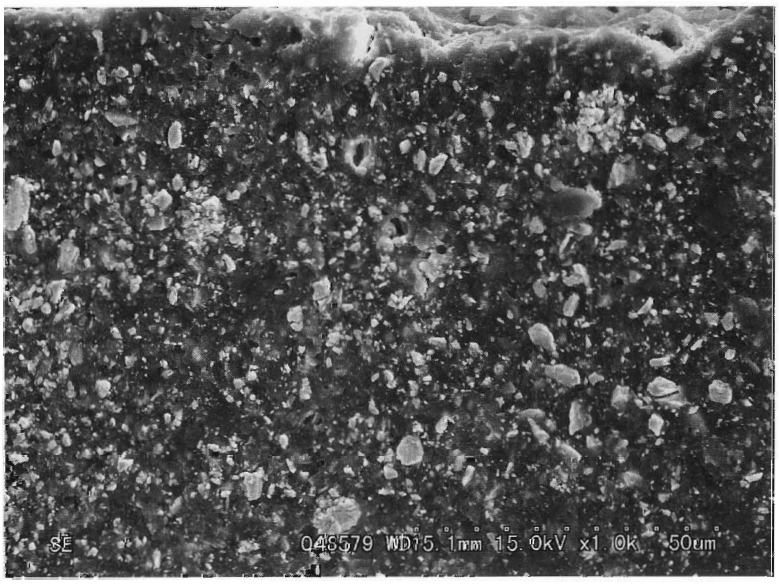
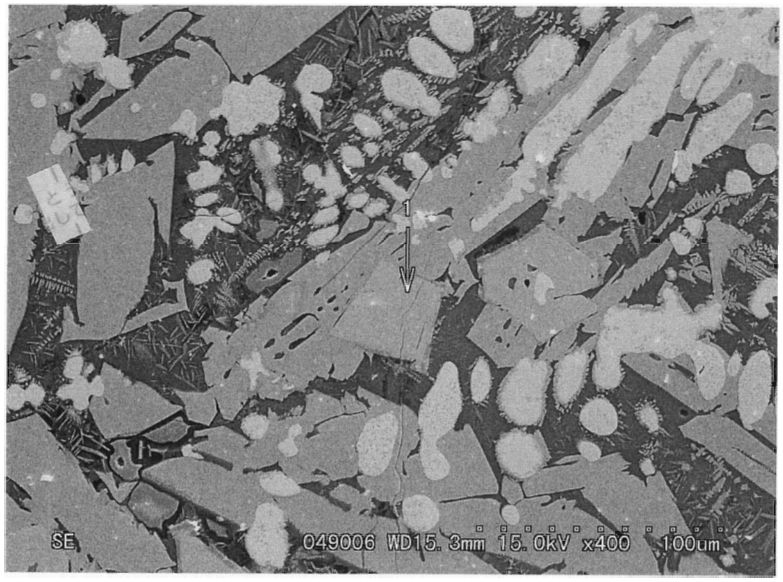
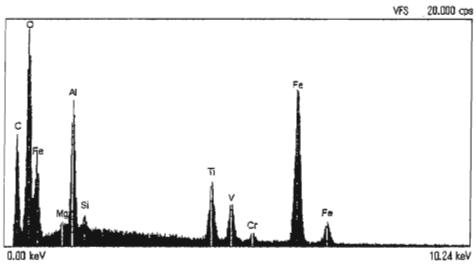
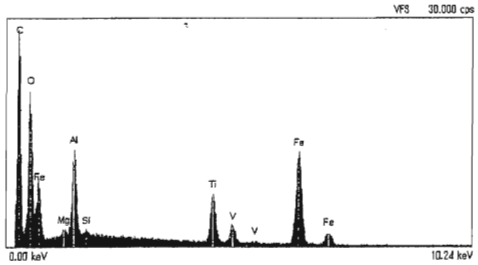


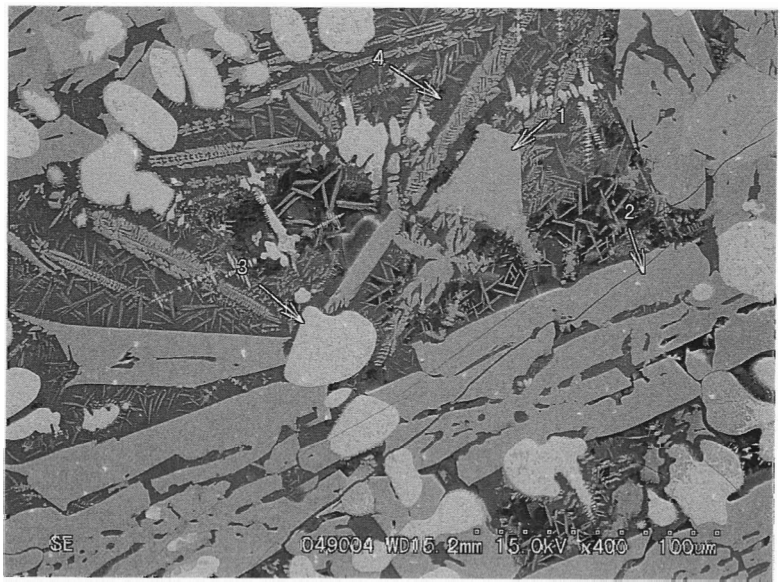
図９　赤塗木片（No.５）のSEM像とEDX微小部分析

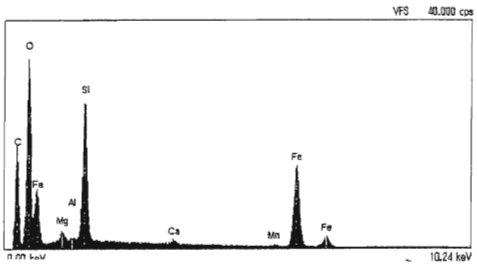


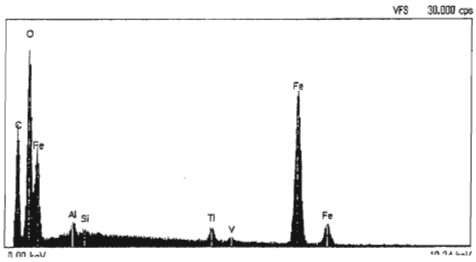


（A）









（B）

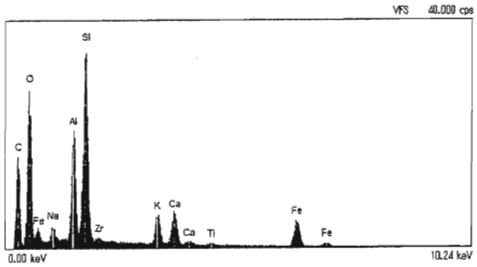
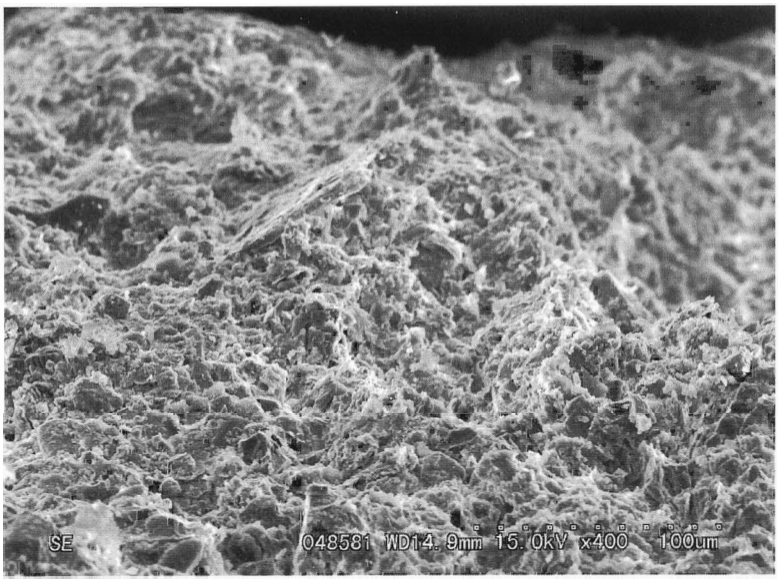


図10　鉄滓（No.6）のSEM像とEDX微小部分析



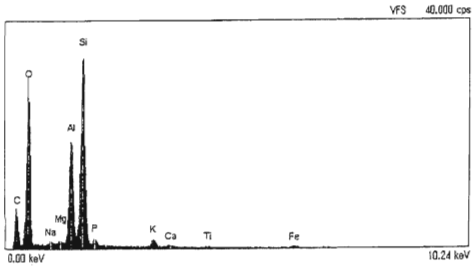


図11　羽口片（No.７）のSEM像とEDX微小部分析

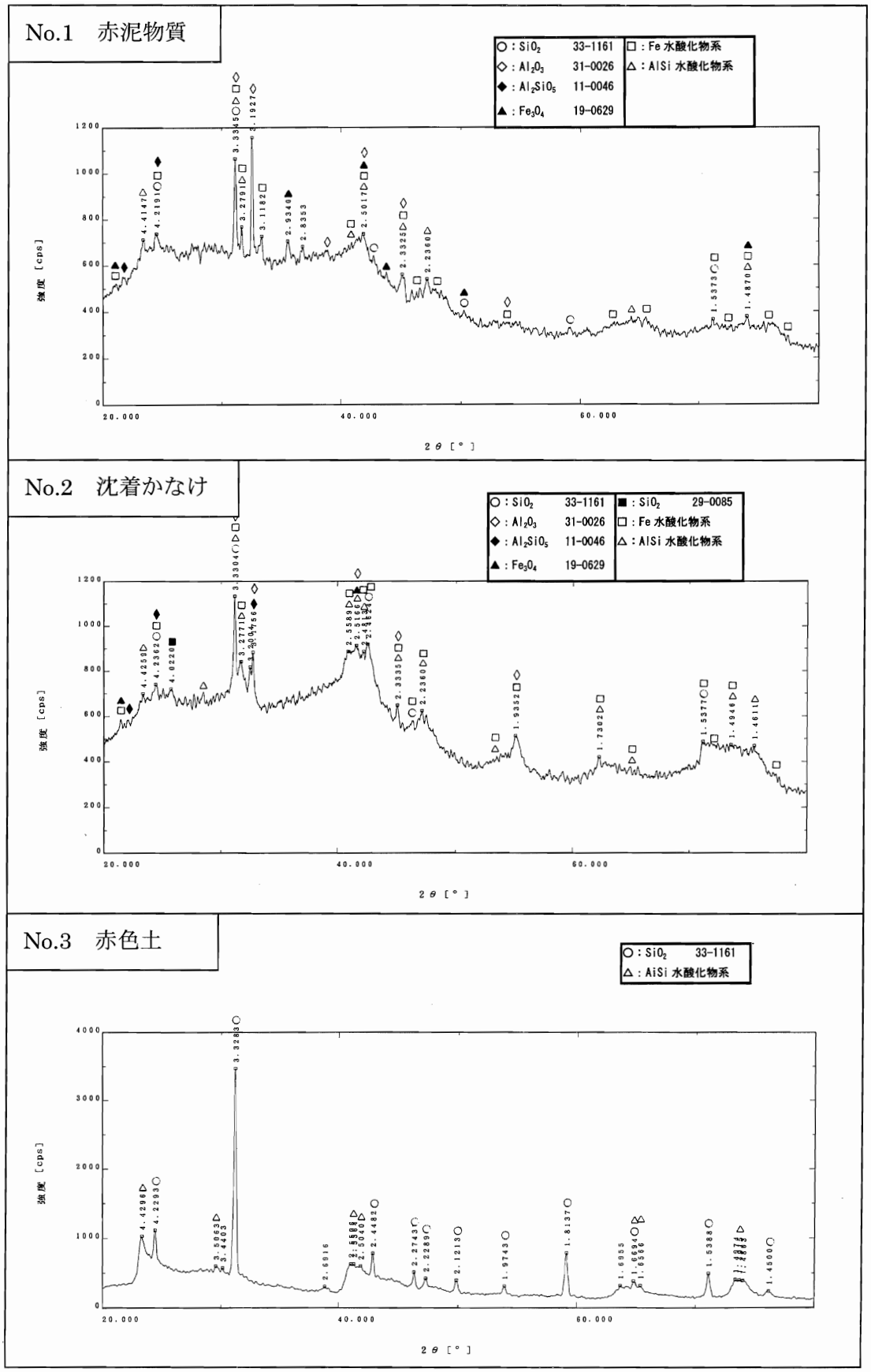


図12　調査試料No.１～３のＸ線回折結果

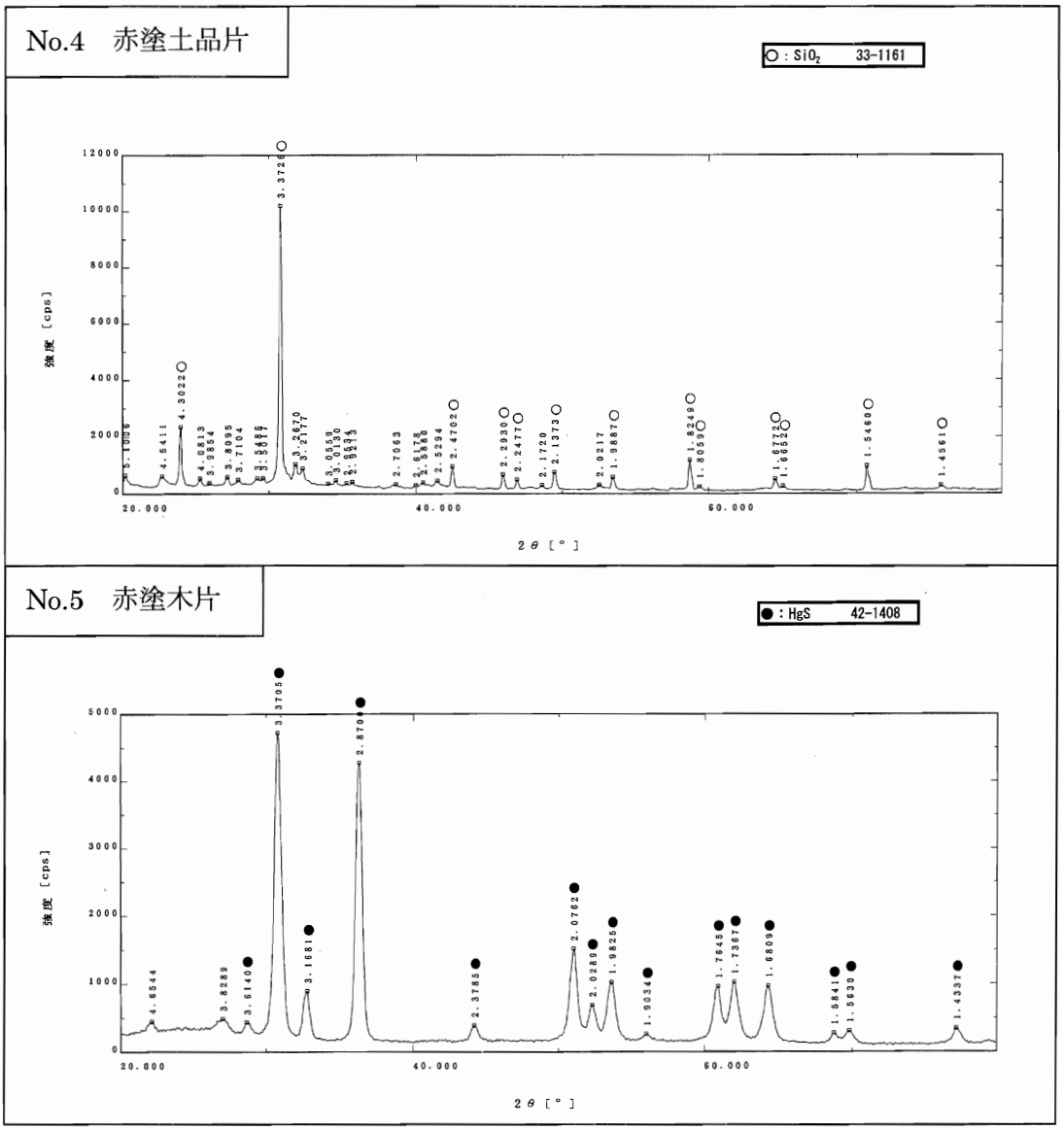


図13　調査試料No.４、５のＸ線回折結果

図　　版

２－６次
Ｃｅ区周辺
石の間に詰まる土器

２－６次
Ｄｅ区
甕と土製支脚

２－５次
Ｃｄ区
土馬検出

遺物出土状況（１）

PL2

3－1次

調査区全景

3－2次

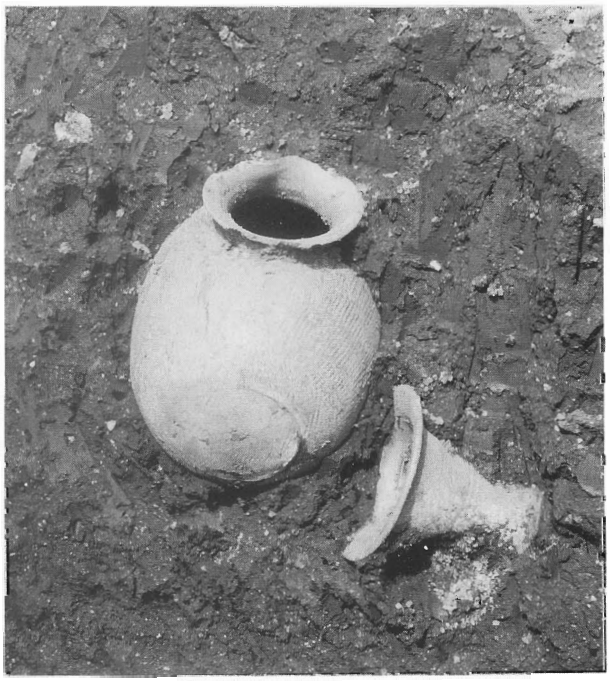
Dh区

2－8次

De区

遺物出土状況（2）

3－5次
Ｆｆ～Ｆｇ区周辺
遺物散布面に
中世の柱穴ピットあり



3－5次
Ｆｉ区
横瓶と壷頸部

3－5次
Ｆｆ～Ｆｆ区
須恵坏と土師甕

遺物出土状況（3）

PL4

3－6次

作業風景

混入していた
吹子の羽口
Ee区 3－2次

坏出土
Hf区 3－7次

3－8次

Ge区

遺物出土状況（4）

Ce区 2－2次
ステージA祭壇遺構
上面

同　上
－俯　瞰－

2－4次
ステージA下底面

祭壇状遺構 －ステージA－

PL6

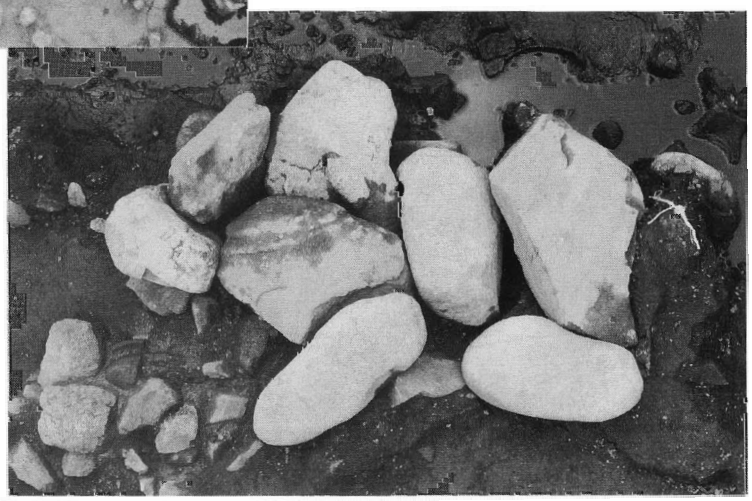
２－１次
Ｂｅ区作業風景

Ｄｅ区
被熱粘土敷きの
上も下も土器推積
２－６次

Ｃｅ区
巨石の狭間にも
粘土敷き、上にも下にも
土器片散乱
２－７次

粘土敷きと遺物の散布状況

Ｆｅ区　石敷祭壇付近
…俯 瞰…



1．石敷祭壇
（上段の部）

2．石敷除去下の
赤泥沈着状況
（分析試料を採取）

ステージＣ　石敷祭壇部　－上段の部－

PL8

3．赤泥沈着物除去
下詰めの山石

4．下詰め石除去
やはり赤泥物沈着

5．赤泥物除去の下に
下段の石敷祭壇

石敷祭壇部　－下段の部－

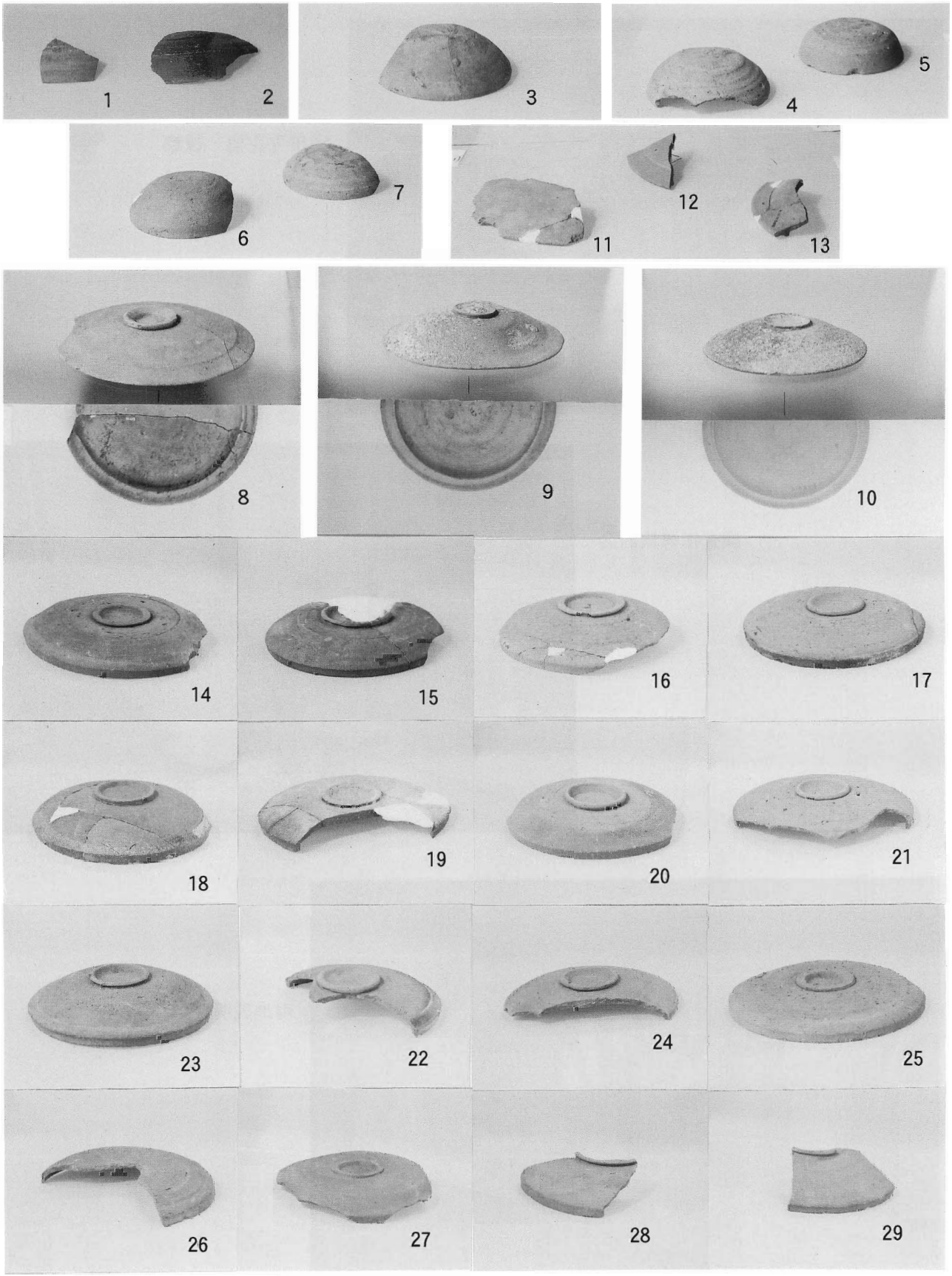
和田先生他　視察

調査指導検討会

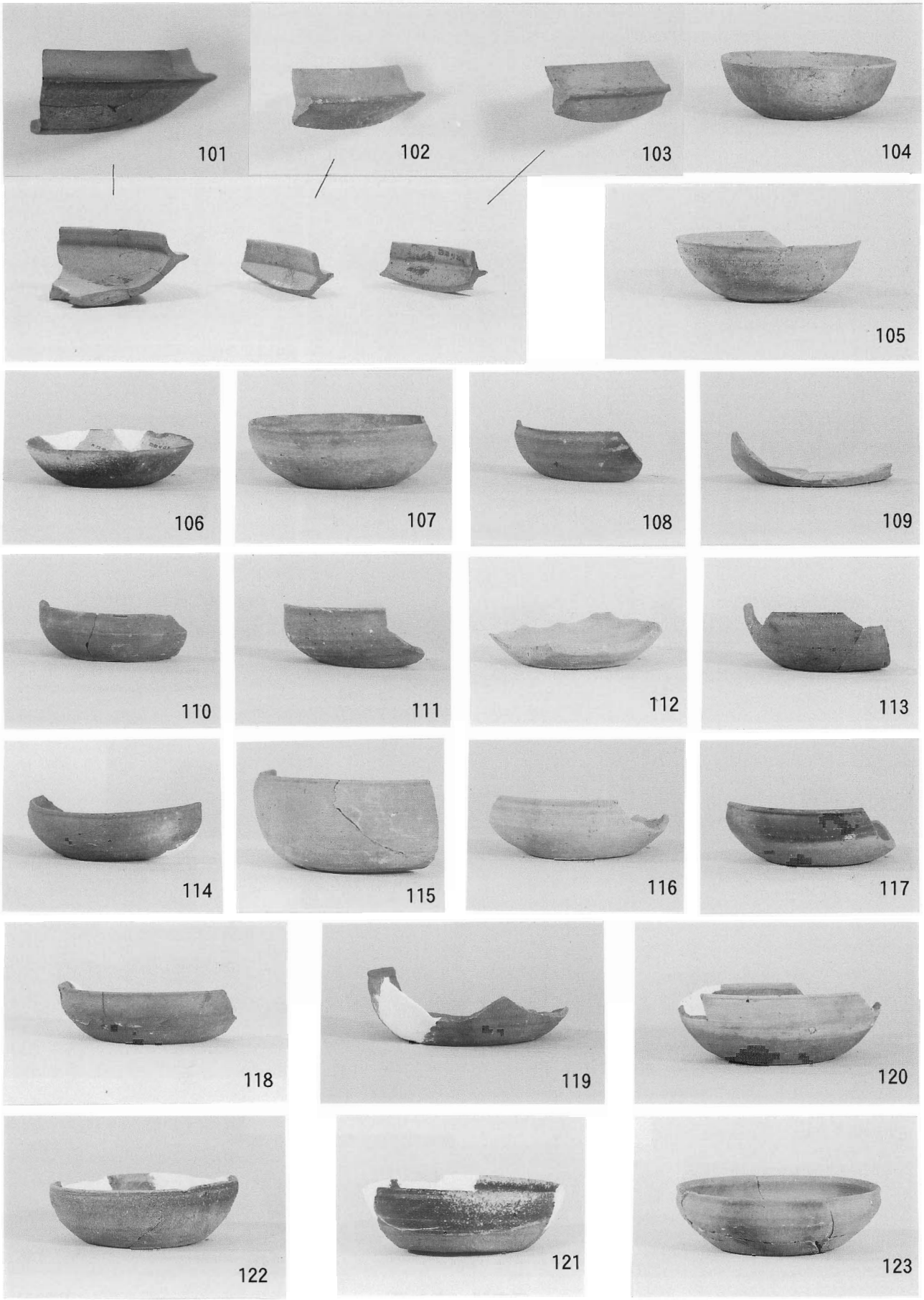
現地説明会

現地説明会と指導会

PL10



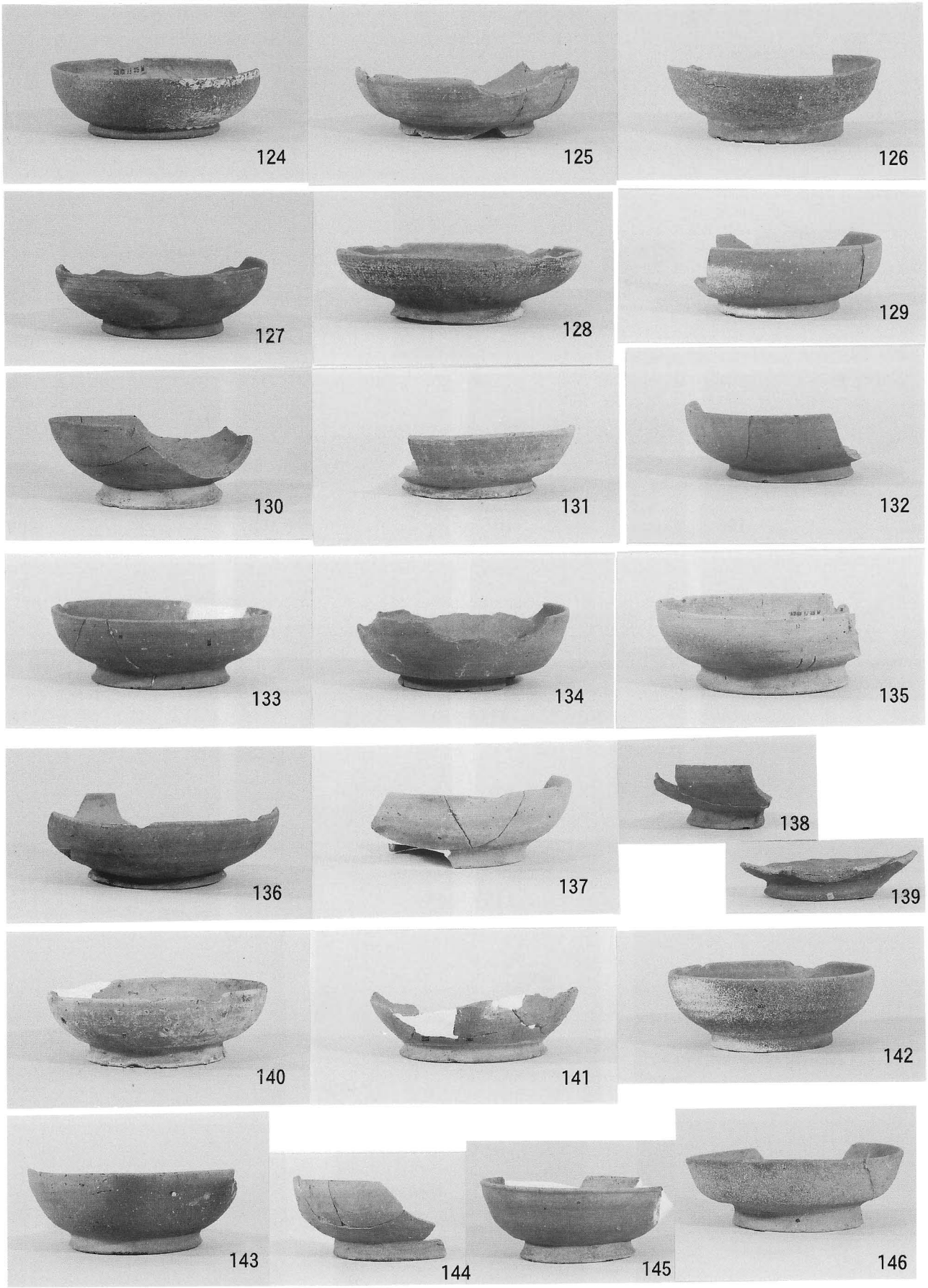
須恵器（蓋）　（図18）


101
102
103
104
105
106
107
108
109
110
111
112
113
114
115
116
117
118
119
120
122
121
123

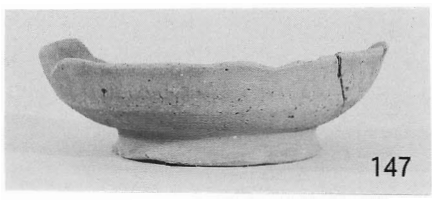
須恵器（坏）

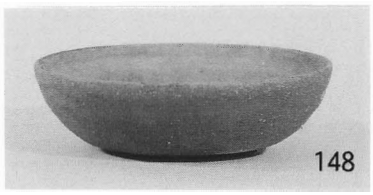
（図19）

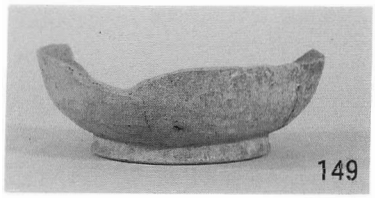
PL12

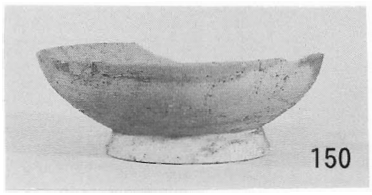


須恵器（高台坏）　（図20）

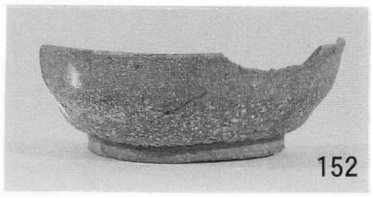

147

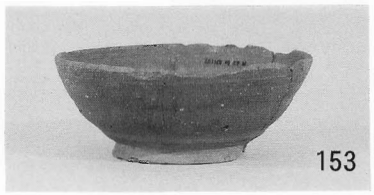

148

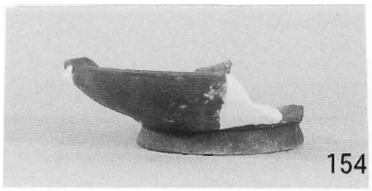

149


150

151

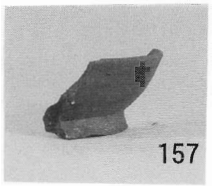

152

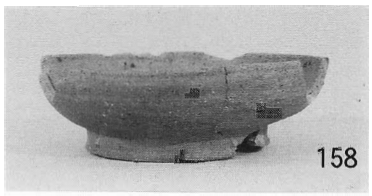

153

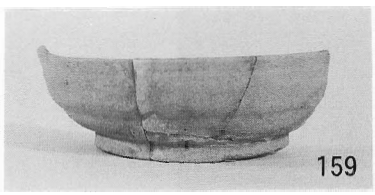

154

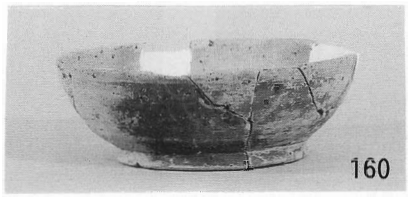
155

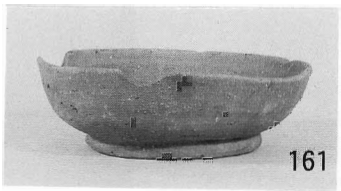
156

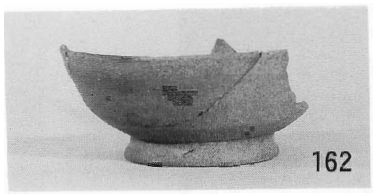

157

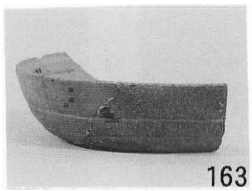

158

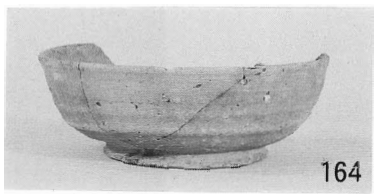

159


160

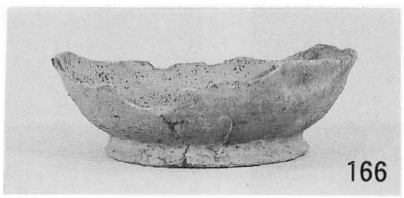

161

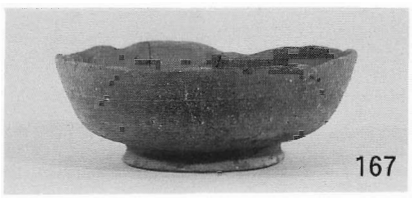

162

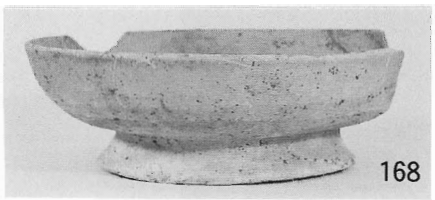

163

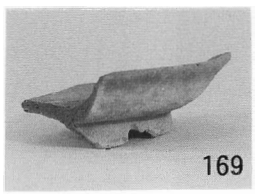

164

165


166


167


168


169

須恵器（高台坏）　　（図21）